
八つの仮面

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八つの仮面

【コード】

N8310Q

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

腐敗した組織、様々な嘘が飛び交う社会、そんな世界に八つの仮面が降り立つ。ある意味で世界を破壊しようとする彼らの道は、真っ赤に染まりつつも、暖かさに満ちていた……。STS編
開始！

プロローグ(前書き)

懲りずにまた始めちゃいました(^^A;

プロローグ

多くの転生せし者達が、この地に降りる時。

法の守護者の闇が浮き彫りになる。

それを『善』とする転生せし者と、『悪』とする転生せし者達の間で争いが起きる。

それはゆっくりと全てを飲み込み、やがて八人の手によって終わりを告げる。

法の守護者は滅びる、しかし代わりに真の秩序が訪れるであらう。

聖王教会の某騎士が読み上げたこの預言は、管理局上層部を震撼させた。

これを受け、上層部は『転生者管理法』を制定、トランプパー『転生者』を徹底的に管理局へ勧誘し、協力的でない者は即刻切り捨てていった。しかし、その程度では未来を変えられないことを彼等は知らない。すでにゆっくりと、その時は近づいていた。

全てが青に彩られた、怪しげな雰囲気の部屋。

いや、『部屋』と言うには少々狭い。

上に、窓の外の景色は動いている。

前へ前へ、ゆっくりと。

そのことから、ここはリムジンか何かの車内と推測できた。

そしてその部屋の奥に、『そいつ』はいた。

白髪に、異様に長い鼻、ぎよろつとした目玉は充血している。

『そいつ』の隣には、部屋と同じ色合いの服を身に纏った女性が、何かの書物を読んでいた。

やがて、『そいつ』が語りだす。

「ようこそ、ベルベットルームへ……」

にやり、という効果音が着きそうな笑みを浮かべて、しゃがれた声で話し出した。

「今回皆様にお見せするのは、私としてはとてもとても興味深いお

話でございます」

笑みを消さないまま、『そいつ』は何かのカードを取り出す。

「皆様は『ペルソナ』というものをご存知ですか？」

カードをシャッフルし並べながら、『そいつ』は話を続ける。

「簡単にご説明させていただくと、己の奥底にあり、己を守るもう一人の己にございます」

伏せて並べたカードを開く、そこには『0』と『愚者』の文字が描かれていた。

『そいつ』は次々カードをめくりながら続ける。

「ペルソナとは、必ずこのタロットカードのアルカナのどれか一つに属しています」

「しかし………」と云ってる割に、『そいつ』はさも楽しそうに笑う。

「私たちがお相手してきた客人とは、住む場所……いいえ、『世界』が違ふところで覚醒した方々は違います」

言うなり。『そいつ』は突然せつかく並べたカードを部屋中にぶちまけた。

「属性はあるものの、しかし、そのどれもがこの『アルカナに属さない』のです」

ぶちまけたカードを片付けようとしないうまま、『そいつ』は懐から別のカードの束を取り出す。

しかし、枚数がタロットカードに比べて圧倒的に少ない。

「存在するのはこのカードの枚数と同じく八体……その一つ一つがとても強力な力を持っています」

並べられた八枚のカードを一つ一つ捲りながら、『そいつ』は口を動かした。

「『剣士』、『弓兵』、『騎兵』、『槍戦士』、『魔術師』、『狂戦士』、『暗殺者』、『道化師』……これらがどのように世界を変えていくか……楽しみではありませんか？」

誘うような口調で『そいつ』が喋り終えた時、隣に座っていた女性が突然書物を閉じてこちらに振り向いた。

「進路を変更いたします、車内がゆれると思われますので、お気を付け下さい」

リムジンが、進路を変える。

プロローグ（後書き）

今回登場した『彼ら』抜きではペルソナは語れないと思い込んでます。

実はペルソナシリーズは未プレイなんですが、ほら、世の中には『プレイ動画』や『wiki』という便利なものがありますから・・・

・w)

生暖かく見守ってもらえると嬉しいです。

では次回ノシ

第一話ある日の(前書き)

今回原作キャラは出てきません。

第一話ある日の

………何だかへんな夢を見ていた気がするが、面倒くさいので気に留めないことにした。

目覚ましが鳴って、それを叩く様にして止める。

まだ眠いけど、学校に遅刻するもの面倒くさいからな。

だるい体を無理矢理起こして、冷蔵庫へ。

扉を開けて、タマゴとベーコンを取り出して、熱したフライパンに乗せる。

焼きあがったそれらを、ご飯と一緒に腹にかきこみながら、テレビのニュースを見ていた。

画面の中では、有名なタレントがインタビュウを受けていた。

朝ごはんを食べ終わった後、食器を流し台に置いて、制服に着替える。

そして鞆を持って、玄関に出てから。

「………いってきます」

誰もいない家に向かって、そう言った。

ああ、そういえば名乗っていなかったな？

俺の名前は『道村空也』。

市立中学校に通う、『転生者』だ。

周りの学生（特に私立の中学校）の視線が突き刺さっているが、気にしない。

ほら、よく『気にしたら負け』って言うだろう？

ま、正直な話、いちいち相手するのが面倒くさいだけなんだがな。

「空也、おはよう！」

「相変わらず視線突き刺さってるなあ？おい」

後ろから突然、肩を叩かれ、軽口をかけられた。

振り向くと、友人である『剣ヶ原刀子』と『東雲幽斗』がいる。

世間話したり、今日の授業について話したり、そここうしている内に学校についたので、靴箱で上履きに履き替えて、教室へ行く。

「はよー」

「お、ミッチー！つーちゃん！ゆー！おはよー！」

入ったとたん、いくつか出来ている一団の中の一つから、元氣すぎる声がかけられた。

『ミッチー』とは、俺のことだ。

ガラだけじゃなくて噂も悪いから、せめて呼び方だけでも、ということらしい。

余談だが、こいつが俺をあだ名で呼び始めた瞬間、こいつの学年ではこいつの『最強伝説』が生まれたとか、そうじゃないとか。なお、『つーちゃん』は刀子のこと、『ゆー』は幽斗のことである。

「おはよキコ、今日もテンション高くない？」

「だってこれがあたしなんだもん！」

俺達を愛称で呼んだ女の子はそう言って無い胸を張った。

彼女は『伊達騎子』。

俺らより一つしたの学年で、元気が取り得の女の子だ。

「ソーマ、一日中このテンションに付き合わされんだろ？尊敬する

よ

「何事も慣れですから」

幽斗に聞かれ、俺の隣で淡々と答えるのは『伊達槍馬』。

騎子とは双子の兄弟で、槍馬のほうが兄らしい。

ヘッドホンがトレードマークのローテンションな奴だ。

「まあ、いいんじゃないかな？何事も前向きになるのは大事だよ」

席に座った状態でそう言うのは、『鷹宮弓成』。

この学校の生徒会長で、文武両道の優等生だ。

俺らのグループのリーダー的存在でもある。

「暗いところより明るいところだよね〜ぼかぼかしてあったかいし」

「いや、今夏一歩手前だから日向は勘弁だわ」

「あれ？そうだったっけ？」

騎子に突っ込まれているのは『狂咲由香』。

学年もクラスも騎子達と同じで、どこかおっとりしているというか、
ぼわぼわしているというか……。

『不思議ちゃん』という言葉が良く似合う。

それと、こいつは体系が細い。

不健康的に痩せすぎってわけでもないが、もうちょっと食べてもい
いんじゃないかってくらいに細い。

だけどこんな外見に似合わず馬鹿力の持ち主だ。

……あの細っこい体のどこからあんなパ
ワーが出てくるのか、正直俺がかなり気になっている疑問だったり
する。

まあ、怪力少女に関する考察は置いて……軽くぶつち
やけると、今まで紹介したメンバー全員『転生者』だ。

俺や他のメンバーが『転生者』であると自覚したのはとある共通の
力が目覚めたことが原因だが、その辺はあとで話すので割合させて
いただく。

さてと、担任が入ってきたので午前はここで解散。

学生らしく勉強にはげみますかね……めんどくさいけど。

「そーいやさ、ミッチーは聞いたことある？」
「ごくたまに、ある日
突然人がいなくなる」って都市伝説」

「知らん、聞いたことも無い」

昼休み、屋上にて昼飯の弁当を食べていると、キコがそう話を振ってきた。

そんなもの知らないの、ばつさり切ったが。

「……………駄目もといえ、聞いたあたしが馬鹿だった」

キコはそう残念そうに頭を抱える。

「けどあなたがち無視できないよね、そいつの聞くとさ」

「まあ、わたし達自身が都市伝説になりそうなものだもん」

刀子の言葉を皮切りに「ねー」と女性陣は声をそろえた。

それでも構わず、俺は弁当にパクつく。

「そっぴゃ話は変わるけど、駅前商店街の有名な喫茶店、確か……

……『翠屋』だったか、そこに新しいメニューが出来たそうだ」

「ほんとっ!?!」

「どんな!?!」

幽斗が出した話題に、真っ先に食いついたのはキコと由香。

二人とも甘いもの好きだからな。

対する幽斗は冷や汗をかきながら、

「いや、残念ながらどういふものかは知らないぞ、俺は聞いたただけだしな」

「うーん、そう聞くとますます食べたくなくなるのが人間の性」

そう言って、由香と一緒に悩みだすキコ。

すると、

「よし、明日みんなで翠屋いくぞー！」

「ちょうど午前授業ですもんね！」

立ち上がって元気よく宣言する二人。
だがしかし、

「お前らだけで行つて来い」

女性陣全員ならともかく何故俺等までいかにやらんのだ。

「ぶーぶー！ーいーじゃんよどうせ皆やることないんでしょー？」

「残念、俺は明日バイトだ」

「なん．．．．．だと．．．．．!?!?」

「大げさなりアクションはやめろ」

がやがやと、騒がしいながらものんびりとした時間が過ぎてゆく。
このまま何も起こってくれなければ、面倒くさがりの俺としてはう
れしいのだが．．．．．。

．．．．．あ。

「そーいや、明日のバイト、翠屋だった」

「何ーっ!?!?それを早く言わんかいっ!?!」

放課後、帰り道。

今日はとつと帰りたいた気分だったので、幽斗たちとは学校で別れた。

みんなでわいわいというのもいいが、こうやって自分のペースで進むのも結構楽しい。

途中商店街の人たちに、色々おすそ分けをしてもらった。

自宅についたので、玄関の鍵を開ける。

両親の稼ぎがそれなりに良かったらしく、家もその辺のに比べて結構広い。

あれだ、武家屋敷のちっちゃい版を想像してくれ。

両親が死んでからは、俺一人になってしまった。

幸い近所には優しい人が多いから、特に寂しいというわけでもない。

前述の通り、帰宅途中に通る商店街の人たちも俺を構ってくれるし、遺産も、両親の友人がきちんと管理してくれてる。

それでも俺が『独り』なのに変わらない。

その所為か、広い家が更に広く感じる。

二階の自分の部屋で寝転がって、ぼんやり外を眺めていた。

外がすっかり暗くなった頃。

向かいの家の二階の窓で、光がチカチカと点滅しているのが見えた。何事かと思つて立ち上がったから、全て理解する。

まだ俺に構うか……………。

数年前から中学校での……………特に私立の奴等からの俺の評判が、すこぶる悪い。

原因は『とある誤解』からなのだが、気付いた時にはもうどうしようもないくらいに広がっていたから、俺にはどうもできなかった。その『原因』になった『彼女』は、今日も性懲りも無く部屋を真っ暗にして、懐中電灯を点滅させている。

これは『幼馴染』である俺たちの秘密の信号のようなものだ。明かりをつけては消しを三回、一回長く光らせた後、再びつけては消しを三回。

『今日は楽しかった？』の意味だ。

『あんなこと』があつてからも、『彼女』はずっと続けている。それにたいして俺は知らぬ存ぜぬを決め込んできた。

いい加減諦めてくれてもいいんだが……………。

ああ、だから『不屈のなんとか』……………だったか。

……………本当に諦めが悪い女だ。

s i d e ? ? ?

今日も信号を送ってみた。

結果はいつも通り、無反応だった。

「……………はあ」

思わずため息が出てくる。

『あんなこと』が起こってから、友達の間で彼の評判が一気に悪くなった。

……………わたしの所為だから。

わたしが弱かった所為だから。

だから、せめてわたしだけでも『彼』と接点を持つてなきゃ。

それなりに『彼』がどんな人が知っているし、意外と寂しがり屋っていうのも知ってるし……………。

とにかく！わたしの所為で独りになんて……………させちゃだめだ。

第一話ある日の（後書き）

前書きで出てこないって言いつつ、結局最後に出ちゃってますww
次回は戦闘でも書きたいなーっと。
それではノシ

第二話ボラバイト（前書き）

お待たせしました、二話です。

8 / 7 : 誤字修正。

第二話ボラバイト

「・・・・・・・・・・であるからして、この数式は・・・・・・・・」

うちのクラスの数学担当が黒板にびっしり数式を書き込んでいる。今日は二年がインターンシップ前と言うこともあり、それにあわせて全学年が午前授業になっていた。

ちなみに今はその午前最後の四時限目なわけで、授業中にも関わらず、アイコンタクトやジェスチャーで今日の予定を確認しあっている。

秒針が、一周した。

同時にチャイムが鳴って、先生がまとめを手短に告げてから出て行く。

途端に教室中が騒ぎ出した。

まだホームルームも済んでいないのに、みんながみんな帰宅ムード全開だ。

・・・・・・・・・・かく言う俺のその一人だが。

つと、弓成が近づいてきたな。

「空也は予定通り翠屋に？」

「ああ、二時から」

教科書その他もろもろを鞆に入れつつ、会話する。

弓成はそっか、と返事をした。

ん、今度は刀子か、

「わたし達もご飯食べてからいくから」

「分かってる、一応客として接するから他人行儀なのはご愛嬌な」

「りょーかい」

丁度その時、担任が席に着くよう指示しながら教卓についた。どうやらホームルームを始めるようだ。速く終わらせろという生徒の視線を受けながら、担任は話し始めた。

割と早く担任の話が終わったので、真っ直ぐ翠屋に向かう。ちなみに、バイトバイトとっているが、実は単なる小遣い稼ぎである。

翠屋のお陰で平均年齢は下がっているとはいえ、年配の方が多いのは変わらないわけで……。

だから手伝う代わりに、ちょっとした小遣いや食べ物などをおすすめ分けてもらっている。

ほらあれだ、『ボラバイト』のようなものだ。

親の友人が遺産を管理してくれているとはいえ、そればかりに頼るのもなんだしな。

そうこうしている内に翠屋についたので、扉を潜った。

「お、空也くんか！」

「こんにちは」

最初に話しかけてくれたこの人は、高町士郎さん。
翠屋のマスターで、気前のいい人だ。

「来てくれてありがとう、制服奥の方にあるから」
「分かりました」

次に声を掛けてくれたのは、その奥さんの桃子さん。
翠屋のパティシエで、人気商品のシュークリームもこの人がつくったものだ。

この二人に小さく会釈してから奥の控え室に入って、バイト用の口ツカーに荷物を入れて翠屋のエプロンを着る。

制服のまままで来ているので、上着だけを脱いだ状態だ。

今日から七日間着ることになるので、大切にあつかわなきゃならない。任される仕事は接客のみだが、しっかりやるとするか。

控え室を出て、手を洗う。

店の規定どおりに、肘まできっちり。

最後に身なりを確認してから、店頭に出た。

高町夫妻にもう一度会釈してから、注文表とボールペンを装備。早速入ってきたお客に向かっていき、営業スマイル全開で、

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

もう数えるのも億劫になるくらい『いらっしやいませ』を繰り返した頃。

見知った顔がぞろぞろ入ってきた。

それでも構わずに営業スマイルを浮かべて、

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「あつはつはー！ミッチーちよー似合ってる！」

「すみませんこれは気にしないで下さい、あと、六名です」

腹を抱えて笑う騎子を他所に、槍馬が人数を述べる。

かしこまりました、と返事してから席に案内した。

先に来ていた客の配膳を済ませてから、騎子たちの席へ。ボールペンと注文表を取り出した。

「ご注文お決まりでしょうか？」

「新作のこれを三つ、あとカフェオレを六つ！」

簡潔に書き付けて、読み上げる。

「ご注文繰り返ささせていただきます、春のラズベリーケーキを三つ、カフェオレを六つ、以上でよろしいでしょうか？」

弓成がうなづいたのを確認。

「承知しました、ゆっくりおくつろぎくださいませ」

×に営業スマイルをかましてから、その場を去っていった。
注文をカウンターに置くと、桃子さんが近づいてくる。

「お疲れ様、休憩入っていいわよ」

「分かりました」

会釈してから、みんながいる席へ向かった。

閑話休題。

近づいてくる俺に真っ先に気付いたのは、幽斗だった。

「休憩か？」

「ああ、さすが人気の喫茶店だ、ちょっと疲れた……」

おもわずどっかりと座り込んだ俺を見て、刀子は苦笑いをした。

「大変だねえ」

「まあな」

「あれが一週間、か、すごいねえ」

出されたお冷を口にして、由香がのほほんと喋る。

それに対して騎子は机に顔を乗つけて、

「長年の経験って奴じゃない？空也結構長い間ボラバイトもどきしてるでしょ？」

「俺らが知ってるだけでも、五、六年くらい？」

「だな」

しばらく和やかな空気が流れる。

すると、

「お父さん、お母さん、お待たせ！」

バタバタと、少々急いだ足音が聞こえてきた。

聞き覚えのあるそれに、思わず反応してしまう。

みると、見覚えのある後姿が見えた。

そいつが振り返りかけたので、さっと視線を逸らした。

だが、運命は逃がしてくれないようだ。

「空也くん？そろそろ……………」

「……………了解」

不可能と分かっているにもかかわらず、彼女と視線を合わせないように努めながら立ち上がる。

というか、名前を呼ばれた時点で合わせるも何もないか。

顔を上げると、彼女はかなり驚いた様子でこっちを見ている。

……………別に気にしなくてもいいんだがな。

「早速これを4番と6番テーブルにお願いね」

「分かりました」

「あ、あの……………」

彼女が何かを言いかけるが、一応スルー。

視線で黙らせてからお盆を受け取って、運んでいった。

気配で彼女がこっちを見ているのが分かったが、無視を決め込むことに。

その後もしばらく視線を感じていたが、夕方頃になれば流石にそれもなくなくなった。

そして弓成たちも帰っていく。

とりあえず、手を振っておいた。

side 槍馬

「あー最高だった！」

翠屋のケーキに満足してはしゃいでいる騎子を呆れた目で見つつ、家に帰っている。

まあ、喜ぶ気持ちも分からなくも無いかな。

双子は意思疎通が出来るもの、なんて思われているけど、一応はその通りだ。

いや、流石に全部は分からないけど、共感を求められたら、流れが分からなくても条件反射でうなづいちゃうんだよな………。

「海鳴の学生にとって翠屋のケーキを食べることがある意味の贅沢よねー！」

「ん、あそこの味はいいと思うよ」
「だよなー！」

我が妹ながら、本当に無邪気に笑う。

………前世で死んでしまった時に、『また双子がいいね』

って笑いあつたことが叶つて、喜ばしいことだと感じている俺がいた。

「はぁー・・・今なら死んでもいいかも」

「こら、物騒なこと言つなよ」

「冗談だよ、ジョーダン！」

笑いあつていたその時だ。

「じゃあ死なせてやるよ」

振り向く間も無く、光で見えなくなる。

side ????

車に撥ね飛ばされて死んだと思ったら、いきなり目の前に神が現れて、しかも俺が死んだのは手違いっていうじゃねえか。

むかつ腹が立つたんで怒鳴り散らしてやったら、色々チートな能力をくれた。

しかも行先はリリカルなのはだつて聞いて喜んだのは記憶に新しいぜー！！

こうなりゃなのはやフェイトを奴隷にしてやらあー！！
・・・だが、な。

「聞いてねえぞ……俺以外の転生者がいるなんて」

俺は木の上にいるわけだが、見てる先に双子の転生者がいる。

なんで転生者が分かるのかって？何と言うか……感覚？

会話から聞くに、もう翠屋にいつてやがった。

ということは既になのはとエンカウト済みのはずだ。

女のほうはともかく、男のほうはつぶしておく必要があるな……

すると女のほうが、

「はぁ……今なら死んでもいいかも」

自分でも、口角が上がるのが分かった。

「じゃあ死なせてやるよ」

もらった虚ホロウの能力、虚閃でぶっ飛ばしてやった。

もろに直撃して、周りのものを巻き込んで吹っ飛んでいく。

きっちり結界を張っているから一般ピーポードもには気付かれねえ。

っは！ざまあ見やがれ！完全に伸びてやがる！！

さあ、あとは男の方を殺しておしまいな。

の、はずだったんだが……。

「こらっっ！！いきなり何するんじゃー！！！！」

思いつきり殴られてた。

side 騎子

危なっ！！めっさ危な！！！！ってか問答無用にどかーんとかないで
しょ！！！！？

近づいてきた奴を思いつきり殴り飛ばしちゃったけど、別にいいよ
ね？

「ちよつとソーマ！起きてる〜？」

「起きてる、ヘッドホンに埃が入ってないといいけど……………それと転生者だね？」

しっかり頷いて前を睨む。

さっき殴りつけた奴が丁度起き上がっていた。

「っち！このアマ、なんで意識が……………」

あれ？もしかして今の一撃で倒せたとも思ってるのん？

っはっはっはー！

「ざまーみーろ！あたし双子がそう簡単に倒れるわけじゃないモンねー！」

腕に『収めていた』トンファーを取り出して、戦闘体制に入る。

ソーマも同じ方法で二丁銃を取り出していた。

「俺たちに喧嘩売った事、今更後悔しないよね？」

「軽くすっ飛ばしてあげるから覚悟しなれー！」

相手は倒せなかったことにいらっとしてるみたいね。
こっちもの凄く睨んでるし。

「……………んな訳あるか……………」

うかつに出てったらやられそうだし、しばらく様子見？

「俺は完全無敵のハズだろ？何で転生者一匹殺せないんだよ！？」

え、こいつ自分が無敵だと思っ込んでたの？

ばっかみたい、無敵なんてただの幻想じゃん。

生物である限り何らかの弱点はあるのは当たり前だつての！

「馬鹿みたいだね、最強なんて本来存在しないものだよ」

「そーだそーだ！身をわきまえろー！！」

「……………っ！」

おお、怒ってる怒ってる。

「このクズ共があー！！塵残さず消してやらあー！！」

突っ込んできたけど別に危ないわけでもないかな？

隙まみれだし、横に避けてチョップすれば問題ないねー。

………けど、

「それじゃ尺にあわないよねー？」

「まっただ」

あたしも槍馬も青いもやを出す。

同時にあわられたカード目掛けて、あたしはトンファーで、槍馬は銃で。

それを破壊する。

あたしは気に入ってたバッグを、槍馬はヘッドフォンを埃まみれにされたんだ………。

とーぜんの報い受けさせてやる！

「いつくよー！ケンタウルスー！！」

「こい！クーフリーンー！！」

あとあれだ！こいつ碌なことしない！！

「それじゃあ空也くん、お疲れ様」

「はい、ではお先に失礼します」

「ええ、気をつけてね」

さて、店の片づけもあらかた終わった頃。

帰っていいと言われたので、お言葉に甘えることにする。

控え室に戻ってエプロンを外し、注文表とボールペンを所定の位置にしまってから、ロッカーを閉める。

そして振り返ると、

「……………」

彼女がいた。

「……………何か用か？」

「……………このままでいいの？」

『何が？』と聞くと、『あのことだよ！』と返してくる。

「空也は全然悪くないのに、みんな勘違いしてあなたを悪者扱いだよ！？悔しくないの！？」

「……………あんなこと」をまだ自分の所為だと思い込んでいるらしい。

「面倒くさいからやめた」

「っとうして!?!」

「思いたい奴等には勝手に思わせておけばいいんだよ」

途端に、しゅん、となって俯く彼女を見て、若干罪悪感が沸いたのはここだけの話だ。

「……………お前が抱える理由は無いはずだろ、もうすぎたことだ」

長居する理由は無いので、とっとと帰ることにする。

「……………いい加減に忘れろ、なのは」

すれ違いざまに、そう言って置いた。

第二話ボラバイト（後書き）

思ったより戦闘がかけませんでした・・・^^；
次回は・・・どうしよっかな？

第三話会議もどきと占いと（前書き）

アイデアがばんばん出てくるので、またまた更新w
もしかしたらしばらくはこっちを更新し続けるかもです。

第三話会議もどきと占いと

お手伝いが済んだのと、お父さん達に帰っていいよって言われたので、家に帰っている。

すると、ケータイが鳴った。

取り出して画面を見ると、『アリサちゃん』と表示されている。

………ちよつと憂鬱な気分になった。

それでもでないわけにはいけないので、仕方なく出ることにする。

「もしもし?」

【なのは!?!ちよつと、大丈夫なの!?!】

………ため息が出そうになったのはここだけの話だよ?

「何が?」

とりあえずとぼけておいた。

【何って、空也のことに決まってるじゃない!何もされなかった?】

「アリサちゃん心配すぎ、大丈夫だよ」

【けど今日から一週間翠屋にいるんでしょ!?!】

「いくらあの人でも、人前では何もしなれないと思うよ………ここだけの話、あの人担当はホールだけだから、人目が多いし、大丈夫」

電話の向こうで、アリサちゃんの『つぐ』と言つのが聞こえる。
やがて、

【…………分かったわ、土郎さんも桃子さんもいるから、きっと大丈夫よね】

「うん、アリサちゃん、心配してくれてありがとう」

それじゃあ、と電話を切った。

「さてと、どうしてこうなったか、説明してもらおうか？」

「え、えっと……………」

「……………」

……………今俺の目の前には、笑っているのに明らかに怒っている弓成と、正座させられてる騎子と槍馬がいる。

背景は一面の銀世界、視界の隅には由香に棒切れでつつかれている転生者の遺体がある。

ちなみに刀子と幽斗は銀世界になってしまった周辺を片付けている。

「まったく……お気に入りや埃まみれにされたっていうのは分からなくもないけど、だからってこれはやりすぎだよ」

「はい……」

「その、すみません」

珍しくしゅんとしている二人を見て、思わず笑いだしてしまった。

「はあ……こんなんじゃ、後始末のほとんどを『おばあさん』に頼むことに……」

『あらあら、問題はないわよ?』

突然弓成の目の前に空間ウィンドウが現れる。

そこには、見覚えのある和やかな顔が映っていた。

「わー!ミゼばあ!」

「おばーちゃんだあ」

由香と騎子はのほほんとした空気をかもし出すばあさんにつられて、明るい表情になる。

……一応言っておくが、彼女は本当の祖母ではない。

まあ、色々縁があつて『おばあちゃん』と呼ぶことを許可してもらった人、かな?

「おばあさん、けど……」

『いいわよ別に、予想の範疇だからねえ』

モニターの向こうでほっほっほと笑うばあさん。

相変わらず平和ボケした雰囲気を持つ人だ。

「すみません、お願いできますか？」

『ええ、可愛い孫の頼みだもの』

頼み込む弓成と、即答でOKを出すばあさん。

こつもあつさり引き受けてもらってしまつと、どうも罪悪感が……。

まあ、この有様じゃあ頼らざるを得ないような状況だな。そついう訳で今日はお開きになった。

翌日、学校。

昼休みもあと少しと言つ時間帯。

俺たちは………屋上にいた。

「っていつかあたしらはともかく、弓成と刀子はいーの？生徒会長と副会長でしょー？」

「別に」

「わたしも、ね」

何故集まっているかつて？

サボりを口実にした作戦会議的なものだ。
議題はもちろん、昨日騎子と槍馬を襲った転生者について。

「さて、昨日二人を襲撃してきた転生者のことだけど……」
「来たばっか、弱い、むかつく、以上」

「突っ込みどころ満載だけど……同意せざるを得ないね」
即効で短い感想を言う騎子に、珍しく突っ込み無しで同意する槍馬。
「……ヘッドフォンをやられたことが相当頭にきているらしいな。」

今日はヘッドフォンを首にかけた状態になっている。
どうやらあれ以来、音質がかなり悪くなってしまったらしい。
弓成は苦笑いしてから、

「えと、じゃあどんな能力を使ってた？」
「生意気にBLEACHの虚ホロウの力、のっけから虚閃セロぶっぱなしてきたから間違いない」

当時のことを思い出しているのか、双子はイライラした雰囲気を感じ
そうともしない。
「……不謹慎だとは思いますが、そいつを見てみたいと思っ
ている俺がいた。」

「それで、他は？」
「うんや、特に何も、ね？」

「ああ、虚閃で吹っ飛ばされた後、問答無用で片付けちゃったから
ね」

しれっと答えた騎子と槍馬は手をぎりぎりと握っている。
そんな二人を見た幽斗は苦笑いして、

「まあ、いいんじゃないかねえか？二人の話からするに、けっこう人間的に酷い奴だったみたいだしさ」

と、その時、

「お前等……またここにいたか」

「あり？せんせー？」

いつのまに來ていたのか、俺たちの担任が屋上の扉のところで仁王立ちしていた。

そういえば、五時間目はもう終わっている。

流石に六時間目は出ないと、な。

ちらつと弓成のほうを見ると、さっきので大方の話は聞けたらしい。小さく笑みを浮かべていた。

「道村たちはともかく、鷹宮と剣ヶ原は何をしていたんだ？」

「すみません、それが……」

刀子が前に進み出て、にこにこしながら、さらさらと話していく。

……嘘を。

いや、話の流れ的には嘘じゃないけど。

「むう……昨日その双子が不審者に絡まれた、何とか逃れることは出来たものの、不安が残っていたので、友人達に同席してもらい、相談会を開いていた、と」

「ええ」

曇りが無い笑顔で言い切る刀子。

……何故か頼もしく見えたのはここだけの話である

ことを告げておく。

周りが真っ青で、部屋にしてはせまいところ。

多分、リムジンか何かの車の中だと思う。

その奥の方に……。

何と言うか、人、何だと思うけど。

「おやおや、これは珍しいお客だ……」

人間って、あんなに鼻が大きくなるものなのかな？

何をどうすればあんななるんだろう……？

おじいさんと思われるその人は、カードをシャッフルして並べてい

た。

タロットカード、かな？

やがて一枚一枚を捲り始める。

すると、おじいさんは「ほう」とため息をついた。

「・・・・・・・・あなたには、呪いのようなものがかかっていますな」

「・・・・・・・・え？」

いきなり告げられた占い結果に、思わずぼけっとしてしまう。

初対面にそんなはつきり言うのもどうかと思うんだ。

占いならともかく、そんなにやにやした表情で言われちゃったら流石にいらっとくるなあ・・・・・・・・。

「絆を失くす呪い、業を背負っていく呪い、仮面をかぶり続ける呪い・・・・・・・・」

・・・・・・・・。。。

「それでも、あなたは生きていく力を持っていきますか？」

おじいさんは、こっちをじっと見ている。

・・・・・・・・正直、おじいさんが言っている意味が分からない。仮にそんな呪いを受けたとして、生きていけるどうか分からない。不安、だけど。

「・・・・・・・・多分、大丈夫です」

その答えを聞いたおじいさんは、にやりと笑った。

「それもまた、一つの答えでしょう・・・・・・・・改善策としてこ

こちらがお伝えできるのは、もう一人の自分を受け入れることです」

『もう一人』の、自分？

「あなたとはもう会うことは無いでしょうが…….どうか、道を外されませんように」

最後におじいさんの声が聞こえて、意識が遠のいた。

というところで目が覚める。

まだ春先なのに、汗でぐっしょりになっている。

呼吸が荒い、どこか閉じこもった場所にいた気分だ。

何がどうだったのか、よく思い出せない。

けど何か、将来に関する重要な内容だったような…….
ん…….。

我は汝

また眠りそうになった時、そんな声が聞こえた。

奥底で、わたしはうづくまる。

閉じ込められた中で、わたしは息をする。

気付いて欲しいな

ただ、『あの人』が『わたし』に気付くのを待つだけ。

否定して欲しくないな

そうすれば、『わたし』は『あなた』の力になるから。

『あなた』が望めば、『わたし』は………。

第三話会議もどきと占いと（後書き）

はい、三話でした。

あと今回からこちらでも、後書きのほうで返事をさせていただきま
す。

題して、『お返事の部屋』！

そのまんまや！という突っ込みは無しの方向で！！

天ノ刃羽斬様

ぶっちゃけ彼はかませ犬的な人物なので、早々にご退場してもらい
ましたww

二人の過去については、まだまだ引っ張りますよ〜

催促なんてとんでもない、感想欄に載ってるのを見つけたときには
狂喜乱舞しましたからww（

さて、次回の内容はひ・み・つ

期待してもらえると嬉しいです。

それでは。

第四話襲撃と失踪（前書き）

アイデアが出てくるのはいいけど、書き上げてもグダグダになっている気が……。

3 / 6 : 一部修正

第四話襲撃と失踪

翠屋のバイトも今日で一週間目。

ここまでの間、特に問題はおきなかった。

今日で最終日なので、今まで以上にきっちりやらせていただくと思っ。

「空也くん？配膳お願い！」

「分かりました！」

さて、気張っていきますか。

一段落して、控え室で休んでいる。

今日が休日だからか、客がまさに雪崩のように押し寄せてきていた。ぶっちゃけ、滅茶苦茶疲れた。

体力には自身があっただが………人気店は格が違うな。

いつも手伝っている年配者の店より、動き回る必要があるようだ。

「あ、お疲れ様空也くん」

「どうも、お疲れ様です美由紀さん」

たそがれていると、高町家の長女、美由紀さんが来た。すると隣に座っていいかと聞かれる。

特に断る理由が無いので、一応肯定した。

しばらく、他愛ない話をする。

と、突然、

「……………最近さ、なのはの元気が無いんだ」

「……………?」

「いや、ね、何か思いつめているというか、何と言っか……………」

「

……………つまり、

「何か悩んでいるようだ」と

「うん」

どうしよう、心当たりがあり過ぎるんだが。

美由紀さんにもそれを見抜かれたらしい。

割と真剣な顔で、

「何かあるんだね?」

「というか、美由紀さんも知っていると違います」

「何が……………って」

『ああ』と、思い出したように上を見上げた。

「……………あの子らしいというか、何と言っか」

「あれは俺の自業自得です、別にあいつが気負う理由は無いはず」

「それでも悩んじゃうのがなのはだから」

「……………どうも納得できん。」

「だいたい、そんなに悩んでいるなら友達はある程度のがス抜きくらい出来るはずだ」

「出来るようだったら相談してないよ、それに、君の不評の原因でもあるから、余計に、ね」

「そういえばそうだったな。」

「まあ、言いだしっぺだからって恨む気は無いが、友達ならガス抜きくらいしろっていう話だ。」

「人のことをとやかく言う趣味は無いが、今のあいつらはどうなっている？」

「空也くん？どしたの、そんなに考え込んで？」

「え、あ、いえ、何も……………」

「考え込んでしまっていたようだ。」

「美由紀さんの声で、現実を引き戻される。」

「ついでに休憩時間も終わったようなので、仕事に戻ることにした。」

「空也くん今までお疲れ様、はいこれお給料ね」

「はい、お世話になりました」

「もう！そんな言い方したら今生の別れみたいじゃない！」

別にその気は無いのに、桃子さんにはんばん肩を叩かれる。

「すみません、地味に痛いです」

「あら、ごめんね」

謝っている割には反省の色が見えない。

けどそれを指摘したらいけない気がしたので、あえて無視することにした。

給料の入った封筒をバッグにしまい、一礼してから翠屋を出る。

外は大分暗くなっている、足元や周りに気をつける必要があるようだな。

何にせよ、早く帰ることが先決だ。

帰宅が遅くなつて面倒ごとに巻き込まれるのもごめんなので、真っ直ぐ家に向かうことにする。

……なにも起こらないことを祈ろう。

翌日、私立聖祥中学校。

昼休み、屋上でご飯を食べていると、見知った顔が凄い形相でこっちにきた。

うちの一人がわたしの肩をがっちり掴んで、

「なのは！アリサから聞いたけど、大丈夫だったの！？」

「……何が？」

「決まってるやん！空也のことやー！」

肩をがっちり掴んでいる子　フエイトちゃんとその後ろにいる
はやてちゃんとすずかちゃんが、心配そうにこつちを見ている。
思わずため息をついてしまった。

「……別に大丈夫だったよ、人目も多かつたし、仕事関係

で2、3回話しただけだから

「ほんとに？」

「隠してないよね？ほんとに何も……」

「……っ」

この人たちは………何度も………何度も
！！

「何も無いって言ってるでしょ！！」

「……っ!？」

「……!!」

………。

「ごめん、でも本当に何も無いから」

「わ、分かった」

まだお弁当の中身は残っているけど、もう食欲がない………。
………速く教室に戻ることにした。

「そーいやさー」

いつもの屋上。

騎子が俺を見る。

「そもそもミッチーって、何でみんな……特に私立の奴等に毛嫌いされてるわけ？」

「……」

……突然痛いところを、突くなこの元氣娘は。

「今更だな」

「むー、だって気になったんだからしよーがないじゃん」

「でも確かに気になる、生徒会長と副会長あたりなら何かしってるんじゃない？」

槍馬の言葉を皮切りに、俺以外の視線が弓成と刀子に集中した。

二人は『見られても……』という顔をしている。

「……人のイタイ昔話を根こそぎ掘り出すのがお前らの趣味だったのか？」

……しばらくこの状態が続いたが、何だか本人達がいたたまれない感じになってきたので、フォローを入れた。皮肉っぽくなったのはご愛嬌だ。

「うぐつ、でもうちの学校のはともかく、私立の奴等からの悪評半端無いじゃん!!」

「言わせたい奴には言わせておけばいい」

視線が今度は俺に集中しているのが分かる。

だが騎子は諦めていないようだ。

黙り込みはしたものの、知りたいという気持ちが氣迫で伝わってくる。

といつても、こいつのあしらい方は慣れているのでスルーすることに。
やがて騎子も諦めたようだ。
視線を感じなくなった。

夕方。

昼間にあんなことがあったので、今日は一人で帰っている。
何だか、いつもより憂鬱な気分だ。

……… 周りが嘘にまみれて、精神が限界になってきた気がする。

ホントのことを知っている人は隣にいない。

……… 一人じゃないのに、独りぼっち。

また……… 『独りぼっち』………。

一人ぼっちが嫌だなんて、弱虫のいうことだよな？

「……… つ!!!?」

後ろを振り返っても、誰もいない。
けど確かに今声が……………。

「ひゃっほう！見つけたぜ！！」

っ上！？

見上げると黒い羽をはやした男の人が見える。
こっちを見下ろしているその人は、気持ちの悪い笑顔を浮かべていた。

「つくつくつく……………ここでお前を殺せば、この世界はもらっ
たも当然だあ！」

男の人は言うなり黒い剣を振り下ろしてきた。
とっさにバリアを張るけど、まるで障子紙を切るみたいに突破される。

少し肩を切られて、思わず後ろに下がった。

「思ってたより動けるみたいだなあ？『原作』とは大違いだぜ！！」

『原作』……………まさか。

「トリッパー転生者……………？」

「正解！ついでにいいこと教えてやるよ！」

男の人は、また剣を振りかぶって接近してくる。
今度はシールドを三枚重ねして、前に突き出した。

「原作キャラは、転生者様じゃ勝てねえ！！！」

「え、きやあつ！」

また紙みたいに切られた。

そんな、思いつきり硬くしてあったのにこれって……。蹴り飛ばされて、地面を転がる。

ダメージを受けたのは腹一箇所のはずなのに、全身が痛い……。

動こうにも動けない……。

けど、助けを求めるわけには行かない。

だってわたしは……。

不屈のエアスオブエアスだから？くっだらなーい！

「……………つまた……………」

この声、いつたい？

「はっはあ！突然だんまりか！？遺言くらい聞いてやろうと思ったが何も言わないんじゃないかねえ！！」

しまっ……………。

目の前が真っ暗になって、あの男の人しか見えない。

……………死ぬの？

いやだ、嫌だ嫌だ嫌だ！！

まだ謝ってない！あの人にごめんなさいって言ってない！！

それにこんなところで独りでなんて……………いや！！

「おいでませ！アルトリア！」

任せろ！トウコ！

「なんっ！？ぐおおおおっ！！」

目の前に薙刀を構えた人と、何か見えないものを構えて宙に浮いている人のようなものが降りた。

男の人は『二人』の一閃に飛ばされて、壁に打ち付けられる。

二人とも凄くきれいで、凜とした雰囲気があっていた。

「……………つて、いけない！」

「あの、逃げてください！その人、わたし達じゃ……………！」

「うん知ってる、『原作キャラ』じゃかてないんでしょ？」

「え……………？」

その人はこつちをみて笑うと、もう一度男の人と向き合った。

「海鳴市立月白中学校生徒会副会長！剣ヶ原刀子！」

トウコの剣であり鎧であり彼女自身である、ペルソナルトリア！

「推して参る！！！」

威敵たつぷりの佇まいで『二人』は名乗りを上げて、男の人に斬りかかった。

さつきとは打って変わって、今度は男の人が苦戦し始める。

男の人は何度も何度も切りかかるけどひらひら避けられて、逆に反撃されたりしている。

「……………すごい、トリッパー転生者相手にあそこまで戦ってる。」

「っ、このっ、てめ！同じ転生者だろお！？何で邪魔するんだよお！！！」

「はて、おかしなことを聞きますね」

『二人』が、縦一閃で男の人をまた吹き飛ばす。

「わたしは確かに転生してこの力を手にしましたが、それ以外はど
うだっていいです」

ただ、私もトウコも貴様のような外道は見逃せん!!
「っ畜生!!」

男の人はもう闇雲に剣を振り回す。

考え無しに振られているのに凄く速さのそれを、簡単そうに避けて
いく。

本当に……すごい人だな。

「っだったら……」

すると男の人が消えた。

魔力は……探れない。

完全にどこにいるか分からなくなった。

どこに……?

「おや、姿を消しましたか……」

気配も無いようだ、どうする?トウコ?

「うーん……アルトリアですら探れませんか」

少し考えこむ「二人」。

すると、薙刀を持った人はふふつと笑った。

顎にあてていた手を離すと、青いもやを出す。

「ちよつと荒つぱいけど、これで……」

御意

風が『二人』の周りを駆け巡る。

動けないわたしはただそれを見てることしか出来なかった。
やがて、風の動きが激しくなる。

『二人』は自分の武器を振り下ろす。

「マハガルーラ！！」

その場全体に、風が吹き荒れる。

次の瞬間に見たのは、風に切り殺されるあの男の人の姿だった。

『あの子』は、『わたし』と同じ存在。

いいな、『わたし』もいつか『あなた』とあんなふうに背中を合わせたいな。

受け入れてくれるかな？気付いてくれるかな？

『わたし』は『あなた』の一番の味方だよ。

だって、『わたし』は『あなた』で『あなた』は『わたし』なんだから……。

今、また声が……？
いったい……。

「大丈夫？」

「え、あ、はい」

いつの間にかあの薙刀の人が目の前にいた。
何かを構えた人のようなものもいなくなっている。
薙刀の人に手を貸してもらって、何とか立ち上がった。
まだ体は痛いけど、さっきよりは楽になっている。

「ごめんね、もっと早くに来れたらよかったのに」

「そんな！あの、こちらこそ、助けていただいちゃって……」

その、ごめんなさい」

「いいよ、無事でよかった」

そう言つて、薙刀の人は笑った。
……今になってよく見てみると、きれいな人だなあ。
あんなに戦えるし、わたしなんかとは大違い……。

「わたしはもう帰るけど、帰り道には気をつけてね？」

「あ、はい、ありがとうございます」

その人に一礼してから、帰ろうとして、思い出した。

「あ、あの」

「うん？」

「さっき、月白中って言いましたよね？」

「ああ、言ったね」

………だったら、

「あの、道村空也って……」
「知ってるよ」

………。

「……………確かにちょっと前から評判は悪くなってるけど、うちでは別に変わったところは無いかな？」

「そう……………ですか」

いいな、きつと受け入れてくれる人がいるから、そんなに悪く思われてないんだ。

……………いいな。

「じゃあ、わたしはここで、帰り気をつけてね」

「……………ん」

小さく頷いてから、その人に背中を向けて家に帰ることにする。

……………自分の無力を思い知った時間だった。

はあ？今更気付いたの？あんたは最初っから弱いじゃない

つまた！

あんたの実力なんて高が知れてるのよ、負けてとーぜんよ！

誰！？

くすくすくすっ決まってるじゃない

後ろに気配を感じた。

わたしはあんたよ

振り返ると、

ハァーイ、こ・ん・ば・ん・は？

翌朝。

今日もいつも通りに、登校するはずだったんだが、
珍しく玄関が強くとたかれる音がする。

返事をしてから出ると、これまた珍しい顔がいた。

「美由紀さん？おはようござい……」

「それどころじゃないよ！！大変！大変なの！！」

美由紀さんはかなり興奮している様子だ。

とりあえず深呼吸をさせて、落ち着かせてる。

その上で、改めて用件を聞いてみた。

「なのはが、なのはが昨日から帰ってきてないの！」

「……仕事か何かじゃないんですか？なのは、管理局ってのに勤めてるんでしょ？」

「連絡してみたけどいないのよ！街中も探したけどどこにもいなくて！！」

はあ……一体どうなっているんだ？

帰ってないって、だったらどこに……？

……しよーがないな。

「放課後、俺も友人に手伝ってもらって探してみます」

「あ、お願いね！」

「はい、それじゃ俺はこの辺で」

美由紀さんと別れて、学校に向かうことにした。

……。

……。

……。

何か面倒ごとに巻き込まれていきゃいいが。

第四話襲撃と失踪（後書き）

刀子のペルソナについては、『fate』のセイバーがペルソナっぽくなつた感じを想像してください。
さて、『お返事の部屋』いきまーす。

天ノ刃羽斬様

連続感想ありがとうございます。

ミゼばあは・・・・・・・・・・むふっw

ご想像にお任せしますよww)

悪評に関しては、本来はそんなに大きなことでもありませんけど、誤解や妄想もどきで大事になりすぎていますから。

3人のリアクションが上手くかけていると嬉しいです。

次回、ちょっと早いですが過去話っぱいものを。

第五話影（前書き）

彼女覚醒なるか！？

3 / 4 : 一部修正

第五話影

「探して欲しい人がいる？」

昼休み、いつもの屋上。

みんなに人探しを頼むことに。
搜索対象はもちろんなのはだ。

「ああ、昨日から行方不明らしくてな、搜索を頼まれたんだ」

「俺らは別に、なあ？」

幽斗がみんなに確認を問うと、全員が頷いた。

「……まあ、こいつらのことだ、引き受けてくれると分かっていたが……。。
いざ受け入れてもらうとうれしいものがあるな。」

「それで、その子の特徴は？」

弓成にそう言われて、今朝美由紀さんから受け取った写真を見せた。
すると刀子が珍しく驚いた顔をして、

「この子、会ったことある……。」

「……！！？」

「本当か……！！？」

「うん、昨日の夕方転生者に襲撃されてたのを助けたの」

「それは何時ごろだった？」

「えっと、結構暗かったから七時くらい」

なるほど……。

だったら、七時以前と七時以降の足取りを掴んでみる必要があるな。早速提案をし、放課後全員で手分けして搜索をすることになった。

少年少女、聞き込み及び探索中……。

放課後、ショッピングモール『アクセスポリウム』のフードコート。
みんなで集めた情報を交換した。
結果……………。

「やっぱり、七時以降の足取りが掴めないな……………」

商店街のおじさんやおばさんにも聴取を試みたけど、情報は掴めなかった。

だが何も無いと言うのも不振すぎる。

一体何があった……………？

「そういえば、商店街のおじいちゃんが言ってたよ？なのはちゃん、何か悩んでる感じだったって」

「悩みって……………」

「……………」

由香の報告を聞いた弓成と刀子はじつと俺を見た。

理由がなんなのか、俺も重々承知している。

引きずってばかりだと思っていたが、あいつは他人に見られて分かるくらいに……………。

「……………何か知ってるみたいだな」

幽斗が、どこか暗い口調で問いかけてきた。

視線が一気に俺に集中する。

……そろそろ時候か。

「……騎子達二年組に気付く前だから、中一の頃だったか……なのはがおばあさんを庇って、ヤンキーっぽい人たちに絡まれていたのを見かけたんだ」

みんな、黙って聞いてくれている。

「流石にまずいかなって思って側に近づいてたら、なのはが路地裏に引きずり込まれている所だったんだ、それを追いかけて……」

その追いかけて、追いついた後の時を思い出して口を閉ざしてしま
う。

正直、喋っていいのか分からない。
つかの間考えた結果。

「……その後は、正直自分でも何が起こったのか分かっていない、ただ、気付いた時には血まみれでなのはと向き合っていて、ちょうどそこになのはの友人達が来た」

『あとは知つての通りだ』と締めくくって、全員の反応を見てみた。
みんながみんな、微妙な表情をしている。
やがて、弓成が口を開いた。

「俺と刀子はそのときちょうど生徒会の研修生として先輩の助手をしていたんだ、空也の事件はそこで知ったんだよ」

「ということは、なのはって子の失踪原因ってそれがらみ？」

「てか、今のミッチーの話聞いてたらそうとしか思えなくなっただわ」

幽斗と騎子が、確信したような顔で頷いた。

「とりあえず情報は集まったから、これからは搜索を中心にしようよ」

「りょーかい、行きそうな場所とかの情報も掴んでるしね」

刀子がまとめをして、全員がグループになって散開する。
.....。

「悪い、俺は単独行動する」

「?別にいいと思うけど、どしたの?」

由香に理由を聞かれたが、あえて無視してある場所へ向かった。

つ・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？ここは・・・・・・・・。。。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ
」

目の前に、真っ赤な景色が広がる。

確かここは臨海公園にある、普段誰も来ない場所だ。

わたしも『あの人』もまだ小さい頃に見つけて、二人だけの秘密にした場所・・・・・・・・。。。

一年中紅葉している、不思議なところだ。
けど、どうしてここに？

あ後は真っ直ぐ帰ったはずなのに・・・・・・・・。。。

・・・・・・・・。。そうだ、薙刀の人に助けてもらったあと、声がして・・・・・・・・。。。

振り返ったら・・・・・・・・。。。

「そだ、『わたし』が・・・・・・・・。。！でも何で？いつの間ここに・・・・・・・・。。？」

ケータイを取り出して確認すると、日付が次の日になっていた。

っていつか次の日！？え、一日たってる！？

わたしここで一晩すごしたの！？

一体何がどうなって・・・・・・・・。。！

もう一度ケータイを確認すると、メール、電話ともに着信履歴がすごいことになってる。

な、何がなんだか分からないけど、とにかく帰らなきゃ。えっと、ここから出る場所は……あっちだ！とにかく走って出口に向かうことにする。走って走って、あとちょっとでここから出……。

「って、え……？」

何で……どうして……？

「出れてない!？」

確かに出口に向かって行ったはずなのに、何でかまたここに入り込んでしまっている。

何で……どうして……？

『出られるワケないじゃない』

「……っ誰!？」

後ろを振り返ると、わたしとおんなじ顔をした『人』が空にいた。

「フェイト！いた！？」

「いない！」

「もう、いったいどこにおるんや！？」

「こっちもダメ！」

「こっちも！」

今アリサ、はやて、すずかの四人で、公園内を探し回っている。

エイミイにも調べてもらった。

確かになのはの反応はここから出ているのに場所が掴めない。

一体どうなって………？

………？向こうにいるのは………。

「っ空也！！」

まさかあいつが何か………！

アリサ達のほうを見るとみんな気付いたらしい。

小さく頷いて、後を追うことにした。

「本当にあの場所にいるのか!？」

ああ、だが妙な力が蔓延している、心してかかれ
「分かっている!」

ただひたすらに走って、『あの場所』へ向かう。
近づくにつれて、真っ赤なが楓増えてくる。

同時に妙な気配も強くなってくる。
と、その時、

「ああっ!」

なのはの悲鳴が聞こえた。

何とか着地の態勢をとって、地面に立つ。
今わたしが纏っているのはバリアジャケット。

ただし、いつものアグレッサーではなく、フルドライブのエクシー
ドだけど……。

それでも相手に傷を付けられていない。

『あはははははははははっ！！』

目の前で笑い声を上げている相手は、金色の目以外は、同じ姿、同
じ魔法、髪の色、声まで同じ。
……同じ、なのに。

『よっわーい！そんなんじゃわたしは倒せないよお〜？』

そう言っただけでまた高笑いを上げた『わたし』は歪な黒い杖を振りまわ
している。

「……………つうぐ……………」

立ち上がるうとしたけど、体が動かない、痛みが邪魔している。
こんな戦い初めてだ。

無理に動かした所為なのか、せつかく血が止まった腕の傷から、ま
た血が流れ出している。

すると、前のほうから足音が聞こえてきた。

ばたばたと不揃いなテンポを刻んでいることから、それが二人以上
だと簡単に推測できる。

「なのは！」

案の定、真っ暗な中から現れたのはフェイトちゃん達だった。

こっちを見たみんなは、もう一人の『わたし』を見て驚いている。

一方、もう一人の『わたし』は、みんなが来たのを見計らったよう

に、にやにや笑って、こつちを見た。

『不屈なんて無くなればいいのにね?』

突然口を開いた。

『わたしはずるい子、みんなに構ってもらいたがりの弱い子』
「つな、何を……」

背筋にぞくつと電撃が走るような感覚がする。
同時に、やめて欲しいと願った。

『独りが怖い、誰でもいいから隣にいて欲しい』
「……」

思わず頭を抱え込んでしまう。

『独りぼつちは怖いよねー? みんなに囲まれていたいもんねー?』
「ち、ちが……」

震えがとまらない。

『だからみんなの気を引くために綺麗ごとほざいたり無茶やったりする!』
「っやめて!」

突然、『わたし』がお腹を抱えて笑い出して。

『そしたら大当たりじゃない! みんなみんなわたしを見てくれる! 卑怯者でばかばかしいわたしをね!』

「・・・・・・・・・・いや・・・・・・・・・・」

あの子が言ってることが的を射ていたからなのか、無意識に言葉が出てくる。

『くすくすくすつ、ねえ覚えてる？六年前に【みんな】と戦ったときのこと、わくわくしたよね？上手くいけば恩人としてもらえるんだからさあ〜』

「・・・・・・・・・・やだ、見な・・・・・・・・・・」

震えがいつそう強くなった。

フェイトちゃん達に向けて、拒絶のような言葉を言ってしまう。

『そしてこれも大当たり！フェイトちゃんもはやてちゃんも、わたしを頼ってくれた！弱つちいわたしをね！！』

「見ないで・・・・・・・・・・」

ふつと、フェイトちゃん達のほうに視線を向ける。

みんなはまだ何が起きているのか、理解できていないみたいだった。・・・・・・・・・・ほっとした自分がいた。

「あ、あなたは何なの！？勝手なことばかり言わないですよ！！」

せめてもの抵抗に、『わたし』に向かって怒鳴る。

すると、『わたし』はまたにやつと笑って、

『何度も言わせないでよ、わたしは、あなたよ』

「ち、違う・・・・・・・・・・！そんなはずない・・・・・・・・・・！！あなたなんか・・・・・・・・・・あなたなんか・・・・・・・・・・」

震える声で、

「わたしじゃない!!」

『わたし』を否定した。

「なに勝手なことほざいてるのよあんた!!」

「そうだよ！なのはちゃんがそんなこと思うわけ無いじゃない!!」

「なんや状況わからへんけど、もう御託はごめんや！」

「あなたがなのはな訳ない！なのはであって堪るか!!」

はやてちゃんとフェイトちゃんが、アリサちゃんとすすかちゃん
二人を下がらせて、デバイスを起動させる。

その時だった。

『………つく………くつくつくつくつく………
………あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!!!』

『わたし』が今までに無いくらい大笑いして、赤黒いオーラを噴出した。

『あははははっあははははははっ!! 気持ちいい～さあーいこお………
………』

赤黒いオーラは、段々と『わたし』を包み込んですっぽり覆い隠してしまう。

『そんなこと言われたら………わたし………』

同時に、意識をこっそり持っていかれる感覚がした。

視界が一気に暗くなって、街の明かりと『わたし』がかかるうじて見える状態になる。

そんなわたしが、完全に気絶する瞬間に見たのは、

『暴れなくなっちゃうじゃなあ〜いつ〜!』

バケモノに変わってしまった『わたし』の姿だった。

もうよせ空也!!このままだとお前の腕が……!!

「だからって諦める人物じゃないことはお前が一番知っているだろう!」

声のするほうへむかっていると結界のようなものにぶち当たり、何とか突破しようとしている次第だ。

刀で何度も斬り付けるが、キリがない。
やけに硬い結界だぞ……。結界にひびが入った。
何度目か分からない斬撃を繰り返した時、

「っよし！」

あとは任せろ！！

バックステップで一旦退く。

次の瞬間にはひびに雷撃が叩き込まれていた。

「いくぞ！！！」

応っ！

刀を構え直して、中のほうに再突撃する。

閑話休題。

中に入って見たのは、バケモノと戦っているテストロッサ達と、傷つき倒れたらしいのはを護るように、隅っこに待機しているバニングスと月村だった。

再び刀を握りなおして、敵と思われるバケモノを見据えたときに、応戦していたテストロッサ達がバケモノに吹き飛ばされる。

そしてバケモノの視線が動く。

ただし、俺ではなく気絶しているのはの方に、だが。

『あなたはもう要らない、だってわたしがあなたになるんだから！』

言うなり、バケモノは口に風を溜め込む。

標的は言うまでもなくなのはだ。

っ！チャージが思ったより早い……。っ！

間に合うか!?

おい！忘れていないだろうな!？『私達』の弱点は……

・！

「こう言う時に自分を可愛がる主義じゃない!！」

そうこうしている内に、風が発射された。

予想の斜め上に行く速度でなのはに撃たれたそれを見据えながら、ただ滅茶苦茶に走って、近づく。

だが間に合わない………!

何とか、しないと………!

もう必死に、『カード』を出して叩き割る。

「防げ!！」

承知した!!

バニングス達ごとなのはを突き飛ばして、自分が盾になる。

次の瞬間、衝撃が来て、吹き飛ばされた。

ペルソナごと庇ったので、ダメージは二倍だ。

なんとか体制を立て直すものの、弱点を突かれた所為か、体が思うように動かない。

流石に無理をしすぎたか………。

『あらら〜？乱入者さん？くふふっ楽しくなってきたわねえ〜』

目の前のバケモノは鉤爪を打ち鳴らすと、俺を見る。

『ふふっ丁度こいつらじゃ退屈してたところだし!？良いわよお〜
かかってきなさい!!!』

威嚇でもするかのように、バケモノはくわつと牙を見せた。それを皮切りに、バケモノは突進してくる。歩法を駆使してなんとかそれを避けると、バケモノに接近、一閃する。

もちろんこの程度で倒せると思っていないので、すぐに次の行動に出る。

奴が放つたのは疾風属性の攻撃。

恐らく、こちらの属性も効くはずだ。

「こい！『イザナギ』！！」

いくぞ！ジオ！！

カードを割り、黒い中に深みのある蒼のコートを纏った俺のペルソナ、『イザナギ』は、大剣を構え、雷を落とす。

相手にダメージは通ったようだが、これといった突破口は開けなかったようだ。

「つち、弱点じゃないか……」

だが効いてはいる、いけるぞ！

「わかった！」

構えた刀で、再び斬りかかる。

「ちよ、あんた！」

背後から、バニングスの声が聞こえる。

が、構ってる暇はないので『すっこんでろ！』とだけ言っておいた。……あとで思ったが、仮にも女性相手にすっこんでろはあんまりだったような気がする。

バケモノの尻尾が地面を巻き込みながら薙ぎ払われてきた。

前転を利用して何とか避け、引つ込めていたイザナギを再び召喚、神経を研ぎ澄ませる。

だが体がついてこないのでは意味がなく、研ぎ澄ませる前と大差ない結果になってしまっている。それでも負けるわけにはいかない。

『あははは、あーっはっはっはっは！強い人はいいわね！自分で自分の身を護れる！』

突然バケモノが攻撃の手を止め、卑屈な目で俺を見てきた。

思わず俺も動きを止める。

先に受けたダメージの所為か、体が鉛を纏ったようにだるかった。そんな俺を見ながら、バケモノは続ける。

『あなたの所為で、わたしがどれだけ背負ってきたかわかっている？』

何処か寂しさを含めた言い方で、語りかける。

『周りは嘘ばかり言う、本当のことを言っても誰も聞いてくれない、それどころか言わせようもしないじゃない！』

歪な杖と融合している腕を、振るった。

ごうっつと、風が起くる。

『それもこれも全部、あなたの所為よ！』

続けて、爪先をこっちに向けた。

「そうよ！だいたいあなたの所為でなのはが傷ついて、こんなこと

どこか暗い場所にいた気分だ。

未だに重たい体を起こして、目を開ける。

目の前に、『わたし』がいた。

「……………つあなたなんか……………わたしじゃ……………
……………」

気絶する前のことを思い出して、そう口にしてしまう。

……………分かってる、けど、認めたくない。

認めてしまったら、何か失くしちゃう気がする……………。

すると、誰かに肩を叩かれた。

反射的に振り返ると、空也がいる。

戦ってくれていたのかな？すぐくぼるぼろになっている彼はわたしを見て、黙って首を振った。

そして『わたし』に目を移して、

「……………あれは元々お前の中にいた者だ、お前が普段押さえ込んでいた感情が、許容の限界を迎えて実体化してしまった姿」

そう教えてくれながら、わたしと『わたし』の間に立つ。

「だから、お前が受け入れてあげなきゃ暴走するしかない」

受け入れて……あげなきゃ……。

空也に黙って促されて、『わたし』と向き合う。

そう言えばさつきから『わたし』はだんまりだ。

何も喋らない。

後ろから視線を感じる。

きつとフェイトちゃん達も見ているんだ。

……。

「……難しいね、自分と向き合っつて」

思わず、自嘲的な笑顔が出てきてしまう。

「あなたはわたしで、わたしはあなた、か……。」

確かに、『わたし』の言うとおり、そう思ってしまったている節が時々あった。

それが実体化して暴走して、みんなに知られて、見られちゃった。

……何だか、『わたし』に遭遇したときならいざ知らず、今になってみると、もう腹を決めるしかないみたい。

「……こんなわたしだけど、また一緒に歩いてくれる？」

そう、聞いてみる。

『わたし』は黙ったまま、無邪気に笑って頷いてくれた。つられて、わたしも嬉しくなる。

「これからも、よろしくね」

『わたし』に近寄って、手を差し出した時。

「・・・・・・・・・・・・・・・・認めるの？」

「え？」

予想していなかった言葉に、振り返る。

『友達』がみんな、まるで悪人を見るような目でわたしを見ていた。

「なのは、汚い自分を認めるの？」

「・・・・・・・・・・確かに汚いかもね、けど、それもひっくるめてわたしだから」

「そっか・・・・・・・・・・」

大丈夫だと思ってた。

みんななら、わたしも『わたし』も認めてくれると信じていた。

「幻滅だよ」

……信じていたのに。

第五話影（後書き）

わたしが書きたいのはキャラクターじゃなくて人間なんです。と、おそらく次回に言うべきであろう言い訳をここで言ってみちゃったり。

空も含む転生者組のペルソナに関しては、一段落してから登場済みの『者』の設定を出そうかと。

あと、自分で書いててゲシュタルト崩壊起こしそうになったのはここだけの話です。

それでは『お返事の部屋』GO！

天ノ刃羽斬様

なのははもう何度も襲撃されているので、もう慣れてしまったというか。

ただ、今まで襲ってきたのが経験不足だったり、単に魔力がでかいだけの奴等だったので、その辺描写できるようにしたいですorz
モノクロームファクターは知りませんが、『黒』っぽくかけると嬉しいです。

あと・・・そう簡単に覚醒させませぬwwww
彼女にはもうちょっと悩んでもらいます。

AfterRain様

初めまして、ご感想ありがとうございます。

（ ペルソナ4をプレイしている上に予想の斜め上に行くカップリングを妄想した方が降臨なされた！！
個性をかき分け切れているみたいで安心です^^
シャドウをシャドウっぽくかけてるといいのですが・・・。

残念ながら剣x道はありませんが、強い女性が魅力的と言う意見には頷けます^^

展開に期待していただけるようがんばります！

Veritas様

ここにもいらっしやいましたかww

言われてみればそうですね、ゲーム関係いっぱいです。

全部実際にプレイしてませんけどv()

面白って直感的に思ったものをクロスオーバーさせてるので、それがたまたまゲームだったって話じゃないんでしょうかw？

(以上、若本に若本で返事w)

さて、次回はどうなるのは！？

それではノシ

第六話 一段落（前書き）

今回結構難産でしたよ……！！
追記：所々修正。

第六話一段落

「空也!?!」

心と体、両方の疲労でぐったりしたなのはを抱きかかえていると、幽斗の声が聞こえた。

振り向くと、幽斗の後ろからは弓成達も来ている。

「わ、ちよつ、ミツチーぼろぼろじゃん!?!」

「何やらかしたの!?!」

流石にここまで負傷した姿を見られたらそうなるか。

早速弓成がペルソナを召喚して、治療を始めてくれる。

そのすぐ後、俺は少し考えてから、

「……………刀子、アルトリアの全てアヴァロ遠き理想郷でなのは……………」

「え、いいけど……………空也は?」

「俺は別に……………なのはは被害者だからな」

つかの間考える刀子だが、すぐに了承してくれた。

召喚されたペルソナ『アルトリア』になのはを渡し、一息つく。

「ね、何があったの?」

一段落したところで、改めて由香が聞いてきた。

話していいものかどうか考え込んでしまったが、みんなを信じることにする。

こいつらなら、バニングス達のようになるはずがない。

「ふえ、フェイトちゃん？」

テストロッサの口から出てきた言葉に、困惑した様子なのは、それに構わずに八神達が口を開く。

「あんななのはちゃんやないに決まってる」

「だいたいあんだだつて否定してたじゃない」

「なのはちゃんに黒い部分なんてあるはずない」

俺も、恐らくなのはもはつきり見た。

友人四人全員が、うつろな目をしている。

それが洗脳されたようなものであるということに気付いたのは、俺だけのようだが……。

空也！

突然聞こえたイザナギの声。

何が起こったのか聞かなくても、『俺』が何に気付いたのかわかった。

視線が、もう一人の『なのは』の方に向かう。

そしてすぐに、彼女の様子が明らかにおかしいことを察することが出来た。

『やめてほしい』と、目が語っている。

首をふるふると横に振って、手を前に突き出し、友人の冷たい言葉の猛襲を受けているなのはを、護ろうとしていた。

だが、その行動はこれといった効果を出してくれない。

やがて、

「もうあんたを友達なんて思いたくない」

「もうあなたを仲間なんて思いたくない」

「間違っているあなたなんて、あなたじゃない」

「や、やめてよ！この子を否定しないでよ！どっちもわたしってだけの話じゃない！！」

必死になって、『なのは』を庇って、テストロッサ達を説得しようとするのは。

だが、とどめは無情に刺された。

「絶交だよ、なのは」

バリンっと、何かが砕ける音が聞こえた気がした。

なのはが力なく膝をつくと同時に、『なのは』にも変化が起きる。

青い、悲しみや寂しさといった負の感情を漂わせたオーラに包まれ、消えてゆく。

『なのは』は今にも泣き出しそうな顔で、なのはに向けて必死に手を伸ばした。

なのはが手を取ってくれなくても良かったようだった。ただ、届けばいいと思っっているようだった。

しかし背中を向けて去るテストロツサ達を、呆然と見送るなのはに、触れることすら叶わないまま、『なのは』は完全に消え去り、一枚のカードを残す。

それは一瞬だけ存在した後、青いもやを発しながら砕けて完全に消えた。

「……………なのは」

未だに愕然とした表情をしているなのはに、声を掛けるしか出来ない。

強い人はいいよね。

ついさきほど、『なのは』に言われた言葉が脳裏をよぎる。

……………俺は強くない。

目の前で傷ついた幼馴染すら救えない、最低な人間だ。

そうやって自己嫌悪に浸っている時、隣でどさっと、何か重いものが落ちる音がする。

はっと現実に戻ると、なのはが倒れていた。

「お前達が来たのは、そのすぐあとだ」

黙り込んだみんなを見渡して、締めくくる。

いつのまにか、俺もなのはも治療は済んでいた。

なのはが纏っていた武装も解除されている。

ちなみにだが、お察しの通り、俺となのはは幼い頃からの付き合いだ。

魔法を使えることくらい知ってるし、あのRPGっぽい服装が防具だつてことくらい分かる。

とにかく、なのはを家に送ることが先決だ。

……正直、気まずい部分があるが、仕方ない。

そのことを話すと、みんなが同行してくれるとってくれるとってくれた。

みんなに感謝しつつ、高町家に向かうことにした。

どうして……!?

こんなことって……!!

認めてくれたのに……

一緒に歩こうって言うてくれたのに!!

そんな……

また、閉じ込められるの……?

ダメだ……

また、独りに……

……

……

.....

なのは.....

俺たちは今、高町家の玄関前にいる。

.....さっさと入ればいいだろうって？

残念、そうも行かない理由があるんだ。

目の前には黙ってこつちを睨む男性が一人。

もちろん、土郎さんだ。

玄関の一步手前にある門を潜ったところに仁王立ちしていたもんだから、動こうにも動けない状態にある。

さらに広い家とは言え、ここは玄関。

本来は通り過ぎる場所だ。

そこに9人も立ち往生すると、流石に狭く感じる。

．．．．．ぶつちやけ、沈黙がかなり痛い。

それを破ったのは原因である土郎さんだった。

「．．．．．何があつたのかは、フェイトちゃんたちから聞いた」

．．．．．あいつら、土郎さんに告げ口したのか。

『けど』と土郎さんは続ける。

「俺はなのはの親であり家族だ、判断はなのはの言い分を聞いてからに思ったが．．．．．」

視線が、俺におぶさっているなのはに向かう。

「．．．．．空也くん、変わりに君が話してくれないか？」

「．．．．．分かりました」

なのはにも俺にも、疚しいところなんて一つもない。

だから、堂々と返事をした。

閑話休題。

なのはの心の闇が暴走したこと、本人がそれを受け入れたものの、友人達が拒絶したこと。

先ほど起こったことを、出来るだけ詳しく聞かせた。

聞き終えた土郎さん含む高町家のみんなは、真剣に考え込むやがて、

「……………俺は、なのはに非はないと考えている、お前達はどうだ？」

「わたしも同意、そりゃ信じてる人や自分の真っ黒い部分を突きつけられたら、動揺はしちゃうけどさ、それでも受け入れたのははえらいと思う」

土郎さんの問いかけに、美由紀さんが少し笑いながら答える。

桃子さんも何も言わなかったものの、なのはのことを信じてくれているのは人目で分かった。

……………いい家族に恵まれたんだな、なのは。

ちなみになのはは自室に運ばれた。

今頃静かに寝ているんだろう。

「しかし、君……………いや、君達が転生者とはね」

実は、事情を話すにあたって、転生者であることを土郎さん達に打ち明けた。

重たかった空気が、少しだけ軽くなる。

「はい、といつてもなのはに危害を加えるつもりは毛頭ありませんし、させません」

胸をはって、堂々と言い切る。

対する高町家の皆さんは優しく笑って、

「そりゃ頼もしいね……………娘を、よろしく」

言うなり、土郎さんは深々と頭を下げた。

少し照れくさかったが、信頼されているのはとても嬉しかった。ほんの少しのあいだ、和やかな空気が流れたが、

「今の会話、何にも知らない人が台詞だけ聞いたら、結婚の許しをもらいに来た娘の彼氏と父親っぽいよね」

「ばいじゃなくて、まさにそれだと思うなあ〜」

騎子と由香が要らんことを言いおった。

空気が固まって、土郎さんから何やら怪しいオーラが滲み出てきた気がする。

とりあえず、原因になった二人を睨みつけておいた。

「こ、これからどうするんすか？主に学校とか！あいつらと同じなんでしょう？」

何とか嫌な予感を外れさせる為にか、幽斗がそう提案した。

「あ、そうだね、空也の話だとかかなり嫌われちゃったみたいだし、そんなだったら・・・その・・・いじめ、とか・・・」

最後の部分を控えめに発言しながら、美由紀さんが答えた。

土郎さん桃子さん夫妻も、頭をかかけて熟考し始める。

と、今度は槍馬が手を挙げて、

「じゃあうちヨロヨロに来れば？」

まるで泊まる所がないなら来いよ的なので、さらっと言ってのけた。

だが、言っていることは双子の妹と違い、なんとというか、まとも(?)な意見だ。

高町家の皆さんもそれだっていう表情をしている。とりあえず、今後の方針の選択としては最重要候補に挙がったのはたしかだった。

本人に意見を聞く必要があるからということと、もう遅いことが重なったので、解散することになった。

まぶしい。

何かやわらかいものに包まれている感じがする。

これは……お布団？

……ああ、わたし、帰ってきたんだ。
……学校、いかなきゃ。

「……っ」

制服に手をかけたとき、背筋に寒気が走った。
同時に吐き気がしてくる。

……苦しい、全身が痛い。
上手く息が出来ない。

……これは、遅刻覚悟しなきゃかな？
しばらく部屋にうずくまっていると、痛みが退いてきた。

苦しくて吸えなかった分の空気を思いつきり吸って、ため息をつく。
時計を見ると、もうどんなに頑張っても絶望的な時間だった。

また、ため息が出る。
なんだか制服を触るのが怖くなってきた。

けど、パジャマのまま下に降りるわけにも行かない。
……考えた結果、普段着を来ておりにした。

階段を下りると、お母さんが台所でお皿を洗っていた。

お父さんもお姉ちゃんもいないみたいだね。

テーブルの上にはわたしの分らしい朝ごはんが置いてあった。
席に着こうとするとお母さんがこっちに気付いて、近寄ってくる。
……怒られる、かな。

結構遅い時間に起きたし、遅刻決定だし……。

「あ、なのは、おはよう」

「……ん、おはよ」

「……」

お咎め、無し？

あれ？でも時間的にはアウト、だよな？

「なのは、今日学校行かなくてもいいから」

「……え？」

え、えと、どういこと？

「……昨日空也くん達から色々聞いたの……それに、思うところもあるだろうから」

お母さんは笑っているけど、どこか暗い。

……何だか、罪悪感が湧いてきた。

「……ごめんなさい」

「いいのよ……大変だったわね」

そういうと、頭を撫でてくれた。

「あ、じゃあ翠屋の手伝い……」

流石にこのまま家に引きこもるわけにもいかないけど、お母さんは首を横に振って、

「それもいいわ……あの子達に会ってしまったら何をされるか……」

お母さんの顔は、すごく心配している。

.....。

「うん、わかった」

今のわたしに出来ることは限られすぎている。

だからここは、お母さんの言つとおりにするにとした。

屋上で大の字になって寝転んでいる。

今日は弓成達もいないので、俺一人だ。

昨日の出来事を思い出していた。

なのはのこともそうだが、それよりも彼女を拒絶したバニングス達

のことを考えている。

見間違えでなければ、あいつ等の目は明らかに操られている類のそれだった。

「……………何者かに、思考をいじられたのか？」

「お前は どう思う？ イザナギ」

同感だ、というか明らかに感じ取ったぞ……………精神が操り人形にされているようだった

「そうか……………」

なのはとあいつら全員の共通点といえば、

「時空管理局……………ばあさんがかわっているとは思えないが、確認を取る必要があるな」

そうだな、聞いておく必要があるだろう

丁度六時間目のチャイムが鳴る。

……………ホームルームには出席しておくかな。

少年、学業&移動中……………。

帰り道。

「ん……………洗脳、か」

「確かに考えられなくもないよね」

考え始める幽斗と由香。

弓成と刀子も『ありかも……』という顔をしていた。

「じゃあ帰ったらおばあさんに連絡だね、俺が引き受けるから、みんなはゆっくり休んで」

思考がまとまったらしい弓成が、連絡を引き受けてくれた。

というか、そういう難しいことは伊達兄妹より弓成に任せたほうが安心できる。

「あ、そーだ！ミッチー！！」

別れ際、騎子がこっちに手を振ってきた。

「なのはちゃん！声かけてあげなよ〜！？」

「……りょーかい」

「あつはー！それじゃあした聞かせてねー！」

あいつの表情からして、絶対に声を掛けなければならぬようだ。

……顔くらい見ていくことにした。

俺は今、高町家前にいる。

……一年振りとはいえ、ちょっと緊張する。
門のベルを押す。

出てきたら何を言おうか、頭の中を整理しているが……。

「……………出てこない」

一分くらい突っ立っていたけど、何の反応もない。

……………まだ帰ってきていないか？

まだ学校に行っている……………？

洗脳されているかもしれないとはいえ、かなり毛嫌いされた翌日に？
……………気はひけるが、まあ仕方ないか。

ここが高町家じゃなかったら、不法侵入だな。

それは言うな、イザナギ。

裏手に回って塀に飛び乗ってから、続けて飛び降りる。

……………小さい頃はよくこの方法で入り込んでいたものだ。
久しぶりにやった所為か、ドスンと音を立ててしまった。

「うにゃっ！？え、なにになに！？」

案の定、感づかれた。

だが中からなのは声が聞こえたので、家にいたようだ。

「く、空也！？ど、どしてここに！？」

「友達に様子見てこいと強制された、以上」

制服についた埃をはらいつつ、なのはに歩みよる。

一方のなのは戸惑ってはいるが、くすつと笑って、

「にやはは、もう……空也じゃなかったら警察に電話だよ？」

「む……スマン」

一瞬黙った後、思わず二人で笑ってしまった。

なのははまだこみ上げてくる笑いを抑えながら、

「ふふつ……お茶とコーヒーどっちがいい？」

「お茶、緑の方な」

「うん」

縁側に座ると同時に、なのはが家の中へ入っていく。

久しぶりに見る高町家の庭と道場を眺めながら、ぼーっとしていることにした。

閑話休題。

なのはが入れてくれたお茶をすすりながら、何を話そうかをまた考え始める。

そう言えば、今日は学校にいったのだろうか……。

聞いてみることにした。

「……今日、学校にいったか？」

「……いつてない」

なのはの表情が若干曇ったのを見てしまった。

慌てて慰めの言葉をさがしてみるが見つかりそうにない。

.....。

「.....そっか」

結局、それだけしか返すことが出来なかった。
なのはは困ったように笑う。
俺もつられて、口角を上げてしまった。

「.....大丈夫か？」

「.....多分」

今度は自嘲気味に笑いながら、なのはが返す。
.....そういえばさっきから笑ってばかりだが、大丈夫なのだろうか？

「.....泣かないのか？」

「自業自得だもん、泣けないというより泣いちゃダメ」

そういつて、寂しそうにうつむく。

.....何か言ってるやめたかったが、また何も見つからなかった。
気まずい気持ちで、ぬるくなったお茶を飲んだ時。

ぼたり

思わず隣を見た。
かなり驚いている様子の表情から、大きな水滴がぼたぼた落ちていく。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・れ・・・・・・・・？」

一方の彼女は、ただ呆然として落ちたそれを見ていた。手に落ちたそれを見つめた後、両手で拭う。もちろんそれだけじゃ止められない。

「あれ？・・・・・・・・あれ・・・・・・・・？」

何度も何度も拭う。

それでも涙は止まらない。

「・・・・・・・・」

いつのまにか、無言で抱きしめていた。

宥めつつ、頭を撫でる。

流石に叫びはしなかったが、感情が爆発したらしく、そのまま声をあげて泣き出した。

必死に声押し殺して泣きじゃくる。

・・・・・・・・本人の為にも、このことは見なかったことにした。

「なんか……ごめん」
「別に、気にするな」

大分落ち着いたなのは、目を真っ赤にして謝ってきた。
もちろん服が濡れた程度で気にするほど神経質なつもりはない。
完全に落ち着いたのを見計らってから、昨日彼女が眠っている間に
あったことを教える。

「それって、転校……だよね？」
「そうなるな、一応士郎さん達はお前の意見を聞いてから決めたい
らしい」

なのはが考え込む。

「ま、決めるのは高町家だから、俺はとやかく言わんぞ」
そろそろ帰らなければならぬ時間なので、その場を後にすること
にした。

「あ、送ろうか？」
「いや、向かいだからいい」

見送りを断ってから、来た時とは別に玄関から出て行く。
縁側から出て行く時なんとなく振り返ってみると、考え込んでいる
なのが見えた。

第六話一段落（後書き）

というわけで転校フラグ回でした。

なのはさんは人間なんだから、もっと泣いても言いと思うんです。そんな『お返事の部屋』いきまっせー。

謎様

お久しぶりです。

またまた毒舌なご感想ありがとうございますw

自分でも投稿したあとにあの展開はないなーっと思って、洗脳フラグを立ててみました。

ここだけの話、離脱はしませんよw？ス力側にもつきませんし六課にも一応参加させようかなっと思ってます。

ただその場合、彼女に若干（というか、かなり）変化が見られることになります。それはまた別のお話と言っことでww

三毛猫ヤマト様

初めまして、さばくです。

この小説を書こうと思った切欠が4だったので、所々参考にしてます。

シャドウが語る口ごろの鬱憤と言うか、不満と言うか、そういうものがしつかり描写できるといいと思います^^；

空也のペルソナは『イザナギであってイザナギではありません』

アルカナもありませんし、ワイルドも名前は同じですが、違った内容になります。

本作のシャドウ対面についてですが、4で例えるとそんな感じになるでしょうね。

まあ、彼女の場合、多少抵抗しつつ受け入れそうな感じがしますww

Veritas様

今日の俺は紳士的だあ、楽うくに返信してやるううう。

.....ごほんっ！

前回の後書きでも述べたと思うのですが、わたしが書きたいのはキラクターではなく人間なので、ぶっちゃけ、アニメみたいなきらつきらしすぎるような展開は期待しないほうがいいですwww（えTOVのほうも同じ理由でそんな感じだったりします。

またぶっちゃけてしまうと、TOVのほうでは『関係が酷くなることもあるけど、仲間っていいよね』ってのをかきたくて、こっちは『人間は醜いときもあるけど、素晴らしい時もあるんだよね』って言うのを書きたいんです。

さて、次回はついに空也のグループになのが加わります、けど・

.....?

それでは。

第七話転校（前書き）

まんまタイトルどおりですww

3 / 1 8 : 修正。

3 / 2 4 : 後半を書き直し。

第七話転校

月白中学校、三年五組。
クラスメイト達がいつになく騒いでいる。

「転校生がくるってさ」

「こんな時期に？運悪いなそいつ、この後にあるイベントつつたら期末くらいだろ？」

その転校生が誰かって？

分かる人には分かるだろうから何も言わんぞ？

「しずかにしろー」

チャイムが鳴って、担任が入ってきた。

いつもよく思うのだが、やる気なさげな声だ。

まあ、そういうのがうちの担任である『御坂智紀』みさかとものりなわけだが。

………ちなみに某レールガンとは一切関係ないのであしからず。

「あー、知ってる人もいると思うが、このクラスに転校生が来ることになった」

またざわざわするみんなを宥めて、

「転校にも事情つてものがあるから、期末が近いから可哀想とか、余計なことは思わないように」

考えていたことを当てられて、苦笑いしたり笑顔が引きつったりす

る奴がいた。

またまたざわついたクラスが静まり返るのを待ってから、扉の方に顔を向ける。

「それじゃあ入って来い！」

言われて入ってきた人物に、クラス中が沸いた。

………主に男子が。

「今日からここに通うことになりました、高町なのはです、よろしくお願いします」

若干の緊張が見られたが、嘯まなかつたので大丈夫だろう。

たまたま空いていた俺の隣の席に座った。

小さく手を上げて挨拶する。

彼女は、照れくさそうに小さく笑って返してくれた。

その直後の休み時間。

案の定、なのはは質問攻めにされていた。

こいつの名前、聖祥と反対方向にあるここまで轟いていたからな。

………おもに美人の意味で。

「ホントにあの高町なのはなんだよね!？」

「美人の秘訣って何!？」

「何人に告られた!？何人フツた!？」

「急な転校だよね、なんでこんな時期に？」

「あ、えと……!」

容赦なく質問されて、たじたじになっているのはを見ているのは、結構面白かった。

「とゆーわけで！月白中にいらっしやーい！！」

いつもの屋上。

騎子がいつも以上のハイテンションで、購買で買ってきたジュースを上突き上げた。

その横でなのはは、戸惑いつつも嬉しそうに笑っている。

「はいじゃあ自己紹介！槍馬からねー！」

「え、俺？」

騎子の進行で、槍馬に話が振られる。

槍馬は面倒くさそうに顔をしかめたが、小さくため息をついた。

「……………伊達槍馬、二年一組でそのハイテンションの双子の兄」

「でーあたしは伊達騎子！ソーマの双子の妹ね！」

「わたしは狂咲由香、学年もクラスもソーマ君達と一緒にだよ」

二年組みが挨拶を済ませたようなので、今度は俺達三年組みの番だ。

「俺は鷹宮弓成、空也とは同じ三年五組で、この学校の生徒会長をやってるよ」

「久しぶり……………なのかな？わたしは剣ヶ原刀子、この学校の副生徒会長だから、弓成の右腕みたいなポジションだね」

「初対面組みじゃラストか……………同じく三年五組東雲幽斗、生徒会役員でもなんでもないけど、ま、よろしく」

三年組みも握手を交わす。

……………手を握る時、なのはが一瞬震えたように見えたんだが……………大丈夫だろうか？

……………今は詮索するだけ無駄、か。

自己紹介が済んだ後は、他愛ない話や、聖祥での思い出話を語り合った。

と、幽斗が何か疑問を思い出したらしく、全員を見回したあと、なのはに目をやる。

「そっぴや……………何かトラウマ掘り起こすようで悪いけど、なのははもう一人の自分を受け入れたんだよな？」

その問いかけに、なのははほんの少しだけ表情を暗くする。だがそれもつかの間、

「……………うん、そうだよ」

精一杯に作り笑いして、答えた。

幽斗は申し訳なさそうに笑い返してから、

「だったら、俺たちと同じように、ペルソナ使えるようになってるんじゃないの？」

「ペルソナ……………?」

彼女にとっては聞きなれない単語らしい。

まあ、当たり前っちゃ当たり前なんだが……………。
首をかしげるなのはに刀子が説明を入れる。

「ペルソナって言うのは、簡単に言っちゃえば、自分の奥底に眠っているもう一人の自分のことだね」

「普段抑圧しているそれを自我が制御することによって、自分を護る武器になる『力』のことだよ」

「な、なるほど……………」

弓成が入れた補足を聞きながら、頷くのは。

この流れだと、見せたほうがいいだろうな。

俺はそう判断して、軽く目を閉じる。

思考内容は、ペルソナの召喚。

一呼吸おいて目をゆっくりあけると、一枚のカードが手のひらの上にあった。

こっちに気付いたなのはは、興味深そうに俺の手のひらを覗き込んでいる。

「これがペルソナを召喚するときを使うカード、持ち主本人が叩くなりなんなりして破壊することによって、ペルソナを呼び出すこと

が出来るんだ」

「へえ……………」

なのはがさわってもいいかと聞いてきたので、カードを渡した。俺以外にも破壊できないカードなので、損傷の危険はない。まじまじとカードを見つめる彼女に、由香が身を乗り出して、

「なのはちゃん、召喚やってみたら？」

由香のいきなりの提案に、思わずポカンとしちゃってて。

「……………ふえ？」

次の瞬間には、そんな間の抜けた返事をしていた。

「そーだね、出さないままでもどんな子かは弓成が調べられるけど、やっぱり実際に見たほうがいいと思うよ？」

騎子が由香に賛同する。

その隣にいた槍馬も黙って同意していた。

「え、でも、どうすれば……………」

やっぱり初めてだと何していいか分からないし、その……
んなところでもし失敗しちゃったら、みんなに迷惑かけちゃうし……
どうしようか、悩んでると、

「簡単だ、召喚したいと思えばいい」

「そ、そうなの？」

「ああ、そしたらカードが出てくるはずだから、それを割るんだ、素手でも出来るし、今後使う機会もあるかもしれないから、今やっておいて損はないと思うが……」

うだうだ悩んでいるわたしを見かねたのか、空也がアドバイスをくれた。

召喚したいと、思うだけ……。

「……ん、わかった」

姿勢を正して目を閉じ、集中し始める。

わたしの中にいる、もう一人の『わたし』に意識を向けて、来てくれるように、力を貸してくれるように願いながら、集中する。

……いつまでたっても、手にカードの感触が出てこなかった。

段々息が苦しくなって、思わず咳き込んでしまう。

体がだるくなつて、若干吐き気もしてきた。

刀子ちゃんが、背中をさすってくれる。

「なのはさんごめん、無茶なくていいから、そのままじっとしてて?」

途中弓成くんが、刀子ちゃんと一緒に背中をさすってくれてから、一歩後ろに下がって、カードを出した。

「ロビンフッド、アナライズ」

りょーかい！任せな、相棒！

弓成くんがカードを割ると同時に、迷彩柄のコートを着た人のようなものが現れた。

『ロビンフッド』っていうらしいその『人』は、両腕がボウガンになっついていて、顔はカメラみたいな左目と犬みたいな耳以外、何も付いていない。

そのカメラみたいな左目をわたしに向けて、レンズを動かしていた。……気のせいかな？刀子ちゃんが助けてくれた時一緒にいたあの女の人と、雰囲気似ている。

これが、ペルソナ……??

……嬢ちゃん、ちょっとやっかいなことになってんぜ?

「……え?」

いやな、ペルソナは確かに生まれてんだけど、外に出られないみたいだ

外に、出られない……??

「何か枷を付けられてるみたいない感じだね、けど、どんな子かはだいたい分かった」

「そうなの？」

そう聞いたわたしに頷く弓成くん。

「ペルソナって普通はアルカナっていうのに属しているんだ」

「ちなみにアルカナってのはタロットカードの分類ね、人間が生み出せるのは、愚者から死神までの十三だって言われてる」

「そう、けど、俺たちのはちょっと変わってて……」

タロットカード……なんだかマニアックな言葉が出てきたなあ。というか、ちょっと変わってるって……？

「愚者から死神どころか、どのアルカナにも属していないんだよ」

由香がのんびりした声で、そう言った。

……何だかペルソナについて知ってる人が聞いたら、びっくりしそうなことをさらっと言った気がする……。

「アルカナとは違う、別の分類に属しているんだ」

空也が、そう教えてくれた。

「俺は弓兵、騎子は騎兵、刀子は剣士、幽斗は暗殺者、由香は狂戦士、槍馬は槍兵、そして空也は道化師……」

弓成くんがその分類を教えてください。

すると今度は騎子が私の顔を覗き込んだ。

「ちなみにこの分類、道化師以外はあたしが前はまっていたゲームと同じだから、ちょっと親近感沸いたりするんだよね」

「今俺がロビンフッドを通して見た分類は『魔術師』……これでその騎子のはまってたっていうゲームのクラスがそろったことになる」

説明することは一通り終わったらしくて、弓成くんはロビンフッドを収めていた。

「ま、難しい話はここまでだ！」

「そーだ！いつそアックスで二次会やらない!？」

真面目なお話が終わった途端に、幽斗くんと騎子のテンションがあがったのが分かる。

二人ともニコニコして、『二次会』についての話で盛り上がっていた。

……それよりも、

「アックスって？」

「正式名称『アックスポリウム』、近隣にあるショッピングモールで、月白中生の寄り道として人気がある」

わたしの疑問に、空也が答えてくれた。

空也はため息をついて、

「まあ、テンション高すぎて困るときもあるけど、それなりにいい奴等だから、大丈夫だ」

言い切った顔に、ちよつとだけ笑顔が浮かんでいた。

……ほんとに小さいものだったけど、わたしの貼り付けたものに比べたら、何倍もいいものだった。

……わたしも、こんな風に笑えたらいいな。

そういえば……………。

「空也達はどうやって覚醒したの？」

「ん？ああ、そうだな……………土郎さん達から、俺たちのことは聞いたか？」

……………それって、

「空也達が転生者ってこと？」

「ん、それと関係している」

空也は、一回息を吸ってから、

「自分の死を受け入れること」

昼休み終了のチャイムが鳴ったので、屋上での話し合いはお開きになった。

放課後、アックスボリューム。

今屋上にあるフードコートで『二次会』の名前を借りた……

「なのはちゃん、ここは？」

「そこはこれをこつね」

「えつと……わぁ、できた！」

勉強会をやっています。

いや、アックスポリウムに来たのはいいけど、期末が近いって話をしてたら、勉強会に摩り替わっていたというか、なんとというか……

でもテストが近いんならやっておいて損は無いと思う。

「ね、なのはちゃん、これ分かる？」

「どれ……あー……」

これは……

「ごめん騎子、わたし文系はダメなんだ」

「あー、ごめん、でもなんか意外」

「にやはは、でもわたしにだって苦手なものあるよ？」

「それもそーだねー」

笑いあつてから、また問題を解き始める。

会話をはさみながらやった勉強は、いつもよりはかどった気がする……

知識ががちり固まった！

第七話転校（後書き）

3 / 24 なんだか色々つまってしまったので、後半を大幅に書き直し。

次回あたりはほのぼのを書きたいです。

それではお返事の部屋、いきまっせー。

三毛猫ヤマト様

修復させましたw w

なのはから空也への呼び方についてですが、二人はご近所さんなのでちっちゃいころから兄妹みたいに育ってきたので、互いに『くん・ちゃん』付けせずに名前だけで呼び合っている次第です。

ペルソナは転生……っぽいことはすると思いますw w

それではノシ

第八話夏スタート!! (前書き)

なんとか更新にこぎつけられました・・・。
さて、いよいよ夏休みです。

第八話夏スタート!!

「ばあさん、ちょっといいか？」

『あらあら、あなたから連絡なんて珍しいわねえ?』

モニターの向こうで平和面しているばあさんを見ると、一気に脱力してしまう。

ずっと見てると本題を忘れてしまいそうなので、とっとと切り出すことにした。

「ばあさん、なのはについてちょっと頼みがある」

『・・・・・・・・・・なあに?』

今の間は何なんだろうか？

・・・・・・・・・・気にしてしまうといけない気がしたのでその考えは捨てる。

ばあさんに、先日のことを話した。

『その話なら弓ちゃんから聞いたわ・・・・・・・・・・それで、わたしはなにをすればいいのかしら?』

「・・・・・・・・・・なのはを、管理局から離してくれないか?」

ばあさんの目つきが、ほんの少しだけ鋭くなった瞬間を見てしまった。

不覚にも背筋がぞわっとなってしまう。

『・・・・・・・・・・確かにあの子達は上層部に頭をいじられている、

それこそ、時に友人を裏切ってしまうほどにね』

「・・・・・・・・・・」

時空管理局………表向きは正義の組織が聞いて呆れる。
というか、部下の頭いじくつたり、人を人と思わない実験をしてお
いて、何が正義だ。

『なのはさんがその裏切られた側にいる今、遠ざけるのが得策でし
ようね………出来る限りのことはやってみるわ』
「………ありがとう、じいさん達によろしくな」

いつのまにかばあさんの目は元の平和ボケした目に戻っていた。

剣を握り目の前の敵をにらむ。

奴は表情を読み取らせようとせず、考えていることも想像できない。
力だけでは叶わないことは重々承知している。
しかるべき知識を持ってして………。

「何考えてんだ」

「いでっ！」

テスト問題を睨んでたらソーマにチョップされた。
地味に痛い……!!

ちなみにあたし達がいるのはアックスのフードコード。
期末の一日目が終わったので、みんなで答えあわせをしている。

「あうう……ね、理科の問題で『植物の根の成長過程を調査する為に用いられる紅い液体を答えなさい』ってのがでただけ
ど、由香は解けた?」

「酢酸」

ちよっ!そんな七人全員で答えなくても!!
しかもタイミングぴったりな上に即答!?

「由香に答えて欲しかったなあ!？」
「や、俺たちもこんなタイミングが合うとは……」

うわあああん!?

「ちなみに騎子はなんて答えたの？」
「……食紅」
「あー……」
「まあ、なんてーの?当たらずとも遠からず?」
「だろっな」

ちくしょう……!!
……あ、

「でも数学はいつもより解けたよ!?!二次方程式はカンペキの
はず!」

「そうなの？」

「そうそう！なのはちゃんの説明分かりやすかったし！」

「じゃはは……」

誉められたのが嬉しいのか、なのはちゃんは照れくさそうにほっぺたをかいてた。

「そうだ、わたしもちよつと分からないところがあったんだけど……」

「……」

「どい？」

そういうとなのはちゃんは鞆からテスト問題を取り出す。

教科は……国語だね。

「この古文を訳しなさいって問題、結局分からなくて飛ばしちゃったんだ」

お、ここなら！

「そこは『わたしは鬼だから、この田楽を全部いただきます』って内容だよ」

「へえ、って、騎子分かるの？」

「おうよー！」

「こいつ、文系『だけは』学年トップなんだよな」

む、なんかイラっとする言い方……。

とりあえずソーマの足を踏んでおいた。

「そっぴゃ、期末終われば夏休みだよな？」

答えあわせの最中、幽斗がそう切り出した。

「みんな予定とかあるか？」

「何で？」

何だつて急に………？

そんなみんなの視線を受けながら、幽斗は「いや、実は………」と鞆の中を探る。

「じゃーん！」

そして出てきたのは、何かのチケットだった。

よくよく見てみると飛行機のチケットのようだ。

行先は………!?

「沖縄!?!」

「つてかそれどこで………」

幽斗は自慢げに笑いながら、

「ばーさんがくれたんだよ、本人も同行するらしいからさ、なのはも入れてみんなではーつとバカンスだ！」

「わっはー!やたー!」

「え………いいの?」

手放して言ふ騎子と違い、なのはどこか戸惑っている。

「だいじょーぶだって！ばーさんもお前と話してみたいっていったし！」

幽斗がなのはの肩をバンバン叩いて、ヘラヘラと笑う。

なのはは未だ戸惑っているようだったが、小さく頷いてから、

「……………うん、行くよ」

「よっしや！沖繩ー！！！」

その隣で騒ぐ騎子を見て、みんなで笑った。

。。
終業式も何事も無く終わって、夏休みにはいったんだけど……………

今の気持ちを色で表すと青。

………何でって？

だって今………。

「………久しぶり、だなあ」

管理局にいるんだから。

あの『わたし』と向き合った時におこったトラブルが原因みたい。正規の局員から囑託魔導師に格下げされることになった。

今は戦技教導隊の隊社でデスクワークをしている。

クロノくんリンディさん親子に挨拶っていうのも良かったけど、相手が相手なだけに、断念した。

………だめだね、最後の最後まで逃げてる。

『わたし』も、それに怒ったから出てきたのかな？

「よおー！高町い！」

「うにゃっ!？」

いきなり後ろからドンッと来て、びっくりしちゃった。

振り返ると、ぼさぼさの赤い髪が見えた。

「も、もう！アテナ部隊長！」

「あっはっはっは！悪いね！」

戦技教導隊のトップに立つアテナ・グレイガー部隊長。

豪快で時々だらしないけど、実力や教導はトップレベルと評判の女性。

わたしもよくお世話になった人だ。

「ところで高町、この後空いてるか？」

「あ、一応……」

「うし、じゃあ付き合え！」

「ええ!?!」

な、何をやらされるのかな？

「しっかし、あんたが囑託に格下げねえ」

「えと、すみません……」

「まあ、なっちまったもんはしょうがないさ、今日はあたしのおくりだ!」

えと、わたしとアテナ部隊長の二人で、なんでか居酒屋に来ています。

というかわたし未成年……。

「可愛い部下の送別会……つっても二人だけなんだけどな！」

「は、はあ、あの、ありがとうございます」

「いってもんよ!」

アテナ部隊長は言って、いつもみたいに豪快に笑った。

……気付いたら部隊長との話はずんで、結構食べた頃。

「そついや、何があったのさ？」

「はい？」

「いんやねえ、真面目に働いてるあんたが囑託にだなんて、よつぱどのがあつたんだらうつて」

「……部隊長なりに心配してくれるのがよく分かる。

この人なら、受け入れてくれるかもしれない。

……けど、

「……すみません」

「ああ、いや、話したくないならそれでいいさね」

また突き放されるのが怖かった。

それつきり部隊長は何も聞いてこない。

……帰る頃には外は真つ暗になっていた。

「どーしたどーしたあ？机に突つ伏しちゃって」

「……」

ばあさん主催の旅行が近づいてきているので、夏季休暇の課題をいくつか片付けようって言う話になっている。

集合場所は何故か俺の家なわけだが……………。

そんな中、なのはが珍しく居眠りをしているようだった。

いや、学校じゃないだけいいと思うけど、これじゃ目標が達成できないというか……………。

「あれ？おーいなのはちゃん？」

「……………」

騎子が呼びかけているが……………。
うん、反応が無いな。

「昨日遅かったのかな？」

「だろうな、昨日何か用事があったみたいだし」

「用事？」

いったん頷いてから、

「どうも管理局にいつていたらしい、特に何も言われなかったみたいだが……………」

「へえ、何だったんだらうね？」

騎子は言いながら、寝ているなのはの頬をふにふにつついていてる。

「何だったんだらうね？」

「さあ？」

はてなを浮かべる俺たちを他所に、騎子が突然なのはの背後に回っ

た。

「……いかん、あの顔は明らかに何か企んでいる顔だ。

だが時既に遅し、両手が脇腹を掴んでいた。

そのまま脇を摩り始めた。

最初の数秒は無反応だったなのも、流石にくすくす笑い出す。

「ほれ、ほれほれほれほれほれほれ……!!」

「……く……く……く……く……つふふ
ふふふ……」

「あ、あの、そろそろやめてあげたほうが……」

何だかノリノリになってきている騎子と、無意識下で笑っているな
のとはと、それを止めようとしている由香……。

「こーいう状況を混沌^{カオス}ってゆーんだろうな、世間様は
「いや止めようよ」

呑気にそう言う幽斗は、刀子と弓成の生徒会コンビに突っ込みを入
れられていた。

「……すまんなのは、俺じゃそのハイテンション娘を抑えら
れなかった……。」

閑話休題。

なのは再び机に突っ伏している。

今度は眠気からではなく、笑いまくったことによる疲れからだが。

「大丈夫か？」

「……若干腹筋が痛い」

起き上がってシャーペンを手に取り、再び問題を解きはじめた。
やっているのは……国語か。

「今年は苦手なものから片付けときたいんだ」
「そうか」

ちなみに、騎子は後ろで槍馬にアイアンクロー喰らって悶えていた。

午後……。

それぞれ課題が大方片付いたらしい。
麦茶を飲みつつのんびりしていると、なのはが「そういえば……
といてこつちを見た。」

「みんなが言ってる『おばあさん』ってどんな人？」

そういえばなのはには話してなかったな、ばあさんのこと。

「あたしらの生活の保護をしてくれる人だよ、普段平和ボケしてる顔だけどいざと言うとき目が煌くんだ」

「煌くって……ちなみにその人、名前は？」

刀子は頷いてから、

「ミゼット・クローベル、なのはちゃんが勤めてた管理局にいて聞いてるけど……なのはちゃん？」

……？

なのはがさつきから固まってるんだが……。
何があった？

「……？なのはちゃん？」

「おい」

目を見開いたまま、なのはは固まったままだ。

しばらくその状態が続いて、やっと出てきた声は……。

「……え？」

第八話夏スタート!! (後書き)

一歩進んで二歩下がるっ!

.....えふんえふんっ!

今回ついに『おばあさん』について出てきましたが、まあ気付いていた人は気付いていたでしょうから、何も語りませんww
では早速お返事の部屋あああ.....っって行きたいですけど、感想がきてなかったので今回はお休みです。

次回は沖縄、それでは!

設定（前書き）

本編も大事だけど、設定も更新しよっかなって。各自のペルソナに関しては、戦闘シーンがあったり、台詞が出てきた奴のみを乗せています。

設定

『本小説におけるペルソナ』

ペルソナは老若男女全ての人間に存在している。

転生者の場合は自分の死を受け入れること、一般人の場合は自分の後ろめたい部分と向き合うことが覚醒の条件。

ただ、本作の舞台になっている『魔法少女リリカルなのは』の住民の場合は、すでに魔法という力が備わっている為、特に魔導師は目覚めにくい。

じゃあなのははどうなるんだって話になるのだが、それは別の機会ということ。

道村空也（15・男）

身長：それなりに高い

体重：平均

ペルソナ：イザナギ

武器：日本刀

主な属性：雷撃

イメージCV：宮野真守

詳細：市立の中学に通っている少年。

基本面倒くさがりだが、優しい一面もある。

制服の上に白いパーカーを羽織っている。

不良という認識が定着してしまっているが、成績はそれなりによし。なのはとは幼馴染で近所さん。

両親は既に他界。

イザナギ

属性：混沌・善

クラス：道化師^{ジョーカー}

詳細：空也のペルソナ。

『ペルソナ4』本編との違いは、上着に青みがあることと、武器が雑刀ではなく細身の大剣であること。

応援団っぽいというか、番長っぽい格好に似合わず落ち着きのある性格。

鷹宮弓成（15・男）

身長：かなり高い

体重：身長に比例

ペルソナ：ロビンフッド

武器：双剣、弓

イメージCV：福山潤

主な属性：疾風・雷撃

詳細：空也と同じクラス。

生徒会長を務め、成績も優秀である。

責任感があり、ある程度の護身術も使えるので、まさに文武両道である。

実はネコ好きという一面もある。

生徒会長だけに、制服もきっちり着こなしている。

ロビンフッド

属性：秩序・善

クラス：弓兵^{アーチャー}

詳細：弓成のペルソナ。

迷彩柄のコートに両手がボウガンになっている亜人。

顔には狼のような耳と、カメラアイになった左目のみつけた仮面をつけている。

陽気な性格。

剣ヶ原刀子（15・女）

身長：女子の平均
体重：女子の平均

ペルソナ：アルトリア

武器：薙刀

主な属性：疾風・光

イメージCV：吉川未来

詳細：生徒会の副会長。

弓成の右腕的存在で、半歩ひいたポジションからのサポートが上手。大和撫子を思わせる雰囲気纏っている。

戦闘では中衛に立つ。

弓成と同じく、制服はきっちり着ている。

アルトリア

属性：秩序・善

クラス：剣士^{セイバー}

詳細：刀子のペルソナ。

スキルを使い、武器を見えなくすることによって間合いを読ませないようにしている。

青いドレスに鎧が装備された姿をしている。

伊達槍馬（14・男）

身長：男子の平均より低め

体重：身長に比例

ペルソナ：???

武器：双銃

主な属性：???

イメージCV：朴口美

詳細：空也の後輩。

物静かで、何を考えているか分からないときがある。

目上だろつが目下だろつが基本態度は変えない。

日常的にヘッドフォンをつけて音楽を聴いている。
お陰で、唇の動きが読めるといって特技を身に着けた。
双子の兄。

通称『ソーマ』
以外と銃のプロ。

伊達騎子（14・女）

身長：女子の平均より低め

体重：身長に比例

ペルソナ：????

武器：トンファー

主な属性：????

イメージCV：堀江由衣

詳細：空也の後輩。

兄の槍馬と違い明るくテンション高め、成績はちょっと残念。
双子の妹。

制服はだらしなく着崩している。

トンファアの扱いが何故かプロ並。

通称『キコ』。

狂咲由香（14・女）

身長：14にしちゃ高め

体重：身長に比べたら軽い

ペルソナ：????

武器：斧

主な属性：????

イメージCV：嶋方淳子

詳細：つねにぼやぼやとしていた天然少女。

クラスの間からは『変わり者』と認識されているが、嫌われ者というわけでもない。

細い見た目とは裏腹に、かなり怪力。
学校では黒いラインが入ったソックスをはいている。

東雲幽斗（15・男）

身長：それなりに高い

体重：身長に比べたら低い

ペルソナ：???

武器：短剣二刀流、その他飛び道具

主な属性：???

イメージCV：森久保祥太郎

詳細：能力的には下でも上でもなく、あらゆる分野で並。
しかし、飛び道具の扱いに関してはプロ中のプロ。
体のおちこちに飛び道具を隠し持っている。

何でも先祖が忍者だったとか、そうでもないとか……。
制服は、ズボンにベルトを二本下げている。

設定（後書き）

イメージC.Vは某三つの国の無双6番目から持ってきたのが多しWW属性に関しては『FATE』を参考にしました。

出てないペルソナに関しては全部出てからまとめて出そうと思ってます。

あと、お返事の部屋ですが、感想が来てないためお休みです。

第九話沖縄へ

跳田空港……………。

待ち合わせ場所である受付前。

メンバーはあらかじめ集まり、あとはばあさんを待つだけとなった。搭乗までまだまだ余裕はあるが、向こうが年寄りなだけに少し心配だ……………。

何となく隣を見ると、かなり緊張している様子のな的是がいる。

思わず苦笑いがこぼれてしまった。

しかし、俺たちもこの間初めて知ったな。

管理局でそれなりに高い地位にいるとは聞いていたが、まさかそこまです。

なのはの話によれば、管理局開設に携わったメンバーの一人らしいし。

まあ、俺にとつてばあさんはばあさんだから、別に態度が変わるってわけでもないんだけどな。

ん、噂をすれば……………だな。

「みんな久しぶりねえ、待たせてごめんなさい」

「わー！ミゼばあー！」

「久しぶりー！」

真っ先に騎子と由香が飛びつき、衝撃ではあさんは倒れかける。

が、刀子が素早く後ろに回ったことで、転倒はまぬがれた。

「二人とも元気ねえ、刀子ちゃんもありがとう」

「いえ、どういたしまして」

その間に槍馬と弓成がばあさんの荷物を持つ。

「ああ、いいわよ、自分で持つから」

「年配者の手助けも若者の仕事ですから」

にこつと笑う弓成につられて、ばあさんも笑っていた。

ここまで来て、もう一度なのは見てみる。

……先ほどにも増して緊張しているようだ。

その隣で幽斗は苦笑いしている。

俺もつられてまた苦笑いした。

「初めまして、高町なのはさんですね？」

「あ、はい！初めまして！」

思わず敬礼しかけたなのは。

寸前で止めきれたものの、みんなで笑った。

「さあさ、はやく手続きを済ませましょ」

「はい！」

閑話休題。

手続きも難なく終わって、今は出発ロビーにいる。

ばあさんと刀子たち三人は談笑をしていた。

俺を除く男子は売店に買い物にいつている。

なのははいまだに俺の隣にいた。

ばあさんと話してみたいようだが、どう切り出せば良いのか分からないといった感じだ。

……この際しようがない。

「ばあさん、管理局でのなのはの評判はどんな感じだった？」
「うん？そうねえ……………」

隣でなのはがあわあわ言ってるが無視。
ばあさんに話を振ってみる。

「あ、それあたしも聞きたーい！」

「わたしも気になる」

「えと、あの……………」

慌てだすなのはを他所に、女子が盛り上がっていく。
ばあさんはふふつと笑ってから、

「色々聞いてるわよ？とても優秀な魔導師だとか、教え上手な教官だとか」

「そつ、そんな、わたしなんて……………」

上手く二人を話させることが出来た。

なのははわたわたしているものの、ばあさんとの話は弾んでいるようだ。

……………魔導師になってからのなのはは、どこか遠慮がちな部分があったから、これをきっかけにもう少し年相応になってくれるといいが。

弓成達が帰ってくるのと、搭乗案内のアナウンスが流れるのは、ほぼ同時だった。

さて、今は飛行機の中にいる。
騎子はメモを片手に、由香と現地に着いたらやることを整理して、
槍馬はその隣で寝ている。

弓成と刀子は騎子達の会話に混じりながら、はぐれた時の処置等を
アドバイスしていた。

ばあさんとなのはは未だに話している。

様子を見る限り、かなり打ち解けているようだ。

幽斗はどうかやら気圧にやられたらしい。

イヤホンで音楽を聞きつつ、具合悪そうにしていた。

アイコンタクトで、乗務員を呼ぼうかと言ったが、幽斗は頭を横に
振った。

確かに気分は悪いが、呼ぶほど悪いというわけでもないそうだ。
到着までまだ時間がある。

することは何もないので、俺も眠ることにした。

「くーやー！」

「あ、なのはー！こっちこっちー！」

「……………これは……………」

「どっいくのー？」

「すっいとっくるー！」

そうか、『俺』が『僕』だったころの……………。

「あ、めえつぶってて！びっくりさせたいから！」
「うん、わかったの！」

『僕』はなのはと手をつないで、臨海公園の中を奥へ進む。
なるほど、あの場所を見つけたときの記憶が。

どつりでかなり幼いと思った。

なのはの手を引いて、『僕』はどんどん進んでいく。
やがて、周りが段々紅くなっていった。

『僕』の足が止まる。

目的の場所についたんだ。

「なのは、もういいよー！」

「う……わぁ！」

この頃は『僕』もなのはもかなり無邪気で、目の前いっぱい広がる紅葉に、二人してはしゃいでいる。

あと数年後に魔法なんてものに関わるとか、想像していなかったよな。

家に帰れば両親がいて、ただ一緒にいることが当たり前で。

自分が転生者だなんて思ってもいなかった。

……それで、このすぐ後だったか。

こつちでの両親が死んで、『俺』が目覚めたのは。

「ミッチー、そろそろ着くよ？」

「……んあ？」

騎子に起こされた。

どうやらもうじき着くようだ。

機内アナウンスに従って、ベルトをつける。

つと、

「騎子助かった、お陰で最悪な目覚めを迎えずに済んだよ」

「そりゃどーも」

降下するときを起こる、あの気圧に押さえつけられる感覚に叩き起こされるよりマシだな。

………普段の私生活が、ちゃんとしてなさそうな奴に起こされるのは、微妙な気持ちになるが。

何となく、ばあさんとなのはの方を見てみる。

しゃべり疲れてはいるようだったが、会話は途絶えていない。

………思ったより早く仲が深まったようだ。

現地についたらまずは何をしようかと考えながら、ぼーっと前を見た。

「きたぜー！おっきなわー！」

いつも以上にテンションが高い騎子を、横目に見つつ、ばあさんが予約を入れたというコテージを目指す。
何となく視線をずらすと、なのはが辺りを見ていた。

「初めてか？沖縄」

「あ、うん、テレビでしか見たことないから、新鮮で……」

そう言って、恥ずかしそうに笑う。

「誰だってそんなもんさ、別に恥ずかしがることじゃないだろ？」

「……」

小さく頷いてから、みんなの後をついていく。

それから少しして、バスに揺られてついたのは、市街地から少し離れたコテージ群。

受付で鍵を受け取ってから、俺たちに宛がわれた一件に向かった。

観光地と言っただけあって、かなり綺麗に片付けられている。

男子と女子に部屋を別れて、荷解きをすることになった。

「そういえば、幽斗は大丈夫か？」

「ああ、バスの中でも寝てたからな、だいぶ良くなったよ」

「そうか、よかった」

幽斗の具合も回復しているし、このまま出かけても問題は無いだろう。

さて、荷解きも大体終わったし、いよいよ観光地めぐりだ。

「最初どこいくんだ？」

「ちゅうらうみ」

「なるほど、大水槽か」

「……人工尾びれもいなかったっけ？」

「イルカだろ？あれは確か亡くなったはずだ」

そう告げると、槍馬は残念そうにうつむいた。

そんな槍馬を慰めつつ、コテージの外に出る。

ばあさん以外の女性陣はまだ準備が終わってないらしい。

実際部屋の前を通る時、なにやら騒がしかった。

まあ、修学旅行のようにきっちり時間を守れとは言わんが、待たされる側のこととも視野にいれてほしいなっつと。

そのことをばあさんに言ってみると、

「わたしはともかく、若い子達はおしゃれに気を使うからねえ」

そう言っつて、ほっほっほつと笑っていた。

「で、結局のところどうなのよ？」

「何が？」

すると騎子は、『またまたあゝ』と言いながらわたしに擦り寄って

きた。

いたずらっぽい笑顔を見せながら、

「ミッチーのことに決まってるんじゃないん？うちのクラスじゃ結構噂になってるよ？」

空也のこと？噂って……何が？

「知ってる、二人が付き合ってるんじゃないかってやつでしょ？」

「……ふえっ!？」

え、ちよっ、なんでそんなことになってるの!？

「二人が幼馴染だからじゃないの？それなりにお互いを知ってるわけだから」

「そ、そんな……」

「で、噂はウソ？ホント？」

「教えてほしいな？」

刀子ちゃん言葉に、騎子と由香は更に盛り上がってわたしに問い詰めてきた。

あー……もう……。

「別に、空也とわたしはそんなじゃないよ、異性っちゃ異性だけど、あくまでお友達だから」

「うそだあ！絶対何かあるって!」

「はいはい、そこまでね、おばあさん達待たせるのも悪いし」

ますますヒートアップしそうな雰囲気刀子ちゃんが収めてくれた。目でありがとうって言うのと、いいよって返してくる。

後でなにかおごってあげようかな？

「……空也のことを好きか嫌いかって聞かれたら、好きって答えられる。」

けど、それが友達としてなのか、恋人としてなのか、最近分からなくなってきた。

「……わたしなんか、友達としても、恋人としても、絶対に彼とはつり合わない。」

今は居場所がないから寄生虫みたいに引っ付いているだけ。だから、時々……。

「なのはちゃんどしたん？」

「大丈夫？」

「顔色悪いよ？」

「ふえ？……あ……うん、大丈夫」

「……時々、みんなの優しさが怖くなる。」

このままだと、いつかまた離れていっちゃんいそいで……。

バスを乗り継ぎ、目的地である水族館に着く。

入口のジンベイサメの銅像の前で記念撮影をしたあと、館内を見て回ることにした。

そしてここでも騎子はしゃぎまくっていた。

つられて由香や幽斗、そこから一步はなれたところではあるが、槍馬までもテンションが高くなっている。

ばあさんも久しぶりにみんなといられて、嬉しいようだ。

なのはも笑顔が絶えない。

館内を一通り見終わった後、別行動をとることになった。

騎子、槍馬、由香、幽斗の四人はこのまま水族館に残るようで、イルカショーを見るんだと意気込んでいた。

弓成と刀子とばあさんは、名護にあるパイナップルの施設に行ってくるみたいだ。

さて、そんな中で俺となのははあぶれてしまったわけだが……。

どうしようかと考えていると、腹が減ったのを感じる。

ちらつと見ると、なのはも同じようだ。

「……何か、食べに行くか」

「……ん」

とりあえず、まずは腹ごしらえだな。

「何か、食べてみたいのはあるか？」

「ん……」

なのはは少し考え込んだ後、

「……空也に任せる」

「いいのか？」

「うん」

……一番困る返答だな。

だがなのはも女の子だ、何らかの恥じらいを感じたのかもしいれない。しかし任せる、か。せっかく沖縄に来ているんだから、ここならではのものを食べてみたいよな。

選択肢は、ゴーヤチャンプルー、沖縄そば、豚足……だろうな。

さて、どうしたもんか。

………ん。

「沖縄そば、なんてどうだ？」

「うん、いいと思う」

なのはも肯定してくれた。

とりあえず、移動だな。

幽斗から受け取っていたマップを頼りに、とりあえずそこで紹介されていた店に行くことにした。

しばらく歩いていると、人通りがやけに多い場所に着いた。上を見上げると、でかでかを通りの名前が書かれた看板が立っている。

その大きさに圧倒されつつも、二人でそこをくぐった。

何とかはぐれないように進んで、目的の店に入る。

割と混んでいなかったのが幸いして、スムーズに席につけた。

目的の沖縄そばを注文して、二人してぼつと外を見ていた。

「………ね、空也」

「ん？」

なのはが、若干身を乗り出して話しかけてくる。

「空也は、いつペルソナを使えるようになったの？」

遠慮がちに、そう聞いてきた。

「……ペルソナ、イザナギが目覚めたとき。
あの時のことか。」

「……」

「あ、あの、いやだったら別に……」

考え込んでいると、なのはがどこか申し訳なさそうにこっちを見ている。

俺はちょっとだけ笑ってから、

「いいさ、誰だって気になるだろ？そういつこと」

「……ん」

ちようど注文していたものが来たので、話はこれで中断。
郷土料理に舌鼓を打った。

「あ、見て見て！これ可愛い！」

昼ごはんも済んで、俺となのはは通りを歩いてきた。かなりの数のお土産屋が並んでいて、それぞれが声を張り上げている。

そんな中、なのはが一件の店に駆け寄っていく。

指差されたそれを見ると、いい感じにデフォルメされたシーサーが一組。

確かに可愛い。

黙ってそれを肯定すると、なのはは嬉しそうに笑った。

結果、土郎さん達へのお土産にそれを買うことにしたようだ。

それをもってレジに走るなのはを見送った。

今日は、小包を抱えたなのはと一緒にコテージへ帰ることにする。

その帰る途中、通行人からちらちらと視線を受けていた。

……まあ、なのはは美人だし、自然と一緒にいる俺にも矛先が向いているんだろう。

そういうことで別に気にとめなかった。

さっき店で見つけたシーサーのストラップを持って、コテージに戻ってるんだけど、その……。

「ね、あの二人……」

「カップル？美男美女だよねー」

何か、周りの視線が……。

美女はともかく、美男って……。

ちらつと隣を見ると、空也が何か考え込んでいる。

「……うん、今になってよく見ると空也もなかなか……
って、ストップストップ！」

空也は友達だってば！それ以上の感情持ってたとしてもわたしなんか踏み込んだじゃダメ！！

友達、友達、あくまで友達……。

「なのは？どうした？」

「ふえ、あ、うん、なんでもないよ！」

気がつくと、空也が顔を覗き込んでいた。

何だか、心配させちゃったみたい……。

適当に大丈夫って返してから、みんなと合流することにする。

コテージ。

幽斗達はそれなりに楽しんできたようで、初めて生でみたイルカに、未だに興奮しているようだ。

ばあさん達はパイナップル園でお土産を買ってきたらしく、ばあさんは職場に、弓成達は生徒会に配るらしい。

俺達は？と聞かれて、沖縄そばのことと、なのはがお土産を買った通りのことを話した。

騎子と由香が興味を持ったようで、明日はそこにいくようだ。

それから、夕食はどうするかと話し合った結果、ばあさんが見つけたという店に食べに行くことにした。

帰りに朝食の材料を買うようだ。

幸いコテージにはキッチンが備え付けられているから、料理ができる。

何を作ろうかと話し合いながら、再び外に出ることにした。

晩御飯は特に何もなかった。

あえて何かいうなら、チャンプルーがおいしかったです。みんなはもうベッドに入っていた。

今日散々はしゃいでた騎子達は、もうぐっすり寝ている。寝顔を見てたら、何だか癒されちゃって……。

気がついたら顔を撫でていた。

そうやってたら、何だか微妙な気持ちになってくる。何か、自分が年増になってる感じがして……。

ちょっと苦笑いしてから、ベランダに出た。風が気持ちよくて、昼間の蒸し暑さが嘘みたい。……景色を見ていたら、ため息が出た。

月白中に転校してから、この場面にフェイトちゃん達がいたらって思う自分がある。

あんなに拒絶されたのに、まだ昔を捨てきれない自分がいて……

・・・。

思わず苦笑いがこぼれちゃった。

・・・お別れはあんなだったけど、思い出だけは大切にしたい。

けど、思い出すたびに、何と云うか・・・体が痛くなつて・・・。

「・・・か・・・はっ・・・」

「

・・・急に・・・喉が・・・詰まって・・・

息・・・息が・・・できなっ・・・

「っごほ・・・」

空気・・・苦し・・・

「大丈夫！？しっかり！」

・・・みぜっ・・・

・・・っ。

わたし・・・。

「起きた？」

「え、あ……………」

目の前に、ミゼット提督がいた。

外を見ると、若干白んでいる。

結局一晩ねちゃってたんだ…………。

つて…………！

「す、すみません！何だかお手数おかけしたみたいで…！」

「いいのいいの、それよりも大丈夫？急に倒れたんだから驚いたわよ？」

「あ、はい、なんとか！」

ミゼット提督は、わたしの答えを聞いて満足そうに頷いていた。

というか、提督に看病させちゃうとか…………。とにかく！お礼いわないと…………！

「あの、すみません、ありがとうございます」

「はい、どういたしまして」

そこで会話が途切れちゃって、気まずい空気が流れる。

わたしが必死になって話題を探していると、

「……………悪いとは思ったけど、あなたのうわ言、聞いちゃったの」

「ふえ？」

うわ言って…………。

そういつて、もそもそとわたしの隣に入ってきた。

今のわたしの顔、ガチガチに緊張してるんだろぅなあ……。
上半身を起こしたまま固まって、その状態でじっとしていたんだけど、段々寝息が聞こえてきた。

ちらつと隣を見ると、ミゼット提督が寝ている。

。。。。。。。

「……………ごめんなさい」

自然と、そんな言葉が出ていた。

第九話沖繩へ（後書き）

何が書きたかったんだろう自分・・・？

まあ、更新できたからいいのかな？

今回は沖縄話でした。

昨年修学旅行で行ったきりなので、記憶を搾り出しながらの執筆です・・・！

空也達がいったところは、美ら 水族館、国 通り、名 パイッブルークの三つです。

・・・いや、一応伏字にしておこうかなって。

ご感想、お待ちしております。

それでは。

第十話スイカ片手に（前書き）

今回も沖縄。

第十話スイカ片手に

「・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・ぐすっ・・・・・・・・」

もう空も飛べない、歩けない。

昼間にそう告げられた事実が、悲しかった。

わたしの何もかもが痛くて、たまらなくて。

だけど、そんなことを言えばみんなを心配させちゃう。

でも、不安がいつぱいで・・・・・・・・。

自分が・・・・・・・・割れそう！

「・・・・・・・・」

「っ、誰!？」

な、なに？部屋に誰がいる!？

「・・・・・・・・」

暗がりにいるから、よく見えない。

・・・・・・・・こ、怖いよ・・・・・・・・!!

「・・・・・・・・」

誰かがゆっくりこっちに近づいてきた。

や、やだ・・・・・・・・。

「っ、こないで・・・・・・・・!」

するとその人は、明るいところに出てきて、止まった。

月の光に照らされて、顔が良く見える。
でもこの顔って……。

「親戚、さん？」

「……ちがう、な」

お母さんにそっくり、だけど、違っていて……。

「……お前には呪いがかかっている」

「え？」

「いつか絆を失くす呪い、いつか業を背負っていく呪い、いつか仮面をかぶり続ける呪い」

なに……それ？

いったい何が言いたいのか？

「それでもお前は前に行くか？それでもお前は生き続けるか？」

「なのはちゃん、大丈夫なの？」
「うん？」

あれから、わたし達は海に来ている。

沖縄に来たからにはまずは海っていうことで、全員一致。
まあなんやかんやで、けっこう楽しんでる。

「いや、おばあちゃんに昨日のこと聞いたから……」
「あ……うん、平気」

……だめだなあ、わたし。

年下の由香にまで心配かけちゃうなんて。

……もっとしつかりしないと。

「ミゼット……さんが、看病してくれたから」

「そっか、あ、でも無理しちゃダメだよ？」

「うん、ありがとう」

思わず提督って言いかけて、苦笑いが出ちゃった。

由香もにこっと笑い返してくれる。

……よく言われる『無垢な笑顔』って、このことを言っんだらうね。

「そっぴやなのは、なんでパーカー着てるんだ？」
「ふにゃっ!？」

な、なんでそんな質問しちゃうかな、幽斗くん?
え、えーと……。

「ほ、ほら、あんまり日に焼けたくないから……」
「あー、女の子だもんな」

幽斗くんはあっさり諦めてくれた。

今はそれありがたいけど、なんか彼の将来が心配に……
っ!!!?

「おおー、空色のビキニかー、健康的な色だね、これなのはちゃん
のチヨイス？それとも親？」

「ちよっ！騎子!?!」

「おわっ、ばっか！さり気にはだけさせるんじゃないわねえ！」

「やあああああ！？」

「だ、だからパーカー着てたのに!？」

「なのはちゃんスタイルいいんだから、恥ずかしがらなくてもいい
のに」

「いや、あの、ちよっとお……!」

「だ、誰か、助けて……!」

「ほっほっほっ、若いっていいわねえ」

「見てるだけですかミゼット提督!？」

「大丈夫？」

「む、無理かも、精神的に……」

騒動も落ち着いて、わたしはミゼット提督と一緒にパラソルの下でのほほんとしている。

「……わたしの水着、お母さんとお姉ちゃんが選んでくれたんだけど、露出が高いというか、なんというか……。とにかく、恥ずかしかったからパーカー着てただけど……」

「……というかいつのまに脱がせたの騎子？」

「わたしですら気付けないって……ある意味すごいよ？」

「災難だったね、はい飲み物」

「あ、ありがとう、刀子ちゃん」

お礼をいってから、刀子ちゃんから受け取った飲み物をあける。

何となくラベルをみると『フェロモンシークワサー』って書いてあった。

「……フェロモンって何？」

「ごめん、買いに行った自販機で、一番まともそうなのがそれだったから……」

「そうやって謝ってくる刀子ちゃん。」

「……これがまともに見える自販機って、どんなラインナップなんだろう？」
むしろ気になってきた。

「他のみんなは？」

「浜辺であそんでる、ほら、あそこ」

わたしが指差した先で、騎子達が槍馬を砂に埋めている。

「……縦に。」

「あー、海水はかけちゃだめだよ、満ち潮になったときに余計出られなくなっちゃう。」

「なんとなくか、相変わらず？」

「だねえ」

「……あの底抜けの明るさが、時々……言い方は大げさかもしれないけど、救いになったりする。」

「最近色々考えてるから、余計に。」

「……って。」

「空也は？」

「空也なら、ほら、あそこ」

「……？」

「なんか、人だかりが出来てる？」

「ビーチバレーかなにかかな？」

「行ってみたら？おばあさんはわたしが見てるよ」

「……ん、分かった」

いつの間にか、ミゼット提督は寝ていた。とりあえずお言葉に甘えて、人だかりに向かうことにする。でも空也、あそこで何やってるんだろう？近づくとつれて、すごい歓声が聞こえてきた。思わず耳を塞いじゃうくらいのボリューム。な、何が……。

「おおーっ！また割ったあーっ！半端ない！半端無いぞ挑戦者あーっ！」

聞こえてきたのは、実況と思われる人の声。

何とか背伸びして覗き込んだ先に、空也がいた。

……目隠しして、木刀を持った状態で。

周りには赤い塊と真っ赤な液体が飛び散った跡が……。

「……スイカ割り？」

「さー面白くなってまいりました！チャンピオン危うし！！どう切り返すのか！？」

ぼかんとするわたしを他所に、実況の人は腕を振り上げる。

「決勝戦の前にもう一度ルールの確認だ！スイカ割りタイムマッチは、一定時間内にどれほどのスイカを割ることができるかと言う競技！割り切れなかった数はもちろんのこと、空振りした回数も減点対象に入るなかなかシビアなスポーツだ！」

へえー、そうなんだ……って、何で空也が参加してるの？……暇、だったのかな？何だかいつになく楽しそうだし。

何となく視線がステージの方に行く。

……うん、何も見なかったことにした。
見てないよ？ごつい顔と体で猫耳をつけた男の人なんて。

あの後、空也は優勝できなかったけど色々すっきりしたみたい。
昔から名誉とかあまり興味持たないもんね。
そういうば、将来の夢とかの話、聞いたことなかったかも。
……ま、いいかな。

「おつかれさま」

「ん？ああ、見てたのか」

とりあえず、空也に声を掛けることにする。

空也は軽く手を上げて答えれくれた。

……開いてるほうの手に何か握られている。

「それは？」

「これか？参加賞だと」

そうやって見せてくれたのは、スイカだった。
ネットに五つもはいつてる。

「ミツチー！なのはちゃん！」

後ろから騎子が声を掛けてきた。

みんなも集まってるし、何処か行くのかな？
とりあえず、合流することにした。

「うわ、なんだそのスイカ!？」

「景品」

「なんの!？」

「スイカ割り」

空也と幽斗のやりとりを見てると、刀子ちゃんがこっちに来た。

「おかえり、どうだった？」

「ん、楽しかったよ」

「それは……………」

「で」と刀子ちゃんは急に声をひそめて、耳を貸すようにジェスチャーする。

何かな?と思いつつ、従うと、

「空也、惚れ直した？」

「にゃ!？」

なななっ……………何を言うのかな!?

「あれ?違っの?」

「ち、違っよ!?!確かにかつこよかったけど違っよ!?!」

何が、って言わなくても会話がり立ってるのは仲良くなった証拠

なのかなって思いながら、笑っている刀子ちゃんをジト目で見た。
「・・・・・・・・刀子ちゃんって意外といじわるなのかな？」

「ってゆーか、このスイカどうするよ？」

「・・・・・・・・食べる？」

「これ全部？太りそうなんだけど」

げんなりとした顔で、スイカを見つめる騎子。

この分だといくつかは持って帰らなきゃいけないかもね。

「つか、俺達割と戦ってるほうだから、心配いらなくね？」

「それでも気になるのが女の子！」

「沖縄といえばパイナップルのイメージがあっただけど」

「まあいいじゃない？スイカもけっこうおいしいよ？」

コテージに戻ったわたし達は、スイカを食べている。

由香の言うことも一理あるけど、やっぱり暑い季節はスイカだと思
うんだ。

なんとなく騎子と槍馬のほうを見ると、騎子が口の中で何かもごも
ごと動かしている。

「・・・・・・・・次の瞬間、スイカの種が凄い速さで撃ちだされた。」

「へへー、これがホントのタネマンガンガってね」
「……………アホ」

うーん、ネーミングがそのまんまな気がする。

すると騎子のそれをみていた幽斗が、懐かしそうににやっと笑って、

「懐かしー、ポモンか」

「これも前世の？」

「ん、十年以上も人気なゲームシリーズだ」

「十年も!？」

こつちの世界にそんな売れてるゲームってないよね？

……………すごいなあ……………。

「確かに懐かしいね、俺もそのシリーズ結構やりこんでたな」

「そうなの？」

「うん、俺が生きていたころは種類が五百超えていたよ」

「わあ、集めるの大変でしょ？」

「そーれーが！ポケンの醍醐味なのよ！」

騎子が話に入ってきた。

別にいいけど、せめて口元をふいてからにきなさい。

「ボールなげてもつかまらない！自分の手持ちの属性が偏ってて、弱点突かれ出すと全滅する！バツジもってないと先に進めない！」

さ、さつきからよくな部分しか上げてない気が……………。

けど、騎子は「しかーし！」と、指を上上げる。

「レベルが上がったり、新しい技覚えたり、進化して立派な姿になつたりするとめっちゃめっちゃ嬉しいっていうか、楽しいって言うか！」
「自分が戦わない分、そういう喜びが大きかったよな」
「なんか、すごく楽しそうだね」
「お、興味持った？」
「うん！」

その後も、他愛ない話で盛り上がった。

日も暮れて、また風が涼しくなってきた。

潮の香りが混じってて、思わずため息がでる。

「……ちょっとだけ、肩の荷が下りた気がした。」

わたしの今後の身の振り方とか、ペルソナのこととか、狙ってくる転生者のこととか、最近詰め込みすぎてる感覚がする。

「……けど。」

なんとなく、後ろを振り返ってみる。

「ソーマンがあるなら、蕎麦でもチャンプルーできると思うんだ」

「できると思うけど、一人で挑戦しような？」

「あれ？ねえ！網とコンロどこやった？」

「あ、ご、ごめん！邪魔になると思って、動かしちゃった！」

「ならいいや、準備終わったら持ってきて？」

みんなそれぞれ寛いだり、バーベキューの準備をしたりしてる。

……醜い部分があったり、至らなすぎるわたしを受け入れてくれるみんながいる。

不思議と、何が起こつても大丈夫って思える。

……それもなんとなくだけど。

もし神様がいるなら、というか、空也達が会ったらしいから、いるんだよね？

わがままの二つや二つ、聞いてくれてもいいと思うんだ。

もう少しだけ、もう少しだけ、ここにいさせて。

「なのはちゃんは蕎麦でチャンプルってどう思うっ？」

「んー、どうだろ？でも面白そう」

「あはっ、向こうに戻ったら早速試してみよー！」

「じゃはは、うん」

第十話スイカ片手に（後書き）

スイカの種でマシンガン、誰だっぺやったことがあると思っんです。
あとポケ ンの話に花を咲かせてみました。

今回で沖縄は終わりですが、夏休みはまだまだ続きます。
それでは、ご感想お待ちしておりますよw

第十一話世界の『鍵』（前書き）

私自身がこんがらがるので、今回から『side』が復活です。

第十一話世界の『鍵』

「フフフフ、お久しぶりですねえ」

「ここは、っていうかこの人……。確か……えと……だめだ、鼻しか出てこない。」

「そういえばあなたには名乗っておりませんでしたな、わたしの名前はイゴール、このベルベットルームの主をしております」

「あ、はいよろしく願います、わたしは……」

名乗り返そうとすると、すごい鼻の人……イゴールさんは手を上げて止めた。

「存じ上げておりますぞ、高町なのは様、幼い頃より戦地に赴かれた歴戦の勇士、一度は死線を彷徨ったものの、再び前線に復帰した不屈のエースオブエースにして……」

いわれた情報は全部当たっている。どっ、どこで知ったのかな？

イゴールさんは一旦言葉を切ってから、にやっと笑って、

「世界の『鍵』」

……はい？

かぎ？ 鍵ってあの開け閉めするやつだよな？
わたしがそれだっていうの？

「細かく言えば、この世界の均衡を保つ楔、ですがね」

楔……止め具ってこと？

……ちよつと分らないかな。

「思うところもございましょうが……率直に申し上げましよう、あなたは今、狙われております」

「……え？」

狙われてるって……どういうこと？

わたしが狙われるのは、俗に言う『原作キャラ』だからじゃないの？

「世界の要である『鍵』は、その世界のあり方を護る為に存在するもの、ですがあなたを狙っている者達は、『全てを叶える願望機である』と、間違った方向にしか解釈していません」

一呼吸おいてから、

「『鍵』であるあなたに何かあれば、それだけで世界のバランスは崩れてしまいます」

「……」

……でも、わたしじゃ……。

「わたしじゃ、転生者に対抗は……」

『原作キャラ』……この世界に元々いる人たちじゃ、転生者には太刀打ちできないって事実が……。

中には決定的に経験不足な転生者もいるけど、それでも倒すことが出来るなんてごくまれ。

持つてる能力が反則すぎるから……。

そんな人たちに、わたしが対抗できるわけ……。

「できます、ペルソナさえ目覚めれば」

「……っ！」

けど、わたしのペルソナは……。

「心配はございません、きちんと目覚めます」

そういったイゴールさんの目は、ちょっとふざけているところがあったけど、真剣で。

……本当にそうなる気がした。

思わず、ため息がでる。

「それと……あなたは孤独ではないことを、決してお忘れにならないよう、それでは」

意識が、遠くなっていく。

side 空也

「ここ、この公式でいいよね？」

「大丈夫、でもこの計算忘れがちな人がいるから、注意してね？」

「おっけー」

「ここは加熱、だよな」

「ああ、それで出来る物質は……………」

俺たちは、昨日沖縄から帰ってきた。

近い内に地元で開催されるでかい夏祭りがあるので、それまでに課題を一気に片付けようという話が出た。

そういうことで、また俺の家で勉強会を開いている。

「ふいー、今なん……………ってもうお昼じゃん！？どーりでお腹減るわけだ」

「ああ！ほんとだ!？」

時計に目をやると、確かに時計の針が両方とも十二をすぎている。

現在時刻、十二時五分……………。

何か作るか。

「昼ごはん、何がいい？」

「なんか夏バテに効きそうなの」

「りょーかい」

夏バテに効くものと言えば、辛いもの、か。

何かあっただろうか………。
冷蔵庫と戸棚をあさると、麻婆豆腐の材料が出てきた。
………これでいいか。

閑話休題。

「いただきまーす！」

八人分にしちゃ少し多い気がするが、食欲あるのがいるし、大丈夫だろ。

みんな舌鼓打って、食べてくれている。

………何かこう嬉しいものがあるな。

俺もスプーンを取って一口食べてみる。

ん、我ながらいい出来だ。

若干もう少し辛くてもよかったけど、問題は無いな。

これはこれでいける。

「あ、そだ、今度の夏祭りみんな何着ていくんだ？」

「もち浴衣！」

「夏祭りっていえば浴衣だよね」

「確か開催は………」

と、槍馬は部屋にあるカレンダーを見た。

「ん、八月の中ごろだね」

「だ・か・ら！それまでに課題終わらせないと」

「おー！」

s i d e なのは

家、自分の部屋。

わたしは空也の家から帰った後、自室にいた。

「・・・・・・・・・・」

イゴールさんとの会話があったから、わたしなりにペルソナ召喚の練習をしている。

・・・・・・・・・・といっても、その召喚に辿りつけてないけど。

・・・・・・・・・・けど、

「カード、出すまでは出来るんだよなあ・・・・・・・・・・」

わたしの手の中に、空也達が使うものと同じカードがある。
ここまででは出来るんだけど・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・」

思い切って握りつぶそうとしてみる。

・・・・・・・・・・痛みしかこなかった。

っていうか、シワーっつよらないってどれだけ頑丈なのこれ？
手を見てみると、カードが強く当たった部分が赤くなっていた。
……思わず、苦笑いしてしまう。

「あーあ、結局出来ず仕舞いか……………」

でも、あと少しで出来る感じがしてきた。
まだ赤い手を見て、握る。

……………きつと強くなれる。

『鍵』、とか、まだよく分からないけど、それでも……………。

「迷惑とか、心配とか……………かけちゃいけないもんね」

ごめんなさい。

あなたはわたしを受け入れようと必死なのに。

わたしは何も出来ない。

がんばれ、しか言えない。

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

そのまま寝ちゃってたみたい。

外はまだ夕方みたいだけど、だいぶ暗くなっている。

「・・・・・・・・・・ふう」

体がだるい・・・・・・・・。。。

・・・・・・・・・・いつそまた寝ようか・・・・・・・・つ。

「・・・・・・・・・・つ!?!?」

この反応・・・・・・・・そんな・・・・・・・・まさか・・・・・・・・
!?

「ジュエルシード!？」

side ????

「こんなんで本当に来るのか？」

《そうさ、何せ彼女にとっては因縁の品だからね》

ふうん・・・・・・・・そっぴやそっぴやな。

魔法に目覚める切欠もこれだったんだっけ？

《分かっているな？『鍵』は我々に・・・・・・・・》

「わーってるよ!そのかわり報酬は・・・・・・・・」

《ああ、こちらで十分な量を用意させてもらっ》

本当だろうな・・・・・・・・?

おっと、

「やつこさんが来たからもっ切る」

返事を待たずに通信を切って、『お客人』を見据える。

「黄泉路一直線コースへようこそ、高町なのはさん？」

side なのは

「レイジングハート！距離はあとどれくらい！？方角は！？」

《I understand the feeling, but
at first please calm down and,
as for the distance, in 0.6 km
more, the direction, is north
west from here.（お気持ちは分かりませんがまずは
落ち着いてください、距離はあと0.6 km、方角はここから北西
です）》

「っわかった！」

レイジングハートの指示通りの方向に向かうと、魔力反応が強くな
ってきて、同時に人影もまばらになってきた。

「結界が張られている………？」

あたりを警戒しながら見渡してみると、若干赤っぽい。

「やっぱり、隔離用の結界だ、でも誰が………」
「黄泉路一直線コースへようこそ、高町なのはさん？」

上のほうから声をかけられて、思わず見上げる。
月をバックに、こつちを見下ろしている人が、そこにいた。
外灯に立っていたその人は、銀色の鎧にオールバックの黒い髪とい
った格好をしている。

「誰、ですか？」

いつでも起動できるように、レイジンググハートを握った。
銀色の鎧の人は笑顔を見せて、

「別に恨みはないんだけどさ、お前を拉致って欲しいって頼まれて
るから……」

彼の脇の空間が歪んで、出てきたのは変わった形の武器だった。
分類としては剣なんだろうけど、刀身が円柱状になっているのは始
めて見るよ……。

「……セットアップ」

《standby ready / set up》

気休め程度にしかならないだろうけど、何もしないよりはマシだと
思ったので、バリアジャケットを纏う。

けど、相手は笑顔を絶やさなのまま武器を振り上げた。

「とりあえず、確認な？俺が勝ったら大人しく拉致られてもらう、
あんたが勝ったら……」

そういうと、ポケットに手を入れて、何かを…….とい
うか、忘れるはずの無いものを取り出した。

「ジュエルシード、ロストロギア保管所からパクって来たもんだけどさ、返すよ」

思わず、飛び出していた。

体を強化して拘束移動、続けてレイジングハートを振り下ろして攻撃する。

相手は刀身で受け止めたけど、間髪いれずにスフィアを四つ生成。回転をかけて打ち出した。

相手は罅迫り合いをすぐに切り上げて、武器を振りスフィアを消す。続けて裏拳を繰り出してきた。

何とか体を屈めて避けて、後退。

「デイベインツバスター!!!」

カートリッジを装填して砲撃を撃つ。

一方の相手は手を前に突き出す。

するとまた空間が歪んで、花みたいなシールドを展開。難なく防いでいた。

……ジュエルシードは、わたしが力を手にするきつかけになったものであり、フェイトちゃん達と友達になる発端でもあり、わたしが何をしたいかがはつきり決まる始まりでもある。

あれと出会ったことでわたしの全てが始まった。

ここまでいったら大げさと思われるかもしれないけど、それくらい因縁の相手だった。

だから、

「本当に、勝つたら返してくれるよね？」

「おいおい、信用されてねえな」

相手は苦笑いしたけど、急に目が冷え切った物になる。

「ま、お前らが俺ら原作キャラに勝てるわけでもないから、ぶっちゃけ細かいことあどうでもいいけどな」

やっぱり転生者だったか……！

するとまた空間が歪んで、そこに手を突っ込んだ。

そして引きずり出されてきたのは、鎖。

見た目は何の変哲も無い、けど威圧感は凄まじい。

相手は、またにやりっと笑う。

突然、体が動かなくなつて、空に上がった。

さっきの鎖に縛り上げられているんだ！

動きが見えなかった……！！

「もう一度言うけど、細かいことはどうでもいい」

武器を、胸元に突きつけられる。

刀身が回転を初めて、エネルギーをチャージする。

強さを増す赤っぽい光が、怖く感じた。

「殺すわけには行かないから、『抵抗できないくらいにスタボロ』
って言う条件はこれ以上に無いくらい最高だぜ」

回転が速くなる、光が大きくなる。

「俺さ、前世では人を傷つけないで傷つけないでたままじゃなかったんだ、人の怪我とかみてるのと興奮する、自分もこういうことがやりた
いって我慢できなくなるんだよ」

狂気的な笑顔が、目の前にあった。

臨界ぎりぎりまでの光を前にして考えるのは、生きていられるかど

うか。

「天地乖離エヌマす……………」

次に考えたのは、ジュエルシードのこと。

鎖はびくともしないし、魔法を使う暇もないだろう。

……………出来れば、取り戻したかったな。

辛くても、痛くても、

「開闢エヒツクの星……！」

やっぱり、思い出は思い出だから。

side 襲撃者

「ウケツ……………ウケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケツ！」

ヤベツ、キモチイイ、サイコウ……！！

ハラニ、カザアナ、アカナカッタケド。

オモイツキリ、ヒトニボウリヨクデキタ!!

「ハテ? ハラニカザアナアイテナイツテコトハ、シ
ンデナイ?」

「ナンデ? ナンデ? ナンデ?」

「うっ……ごほっ……!」

「……確かに殺すつてのは依頼内容に
無かった。」

「けど、エアの攻撃くらつてもそれほどボロボロじゃないつてどう
よ?」

「ま、とりあえず十分な抵抗が出来ないくらいボコつたからいいかも
な?」

「さて、このままずらか……。」

「マハガルダイン!」

「マハラギダイン!」

「ん、何かあつ……?」

「デュアルアビリティ! 『火災旋風』 つ!!」

「うおおおおおおおっ!?!」

side 幽斗

あつぶねー！ペルソナが気付かなかつたらやばかつたな。

「サンキュ、サスケ」

.....。

相棒は喋らないけど、雰囲気得意げにしているのが分かる。
なんとつて、『我は汝、汝は我』だからな！

転生者の手から、なのはが離れたのを確認してから、由香と一緒に突っ込んでいった。

棒状の手裏剣を投げつけて、回し蹴り、続けて由香が重い一撃を脳天に食らわせる。

目を回している隙に後退しつつ、なのはを回収した。

「ーかどんな攻撃食らったんだ？腹の辺りの服が全部吹き飛んでるじゃねえか！？」

ぐったりしているなのはを横にしてから、相手に向き合った。

.....んー、ぶっちゃけた話。

「ギルガメシユの色違い？」

「だねー」

いや、銀色な分目に優しいけど、やっぱり派手だな。

もってるのは乖離剣か.....。

天地乖離す開闢の星が怖いぞ。

とりあえず、要注意ってな。

相手のギルガメシユもどきはこつちを睨んだまま、乖離剣をいつでも振るえる様にしてるみたいだし・・・正直、やつかいだ。その昔、混沌としていた世界を天と地に別けたと言われる、乖離剣エア。

そんな物を相手に、無事で・・・すむかあ？

「とりあえず、お前はいつも通り突っ込め、俺が後ろからちまちま援護する」

「わかった、それじゃあ・・・」

とん、とん、とんつと軽快なリズムを立てているが、その間に宙にいる敵に接近してるんだから、割と怖い。

もちろん相手もかなり驚いて、動きを一瞬止めた。

結局、人間って生き物だし、まあそうなるのも無理は無えか。

そこで、由香にとっては最大のチャンスと・・・

「タルカジャ、やっとくか」

・・・

サスケは小さく頷いてから、腕を振る。

すると、由香に緋色の光が宿った。

腕力（まあ、所詮攻撃力つてやつ）が上がった証拠だ。

「そおーれっ！」

ズドンつと、次の瞬間にはギルガメシユもどきが地面に叩きつけられていた。

・・・相変わらずの馬鹿力だよな。

うん、味方でよかった。

・・・って、

「だらあっ！」

「おっと！」

ギルガメシユもどきの突きが襲ってきたので、クナイでいなしてからなのはを抱えて脱出。

奴は方向転換の為に右足を軸にして回転。

けど、次の一手は既に俺のもんだ！

「っ！？があああ！！！」

ワイヤーがはずれる音がして、後ろから棒状の手裏剣が襲い掛かる。背中に何本か突き刺さっているのが確認できた。

「この、いつのまに……！！！」

「ブービートラップってな！」

小石とかにワイヤーとかを仕掛けて、動かした時に仕掛けが動く仕組みの罠だ。

主に戦場で使用されたらしい。

ちなみに『ブービー』ってのは英語で「アホ」とか「間抜け」とかという意味……だったと思う。

「ガルダイン！」

「………っ」

真空の刃がギルガメシユもどきを攻撃して、新たに血を流す。けれど、相手も諦めてないらしい。乖離剣をこっちに向けた。

「天地乖離す開闢……」

「ベンケイ！デスバウンド！」

ぬうらあっ！

恐れてた天地乖離す開闢の星が撃たれる寸前で、由香が間にいった。

そしてカードを斧で叩き割り、ペルソナ『ベンケイ』を召喚した。

義経の部下として有名な『武蔵坊弁慶』そのままの姿をしている。それが薙刀を振り下ろすと、黒い衝撃が周囲全体に広がって、相手の動きを止めた。

ついでに天地乖離す開闢の星を阻止して、ダメージを与える。なのは由香に預けてから、奴に接近してサマーソルトを食らわせる。

「……」

ポロポロになりながらも、こつちを睨みつけるギルガメッシュもどき。つてか、

「なにが、なんで？」

「決まってるだろお！そいつは『鍵』だ！願いを叶える願望機だ！なんで人として扱うんだよ！？」

「……おいおい。」

「なんで？」

「はあ？」

「いや、なのは人間だろ？つかかぎって何さ？」

すると、ギルガメッシュもどきは突然笑い出した。

何がっぼったんだ？めっちゃめっちゃ笑ってるんだけど……あ、咳した。

「つくくくくくくく……人間？おまつアホだろ？何も知らないのか？さつきも言ったろ、そいつは世界の鍵、なんでも願いを叶える願望機だ」

「それに」と続ける。

「……んー、俺としちゃそろそろ自重するのをオススメするんだけどなー。」

さつきから背中が冷たくて、熱い。

「ただの登場人物、キャラクター、所詮俺達視聴者に好き勝手される存在だ、それを今更人間扱いとか、マジ……」

あ、キレた。

「……、どうするよ、この後始末……」。

「……なのはちゃん人間だ、意志を持って、ちゃんと動いている」

由香が振り下ろした斧を持ち上げると、勢い良く血と透明な液が噴き出して、流れる。

うわ、さらに後始末が面倒になった。

「……人が目の前で死んでるのに、考えるのがこんなことって……俺も堕ちたかねえ？」

にしてもだ、

「それをキャラクターとか願望機とか……いい加減にして」

キレた由香、久しぶりに見たわな。

side なのは

何かに揺られている感触がする。

確かわたしは……っ！

「そだ……ジュエルシード!!」

「おお!!?」

「ふにゃっ!?!」

な、なにに!?わたし、担がれてる!?!
だだだだだっ誰……って、

「幽斗くん!?!」

「あー、頼むから耳元で騒がないでもらえますー?」

「っ、ごめんなさい……」

でもどうしてここに?由香もいるし……。

「ペルソナが気付いてくれたんだよ」

「わたし達は全然気付かなかつたんだ、すごい高度な認識阻害の境界だねー」

「……まだ整理できてない部分があるけど、この二人に助けてもらったってことであつてみたいだね。
お礼、言わなきゃ。」

「あの、ありがとう……」
「いいってことよー!」

「うん、友達助けるのは、当たり前!」

二人そろって、無邪気に答えてくれた。
嬉しくなると同時に、悔しくなる。

わたしがやらなきゃいけないことだったのに、また助けてもらつて……。

「あ、もういいよ、自分で歩けるから……」
「そっか? あんま無理すんなよ?」

下ろしてもらつてから、すぐに戻ろうとした。
はやくジュエルシードを回収しないと……!

「つてちよつと待て!」
「どこに行くの?」
「決まつてるじゃない! ジュエルシードを探しに行くの!」

あれは願いを歪んだ形で叶える危険なもの。
だから放つておいたら……。

「ジュエルシードってこれ?」

「そうそれ！それを回収に……………っ!？」

びっくりして、振り返る。

由香が握ってるのって、ジュエルシードだ！

「それ！渡して！」

「おいおい！まず落ち着けて、なんか思い入れあるのはわかったから!！」

幽斗くんに羽交い絞めされてから、はつとなる。

由香を見ると、少しおびえた表情をしていた。

……………。

「ごめん、ちよつと興奮してたみたい……………」

「いいよ、大事なものなんでしょ？」

「……………ん」

由香が差し出したそれを受け取ってから、封印処理を施した。
これでもう大丈夫のはず。

「……………けっこう因縁あつたりする？」

「うん……………わたしが、魔導師になる発端であると同時に、フェイトちゃん達と、友達になるきっかけでもあったもの、なんだ」

きつと今のわたしは、一言一言噛み締めて発言したんだろう。
同時に泣きそうな顔もしているはずだ。

「二人とも、今日はありがとう、ごめんね」

「あ……………」

だから、二人から顔をそらして、返事を待たずに帰ることにした。

第十一話世界の『鍵』（後書き）

頭蓋骨は脳みそを守る為にその中を体液で満たしているそうですよ？さばくです。

もうでないと思われたイゴールさんの登場。

今後もちよこちよこ出てくるかも……。

あと、世界の鍵のこと。

鍵があるということは……？

そして幽斗と由香のペルソナが登場。

設定は後日。

それではお返事の部屋へ。

V e r i t a s 様

そういうことですw

その後主人公と生徒会長に発掘されました。

誰だってやると思うのですよ、スイカの種でマシンガンw w

今回は夏祭りでもやろうかなと、あとおそらく急展開です。それでは。

第十二話大怪我と後悔（前書き）

予告どおり、急展開、かもしれない？

第十二話大怪我と後悔

「っがぁー!!」

衝撃、直後に空也の体が木の葉のように吹き飛ぶ。

そのまま地面にたたきつけられ、うめき声を上げた。

彼愛用の刀はへし折られ、無残な姿をさらし、制服はどこどころ派手に破け、出血している。

一案負傷が激しい右腕を押さえながら、空也は上を見上げた。

そこにいるのは、長い銀髪に紅い目、闇溶け込むような黒いコートといった出で立ちをしている。

極めつけは、彼の背後に存在する。

「……………色違いの……………イザナギつ……………!!」

途端に敵は、にやっとその口角を上げた。

馬鹿にしたようなそれに、空也は珍しく憤りを感じて、声を荒げた。

「何者だ!?なぜイザナギを持っている!?!」

「……………ふふっ、やだなあ、忘れちゃったの?」

敵はまた笑って、両の手を広げる。

「僕だよ?『兄さん』?」

「……………まさか、お前……………!?!」

笑顔を変えないまま、敵は自身のペルソナに号令をかける。

赤や黒といった、禍々しい色合いのイザナギは、その武器を振り上

げて、空也に斬りかかった。

side なのは

目覚ましに起こされて、まだ眠い眼をこする。

昨日は色々あったからなのか、まだ疲れが残っているみたいだったと、ケータイが振動しながら、メモディーを発する。

「……………着信？ 騎子から？」

通話ボタンを押して、耳に当てた。

「たっ、たたたたた大変！！ 大変だよ！！」
「~~~~~っ！」

突然大声でしゃべられて、思わずケータイを耳から話した。

一呼吸おいてから、また耳にあてて、

「落ち着いて、何があったの？」

「み、ミッチーが！ 大怪我して、病院に担がれたって……………」

「！！」

頭の中が、一瞬で真っ白に変わる。

今、なんて？

空也が？病院？大怪我？

するり、と、電話が手から落ちるのが分かる。

だんだん遠ざかって、足元に落ちる、騎子の声。

『ちょ、ちょっと！？なのはちゃん？なのはちゃん！？』

海鳴大学病院。

「騎子！」

「なのはちゃん！」

人目を気にせず、病院の中を走り抜けて、みんなと合流した。

「空也は！？空也は！？」

「お、落ち着いて！」

「そっだよ！まずは冷静に！」

「・・・・・・・・っ」

思わず騎子の肩を鷲つかみにして、激しく揺らしていて。
由香に言われて、はっとする。

「……………ごめん」

「いいよ、すごい心配なんですよ?」

「……………もう、大丈夫?」

刀子ちゃんが、そう聞いてきたので、頷いてこたえた。

幽斗くんが口を開いて、

「全身に切り傷があって、出血が酷いんだと、でも一応命に別状は無いそうだから、明日には目覚めるらしい……………」

「……………」

なんで、どうしてこんなことに……………!

「にしても、なんで空也が大怪我を?」

「一番大きい可能性、っていうか、絶対転生者の襲撃でしょ」

双子が口をそろえて言ったことに、みんなが頷いた。

……………けど、

「ちょっと待って!襲撃されたのって、わたしだけじゃないの!?」

昨日、ジュエルシールド以外の力は感じなかった。

わたしが、落ち着いた思考ができなかったって言うのも、あるかもしれないけど……………。

「少なくとも、相手の目的はわたしのはずでしょ!?」

『鍵』のこともあるし、少なくとも相手はそれが目的のはず。

「だろうね、でもなおさらおかしくなるよ？なんで空也も襲撃した？」

「なのはが狙いなら、なのはだけ狙えば良いだろ」

そう考え込む弓成と槍馬。

「単純にこっちの戦力削りたかったんじゃないの？なのはが欲しい、けどあたしらが邪魔、だったら一人だけでもって」

「そうなら、何で空也なんだ？俺ならアナライズを持ってる弓成や、強力な回復の術を持ってる刀子を狙うぞ？」

騎子が仮説を述べると、幽斗くんがそう意見を言う。

確かに、狙うならやっかいな能力を持った弓成くんや、刀子ちゃんが妥当。

いったいどうして………。

そんな中、さつきから黙り込んでいた由香が、ぼそっと、

「………結果的に、なのはちゃんが目的って見えているだけなんじゃないかな？」

「………え？」

「あ、えっと、その………わたしが言いたいのは、始めから空也が目的で、なのはちゃんは囷………っていう可能性はないかなって」

その直後に慌てて「ただの推測だよ！？」と断る由香。

「それだと、何て言うんだ？俺たちが全く気づかなかったっていうのも頷けるけど………」

「つか、そもそも何でなのはちゃんの方に気づいて、空也の方は全く気づけなかったわけ？少なくとも弓成は分かっていたはずでしょ？」

「それが、ロビンフッドのアナライズに引っかけたのは、なのはちゃんの方だけで……………まさか空也も攻撃されているなんて思わなかった」

悪いな、俺の失態だ……………。

弓成くん胸のポケットから、ロビンフッドのカードがちょこつとだけ出てきて、申し訳なさそうに言った。

ちなみにまだ朝早いので、周りに人はいない。

「いや、ロビンフッドの所為じゃないだろ？」

「さすがのあんたでも、察知できないものもあるって」

すまねえ、ありがと。

「でも」と話を切り出したのは、刀子ちゃん。

「ロビンフッドのアナライズは相当なスペックだよ？それを掻い潜るって……………どんな人？」

場の空気が、重くなる。

「まずは本人から話を聞かないと、目覚めるまで待とう？」

とりあえず今後の方針は、空也からの事情聴取っていうことで纏まった

ごめんなさい。

わたしは気づいていたの

あの人が危ないって、分かっていたの

すぐにでも教えてあげたかった。

だから何度も声を上げて、あなたが気づくように頑張った。

無駄って分かっていたても、あなたに届けばよかった。

でも、ダメだったね

教えて上げられないどころか、あなたを危険な目にあわせて………!!

どうして何もしてあげられないんだろうっね？

わたしは、本当に、いらぬ子なのかな？

side ????

「その後兄さんはどうしてる？」
「予想通り、病院に運ばれた様です」

笑顔が浮かんだのが、自分でも分かる。
こつも事が進むとかえって怖い気もするけど、今はそれがありがたい。

「『鍵』はそのことを知ってるよね？」

「もちろんでございます」

「よし、いい感じに進んでいるね」

つく、ふふっ………。

何年もかかってしまうけど、確実にやるためにはやむを得まい。

さあ、せいぜい踊ってもらおうかな？

僕の目標のために、ね。

side 空也

翌日。

俺が目を覚めたのは、病室のベッドだった。

近くの看護師に聞くと、どうやらあの後すぐにここへ運ばれたらし

い。
友人たちが心配していたと聞かされて、少し申し訳なく思った。
出血が酷かったので、ゆっくり休むようにと言われる。
やることは他にも無いので、従うことにした。
ベッドに入って、ぼんやりしていると、

起きたな

(……イザナギ)

口に出して会話するわけにも行かないので、互いに心で会話をする。

覚えているか？昨日……と言っても、正確には一昨日だ
が。

(ああ、同じ転生者と、赤いイザナギ……それに負けたんだ
つたな)

さらっと言ってはいるが、結構悔しかったりする。

本能と言っか、何と言っか……とにかく、俺も男だ。
負けた、ということに、少しばかり苛立ちというか、嫌悪を感じた。
……それよりも、だ。

(あいつ、俺のことを『兄さん』って呼んだ)

そうだな……まさかとは思っが……。

(……正直、その予想は当たっっいそうだ)

いつの間にか、ため息をついていた。

(なんでここに……?)

さあな。

戦った『あいつ』について考える。

。 間違っていないければ、あいつは

「お前も来ているのか？レイト」

f r e e s i d e

同じ頃、海鳴市の臨海公園では、大きな夏祭りの準備が進んでいた。二日間に渡って行われる巨大なそれは、毎年多くの観光客で賑わう。メインイベントは花火で、量と質が自慢らしい。

今年はなのはの実家、喫茶翠屋も出店する予定で、アイスコークヒーとジュース各種、カスタードの変わりにアイスを入れたシュークリームを売り出すらしい。

そういうことで、高町家および仲良しメンバーは、その準備をしていた。

なお、空也は未だ入院中である。

「助かるわ、若い子達も、あんまり店を空けていられないから」
「友達のよしみってやつです」

ダンボールを運んでいた桃子がうれしそうに言うと、刀子が笑って返す。

そこから少し離れたところでは、土郎と男子三人が屋台を組み立てていた。

テントを立ち上げ、その下に器具を並べていく。

「だ、大丈夫なの？」

「はい！」

「にははは……」

そこへ荷物を運んできたのは、なのは、美由紀姉妹と、由香だ。

美由紀は由香の怪力っぷりにかなり驚き、なのははそれを見て苦笑いしていた。

「今年初なんだよね？」

「うん、お店も余裕が出てきたから、ちょっと新しいことに挑戦してみようって」

「そうなんだ」

テントの下で荷物を広げながらの会話。

その通り、翠屋は初出店なので、地元では結構話題になっている。

桃子に呼ばれた二人は、荷解きをひと段落させてから向かう。

女三人でテーブルを広げて、布巾できれいに拭いた。

「よし、こんなもんかな？」

明るい笑顔で満足げに頷いた桃子につられて、二人も笑う。

そんな中、弓成のケータイに着信。

弓成は士郎に一言断り、離れた場所で電話に出る。

始めの一瞬は暗い表情だったのが、すぐに明るくなった。通話を終えた弓成は、明るい声でみんなに知らせる。

「空也の意識が戻ったそうだよ！！」

side 空也

ぼんやりとしていると、なのは達が病室に乱入してきた。俺が目覚めたと聞いてすっとなんできたという。

あいさつや喜びもほどほどに、会議が始まった。

幸いこの病室には、俺以外の入院患者がいないので、堂々と話ができる。

「早速だけど、襲撃してきたやつ、どんなのだった？」

槍馬にそう聞かれて、あのとぎのことを思い浮かべる。

銀髪に紅い目であることと、イザナギそっくりのペルソナを使役していたことを伝えた。

「イザナギそつくり!？」

「色違いって、どこの ケモンだよ!それ!」

案の定、みんな驚いている。

だが幽斗よ、俺に突っ込みを言われても困るぞ。

「物理と魔法を両方反射されてな、結構一方的な戦いだっただけ」

手も足も出ないとは、あのことを言っただろうな。

もう一度言っただけ、俺だって男だ、負けていい気持ちはしない。

「物理も魔法も反射って……. もろチートじゃん!反則じやん!」

槍馬の隣で騎子が騒ぎ、なのはも不安そうにしている。

「反射……. 少なくともテトラカーンとか生ぬるいもんじやなさそうだな」

「物理も魔法も反射って……. 何かあったけ?」

幽斗と刀子が

「少なくとも、転生者である空也にダメージを通したんだ、もしかしてなくても転生者だよ」

「それも」と、緊張した面持ちで、弓成は重々しく口を開いた。

「俺達転生者ですら対抗できないくらいの力を引っさげた、只者じゃない奴と断定していいと思う」

空気が、一気に落ち込んだ。

………転生者の素性については、伏せることにする。
まだ推測の域を出ないし、何より、

避けられるのは、嫌だ。

誰に、とはあえて言うまい。

と、重苦しい空気の中で、由香が唸って、ポツリ。

「物理も魔法も反射？……どこかで聞いたような……」

「

あの後少しばかり質問攻めにされた由香だったが、結局本人も思い
出せずじまい。

日も傾いてきたので、みんな帰っていくが、なのはは一人残ってい
た。

何か用事でもあるのだろうか？俺には心当たりが無いんだが……
・？

「………ごめんなさい」

「………は？」

いきなり何だ？

何を謝って………？

「わたしの、せいで、こんなに怪我して………」

ああ、そのことが………。

「別に大丈夫さ、お前だって結構ピンチだったんだろ？じゃあしよ
うがないさ、それにお前こそ大丈夫か？後遺症とか、残っていない
といいが………」

「わたしは全然！幽斗くん達が助けてくれたし………」

またしゅんつとなるのは。

………これは、けっこう気にしてる？
………しょーがない。

「あつ………」

「俺もお前も生きていたんだ、大丈夫、何とかなる」

とりあえず、頭を撫でてみた。

彼女は目を閉じて、されるがままにしている。

………んー、まだ暗いな。

っていうか、

「何でお前がそこまで気にする？」

「………だって、わたしが………転生者相手に、手
も足も出なかったから、幽斗くん達の手を煩わせて、それで空也の
方には、誰も助けに来ないで………」

「俺としては、お前が無事なら別にいいんだけどな」

「わたしはよくない！」

突然の大声に、反射で肩が跳ね上がる。

一方のなのはも、今のは思わずだったらしく、口を押さえて震えている。

互いに何も言わないまま、なのはは俯いて、

「……原因は私かも知れないんだよ？そんなの、よくないよ」

「……なんというか、背負い過ぎだろう。

今さっきの絶叫だって、ためていたものを吐き出したという感じだし。

「……別に、お前が気にする必要はないだろ」

「……気にする」

こいつは……。

なんというか、こんなところでも頑固を發揮か？

何でそこまで……。

考えていると、なのはが静か過ぎるのに気付いた。

もう帰ったのかと、隣を見してみる。

「……彼女はそこに突っ立ったまま、黙って泣いていた。つて、何で泣く!？」

何だ!？何かまずいことでも言ってしまったか!？

side なのは

何で泣いてるのか分からない。

けど、目の前の空也を見ていたら、ただ悔しさだけがあふれてきて何でわたし、こんなに弱いんだろ、何で、転生者じゃないんだろ。そしたら、空也のことに気付けたかもしれないのに、転生者に遅れを摂らないのに。

原作キャラは、何をしてもダメなの？絶対に転生者には勝てないの？
……幼馴染を助けることも、できないの？
……分からないよ。

「なのは？おい、なのは！」

空也、こんなわたしなのに、構ってくれて、受け入れてくれて、心配してくれて……。

ペルソナを持つている人つて、どんな人でも受け入れられるのかな？
本当に優しい人……。
……ああ、だからなんだ。

「大丈夫か？何かまずいことでも言ったか？」

環境が変わっても、この人は変わらない。

自分を作らなきゃ生きていけないわたしと違って、この人は自分のままで、立っている、進んでいる。
だから、

「あの、もしもしたのはさん？何か言ってくれないと……
っ？」

この人が好きになったんだ。

第十二話大怪我と後悔（後書き）

あえて何も言いません、はい。

強いて言うなら、純粋な恋心は最高だと思います、サー！

お返事の部屋は今回お休みです。

誤字脱字あらば感想へどうぞ。

次回は……どうしよっかな？

それでは。

第十三話夏の祭り（前書き）

恋愛物を書いているみなさんって、どうやって羞恥心を制しているのだろうか……？

第十三話夏の祭り

side 桃子

八月下旬、某日。

日が少し傾いた空に火矢が放たれ、大きな音を響かせる。

それが、夏祭り開始の合図だった。

それぞれの屋台が臨戦態勢に入り、客が来るのを今か今かと待ち構えている。

それは喫茶翠屋の屋台も例外ではなく。

わたしとなのはは、そろって商品の在庫を調べていた。

在庫が十分ということを書類と照らし合わせて確認し、満足そうに領いたなのはを見て、わたしは複雑な気分になる。

隣にいたからか、分かりやすい顔をしていたからなのか、そんなわたしになのはは気づいて、「なあに？」と聞いた。

わたしは少し笑ってから、

「よかつたの？友達と遊ばなくても」

「……うん、刀子ちゃん達には悪いけど、うちは人気の喫茶店だしね！人手は多いほうがいいでしょ？」

そう、明るく笑った。

……やっぱり、明らかに無理してるわね。

多分原因は、空也くんが入院したこと。

最近のなのはは、前より明るく笑うようになった分、落ち込みが随分激しい。

空也くん達が受け入れてくれた結果と考えれば、それはそれでいいのかもしれないけど。

自分のこととか、フェイトちゃん達のこととか、見た目以上に悩ん

でいるはず。

それでも何も言わないのは、この子が、色々を抱え込んだじゃう癖があるから……。

親のわたしがしっかりしないとイケないのに、これじゃ駄目ね……

「あ、お母さんお客さん！」

「分かったわ」

とにかく、今はこの子を少しでも支えることを考えなきゃ。

side なのは

屋台が開店して、一時間くらい。

人の流れは落ち着いているけど、忙しいのに変わりは無くて。

お母さんとお父さんも、お姉ちゃんも、わたしも、対応に追われている。

やっと一息つけたのは、辺りがすっかり暗くなってからだった。

奥の方で思わず椅子に座り込んで、ため息をついていると、

「なのはちゃん！」

この声は………騎子？

重い体を何とか動かしてカウンターにいくと、浴衣姿の騎子達がいる。

「やつほ、からかいに来たよ！」

「冷やかし目的じゃないだろ」

明るい顔で冗談を言う騎子に槍馬が突っ込んで、みんなで笑う。いつもの光景がそこにあつて、どこことなく安心した。

「なのはちゃん、大丈夫？すごく疲れているみたいだけど……」

「にははは、大丈夫だよ、さっきまで休憩してたから！ありがとう、由香」

心配してくれた由香に、命いっぱい笑顔で答える。
わたしに出来ることっていつたら、これくらいだし……。

「大丈夫なら、お祭り見て周らねえ？せつかくの夏祭りだしさ」

そう、幽斗くんが誘ってくれた。

けど、まだまだお客さんは来るだろうから、迂闊に屋台を離れるわけには……。

「いいよ、なのは」

「お父さん！」

「せつかくのお誘いだ、楽しんできなさい」

「でも……」

お母さんとお姉ちゃんを見てみると、二人ともお父さんと同じように『いいよ』って言ってくれた。

……。

「じゃあ決まり！行こ行こ！」

「あ、わわっ！」

そのまま騎子に手を引かれて、お祭り会場を周る事になった。

閑話休題。

「そっいや、空也くんって退院はいつ？」

みんなでクレープを食べていると、刀子ちゃんが切り出した。すると弓成くんが、口の中のものを飲み込んでから、

「明日だそうだよ」

「え、結構早くない？」

「骨折も見受けられないし、出血が酷いのも太い血管を中心に攻撃されていたからであって、傷はそんなに大きくないしね」

『なるほど』と、由香と騎子は納得して、再びクレープにかぶりついていた。

……メインイベントの花火まではまだ時間があるし、一日の終わりにやるのが、恒例。

だから、明日には空也を交えたみんなで見られるんだけど……
。。
……なんとなく昨日のことを思い出していたら、思わずむせた。

「むせたの！？しっかり！」

気を使ってくれた由香が、背中をさすってくれる。

うん、将来は良いお嫁さんだね。
……現実逃避はやめよう。

「だいじょーぶ？」

「なん、とか……………」

まだ、喉がヒリヒリする……………。

「っていつか、いきなりむせるとか、何事よ？」

「ううん、なんでもない」

「真顔なのがむしろ怖い」

あうっ、そんな顔してた!?

「……………さては、昨日なにかあったな？主にこっち方面で」

ああ、やばい。

騎子はいたずらっぽい顔で、小指を立てている。

この子、こついつのにはずば抜けて鋭いんだから、困ったものだよ……………。

もう……………どう切り抜けようかな……………？

……………あ、電話！

相手は……………お姉ちゃん！ナイス！！

「はいっ！もしもし！」

『なのは？今大丈夫？』

「もちろん！」

後ろで騎子が何か言ってるけど、聞こえないもん！

悪いけど、無視を決め込むよ！

『じゃあ、今から屋台に戻ってこれる？お母さんが用事あるって？』
「お母さんが？……うん、わかった、それじゃあ」

電話を切ってから、みんなの方を見て、

「ごめん、そういうわけだから、ちょっと戻るね！」

「何がどういうわけだかさっぱりだが、戻らなきゃいけないのは理解した」

「もー、いい具合に逃げやがって！あとでたっぷり聞かせてもらうからね！！」

そんなみんなの声を聞きながら、走ってその場を離脱した。

……逃げてなんかいないよ？戦略的撤退だよ！？

翠屋の屋台。

戻ってみると、お母さんが待っていた。

けど、なんでエプロンをはずして……？

「来たわね、じゃあ、わたしはしばらく抜けるから……」
「はい！お気をつけて！」

いつの間にか、お店の人たちが来ていて、お父さん達と一緒に接客している。

っていうか、

「お母さん、用事って何？そもそもお仕事は……」
「いいの、それよりなのは、一旦帰るわよ」

……え？

「な、なんでいきなり……！」

「浴衣に着替えるの」

「え、ええっ？」

あれよあれよという間に、わたしはお母さんに連れられて、家に帰っていった。

side 空也

俺がいる部屋が高い位置にあるからか、それとも周辺の建物が低いからか。

病室から、臨海公園の夏祭りが良く見える。

……まさか病室で花火を見るかもしれない日が来るとはな。明日には退院できるとは言え、少々複雑な気持ちだ……。

そういえば、と、ケータイの電源を入れる。

騎子か幽斗あたりから、何かメールが来ているかもしれない。

メールボックスを開いて、新着メールの受信を起動させると、一通の受信があつた。

差出人は……なの？

これからそつちに行くんだけど、何かほしいものはあるかな？連絡、お願いします。

これからこつちに来る？店も大変だろうに。しかし、何か欲しい物、か。

断ると言つ選択肢もあるが、相手の好意を無下にするのも何なので、ここは好意に甘えることにする。とりあえず、

たこ焼きで頼む

……いや、夏祭りと言えばたこ焼きだろ？

そつちえば、他に来る奴はいないんだらうか？

……男女が二人きりと言つのも、いささか気まずくて……気まずくて……。

……

……

……

ありえないくらい柔らかかったな

「ああ、人間とは思えな……」

昨日のことを思い出して、がっとうを抱え込んだ。

と同時に後ろの壁に後頭部をぶつけて、悶え苦しむ。

ぼっ、煩惱退散！ああ、あれは事故だ！そう、事故なんだ！！

落ち着け、今ならっ今ならもれなくジオダインをつ……！！

落ち着け

「……わかった」

よし、ここは冷静に行こう、何事も落ち着きが肝心だ。

でないと出来る判断も出来なくなる……。

嗚呼、でもやっぱり気まずいものは気まずい、よな。

……どうしたもんか。

閑話休題。

外をぼっとうと見ていると、扉が開く音が聞こえる。

恐る恐る振り返ってみると、

「あ、あの、来たよ？」

浴衣姿のなののがいた。

藍色の生地に、ススキの模様が映えているシンプルなデザインだ。

「……ああ、うん、いらっしやい」

いかん、一瞬呆けた。

というか、俺はこんなキャラだったか？

「……まあ、いいか、考えるのも面倒だ。」

「あ、たこ焼き……」

「ああ、ありがとう」

ベッドに備え付けられているテーブルを広げて、その上に買ってきてもらったたこ焼きを乗せた。

「……駄目だ、話題が見つからん。」

「気まずい、気まずすぎる、昨日のことがあるから余計に……！」

「な、何か話題は……」

「そう焦っていると、なのはが遠慮がちに自身の浴衣を指差して、」

「その、どう、かな？」

「あー、うん……似合ってる」

「……やべっ、かなり恥ずかしい。」

「なのはもそれは同じなのか、下を向いている顔が真っ赤になっていた。」

「なんだか目を合わせづらい所為か、さっきから視線が窓の外に逃げてしまう。」

「あ、あの……」

「うん？」

「なるべく冷静に、口を開いたのはと向き合う。」

「……いや、話すときくらい相手の顔見ないと、失礼だろ？」

「昨日の……」

「……ああ」

何かを必死に伝えようとしているのはは、肩を震わせている。

「その、ごめんなさい……………」
「……………」

なんて声をかければいいのか分からなくて、黙り込んでしまう。
なのはもそれつきり何も言わなくなって、静かになった。
静寂が痛い、だが話題が見つからない。

「……………気がついたらね」

ぼつり、なのはが語り始める。

「気がついたら、あなたのこと考えてて、あなたの隣に居たくて、
あなたともっと一緒に居たいって思ってた」
「……………ああ」

きつとこれは、なのはが漏らす数少ない本音。
だから否定せず、黙って受け入れることにする。

「でも、わたしみたいに、弱くて、足手まといになりそうな子が居
たんじゃ、邪魔になるって分かってたから、今まで気づかなくて、
ずっと黙ってた」

「……………ああ」
「本当に気がついたのはつい昨日で、自分でも本当にびっくりして
いるの」

「……………俺だってあれは驚いた」
「……………ごめんなさい」

謝るなよ……。

そう思ったら、自然を頭を撫でていた。

なのはは少しの間受け入れてから、ゆっくりと俺の手を離す。

「その、分かったばかりで、正直、すごく混乱していて、わけが分からなくて……でも、その……」

これはなのはが自分の口で言うべきだと思った。
だから、その先が分かっている、あえて指摘しない。

「……」

ちょうど花火が始まったらしく、外で甲高い音が響いた後に、爆発音。

なのはの言葉はかき消されたけど、言いたいことはなんとなく分かっている。

「……」

二度目、触れ合わせるだけのそれをかわした。

第十三話夏の祭り（後書き）

深夜のテンションって不思議ですよね。

見てるこっちが恥ずかしい話書いてても、なんとも思わないっすから。

きっと何かの補正がかかってるんだろっね!! うん!!

しんやの ちからって すげー !!

次回は・・・さーて、どうしようかなー？

第十四話花火（前書き）

タイトルは、何となくです。
意味はありません

第十四話花火

「えーそれでは……」

翌日、アックスボリウム。

いつも八人がたかっているテーブルで、一人、弓成がジュースを片手に立ち上がっている。

「空也が退院したのを記念して！」

かんぱーい！

それを合図にして、一斉にそれぞれのアルミ缶をぶつけ合った。

「っていつか、出血多量だったのに三日で退院って大丈夫なの？」

「ああ、多量といっても、重要な血管を中心に攻撃されていたし、何より傷口自体が小さかったからな」

テーブルに並べられたスナック菓子を食べながら、会話を交わす。

「ただし、絶対安静ね？」

「分かってる」

じっとそれを見ていたなのは、いつも道理の光景にほっとした表情を浮かべた。

「まあ、問題はまだあるんだけど」

「色違いのイザナギだろ？確かにそうだけど、今はいいじゃねえか！ほら、飲むぞー！」

「親父くさっ・・・・・・・・」

幽斗に絡まれ、げんなりした表情をする槍馬。
そうこうしているうちに、話題は夏祭りに変わる。

「今日も行くよね？夏祭り！」

「もちろん、なのはちゃん今日は大丈夫？」

刀子の問いかけに、なのはは頷いた。

「本当は今日も手伝う筈だったんだけど、お客さんが予想以上過ぎて、学生にはきついだろうって、シフトを変更してくれてたの」

「本音を言えば今日でもよかったけど」と、なのはは控えめに笑った。

「いや、さすがに学生で働きたいって、どうよ？」

「だって、元管理局員だもん」

「あー・・・・・・・・」と、妙に納得した様子で、全員が頷いた。
気を取り直して、騎子はぐっと握りこぶしを作り、気合十分なことをアピールしながら立ち上がる。

「よし！昨日は普通に私服だったから、今日は女子全員浴衣ね！」

「女子限定？」

「もちろん男子も甚平だよ！？」

「へいへい」

誰もその提案に異議はなく、いったん解散となった。

閑話休題。

時間は進んで、夕方。

臨海公園入り口。

「お、どうやらお出ましました」

「やっと来たか……」

「遅い」

「まあ、女の子はおしゃれに気を使っしね」

そうこぼしながら女性陣と合流する。

そして、少なからずの感嘆の声を上げた。

目の前にいるのは、普段とは一味違う姿の四人組だった。

由香は水色に金魚模様の浴衣、肩まである長い髪を結び上げて、簪で止めている。

刀子は青色に朝顔の模様の浴衣、長い髪は首のあたりでリボンで結んでいた。

騎子は黄色に白い菊模様の浴衣、前髪はピンで留めていた。

なのは先日と同じ藍色にスキの浴衣、だが亜麻色の髪はポニテールでまとめていた。

「ええ、なにあの子達!？」

「うっわ、全員レベル高え!」

「か、彼氏とかいるのかな!？」

「ナンパのしがいがありそうだ……」

浴衣を着ていることもあってか、四人そろって注目を集めている。

そのどれもが彼女らを賞賛していて、男性陣は一緒にいいのだ

ろうかと苦笑いをした。

「どーよ！あたし等の浴衣！」

「似合ってるんじゃないかね？つてか、俺としてはそろそろ移動したいんだが……」

「……？何で？」

「あんたら、注目浴びすぎ」

指摘されて初めて気がついたのか、今度は女性陣がそろって苦笑いをする。

「それじゃ、夏祭り周ろうか？」

「おうよー！楽しむぜー！！」

八人そろって、会場に足を踏み入れた。

「祭りと言えばたこ焼きでしょ！」

「お好み焼きも捨てがたいよ？」

「どっちでもいいから、自腹で買ってくれよ？」

「カキ氷も鉄板だよな」

「~~~~つ頭にきた　ッ！！」

「ああ、ほら、そんなに早く食べるから……」

「さすが弓兵^{アーチャー}、百発百中だな」

「そういう幽斗だって、確実に当ててるじゃないか」

「俺の場合は無駄に集中できてるっただけだよ」

「翠屋の方、どうなっているかな？」
「結構混んでるよね、土郎さん達大丈夫なんだろうか？」
「大丈夫だろ、翠屋は日常的に込み合っているから、対応には慣れているはずだ」

「よつと！」

「おお！やるな、お嬢ちゃん！」

「えへへー！」

「上手なのはいいけど、その金魚どうするんだ？」

「……………あつ」

「『スーパーボールすくい』なんてあるんだ」

「そう、金魚すくいよりも簡単だから」

「コップを突っ込むだけだからね」

「なんだ、その狸？」

「あれ？可愛くない？」

「可愛いっていうより……………」

「……………ブサ可愛い？」

ひとしきり楽しみ、夕日がほとんど沈んだ頃。
はた、と、槍馬が気づいた。

「……………空也となのはは？」

「あれ？そついやいない……………」

臨海公園の奥。

なのはと空也はゆっくり歩きながら、あの紅葉の場所を目指していた。

「……………二人で、あの場所に行くのも久しぶりだね」

「……………ん」

「ね、覚えてる？初めてここに来たときのこと！」

「覚えてる、俺が先に見つけて、なのはを案内したんだよな」

「うん！それでね……………」

二人とも、知らないうちに笑顔で会話を交わしている。

「魔法のこと打ち明けたとき、空也はしっていたの？」

「普通じゃない力についてはな、さすがに魔法があるとは思わなかった」

「そうなんだ」

だんだん紅くなっていく周囲。

この季節にあるはずのない紅葉が、はらはらと、風に踊り、落ちて

いく。

会話がはずみ、開けた場所に出た。

空也は腕時計に目をやって、少し微妙な顔になる。

「ちよつと早かったな花火まで結構時間がある」

「そつか、じゃあその間暇になつちやうね」

二人で苦笑いを交わして、ゆっくりと座った。

「・・・・・・・・ねえ」

「ん？」

話題を振ってきたのはは、それっきり黙り込んだ。

空也がどうしたのかと、隣を見ると、俯いているのがいた。

何かを聞きたいが、躊躇われる。

そんな顔をしている。

空也はふつと笑って、

「聞きたいことがあるなら、遠慮しない方がいい・・・・・・・・幸い、騎子達はいないしな」

「・・・・・・・・」

それからもうしばらく黙っていたが、やがて決心のようなものがついたらしく、顔を上げた。

「その・・・・・・・・空也がペルソナに覚醒した切欠って、何かなつて？」

「・・・・・・・・どうして、そう思った？」

ぴくり、と、空也の眉毛が動いた。
表情は、よろしくない。

そんな空也の質問に答えるべく、なのはは片手を見つめて、目を閉じる。

一瞬、淡く発光。

「……………それは」

出てきたのは、ペルソナのカードだった。

だが、本来ペルソナの姿が描かれている面は真っ黒だ。

「……………みんなの足手まといになるのは、嫌だから、それに……………あなたが怪我するのも、嫌」

なのははカードを両手で抱いて、震える。

彼女なりに、追いつこうとしているのだろう。

『原作キャラ』と呼ばれる人々が、『転生者』に勝てないのは何故か？

答えは簡単、彼らがその世界に無い技術を持っているからである。

次に、こちらが能力について詳しく知らない代わりに、転生者は自分の能力やこちら側の能力まで把握している。

持っている情報に差があるため、対策が立て難いというのが一番大きい。

さらに、転生者の持つ能力は様々だが、基本反則的なものが半数以上だ。

単純な情報と、火力の差。

これが、原作キャラが転生者に勝てない所以。

「ダメ、かな？」

だから、なのはは少しでも力を得たかった。
自身が俗に言う原作キャラだというのなら、おそらくこれから得る能力も把握されているはず。
ならば、それ以外の力を以ってして対抗するしかない。
それ以上に、空也がペルソナに目覚めた切欠は、『死を受け入れたから』だというが。
それ以外にも理由がある気がしていた。

「……………いや、いつかは話さなきゃいけないことだ」

そんななのはの意思を汲み取れたのは、幼馴染ゆえか。
空也は、ぽつり、ぽつり、と語りだす。

「俺が目覚めた切欠は……………お前だ」

「……………ふえ？」

ぽけつとするのは。

空也はそれを微笑ましそうにくすつと笑ってから、続けた。

「……………俺とお前が、一時期仲違いすることがあっただろ？
その切欠になった、あれだ」

「……………あつ」

思い出すのは、一年前。

自身が不良に攻撃されて気絶し、その合間に空也が誤解を受けた、あの騒動。

まさか、あれが切欠だったとは……………。

「さすがにお前を守りながらは辛くてな、撤退も、攻撃も出来ない

ような状況だった……だから、つい願ったんだよね、『力が欲しい』って」

「そしたら」と、空也は手にカードを出現させる。なのはのものとは違い、イザナギの姿が描かれていた。

「けど、覚醒したてじゃ意思疎通出来ない上に、コントロールも不可能だからな、でも勢いに任せて、あいつらに重傷を負わせてしまった」

脳裏に蘇る、あの時の映像。

初めて力を手にした時のことだ、忘れたくても、忘れられなかった。

「……あの、まさか」

「いや、運がいいことに死者は出てない」

不安がはずれて、ほっとするなのは。

「けど、さすがにあれはやりすぎた……そんなこんなで、俺は自業自得で誤解され、嫌われ者になりましたとさ」

「……」

だがすぐに表情を暗くして、俯いた。

空也はまた苦笑いしてから、なのはの頭を撫でる。

するとなのはは、少し安心したように笑って、

「……昔からそうだよな、空也って」

「うん？」

「よくわたしの頭を撫でる」

「む、そうか？」

「そつだよ」

すくすくと笑いながら、笑顔をみせて、

「自分だって子どもなのに、『いいこ〜いいこ〜』ってね」
「・・・・・・そうか」

空也はどこか照れくさそうに、うなじをかいた。
なのはまた笑顔を浮かべて、

「また、一緒に遊ぼうね」
「・・・・・・もちろん」

自然と二人の手が重なり、握り合う。

その姿は、長年連れ添った夫婦のようで。
二人はただ、互いを見て笑いあっていた。

甲高い音の後、爆発音。

夏祭り最後の花火が始まったようだ。

単調な色合いの夜空を、鮮やかに染めながら、一瞬で散っていく。
まるで人間の人生を表しているようで。

見つめていたなのは顔が、不安で翳った。

そして以前にも増して、失くすことを怖がっている自分に気づく。

無意識のうちに、握っている手に力を込めて、離れないようにした。
無駄なことだというのは分かっているが、それでもしなければ安心
できないのだ。

そんなのには対し、空也は黙って手を握り返す。

不安を隠すためとはいえ、強く握った手は、若干痛かった。

第十四話花火（後書き）

浴衣っていいですよね、自分着ませんけど。
それではお返事の部屋。

緑異様

毎度ご感想ありがとうございます。

この小説では、ペルソナとは感覚は共有していませんが、情報なら共有しています。

例えば、足の小指を角にぶつけた時、本人は痛がったのた打ち回りますが、ペルソナは、『ああ、足の小指をぶつけて痛がってるな』
ってくらいです。

それと、自分ハーレムものは苦手って言うか、何ていうか……

この人一筋！ってというのが好物ですので、空也はキタローや番長みたいにならないのは確かです。

今回は夏休みも終わって、二学期に入ります、が。

ここでちよつとみなさんに質問、『体育祭はやるべき？それともスルーすべき？』

お返事待ってます。

第十五話土曜日（前書き）

今回、急・展・開つ。

第十五話土曜日

「うがーっ！何で二学期早々テストかなあ！？」
「学力を保つためじゃない？」

アックスポリルーム、いつものテーブル。

先日二学期を迎えた八人は、そろってテスト勉強に所為を出していた。

なのはに理数系を習っていた騎子は頭を抱え込み、一緒に習っていた由香は苦笑いする。

その様子を見て、なのはは黙って微笑むだけで。
平和なひと時をすごしていた。

「なあ、あれ……………」

ふと、そんな声が聞こえて、何となく視線をずらしてみる。

「……………」

思わず目をそむけてしまった。

そこに居たのは、かつて自分が通っていた学校の制服。

男子のものとはいえ、忘れられないものだ。

「高町だよな、それに向かい合ってるの、道村じゃねえか」

向けられている視線が、段々鋭くなって突き刺さる。

何とか平常を保とうと必死になるが、手が少し震えている。

（何で……………どうしてここに、聖祥の人間がいるの……………

・・・!?)

必死に無視を決め込むものの、聞こえてくるものは聞こえてしまう。

「あんなに美人なのに、もったいないよなー」

「ああ、まさか友達裏切るとか、ないわー」

何にも知らないくせに、と思う反面、半端無い罪悪感で、頭がぐちゃぐちゃになってくる。

混沌としたそれが、怖くなって、震えが止まらなくなって、

「・・・・・・・・・・っ」

喉に異物が詰まる感覚。

呼吸が苦しくなってくる。

かすれるような、蚊の鳴くよりも小さい声で、呟いた。

「ごめんなさい。」

「っーか何で月白に・・・・・・・・・・っ!」

どっと、風が吹き抜ける。

陰口を叩いていた聖祥の男子は黙り込んで、手や額にびっしょりと汗をかいた。

気がつくのと、今まで勉強を教えあっていたはずの一同が黙り込んで、なのは達のいる一角だけ、静まり返る。

何があったのかと、みんなを見渡していると、空気が重苦しく感じた。

そこで、なのはは気がつく。

(みんな、殺気を出している?)

刃のような鋭いそれを、的確に聖祥の男子に打ち込んで、集中するためにペンを止め、ただ黙り込む。

そうやって、どれくらいの時間が経ったのだろうか?

我に返った男子生徒は、そそくさとその場を逃げていった。音が無くなっていった世界に、喧騒が戻ってくる。

「大丈夫?なのはちゃん」

刀子が、なのはの顔を覗き込む。

束の間呆けていたなのはは、すぐに再起動。

笑顔をつくろい、精一杯笑った。

「大丈夫!ごめん、何か変な顔してた?」

「変なっていうか、顔色が悪い」

槍馬が指摘して、全員が頷いた。

「もう帰りなよ、あとは弓成あたりにも聞くから!」

「そうだよ、体壊したら元も子もないよ!」

騎子や由香もなのはを気遣い、帰るように促す。

「え、でも……」

「俺もここで帰る、なのはを送るから」

「ちよっと、空也……!」

空也が徐に立ち上がり、荷物をまとめ始めた。
なのはは、まるで帰ることが決定事項のような扱いに、異を唱えよ
うとするが、

「帰るよね?」

「うん、帰るよ!」

刀子に一睨みされ、荷物をまとめ始めた。

向けられたのは笑顔だが、何故か異様な圧力を秘めていて、とても
逆らえそうになかったからだ。

刀子は満足そうに頷く。

「ちゃんと守ってやんなよ?」

「分かってる」

幽斗は少しからかうような口ぶりで空也に軽口を叩き、空也もそれ
に答える。

「それじゃー、お大事にね!なのはちゃん」

「うん、ごめんね」

苦笑いしてみんなに手を振ってから、空也と共にアックスボリユー
ムを出た。

side なのは

「大丈夫か？」

帰り道。

二人で歩いていると、空也が振り返って、話しかけてきた。さっきのことを心配してくれてるみたいで、珍しく顔が暗い。

「大丈夫！ごめんね、ありがとう」

もちろん嘘だ。

心配させたくないし、襲撃者のこともあるから、これ以上負担はかけたくないし……。

だから精一杯作り笑いして、ごまかした。

「……無理はするなよ」

けど、空也は分かっちゃったみたい。

けど何も言わずにいてくれた。

……むしろ心配させてる気がするけど、迷惑はかけちゃだめだから。

「そだ、土曜日あいてる？」

もう一度無理やり笑顔を作って、予定を聞いてみた。

「？あいてるが？」

「よかった、じゃあちよっと付き合ってもらえないかな？」

「何に？」と聞いてきた空也に、父の日の贈り物を探しに行くことを伝える。
参考意見をくれたらっていう事を話すと、二つ返事でOKをくれた。笑いかけてから、また明日！と言うと、空也も笑い返して、手を振ってくれる。

少しずつ、前の関係に戻れている感じがして、とても嬉しかった。

side 空也

課題テスト最終日。

現在地理のテスト中だ。

あれほど授業で出るといわれた部分が出てきていないことに、いくらかの憤りを感じながらペンを進ませる。

問2 - (4)

世界で一番深い海溝はどこか、また、世界一高い山エベレストと比べると、どちらが大きいか、記号で答えよ。

一番深い海溝はマリアナ海溝で、エベレストと比べると、海溝の方が深かったはず。

さらさらと、対応する記号を選んだ。

.....これはあっている気がする！

問3 - (2)

この図の中にある地形の特徴は何か？名前を答えよ。

これは一発だな、扇状地だ。

問5 - (1)

この地図の中には、何種類の地図記号が入っているか、答えよ。

これから探すのか！？結構な作業ものになるぞ……………。
……………なんとか記号を数えて、解答欄に書き込んだ。
取りこぼしがないか不安だ……………。

sideなのは

今回のテストも無事終了。

やっぱり文系が不安だけど、それなりに頑張ったので自信はある。

「えーっと、じゃあ次、理科の問3の『深成岩の成り立ちはどのよ
うなものか』って問題」

「『地表から深いところで、長い年月を掛けて冷え固まる』……………
……………でよかったですと思う」

刀子ちゃんと答えあわせをしながら、苦い表情したり、笑ったり。

ちなみに火山岩はその逆、地上に出たマグマが急激に冷えて固まることにより出来た岩石……のはず。
……あれ、そういえば、

「空也達は？」

「弓成くんは生徒会のお仕事、幽斗くんは受け損ねたテストを受けにいつて、空也くんは買出しがあるとかで、もう帰ったよ」
「そっか」

そう言えば幽斗くん、今日は遅刻してきたね。

「っていうか、刀子ちゃん生徒会は？」

「わたしの分はもう終わらせちゃったし、それに、今日のは会長しかサインできないものばかりだから」
「なるほど」

生徒会って、結構大変なんだな……。

「で、答え合わせはこれでおしまい？」

「うん、あー、国語の結果が怖いよ……」

「あははっ、何というか、頑張っつて!」

弱音を吐くと、刀子ちゃんが笑って。

ぐっと、親指を突き出して、励ましてくれた。

今日のところは、ここで帰ることにする。

free side

そして、土曜日。

「……………む、そろそろか」

待ち合わせの時間になり、空也は準備を始める。

藍色のデニムの上に、黒のＴシャツを着て、さらにその上からグレ
ーのジャケットを羽織る。

最近いくらか肌寒くなってきたとはいえ、暑いことに変わりはない
ので、ジャケットの袖は捲り上げた。

ウエストバッグを腰につけて、珍しく姿見で確認してしまう。

がらにもないことをやっている自分に対して、思わず苦笑いがこぼ
れたが、どこもおかしいところは見えないと判断し、満足そうに頷
いた。

お年頃ってやつだな

イザナギが何か行っているが、あえて無視し、空也は玄関に向かう。
それから門の前に出て、辺りを見渡す。

どうやらなのははまだ準備中らしく、大人しく待つことにした。

「さー殺ってみようかー!?」
「字が違う!」

あたしと槍馬は今、ミゼばあの計らいで、訓練スペースを使わせてもらっている。

もちろん、銘柄は三提督のプライベートスペースとなっているから、ミゼばあ達以外に誰かが入ってくることはまずない。

つまり、思いつきり暴れられるってこと!

テストも終わったし、久しぶりに体も動かしたいしね!

.....別に、テストのできが今一だったからって、槍馬に八つ当たりするんじゃないよ? 本当だよ?

何言ってるんだい.....ほら、始まるよ!

「おうよ!」

「はぁ.....いこう、クーフリーン」

ひゃはぁ! 腕がなるぜえ!!

あたしはトンファーで、槍馬は拳銃で。

相棒が納まっているカードを破壊して、叫ぶ。

「いっくよー! ケンタウルス!!」

おらおらおらおらぁー!! ぶっちぎりで行くよ!!

「来い! クーフリーン!」

心臓.....は取れねえけど、ぶっ飛ばしてやんよ!!

あたしの傍には、上半身が人、下半身が馬の格好をしたペルソナ

ケンタウルス』が。

槍馬の傍には、青いタイトの上に、白い装甲を纏って、禍々しい紅い槍を持っているペルソナ『クーフリーン』が現れた。

「時間制限なし！」

「待ったもなし！」

どちらかが力尽きるまでの、一本勝負！

「いざ……………」

「尋常に……………」

思いつきり地面を蹴り飛ばして、接近。

「「始めっ！！」」

「ケンタウルス、タルカジャ！」

「クーフリーン、スクカジャ！」

あたしは攻撃力、槍馬は神経を研ぎ澄ませて、打ち合いを始める。
……………さすが槍馬、銃身を巧みに使って、あたしの攻撃を
防いでいる。

けど、所詮遠距離用の武器！

正真正銘の近接武器には、ちよいと劣るね！

「そらっっ！」

「……………」

うまく拳銃を跳ね上げて、片手をがら空きに。
そこへ容赦なく、

「ブフーラ!!」

氷を叩き込む!

「っクーフリーン!」

ただで済むかよおっ!!

むむっ、ガルをうまく利用して、防いだね?

「次はこっちだ!」

銃口をこっちに向けて、乱れ撃ち!

一応練習の時はゴム弾にしてるわけだけでも、やっぱり痛い物があるよ。

というわけで、何とか避けて槍馬を捕らえる。

「まだまだ!疾風ハイブースタ発動!」

うっげ、火力上げてきたあっ!?

こりゃあ.....。

来るよ!

「分かってる!」

「マハガルダイアンツ!!」

咄嗟に防御。

左袖が持っていかれたけど、幸い身体的ダメージは無し。
まだまだ!!

「お返し!ケンタウルス!」

おうよおっ！氷雪ハイブースタ！

ケンタウルスが構えた盾に、冷気が集まる。

「マハブフダイン！！」

そしてそれを一気に解放。

けど、向こうもうまく防いだみたいね。

さーて、オープニングアタックはここまでかなー？
それじゃあ、

「本気、出しちゃう？」

「当たり前」

笑いあつて、突っ込んでいく。

side 空也

門の前で待つこと数分。

なのはが出て来た。

いつもサイドアップにしている髪は下ろして、首の辺りで一括り。
大人っぽさが際立っているが、桜色のスカートをはいているお陰か、

いくらか印象が幼くなっていた。

目が合うと、なのはは照れくさそうに笑い、つられて俺も笑う。

「行こうか？」

「うん」

とりあえず、街に繰り出すことにする。

「ところで、何を贈るつもりなんだ？」

「ん、うちは喫茶店だし、とりあえず仕事中でも邪魔にならなそうな、アクセサリーとか」

「無難だな」

「にははは……」

駅前商店街にあった、アクセサリーショップに入り、色々と物色中である。

「こういつのときは、どうかな？」

「あえてこんなものという選択肢もあるぞ？」

「あー、でも、お菓子作ってるときとか、ボウルの中に入っちゃいそう」

「ふむう……」

「ね、これは？」

「ああ、いいけど……俺としては、もう少し小さいサイズがいいと思う」

「そっか、どこだろうっ？」

閑話休題。

「ありがとうございましたー」

結局、なのはが購入したのは一組のブレスレットだった。

その気になれば、桃子さんと二分できるし、作業の邪魔にもならないしな。

さて、それよりもだ。

思ったより早く目的を達成してしまった。

若干日が傾いてきているとはいえ、帰るには早すぎる。

折角だからもう少し外にいたいところ。

「これからどうする？」

「んー……………」一旦家に帰って、これを置いてから、また別

のところにかかない？折角だし、遊ぼうよ」「

普段に比べて、無邪気に笑うのは。

提案を断る気はなかったので、素直に従うことにする。

一緒についていこうかと思っただが、ここで待っていてくれと言われた。

一人で大丈夫だと告げて、返事も待たずに去っていく。

……他にやることも無いので、大人しく待つことにした。

side なのは

手早く部屋に小包をおいて、急いで空也のところに戻る。

二人で出かけるなんて、何年ぶりだろう？

そう考え出すと嬉しくて、思わず走り出した。

しばらく進んで、やっと空也が見えてきて、

「くう………っ！」

突然右手を掴まれて、振り向いた。

そして、そこにいた子に、背筋が凍る。

「待てよ」

ヴィータちゃんは、ものすごい顔で、わたしを睨んでいた。

第十五話土曜日（後書き）

日常辺は一時中断。

次回より、展開が激しくなっていく予定……………。

第十六話影、再び（前書き）

しばらくかなり長くなるかも……。

第十六話影、再び

「っは……っは……っは……っは……っは……」

何とか手を振り払った後、人ごみを掻き分けながら逃げる。何度か人にぶつかってしまっただけど、謝ってる暇はない。後ろを向く、ヴィータちゃんが追いかけてきている。

「……っ!!」

何とか人気の無いところに行つて、隠れようとする。けど、その選択は間違っていたことを、後で深く後悔することを知らないで……。

必死になつて、ヴィータちゃんから逃れる術を考える。

空也も待たせているから、なるべく早く撒きたい……!!
我武者羅に、走って走って、走って。

気がつくと、臨海公園に逃げ込んでいた。

side 空也

「……遅い」

あれからなのはを待っているわけだが、一向に待っても戻ってこない。

もう大部日も傾いて、現在夕方。
そろそろ帰らないと。。。。。

。。。。？

(何か言ったか？イザナギ)

いや、私は何も。。。。

(何だって？)

じゃあ誰が。。。。？

。。。。これは。

「呼んでいる？」

嫌な予感が。。。。。

どうしても気になってしまったので、声が聞こえた方向に走り出す。

みんながみんな、怒っているとか、そんな生易しい言葉じゃ足りない
いくらいの怖い顔をしていた。

思わず後ずさり、だけどそのうち柵にぶつかって、それ以上動けな
くなる。

・・・・・・・・・・・・・・・・怖い、みんな怖い・・・・・・・・！！

みんなどうしちゃったの？何でそんな顔をするの？

「ずっとあこがれていたのに、期待していたのに、あっさり裏切り
やがって」

「そんな子は、いらないよね？」

「ち、ちが・・・・・・・・」

「違うんでしょ？だって、わたし達をつけたのは、単なるわがま
までしょ？」

怖くなる、何をすればいいのか、分からなくなる。

頭の中がぐちゃぐちゃになって、どうすればいいのか混乱しちゃう。
・・・・・・・・・・・・・・・・みんなを傷つけない、けど、逃げら
れない。

いい方法が浮かばない・・・・・・・・！！
その時だった。

許せない

体に異物を打ち込まれた気がして、硬直する。

こいつら、さっきから何よ、この子がどんな思いをしてきたか知らないくせに

ただでさえ走りまわって上がっている息が、さら苦しくなる。

もう我慢の限界、でも今のわたしじゃこの子の力にはなれない

どうしよう、何とかしてこの子を抑えなきゃ、大変なことになる気がする……。。。

一体どうすれば・・・・・・・・・・そうか

くすくすと笑う声が、耳元で聞こえる。

それから、意識がごっさり持って行かれる感覚。

これは・・・・・・・・だめだ、やめて！

「諦めたか？遺言は無いのか？」

レヴァンティンを片手に、近寄ってくるシグナムさん。

だめ、近寄っちゃだめ、危ないよ！！

つぐう・・・・・・・・！

だめだ、みんなが危ない、殺され・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・！

「・・・・・・・・つ」

「・・・・・・・・何だ？」

意識が・・・・・・・・も・・・・・・・・だ・・・・・・・・。

・・・・・・・・

・・・・・・・・

.....

「.....逃げて」

搾り出せたのは、その言葉だけで。
意識が、完全に途切れた。

f r e e s i d e

レヴァンティンを振りかざし、なのはを斬ろうとするシグナム。
周囲の人間は、笑っていた。

そつだ、裏切り者は消えればいい

管理局に害成すものは、死を

管理局の法こそ、全て

ゆがんだ笑顔で、結末を見守る。

……はずだった。

「……………くはっ!？」

何が起こったのか、はやて達も、シグナム本人も、理解できなかった。

シグナムは力が抜けた手からレヴァンティンを落とす、腹を見る。突き刺さる刃、噴き出す鮮血。

「……………」

そしてそこには、金色の瞳の、『なのは』がいた。

一気に同様が広がり、臨戦態勢に入る一同。

『なのは』は雑刀になったレイジングハートを、シグナムが刺さったまま振り回し、ついでに地面に叩きつける。

足元に衝撃波が広がって、シグナムはびっくりとも動かなくなった。全員、一緒に驚愕の表情を浮かべる。

だが続いてあらわにした感情は、怒りだった。

「てめええええええええ　　っ!?!」

ヴィータの雄たけびを合図に、全員が飛び掛る。

一方『なのは』は動揺する様子を見せず。ただ、シンプルに一閃。

「っわあああああ!?!」

「きゃああああっ!?!？」

それだけの攻撃で、全てを薙ぎ払った。

地面に強く打ち付けられ、動きが鈍くなる。

『なのは』は、薙刀についているシグナムの血を振り払って、構えた。

嗚呼、慈悲にあふれた貴女

裏切った相手にすら、『逃げて』の一言を言うなんて

やっぱり優しい子ね

だからこそ、今は眠ってちょうだい

大丈夫、貴女が眠っている間に全て無かったことにしてあげる

何もかも、夢だっことを教えてあげる

わたしは貴女、貴女はわたし

故に、わたしは貴女の為に動くわ

side 空也

くそっ、まるで歯が立たん！

あれから臨海公園にたどり着き、結界が張られていることを確認。弓成達にも連絡して、いざ進入しようとした途端、結界の気配というか、雰囲気が変わった。

警戒しつつも進入を試みるが、いつまで経っても穴は開かなかった。

「ミツチー！」

「空也！」

後ろから、みんながやってきて。

さっそく弓成がアナライズを発動、結界の解析を始めた。

「入れないの？」

「ああ、さっきから進入を試みているが、まるでだめだ」

苦い顔で、結界を睨みつける。

「……………先ほどからのとは連絡が取れない。」

まさかとは思うが、この中にいないといいけど……………。

「何が起こってるんだ？ばあさんもこここの異常に気づいてさ、さっき転生者の可能性もあるから、調べてきてくれって言われてきたんだ！」

やはりばあさんも気づいていたか。

弓成ばかりに解析を任せるのも何なので、結界周辺を搜索することにした。

ほら、結界の要が札や人形などの物理的なものだったら、俺達でも

何とかできるからな。

少年、探索中……。

「（こちらアーチャー、結界のほころびを見つけたので、至急集合
お願いします）」

結局それらしきものは見つからず。

弓成から、結界のほころびが見つかったと連絡を受けた。

「（こちらジョーカー、了解）」

「（ライダーも了解だよ!）」

「（セイバー、ただちに向かいます）」

ちなみに俺達は、通信ではなるべくコードネームで名乗るようになっている。

上記の場合、ジョーカーは俺、ライダーは騎子、セイバーは刀子で、
アーチャーは弓成となる。

事態の収拾は早い方がいい。

急いでみんなと合流することにした。

「すまん、俺が最後か？」

「大丈夫、それより突入するよ！」

「了解！」

周囲と違い、少しだけ色合いが変わっている部分。

おそらくこれが結界のほころびなんだろう。

俺達は腕に『収めていた』各々の武器を取り出す。

「それじゃあ……………」

自然と、刀を握る手に力が籠る。

なのはが巻き込まれていないことを、巻き込まれていたとしても、間に合うことを祈りながら、

「ゴ—！！！」

みんなと一緒に突っ込んで行った。

free side

「フェイト、おいフェイト!!」

ハラオウン邸。

先ほどから音信不通となったフェイトに何度も声をかけるのは、彼女の義兄クロノ。

数えるのも億劫になるくらいに、声を張り上げている。

「つくそ!どうなっているんだ!?!」

「分からない!予めヴィータちゃん辺りが張っていた結界に、術式が上書きされた感じ…….みたいだけど!」

クロノの隣、エイミイが機器を駆使して、何とか状況を探ろうとしていた。

「補足できるのは魔力反応だけ、とりあえず一つも減っていないから、みんな無事って言うことになるんだろうけど…….つどういうこと!?!」

「今度は何だ!?!」

エイミイの叫び声に、クロノが飛んでくる。

彼女は若干震えながら、

「…….なのはちゃんを除いた、全員の反応が
つ…….」

指差された画面を見る。

確かに、なのはを除いた全てのリンカーコアの反応が、弱まっていた。

s i d e ? ? ?

エモノに突いた血を振り払って、見渡す。

目の前には、虫の息となつてゐる裏切り者達。

中には未だにこちらを睨んでいる者もいるが、あの傷ではもう動けないだろう。

嬉しくなつて、口角が釣り上がる。

あの日、戸惑いつつも受け入れてくれたなのは、それを最低な言葉で切り捨てた裏切り者。

忘れない、忘れるはずがない、忘れるわけがない。

次は誰を××そうか？いや、さきにこいつらに止めを刺そう、そうしよう。

集中して、魔力を込める。

シャドウとして現れた影響なのか、出てくるオーラは赤黒いけど。

まあいいや、気にすることはないでしょう、どうせ全部壊すんだし。

「……………マハラギダイン」

指を鳴らして、全部焼こうとしたとき。

「いくよ！槍馬！ケンタウルス、マハブフダイン！」

「分かってる！クーフリーン、マハガルダイン！」

ペルソナを召還した、見覚えのある双子が立ちはだかつて、

デュアルアビリティ！絶対零度・零！！

炎すら凍てつく冷気が、辺りを嘗め回した。

side 槍馬

何とか間に合った……………。

目の前にはなのはであってなのはでは無い者。

おそらく、自らのペルソナに体に乗っ取られたんだろうね。

じゃなきゃ、ぼろぼろになった相手に追い討ち掛けるようなことしないし。

負傷している人たちに関しては、弓成と刀子が治療に当たっている。さっきの攻撃から推測して、どうやらこいつらを殺そうとしていたみたいだしさ。

……………俺としては、なのはを切り捨てた奴らが死んだって、別になんとも思わない。

けど、見捨てるのは寝覚めが悪いからね。

悪いけど、治療が完了するまで、

「ここは通さないよ」

「大丈夫よ、無理にでも通るから」

それと、これもさつき確認したことなんだけど、おそらく夕子の悪い方向に暴走しているんじゃないかな？
スキル使っていたときも、俺らが使うような青いオーラじゃなくて、赤黒いものだったし。
だとしたら、

「早く沈静しないとやばいかもしれない、おそらく……」

「(なのはちゃんごと暴走してるって?)」

「(そう、それ、体にも相当な負担もかかっているはず、早く収めないと)」

なのはの命が、危険だ。

side 空也

遅かったか……いや、一応間に合いはしたものの、もしかしたら最悪な状況かもしれない。

あの時のシャドウと同じあの目、不平不満は撒き散らしていないみたいだが……暴走しているのは間違いなさそうだ。

つたく……まさかこの後の展開まで最悪とは言わないよな？
しかし、再びシャドウが暴走するなんて……一番傍にいたくせに、気づかないとは。
不甲斐ない。

「空也、くるよー!」

「……分かった」

珍しく、騎子が俺のことを『ミッチー』ではなく『空也』と呼んだ。
このときの騎子が、色々と真剣になっている証拠だ。

刀を握って、『なのは』を見据える。

狂気が籠った金色の瞳を静かに向けていた『なのは』は、一呼吸置いた後。

「……………っ！」

接近してきた。

free side

「マハジオツ！」

まずは牽制。

空也が手を払うと稲妻が走り、『なのは』の周囲を焦がしていく。

『なのは』はそれを避けていくと、空也に一閃。

細い腕から出たとは思えない、重い一撃が、空也の刀に押し掛かる。

「ケンタウルス！突撃！」

跳ね飛ばすっ！！

すかさず騎子がペルソナを召還し、『なのは』を空也から退かせる。

「コンセントレイト」

赤黒いオーラが『なのは』の腕に吸収される。
危険と判断した一同はバックステップ。

「マハガルダイン」

予想通り、強烈な突風が吹き荒れた。

一通りの治療を終えた弓成は、ロビンフッドを召還。
白黒の双剣を構えて、戦闘に参加する。

「ロビンフッド！」

ハマ！

真っ白な札が『なのは』の周囲を取り囲み、張り付く。

一瞬動きが止まったその際に、

「ベンケイ！」

「アルトリア！」

キララツシュ！

一閃っ！

刀子と由香が、一撃を加えた。

「やったか!？」

短剣を構え、様子を伺う幽斗。

だが弓成はロビンフッドを通じて相手を探り、叫ぶ。

「まだまだ！警戒を解くな！」

どつと、衝撃波。

その中心に、幾らか傷を負っている『なのは』の姿があった。

『なのは』は埃を払って、赤黒いオーラを出し、

「ディアラマ」

みるみる傷がふさがっていく。

さすがに衣服は修復できなかったらしいが、全快したのに変わりはないかった。

「嘘だろ、治療術も使うのかよ!!」

焦った様子でそう叫ぶ幽斗。

しかしすぐに平常心を取り戻して、空也に合図。

空也もそれを了承して、二人同時に突っ込む。

「はっ、だっ、ちえりゃあああつ!!」

「ふっ、はっ、せい!つらあ!!」

男二人分の怒涛の攻撃。

だが『なのは』はそれを涼しい顔で見切り、交わし、弾き返している。

「（予想以上のスペックじゃねえか!?つか、なのはって近接戦できたか!?!）」

「（いや、近接もできないことはないらしいが、どっちかって言う
と苦手だな）」

「ちなみに本人談だ」、と付け加えて、渾身の一撃を二人同時に放った。

『なのは』はそれをも、薙刀をシーソーのように上下させて弾き返す。

再び距離を取る空也と幽斗。

それぞれのペルソナを呼び出して、

「マハガルダイン！」

「マハジオダイン！」

デュアルアビリティ！タイフーン！

プラズマを纏った暴風が、『なのは』を飲み込んだ。距離を取って、風が晴れるまで待つことにする二人。しかし、

「プラズマランサー！」

「宿木の枝、銀月の槍と成りて、撃ち貫け！！！」

空也のものとは違うプラズマと、白い槍が暴風に降り注いだ。もちろんそれなりの威力があったため、暴風は打ち消される。

「だー！何やってんのさ！？」

「……治療とかしないで、放置した方がよかったかな？」

あからさまに怒りを露にする騎子と、静かに怒りを口にする刀子。他のメンバーも、口にこそしないものの、怪訝そうな顔をしていた。

「すみません、お手数をおかけしました」

「治療、感謝します」

どうやら真つ先に目覚めたらしい。
はやてとフェイトが、デバイスを構えて空から降りてくる。
弓成は眉間にしわを寄せて、

「だったら邪魔しないでもらえませんか？」

「それは失礼しました、ですが、管理局員として見過ごせません」

淡々とそう告げると、様子を伺うこともせず突っ込んでいく。

二人がかりで攻撃するフェイトとはやて。

だが長くは続かず、一閃で吹き飛ばされていた。

「マハンマ……」

「っだー！もう！猪かてめーらはああああ！？」

幽斗が絶叫しながら歩法を使い、はやてのフェイトの首根っこを引っつかんで回収。

入れ替わるように、槍馬と由香が『なのは』の元に向かい、斬り合いを始めた。

「な、何を……！！」

「邪魔す……」

「こつちの台詞じゃああああ！！」

ゴツつと、拳骨を脳天に食らい、フェイトとはやては痛さに頭を抱えて悶えた。

「馬鹿だろ！？エリートに見えて実は馬鹿だろ！？」

「っどういうことや！？」

「どうもこうもねえって！ちったあ頭使えよ！未知数の敵に考えな

しに突っ込むアホがどこにいるんだよ!？」

説教を始めた幽斗の後ろで、槍馬と由香のサポートに専念するメンバー。

頃合を見計らいながら、的確に強化スキルを入れていく。すると今度は、

「ラケーテンハンマー!」

「紫電一閃!」

「・・・・・・っ」

「ちよっ!？」

「またかあっ!？」

説教を中断し、叫ぶ幽斗。

次に復活したシグナムとヴィータは、ハンマーと剣による攻撃を開始。

もちろん槍馬と由香と、『なのは』の間に割り込んで、である。

さすがに歴戦の勇士、はやてやフェイトのように苦戦はしていないようだったが、

(こいつ、何でこんなに捌けてるんだ!?)

(おかしい、なのはは近接は苦手としていたはず)

そんな思考が割り込んでしまい、隙が出来る。

『なのは』はそれを見逃さず、今度は雑刀を地面に突き刺した。

「八十神の猛り!」

「があっ!？」

「ぐっ・・・・・・!」

予想以上のダメージに、二人は退かざるを得なかった。

side なのは

.....

.....

.....

.....

「.....つうん.....?」

意識がはつきりしてきて、目を開けてみる。

周りは暗くて、だけど何故かはつきり見えた。

目の前に、背中を向けている人。

その人はわたしに気づいたのか、ゆっくりとこっちを振り返って、

「っどうして……!?!?」

すごく驚いた顔をした。

けど、その人よりびっくりしたのは、多分わたし。

だって、顔が瓜二つだったから、けれど目だけは金色で、だからこそわかつちゃった。

「どうして、ここに?」わたし」

「……あなたのはダメージを受けた、だから今は『わたし』が変わって応戦しているの」

応戦って……!!

「まさか戦ってるの!? フェイトちゃん達と!?!」

「……ええ、そうよ、大丈夫心配しないで、裏切り者は必ず……!」

そう言って『わたし』は、にやっと笑った。

……!」

「そんなのダメ!今すぐやめて!」

「……何で?」

何でって……!!

「怪我したら大変だよ！お願いもうやめて！逃げようよ！そしたら
フェイトちゃん達も……」

「その優しさを向けた奴らは、何をした！？」

「っ……！！」

『わたし』の顔が、すごく怒っていた。

思わず体を跳ね上げて、一步後ずさってしまふ。

「寂しいから、独りは嫌だからって理由もあつたけど……」

本気で助かって欲しかったから、必死になつて声をかけたのに……

……！！」

……これは。

「友達だつて思ってた、この人達のためなら独りも我慢できるつて
思ってたのに……あいつらはっ……」

！！」

これも、わたしがためていた、本音？

この子がずつと、背負っていたの？

『わたし』は、目の前で泣き崩れた。

……でも、

「それでも、傷つけちゃいけないよ、あなたが『わたし』なら、分
かるでしょ？」

友達だつたなら、なおさらだよ。

裏切られても、わたしは、フェイトちゃん達を傷つけない。

……そう思うを込めて、そう伝えただ

けど………。

「……………ごめんなさい」

「え……………っ?」

突然鎖が現れて、わたしを拘束する。

「な、何を……………!」

「これだけは譲れない、いくら『わたし』を受け入れてくれたあなたでも、我慢できない」

『わたし』はわたしに近づいて、じっと目を見つめられた。

「大丈夫、体の主導権があなたに戻る頃には、全部終わっているから」

そう言った『わたし』の笑顔は、酷く怖くて……………。

『わたし』がまた背中を向けたとき、外の景色が見える。

『わたし』の攻撃を何とか防ぎながら、攻めあぐねている空也達が見えた。

「……………つち！」

さつきから テスタロツサ達が復活してから ただでさえ通らない攻撃が、通らなくなってきた。

さすがにそのことを俺達の所為だというほど墮ちていないらしいが、正直、邪魔だ。

まあ、他はともかく、俺はしょっちゅう敵意向けられてたから、邪魔されて当然かもしれないが……………。

ぶつちやけ、度が過ぎているぞ？ さつき幽斗に説教されたことは生かしていないのか？

『なのは』が俺に飛び掛ってきて、薙刀を振り下ろす。

それを避けた俺は、刀を逆手に持って、一閃。利き腕に傷を負わせることに成功した。

……………このやつとのことですつけた傷も、

「ディア」

すぐに消されるんだけどな。

side なのは

『わたし』は、わたしに外の映像が見えていることに気づいていないらしい。

ただじつとこっちに背中を向けて、微動だにしない。

っぐあっ!!

「……………っ!!」

い、今……………今、空也が……………!!

空也だけじゃない、刀子ちゃんも、幽斗くんも、弓成くんも、槍馬も、騎子も。

フェイトちゃんも、はやてちゃんも、シグナムさんも、ヴィータちゃんも。

みんながみんな、目も当てられないくらいぼろぼろでっ……………!!

「メギドラオン!」

っ!?

もう言葉にすらならない悲鳴が、耳元で聞こえた。

同時に視界が真っ白になって……………。

色が戻ってきたとき、見たのは、

「……………あ……………ああ……………っ!

!」

どうしよう、どうしようどうしようどうしよう!?

みんなが危ない!わたしの所為で、死にそうにっ……………!!

誰か、シヤマルさん、アルフさん、ザフィーラさんでもいい!!誰

かここにきて!わたしはどうなってもいいから、みんなを……………

…みんなを助けて!

……………神様、神様お願い!もうわたしはどうでもいいの!だ

から、だから……！

「……あ」

でも、どうすれば、どうすれば、みんなを……！

……。

原因がいなくなれば、みんなが助かるんだよね？

わたしが……。

足元に落ちていたそれを見つけて、決心した。

怖いけど、もうこうするしか……。

side 空也

ぼろぼろになり、うずくまっている俺達。

『なのは』はこちらを満足そつに見下ろして、止めを刺そうとした。

その時だった。

「……つぐ……な、何を……」

腕の動きがぴたりと止まり、続けて『なのは』の動きが鈍る。一同が不思議そうに見つめる中、『なのは』は自身の左手を押さえ

た。が、左手はまるで自立した意思があるように、体を動かして、地面に転がっていたあるものを拾い上げた。

「な、なのは？何をやる気？」

震える声で、そうこの場にいない者に問う『なのは』。

すると、『なのは』は突然左目を抑えた。

苦しそうに呻いて、うずくまった後、ゆっくりと顔を上げる。

両目ともに金色だった瞳は、左目だけが、彼女本来の瞳の色だった。

「……………なのはか？」

俺は我に返って、『なのは』、否、なのはに話しかける。

なのはは黙って笑い、テストアロツサ達の方を見た。

「……………ごめんね、痛い目にあわせて……………でも、もう大丈夫だよ！」

明るく笑っているはずなのに、陰りが指している。

……………何故だ？何故あいつが拾い上げた物に目が行く！？

「わたしが何とかするから、逃げて」

優しく微笑んで、拾い上げた物を、折れたレヴァンティンの切っ先を、自身の胸に向けた。

……………って、

「おい！何してる！？」

「……ごめんね、でも、これ以上生きてたら、みんなに迷惑掛けちゃう」

「迷惑くらい掛けてもいいよ！だからそれだけはダメー！」

必死になって思いとどまるように説得を続ける。

テストロッサ達は、ただ呆然としてなのは見つめていた。

「ありがとう、でも、やっぱりダメだ」

「なのは……！」

「だって、攻撃方法は遠距離だけ、仮にもSランクなのに、転生者相手に何も出来ない、友達だって、幻滅させちゃった……今だってそうだよ、みんなを傷つけて……！」

今までこらえていたらしい。

なのはの目から、涙がぼろぼろ落ちている。

涙をぬぐわずに、なのははまた無理矢理笑って、

「もうこれ以上、どんな迷惑も掛けられない……だからこれ以上は、

side 『なのは』

やめて

何をする気なの？

ダメ、それだけは絶対ダメ……………！

独りが怖かったんじゃない！寂しいのは嫌だったじゃない！

だったら、やめてよ

こんな悲しいことって、無いでしょ？

お願い、やめて……………！！

なのっ……………！！？

side 空也

無音。

本当に無音だった。

風の音、みんなの呼吸の音、自身の鼓動さえ、聞こえない。

目の前のなのはは、何をした？

拾い上げたそれで、一体何をした………！？

なのはは、口元から紅い液体をたらしながら、ゆっくりと倒れる。

一呼吸おいて、全部の音が、戻ってきた。

………

………

………

………つ！！！？

「なのはあつー！！」

がらにもなく、大声を上げた。

おそらく、転生者だと自覚してからは、これが初めてだろう。
体の傷が再び開いたが、そんなことはどうだっていい。

なのはが……なのはが……！！

急いで駆け寄って、なのはを抱き上げる。

刃はご丁寧にも胸の中心を貫いていて、迂闊に触れば、大量出血でど

つちみちあの世行きだ……！！

つくそ！！

「何で、何でこんな！？」

弱々しくなる呼吸の下で、なのはは物悲しそうに、ただ笑うだけ。

その姿が、とても哀れで、もろくて……！！

「……………くー……………や」

……………蚊の鳴くような声。

最期の力を振り絞って、なのはが手を伸ばしてきた。

彼女の無駄に体力を消費させなくなかったので、急いでそれを掴み取る。

だいぶ出血している所為か、ぞっとするほど冷たかった。

「……………あ……………す……………」

ゴホっと、血を吐いて。

なのはの力が、抜けていった。

side ????

ばかだなあ、『鍵』がこの程度で死ぬわけ無いじゃん。
重要な楔、下手にいじれば世界を変える代物だよ？
そこまで柔なはず、ないよねえ？

ドクンッ

ほーら、ちゃんと聞こえたでしょ？
第二幕の、開園だ。

第十六話影、再び（後書き）

絶対零度・零と書いて、アブソリュート・ゼロとお読み下さい、食器野さらです。

今回の話は書きたかったシーンの一つでもあるので、筆がすらすら進みましたww

とりあえず、しばらくはシリアスというか、ぶっ飛んだ展開が続くと思われます。

誤字脱字あらば、ご感想へどうぞ。

それでは。

第十七話幾千の・・・(前書き)

十七話。

いけることろまでいきまっせー W W

第十七話幾千の……

どうして？

何でこうなったの？

わたしは、ただ……！！

ただ、助けたかっただけなのに

恩返しをしたかっただけなのに

………護りたかったのに

助けたかったのに………！！

side 空也

思わず、呆然としてしまった。

全身の力が抜けて、胸の中身がなくなった様な感覚を覚える。
誰に言われなくても分かる、自分がまさに看取ったのだから、嫌でも分かる。

ぐっったりとしている彼女は、死

「っ空也！まだ終わってない！！」

「……………っ!？」

背後で弓成が叫ぶと同時に、寒気。
本能的になのはをその場において、離れる。
次の瞬間、

「……………」

無言のまま、何事も無かったように、なのはが立ち上がった。
そして、突然赤黒いオーラが噴出す。

なのは いや、おそらくもう『なのは』だろう は肩をわなわなを振るわせ、顔を跳ね上げて空を仰ぎ、

「ああああああああああああああああああああアアアアアアアア

ア

ああ

アアア

あああ

アアアアア

っ!!!!!!」

どっと、土煙が、吹き荒れた。

free side

『それ』は、自ら土煙を振り払って現れた。

蛇のように長い身体、頭にあたる部分には、レイジングハートの待機状態を思わせる真つ赤な宝玉が据え置かれている。

そしてその上に、下半身を埋めるようにして、なのはが存在していた。

結び上げている髪の毛は解け、垂れ下がり、表情を見えなくしている。

が、彼女から感じる生気は、とてもとても弱々しいものだった。

一同は思わず身構え立ち上がり、個々の武器を構える。

皆が皆、『それ』を目にしたときに、思ってしまった。

（わだかまりとか、そんなものを気にしていたら、殺られる……
……！）

全員が警戒をむき出しにする中、なのはに動きがあった。

だがそれは自分で動いているというより、動かされているという感じのもの。

ミシミシっと、気味の悪い音の後、『本体』が現れる。

「っ！！」

まるで産声を上げるがごとく、なのはの背中を『突き破って』その姿を現した。

肋骨を思わせる胴体、顔はツルハシのように細長く、下半身は背骨のようになっている。

『本体』はぶるぶるぶるっと震えた後、なのはを抱きしめるように身体を抱え込んだ。

「 我は影、真なる我」

次に、両手を広げて、空也達を指差した。

「コワス！コロス！ナノハキズツケルヤツ！ゼンブケス！！」

金切り声を上げて、精神を集中させる。

「メギドラオン！！」

先手を奪い、真っ白な光を撃つ。

side フェイト

何が起こっているんだろう？

なのはが突然強くなって、わたし達を圧倒したと思ったら、いきなり自殺して、そしたら今度は暴走して、

「　　っ!!」

バケモノになっていた。

威圧感が半端無くて、本当に勝てるのかどうか、分からなくなる。けど、ほっといたら絶対に近隣に被害が出る。

何とかして、食い止めないと………!!

「アルトリア!」

ガルダイン!!

「刃持て紅に染めよ、穿て!」

「コメートフリーゲンツ!」

はやては真っ赤な短剣を、ヴィータは鉄球を。

そして鎧を纏った女の人は、見えない武器を振りかぶって風を起す。

けど、

「アアアアアッ!!」

なのはが同じくらい、いや、それ以上の風を起こして打ち消した。

勢いは凄まじくて、耐え切れなくなり、飛ばされる。

なんとか宙で体制を立て直してホバリング、バルディッシュに命じてカートリッジを装填。

「トライデントッ………!!」

目標は………あの『本体』!

「スマツシャアアアア

ッ!」

三叉槍の形をした砲撃が、一直線に『本体』に向かう。これで……………!

「ヤダ……………ヤダヤダヤダヤダヤダヤダ

ッ!

八十神の砦!」

ドンッと、爆発が起きて。

撃つたはずの砲撃が、わたしに向かつて、一直線に襲い掛かってきた。

何とか避けたけど、余波の所為で脇腹に傷を負う。痛みを感じる、でも、まだ負けられない……………!

「シネエツ!」

悪魔の審判!」

巨大な鎌が、二振り。

シグナムの背後を取って、襲い掛かってきた!!
ソニックムーブで……………!

「すまんテストロッサ!助かる!」

「構いません!今は……………!」
「分かった!」

シグナムと頷きあって、『本体』に斬りかかった。

「持ってけ！タルカジャ！」
「スクカジャ！」

短剣を持った男の子と、銃を持った男の子が強化魔法を行使して、能力を底上げてくれる。

途端に体が軽くなって、力も増した気がした。
これなら……いける！！

「ハーケンセイバー！」
「飛竜一閃！」

刃を飛ばして、連結刃で斬り付けて。
強力な一撃が入ったと、確信した瞬間。

ゾクッ

side 幽斗

「持ってけ！タルカジャ！」
「スクカジャ！」

あの二人が攻撃を仕掛けるらしいので、とりあえず強化スキルを掛けておく。

……言っとくけど、あくまでなのはためだからな？

今は協力した方がいいから、そうしてるだけだ。
「っ」かぶつちゃけ、もーこいつらとは共闘したくねえー！
自分ら中心に動いているし！まあ、色々と頭をいじくられてるって
んなら納得できるけど！？
もつとまじな思考回路は持ってないのかよ！？

「言いたいことは分かるけど、とりあえずここは我慢！」

由香が斧を構えたまま、そう叫んで。

このままむしゃくしゃしたままというのもなんだったから、深呼吸
をすることにする。
そんな時だった。

ゾクッ

「ッ！！？」

なんだ、今は………！！
なんっ！か、背筋をなぞられながら、ガラス同士をこすり合わせた
あの音を聞かされたような感覚に陥る。
そして次の瞬間、

「ッ！！？」

「っ」テストドロツサ！！

ポニーテールの剣士が、金髪で鎌を構えた女子を突き飛ばして、身
代わりになった。

side フェイト

体全体に衝撃が走って、地面に叩きつけられる。
何が起こったのかわからなかったけど、とにかく急いで戻ろうと顔を上げて、

「……………」

敵の真ん前、シグナムがわたしを突き飛ばしたらしい。
こっちに押し出す形で片手を伸ばしたまま。

幾千の呪言!!

もろに攻撃をくらった。

体をくの字にまげて、吹き飛んでいくシグナム。
わたしと同じように地面に叩きつけられて、

「っぐ……………おおおおおおおおおおおあ
ああああああああっ!!!!!!!!!!」

side シグナム

な、なんだこれは!?

頭の中で、直接響いて……………っ!

や、めろ

やめろ

やめろ

やめろ

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろ……………っ!

s i d e
容 せ

い
て

せ
め
っ

「弓成！シグナムは無事なのか！？」

「ああ、命に別状は無いけど……すぐ戦闘に復帰は出来ない」

何だ、今のは！？

何かの砲撃を撃つたと思ったら、シグナムが頭を抱えて気絶した。となると……。

「精神にダメージを与えるのか！？」

「だろうね」

「それ、限りなく厄介じゃん！！」

だが、何だ！？あの砲撃は！？

下手をしたら、彼女本来の切り札であるスターライトブレイカー以上に厄介かも知れんぞ。

というか、防御を上から打ち抜く砲撃を『何となく』で作り上げたことといい、シャドウを暴走させそれ以上の砲撃をぶっ放すとか……。

「冷静に考えたら、つくづくおっかないな！！」

side ヴィータ

敵の攻撃をもろにくらって、シグナムがやられた。

テストロツサはシグナムが庇ったお陰で無傷だけど、こっちの戦力が削られたのは痛い。

・・・・・・・・・・・・・・・・

何でだ？

何でなんだ？

「・・・・・・・・つ」

目の前の敵から、目を離せない・・・・・・・・！

「ッ！！」

あいつがまたあの攻撃の準備に入った。

狙いは明らかにこっち・・・・・・・・！

・・・・・・・・つ！

「やらせねえ！！」

「ヴィータ！！」

後ろの声は聞こえない。

・・・・・・・・こいつが。

こいつがシグナムを・・・・・・・・！！

「アイゼン！」

『Zerstorungsform!!』

もう許さねえ、手加減してやんねえ……………!
裏切った上に家族まで奪おうたあ……………!

「上等だ!!おらああああああつ!!」

推進器とドリルが付いた、リミットブレイクを振り上げる。

「ッ!!」

ヤツは鳴き声を上げた後、防御の体制に入った。
あたしのハンマーを受け止めようってか?
……………やれるもんなら!!

「やって見やがれ!!」

カートリッジを大量消費。

全身のバネを利用して、振り下ろした。

side 空也

ヴィータの渾身の一撃が、振り下ろされた。
さしものシャドウでも、これなら流石に……………。

なんて、さっきまで思っていたさ。

目の前のシャドウは、外見とは裏腹に、結構な怪力の持ち主らしい。それも、由香に引けをとらないくらいのもので、なのはだったものは何をやったかというところ。

「……………っ!?!」

ヴィータのハンマーを、いとも簡単に受け止めていた。

あれのどこから、あんな力が出てくるのだろうか？

下手したら、由香以上の謎になるかも知れない。

……………いかん、思考回路が妙な方向に向かってしまった。

目を閉じる、深呼吸して、現実を見ることにする。

「……………っ!?!」

ちょうど、ヴィータがああ砲撃をくらっている所だった。

防いでからのカウンター……………。

本当に厄介極まりない。

「がああああああああああっ!?!?!」

ヴィータは頭を抱え込み、地面をのた打ち回る。

束の間そうやって、ぱたっと、動きを止めてしまった。

side はやて

残った味方は、うちとフェイトちゃんだけ。

頼みのシグナムとウィータもやられて、絶望的な状況になる。

けど、ここは何とかせな………!!

ウィータの一撃は易々と受け止められてた。

だったら………!!

「これなら、どうや!?!」

動けるようになったらしいフェイトちゃんと一緒に空に飛んで、デバイスを振り上げる。

「響け!終焉の笛!!!」

「雷光一閃!プラズマザンバ ツ!!!」

夜天の書を開いて、魔力をチャージして。

照準を合わせる。

狙いはもちろん、あの『本体』つ!!!

「「ブレイカー!!!」」

白と金色の砲撃が、一直線に向かう。

………実は軌道上に空也達がおったんやけど。

まあ、大丈夫や

「つ!?!」

side フェイト

隣にいたはやてが、堕ちていく。

『本体』はさっきの砲撃で、多少のダメージは受けたらしいけど、わたし達の勝利は絶望的だった。

あの砲撃が直撃して、はやてが堕とされる。

これで、残ったのは、わたし一人

「……………」

『本体』が、わたしをじっと見ている。

空也達の攻撃をもともせず、ただじっと見つめている。

……………っ！！

「あ、アルカス・クルタス・エイギアス！」

どこまでも無機質なそれに、本能的な恐怖を覚えた。

杖を掲げて、詠唱を紡ぐ。

これだけ……………これだけの巨大な魔法なら！！

「サンダー……………！！」

バルディッシュを握る手に、自然と力が籠る。

「フオールツ!!」

そして、勢いのまま、振り下ろして

天使の審判!!

「なっ!?!わああああああっ!?!」

魔法を放つ寸前のところで、先手を打たれてしまった。
一組の鉄槌が、わたしを殴りつけて、地面に叩き落とす。

「あっ」

痛みを感じる余裕すら、与えてくれないらしい。
起き上がると同時に、あの砲撃が、直撃してしまった。

まるで荒れた海の中にいる気分だ。

呼吸がし辛く、耳元でぐうぐうと轟音が鳴り、うるさい。

痛い

寂しい

助けて

どろどろ

やめて

悲しい

憎い

怖い

感情が、なのはの感情が、直接頭に叩き込まれてくる……

……

……や、やめろ……

！頭が……割れる……！

！！！！

え

違う！わたしは悪くない！！なのはが悪いんだ！！
人の気持ちを踏みにじったなののが……………！！

いえ

だめだ、やめろ！！

痛い！！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い

にえて

わたしがわたしで無くなる！！

記憶が飛んでいく！！

やだ、やだ！！やめろ！！

た、助けっ……………！！

逃げて！！！！

突然音が、痛みが、止まった。

真っ赤になっていた視界に、一筋の光。

そこから手が伸ばされてくる。

助かりたい一身で、無我夢中で掴み取って、はっとなった。

また、なのはの感情が流れ込んでくる。

けど、さっきまでのものとは全くの別物だ。

ごめんなさい

ごめんなさい

幻滅させてごめんなさい

裏切ってごめんなさい

役立たずでごめんなさい

心が汚くてごめんなさい

迷惑をかけてごめんなさい

危ない目にあわせてごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

さっきまでとは違って、ただただ静かに、謝罪の言葉が聞こえてくる。

我に返って、握った手の、その先を見ると

黙って泣いている、なのはがいた。

今まで、自分を縛っていたものが、派手に壊されたような感覚。
そして、気がついてしまった。

あの時、わたしは何を言った？

あの時、わたしは何を考えていた？

あの時、わたしはどうした？

あの時、わたしは何をした？

あの時、わたしはなのはに・・・・・・・・っ！！

今さら、本当に今さらだった。

なのはが、わたしの手を引いて、黙ったまま抱きしめてくる。
また、流れてくる感情。

死なないで

傷つかないで

わたしはどうでもいいから

自分の心配をして

無茶しちやいやだ

殺すのはいやだ

戦うのは、いやだ………!!

………昔から、そうだったじゃないか。
なのはは、ただ真っ直ぐで、優しく、悲しいことは放っておけな
くて。

この手の魔法は、打ち抜く力

涙も、痛みも、運命も

そんななのはが………どうしてわたし達を裏切る？
それこそ、有り得ない話じゃないか。
………謝らなくちゃ。

とにかく、謝らないと………!!
許してもらえなくてもいい、罵倒されてもいい。

それ以上に、残酷なことを、わたしはっ……………！！

「……………っ」

意識が、現実に引き戻される。

離れたところで、空也達と戦うのは。

「アアアア　アア　アア　　ッ！…！」

今になって見ると、あの声が泣いているようにしか聞こえない。

「……………あ、の」

手を伸ばす、もちろん届かない。

でも、そうしなきゃいけない気がして……………。

「……………」

意識が遠のいていく。

伸ばした手が、ゆっくりと下ろされていく。

ブツンと音を立てて、わたしの記憶はそこで途切れた。

第十七話幾千の……（後書き）

今回は、魔導師のみなさん中心の視点だったため、空也達は空気に・
……。

一応戦つてますよ？必死に『ペルソナアーツ！』してるんですよ？
あと、さらに暴走した『なのは』について、勘のいい方は、何が元
になっているのか、分かるんじゃないでしょうか？
それでは、ご感想お待ちしています。

第十八話召喚（前書き）

かなり難産でした……。

さて、山場もクライマックスですよ。

7/13：誤字発見、修正。

第十八話召喚

「む？いかなな、テストロッサ以下数名のコントロールが解除されている」

「何？それでは……」

「ああ、アリサ・バニングスと月村すずかのも同時に解除されたな」

「はぁ………手間が省ける分、これだから連鎖型は………」

「なってしまったものはしょうがない、直ちに『掃除』に向かわせよう」

「そうだな、まずは現場の魔導師および転生者からだ、一般人はあとからでいいだろう」

「ちょ………これ………」

周囲には、全滅したテストロッサ達。

俺達はただ呆然と見ることに出来ない。

このままにしておく、戦闘に巻き込まれる可能性があるな。

「槍馬、幽斗」

「分かってる」

弓成も同じ考えだったようで。

槍馬と幽斗に合図すると、二人は負傷者を一箇所に集めた。

「刀子はまた治療を、騎子と由香は流れ弾からみんなを守って！残りは引き続き『なのは』の相手！！」

指示を飛ばして、再び戦闘が始まる。

女性陣が後方に下がり、俺達男性陣は武器を握って、『なのは』に突っ込んでいった。

「マハンマオンツ！！」

「スラツシュ！！」

デュアルアビリティ、偽・^{エクス}約束された^{カリバー}勝利の剣！

槍馬のクーフリーンが槍を大きく振ると、少しにごった星の光が『なのは』に直撃した。

「クルナアアアアアアッ！！」

淀んだ空気

が、『なのは』はそれすら受け止め、腕を振るう。
直後に痺気のようなものが辺り一帯に充満した。
視界が若干悪くなっている……これは警戒を強めた方が
いいな。

「アアアアアアッ!!」

ガルダイーン!!

「があっ!?!」

つづ………後ろか!?

「っジオ!!」

攻撃が来た方向に雷を飛ばすが、反応はない。

もう移動したか………!!

気がつくと、視界がさつきより悪くなっている。

これでは、どこに味方がいて、どこに敵がいるか分からないじゃないか………!!

「（全員迂闊に動かないように！視界が悪くなって、敵味方の区別
がつかない可能性がある!!）」

弓成からの通信に注意しながら、辺りを警戒する。

・
・
・
・
・
・
・
・
死んでない？

あ、
れ
・
・
・
・
・
・
・
・
？

s
i
d
e
な
の
は

意識がある？

どうして？だってわたしは……！！

「 ツ！！！！！！」

「 ……っ！！！！！！」

前の方で叫び声がして、反射的に顔を上げる。
頭が一気に目覚めて、ぼやけていた視界もクリアになった。
そして、その中央に、

「 ツ！！！！！！」

言葉にならない、言葉を吐き続けている。

『わたし』がいた。

肌は真っ青になっていて、体の所々が歪な形をとっている。
たったそれだけなのに、本能的に恐怖を感じるようなオーラという
か、気配を纏っていた。

これが、わたし、内側に秘めている、本当のわたし……。

『わたし』を見て嫌悪しそうになるわたしをさらに嫌悪して、立ち
上がる。

いつのまにか、わたしを縛っていた鎖は無くなっていった。

『わたし』に近づくほどに、言葉が聞こえてくる。

あの時ユーノを見殺しにしていれば

あの時お父さんが怪我しなかったら

お前らに何が分かる

わたしが恋なんて、おこがましい

いつそあの時に朽ち果てていれば

誰に吐いているのか分からない、呪いの言葉を吐き続けていた。
さつきから体がちくちくする。

多分、目の前の『わたし』の所為なんだ。
証拠に、さつきまで暗くて紅かったけど威厳があったこの空間は、
黒くて怖い空間に変わっていた。

嗚呼、醜い醜い、なんて醜いわたし

誰か殺してくれないか

裏切り、つくろい、押さえ込み続けてきたんだ、解放されたい

でも助けを求める権利は無い

ずっと、わたしが思っていたこと。

体がいくらか軽いのは、きっと感情の半分が『わたし』にいつているから。

………嗚呼、わたしは本当に大馬鹿野郎だ。

『わたし』にこんなに背負わせているなんて。

外では、空也達がぼろぼろになっっている。

映像はもう見えないけど、分かるんだ。

わたしに追い詰められて、フェイトちゃん達なんかもう全滅している。

独りぼっちが怖いのは確か、だけど

それで誰かが傷つくのなら、いつそ独りの方がみんなの為になる。

頭を抱え込んで、しゃがんでしまう。

もう誰でもいい、誰でもいいの。

わたしはいいから、誰か、『わたし』を助けて。

side 空也

「・・・・・・・・・・っ！」

瘴気の向こうから尾が迫ってきて、間一髪でそれをよける。

尾は地面に打ち付けられて、鞭のような音を立ててから、ずるずるとまた瘴気の向こうに消えていった。

そして少し離れたところから、誰かの悲鳴。

声の高さからしておそらく女性陣の誰かか・・・・・・・・・・。

思わず舌打ちし、なんとかこの状況を打破する方法はないかと思考を巡らせる。

「マハスクカジャ！」

その過程で生まれた結論として、味方全体に強化スキルを行使し、回避性能を上げることにした。

再び刀を構えて、周囲を警戒する。

そのとき、

「ッー！！！！！」

ドカン、と。

体当たりにはいささか派手すぎる音がして、俺は吹き飛ばされた。いつのまにか瘴気が薄くなっていて、目の前にはこちらに体当たりを当てたらしい『なのは』。地面をバウンドしながら転がってしまったが、何とか体制を立て直して、体のバネを利用し立ち上がる。刀を構えなおして、『なのは』に斬りかかった。

「タルカジャ！」

「ラクカジャ！」

仲間達が強化スキルを掛けてくれて、耐久力と腕力が上昇したのを感じる。

刀を振り上げて、『なのは』に突き立てる。

が、水晶部分は思ったより頑丈で、呆気なく弾き返されてしまう。

「ヤメロオオオオツ！！！」

「・・・・・・・・つく！」

衝撃波。

今度はうまくバランスを取れず、地面に叩きつけられた痛みで、思わず蹲ってしまい、動けない。

『なのは』がいる方向からは、生き物が這いずり回る音。つしまった・・・・・・・・！！

これはさすがに詰んだ・・・・・・・・！！

反射的に、衝撃にそなえて目を閉じる。

「ッギヤアアアアアッ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ!?!?」

顔を跳ね上げて、上を見た。

『なのは』の『本体』が温床にしているところ、すなわちなのは。その両肩から、まるで噴水のように血が噴き出していた。

・・・・・・・・・・・・・・・・何でだ? どういうことだ?

まさか、何か下手をうつてしまったんじゃない? ..!!
焦りで思考が単調になってきてしまう。

落ち着け・・・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・!?!?」

今度は何だ?

何か、声が・・・・・・・・。。。

あ
え

聞こえない……………。
耳に神経を集中させて、拾い上げた音は、

たすけて

これは……………！

「なのはか!？」

問いかけに返事は来ない。
だが、確かになのはの声だ……………！

『わたし』を助けて

もう楽にしてあげて

ぼそぼそと、蚊の泣くような声。
それでもしっかりと聞こえてくる。

わたしはもういいから

死んでもいいから

だから、『わたし』を助けてあげて

・・・・・・・・・・自分のペルソナにすら、慈悲を与えるのか。
お前だって、辛いはずなのに。
今だって、ほら、また血が吹き出た。
本当にボロボロじゃないか、限界じゃないか。
それなのに、まだ他人の心配を・・・・・・・・！！
手のひらに鋭い痛みが走って、血がにじむ。
それを見つめて、握り締めて、刀を持ち直した。
・・・・・・・・・・なのは。

「今、楽にしてやる・・・・・・・・・・」

そう呟いて、駆け出したとき。

「ちょっとちょっと！まさかマジで殺すとかないでしょうね！？」

後ろから、声。

振り返ると、騎子が仁王立ちして立っている。

「空也！！泣いてる子のそういう台詞は、本気にしないほうがいいよ！！本心隠して、そういつてるだけなんだから！！」

「助けるべきなの！！」と、こつちを指差す騎子。

「・・・・・・・・・・にやっとな、口角が上がるのを自覚しながら、『なのは』と向き合う。」

「知れたことを・・・・・・・・・・！！」

叫び、刀を構える。

もう、必要とされていないんじゃないか？

……… 管理局に入ったのも、単に独りぼつちが嫌だったから。

同じ力を持っているからこそ、置いていかれたくなかった。

あのままじゃ、将来も決まっていけない、空っぽな存在になっていたから。

それが嫌だったから、わたしはフェイトちゃん達の背中を追いかけた。

………でも、わたしのシャドウを見られて、思いつきり拒絶されて……。

今まで胸を埋めていたものを、一瞬で押し流された感覚。

たとえるなら、それなりに発展していた町が、地滑り等で、一瞬で無くなるような。

男の人と女の人、赤ん坊からお年寄りまで、悪人善人区別なく、全部かつさらっていったような感じ。

今度こそ、本当に空っぽな存在になってしまった。

今までは空也達のお陰でなんとかごまかしきれていたけど、もう潮時だね。

あなたにこんなこと頼むなんて、最低だよな。

刀を握って、こっちに突進してくる空也。

ああ、もうすぐで終わる。

こんな空虚感から解放される。

目の前にいた『わたし』をなるべく優しく抱きしめて、囁く。

もうすぐだよ

もうすぐで、あなたは自由だよ

そう、わたしが消えれば、この子は自由。

思うがままに生きて、好きなときに笑って、泣きたいときに泣いて。ずっとわたしに振り回されて、束縛されてきたんだもん。

ごめんね

もう、大丈夫だよ。

あの人達は優しいんだもん、ちゃんとあなたを護ってくれるから。
お父さんや、お母さんだって、きつと

side 空也

走る、走る、走る。

力が、わきあがってくる。

刀を下げて、カードを出現させる。

「イザナギ!!」

なのはと『なのは』を、助けるために。
ずっと自虐して、ずっと献身的な態度を取って、ずっと不屈を演じ

てきたんだ。

もう少し、自分を許せよ、もう少し、自分を労われよ、もう少し、助けを求めろよ。

「昇華ッ！！」

絶望に膝を折ってもいい、お前だって人間だもんな。

我侭でもいい、そうやって自分を殺してきたんだろ？

恐ろしく醜くてもいい、だって一番怖がってるのはお前だから。そんな、お前だから

イザナギノオオカミ
伊邪那岐大神

真っ白なコート、真っ白な剣。

仮面をかぶり、威厳ある姿になった、俺の半身。
なのは『達』を見据えて、ただ悠然と佇んでいる。

そう言えば神話の俺は、おぞましい姿になった妻を、見捨ててしまったんだっけか？

「幾万の……」

ならば、誓おう。

俺はそんなこと、絶対にしない。

どんなに血にぬれても、どんなに恐ろしい姿になっても、たかまちなのはお前自身が変わっていかないのなら、受け入れよう。

力になるう、隣に居よう。

それで、寂しいなんて思わせなくらいに、たくさん笑うんだ。

仲間達と一緒に、ずっと寄り添い続けるんだ。

だって、そうだろ？

「……………真言ッ！！」

独りぼっちは、寂しいもんな。

s i d e フ ェ イ ト

意識がはつきりしてくる。

頭がくらくらするけど、記憶ははつきりと思いだした。

文字通り頭を叩いて、無理矢理にでも目覚めさせようとする。覚悟は、出来てないけど………罵られるのは、当たり前前の気持ちで。

とにかく、謝らないと、土下座してでも、『ごめんなさい』を言わないと………！

「………あ、のは」

自然と、口から名前がこぼれる。

あの日頑なだったわたしに手を差し伸べてくれて、友達になるうって言うてくれて。

はたから見れば対したことは無いんだろうけど、わたしにとっては、すごく重要なことだから。

クリアになった視界に、空也に抱きかかえられたのが見える。

どうやらあの状態は相当体に負担がかかっていたらしい。

体の所々に、痛々しい傷や、血が付いていた。

顔が真っ青で、唯一安心できることっていったら、息をしていることくらいだろうか。

ポロポロでぐったりして、ぴくりとも動かなかった。

胸がいろんな感情でいっぱいになって、思わず飛び出した時。

「………ッ!」

魔力で体を強化して、空也の後ろに一瞬で移動。飛んできたそれを弾き飛ばす。

地面に突き刺さったのは………針？

「仕留め損ねたか」

「ッ誰!？」

バルディッシュを構えて、突然現れた人と向き合う。
真っ黒なコートに、仮面。

両手には何も持っていないけど、恐らく、袖の下か何かに隠しているんだろう。

「目標を確認、これより任務を開始する」

淡々とそう言ったその人は、どこからかナイフを取り出して、飛び掛ってきた。

振り下ろされたナイフをバルディッシュで受け止めて、弾き返す。
蹴りも防いで、右ストレートもいなく。

バルディッシュを振るけど、ひらひら避けられて、当たらない。

これは……………相当特殊な訓練を受けている!?

「……………ツくあ!」

唐突に足を蹴り上げられて、もろに顎に入ってしまった。

予測できなかった……………!

それに考え事なんてしてたら、やられる!!

「……………わっ!」

ふら付いていたところに、銃弾が来た。

なんとか直撃は免れたけど、腕にかすった……………!!

「……………はずしたな」

もう一人いたの!?!つくそ!気づけないなんて……………!!
二人分の攻撃をなんとかいなして、いったん退いた。

「ふむ、それなりにやるようだな」

「そうだな、これでは予定時刻を過ぎてしまつかもしれん」

「っあなた達は何者!?!」

とにかく、このままじゃラチが明かない。

なんとか情報を引き出さないと……。

「我等は時空管理局暗部」

トリスパー
「転生者特別部隊」

………っ!?!?」

「管理局!?!どうして管理局がわたし達を!?!」

「決まっている、使えない駒は捨てるのみ」

「さあ、もうやめよう、手始めにその舌引っこ抜いてくれる」

二人はそれぞれ武器を構えて、突っ込んで………っ、速
っ!?!?」

「っくう………!」

バリアとバルディッシュを組み合わせて、何とか防いだけど……
………きつい。

さすがに二人分は無理だったかも………!
始めのうちは互角だったけど、段々押されてきて、後ずさりしてし
まう。

だめだ、ここで耐えないと………なのだが、みんなが………!!

「っバースト!?!」

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・！」

咄嗟にバリアを爆発させて破棄。
ついでにまた二人を離す。

でもこのままじゃ、ただの融こっこになっちゃう。
どうすれば・・・・・・・・・・どうすればいいの・・・・・・・・・・！！？

「・・・・・・・・・・もういいよ、フェイトちゃん」

・・・・・・・・・・っ！！！！？

肩が叩かれると同時に、聞き覚えの有る声がある。
後ろを振り向くと、

「なのは！！動いちゃだめだよ！！」
「大丈夫」

まだ回復しきっていないじゃない！顔も真っ青で、全然大丈夫そうには見えない！！

「わたしがなんとかするから、さがって！！」

「・・・・・・・・・・フェイトちゃんこそ、さがって」

「っなのは！」

なのはは黙って笑うと、前に出る。

ふらふらしてて、絶対にあの二人に敵うようには思えなかった。

「ほう、自ら始末されに来たか」

「こちらの手間もはぶけるな」

「・・・・・・・・・・」

二人の言葉を無視して、なのははこっちに背を向けたまま、少し俯く。
声が聞こえる………何かとしゃべっている？

side なのは

目の前の二人を見据える。

多分、空也たちと同じ転生者で、敵。

『前までの』わたしだったら、絶対に敵いっこない相手だけど……

「……………」

息を細く吐いて、少し集中して、カードを出現させる。

今まで真っ黒だった面には、『わたし』の姿がはつきり描かれていた。

「……………分かってる、わたしを捨てたフェイトちゃん達が、憎かったのは確かだもん」

だけどね。

「それでもやっぱり、大切だから、友だちだから……………心

配させたくない、迷惑をかけたくないって気持ちは、あなたも同じでしょ？」

カードが、薄くポツと光る。
わたしは笑ってから、

「あなたは気に食わないかもしれないけど、わたしにとっては大切な友だちなの……」

一呼吸置いてから、もう一度二人の敵を見た。

「……みんなわたし『達』の所為で、危なくなってる、わたしはそれを助きたい」

だから、お願い。

「力を、貸して」

しよーがないわね

くすりつと笑う、『わたし』の声。

こっぴどなったら、一肌脱ぐわよ？

「……………うん」

青白い炎を宿したカード。

ペ

それに微笑んで、一旦空に掲げる。

ル

それから、両手で包み込んで、

ソ

祈るように、願うように、

ナ

カードを、割った。

第十八話召喚（後書き）

というわけで、覚醒しました。

ちよーつと展開が速かったかもしれんです……。

そして空也のペルソナが転生っばいことを……ww

金色の戦姫様

ご感想ありがとうございます。

はい、後者でした（笑）

『闇』が何なのかはちよつと分かりませんが、とりあえずご想像にお任せします。

『魔法』も『絆』も、一応対価じゃないんですが、広い意味で言えば、『絆』の方が対価になっちゃうかもです……。

次回、ついに覚醒したなのはさん！ペルソナの名前と設定は、後日後悔、否、公開！！
それでは。

第十九話『彼女』の名前（前書き）

短くなっちゃいました……。

あと、みなさん感想のほうで、なのはさんのペルソナを予想していただいているようですが、果たして……。ww?

第十九話『彼女』の名前

side フェイト

風が巻き起こって、思わず腕で顔を庇う。

まわり付き髪の毛を振り払って、なのはの方を見ると、

「何、あれ……………!?」

side なのは

全身を隠す、藍色のローブ。

顔も仮面と覆面で隠す徹底っぷりで、自分を隠してきたわたしには、
ぴったりの『わたし』。

今までのわたしだったら、嫌われることを嫌って、絶対に口にしな
かったであろう、その名前を呼ぶ。

「……………イザナミ……………!!」

初陣ね！行くわよお!!

レイジングハートを槍に変えて、二人に向かって走る。

「……………正直、まだ身体は辛いけど。

でも、みんなが頑張ってくれたんだから、今度は、わたしが……………
……………!!!!」

「マハガルーラ!!」

辺り一帯に風を起こして、相手を攻撃。

真空になった空気が、針を武器にしている人に直撃した。

「……………ように見えて、防がれていた。

腕についてるアーマーには、魔力攻撃を防ぐ加工もしてあるみたいだね。

正直、やっかいです……………!!」

「……………ふっ」

「っわ!」

足元に銃弾。

何とか踏みとどまったけど、ちょっとかすった。

やっぱり病み上がりじゃ……………。

「……………だめ、まだ頑張らないと。

「ツイザナミ!!」

派手にいくわよ?メギドラオンツ!!

光が舞い降りて、直後に爆発。

二人にダメージを与えるけど、わたしもちよっと余波を受ける。

当たり前だけど、自分の攻撃も受けるんだね。

まだ慣れてない部分があるし、練習あるのみかな……………。

.....っ！

『Protection』

衝撃。

見てみると、銃を武器にする人がこっちに銃口を向けていた。そしてそっちに気を取られている間に、もう一人が針を飛ばしてきて.....。

つだめだ、こっちは防御が間に合わない。

回避も駄目だ.....！

覚悟を決めて、目を閉じる。

「バルディッシュユ!!」

『Protection』

はっと目を開けると、フェイトちゃんがわたしの前に立っていた。

「なのは無茶しないで！わたしが前衛に立つから.....
二人でなら、やれる!!」

フェイトちゃんは、こっちを振り向かなかったけど、でも。

「.....うん！」

背中が、すごく頼もしかった。

「メシアライザー!!」

そーら、受け取れ!!

光が湧き上がって、わたしやフェイトちゃんや、みんなの傷を癒す。

「次っ！」

マハラクンダ！タルカジャ！

体が軽くなったのを感じながら、相手の耐久力を下げて、フェイトちゃんの攻撃が通りやすいようにした。

フェイトちゃんは元々、「鋭く研ぎ澄ますこと」を得意としている。だから、ちよつと相手の耐久力を下げて、火力を上げるだけで、

「やっ！」

「……………っ！」

「ぬうっ！」

side 空也

隙あらば援護を、と考えていたが、目の前の戦いを見ていると、どうもそういう気になれなかった。

フェイトが前でなのはを守り、なのはは後ろでフェイトを守る。

洗脳という他人の手が入っていたとしても、確かに培われて来た信頼がそこにあつて。

割り込むことが、非礼極まりないことのように思えたから。

だから俺達にできることと言えば、流れ弾の処理くらいだった。

「イザナミ！」

はいはい！

なのはが目覚めさせたペルソナ　　イザナミは、どうやら後衛型のペルソナのようだ。

フェイトを的確に強化したり、援護射撃を行ったりしている。

今のなのはは幾らか弱っているので、全快の時の威力などを考えてみると……。

うん、かなり頼もしいな。

なのはの一閃が針の奴を捕らえて、怯ませる。

その後ろから銃の奴が狙っていたが、すかさずフェイトが弾丸を弾き返し、慣れた手つきでバルディッシュをブーメランのように飛ばす。

「なのは！」

「うん！」

名前を呼び合っただけで、何かの合図ができたのか、二人は同時に二方向へ飛び立った。

続けざまに二人がそれぞれの武器を回転をかけて投げ飛ばす。

「全力全開！」

「疾風迅雷！」

N & F 中距離斬撃型コンビネーション！

なのはがフェイトの、フェイトがなのはの武器をしっかりと握って、魔方陣を展開。

地面に、深く突き立てた。

空間攻撃・ブラストカラミティ！

魔方阵が震えて、光が立ち上る。

目を潰さんばかりのそれを防ぐために、咄嗟に腕を顔の前にやるよ、

「……………っ!？」

安心した表情で、倒れるのが見えた。

次元航行艦『アースラ』

あれから何時間が経って、わたし達はいったん治療を受けることになった。

特になのはちゃんは重傷で……今手術を受けているらしい。

「……………っし、これで大丈夫」

「ありがとう、えっと……………」

「エイミイ、エイミイ・リミエッタ」

「あ、はい、ありがとう、エイミイさん」

包帯をまいてくれた人 エイミイさんにお礼を述べてから、みんなを見渡して見た。

騎子や槍馬、刀子さんや空也、さらにはなのはちゃんの友だちまで。みんなボロボロになっている。

みな、手酷くやられたな

「しょうがないよ、なのはちゃんが相手だったし、戦いにいくところもあつたから……………」

わたしのペルソナ『ベンケイ』をいたわりながら、怪我をしているみんなを見渡した。

なのはちゃんの友だちの、ポニーテールの人なんか、肋骨と片腕を骨折したみたいで。

しばらくはお仕事ができないみたいだ。

。 普段、治療なら刀子さんに頼めばいいんだけど……………

ちらつと、ベッドに横たわっている刀子さんを見る。

スキルは精神力を消耗するからな

「それに今回すごく頑張っていたから、あまり無茶はさせないほうがいいよね」

ほとんど怪我人を守っていたんだし、休憩はきっちり取らないといけないし……………でも、

「誰も死なないで、よかったね」

うむ

side ????

ふうん、目覚めたんだ。

まあ、最近色んな転生者に狙われてたんだし、『鍵』としての本能が働いた結果かな？

どちらにせよ、ことが上手く運んでくれて助かったよ。

ボクの計画のためにも、すぐにやられてもらっちゃ困るもんね。

『混沌の楔』高町なのは、君にはもうちょっと強くなってもらわなくちゃ。

でもその前に……………。

「月詠」

「ここに」

「例のシステムは？」

「完成しました」

うん、よし。

「一年後、『宣言』を行う、メンテナンスをきっちり行つよつに」

「御意」

「……………つふふ」

さーて、来年が楽しみだ。

第十九話『彼女』の名前（後書き）

というわけで、まさかのオリジナルペルソナでした（ウワナニヲスルヤメ（ry
みなさん色々想像していただいていたようなので、この場を借りて謝罪をば。

三毛猫ヤマト様

ご感想ありがとうございます。

からかいネタ……あると思います!!（）

おまけとかで、その辺のネタかけたらなっと思ってます。

緑異様

その五千円わたしがもらった!!（）

イルルヤンカシユは、ネットの画像で拝見させていただきました。

確にかっこよかったです、今回出てきたなのはペルソナは前々から暖めていたやつなので……。

金色の戦姫様

なるほど、あの子ですね！

確かに一部は『闇』に似ていますよw

紹介してもらったペルソナは全てチェックしてきました、サー！（）
確かにどれもよかったです、なのはのペルソナは元から決まっていたので……。

さーて、実は今回で中学生編はおーしまいっ！

次回から新章突入でございますー！

それでは。

設定その2 (前書き)

残りのペルソナのみなさんと、なのはさんのシャドウの設定。

設定その2

サスケ

属性：中立・中傭

クラス：暗殺者^{アサシン}

詳細：幽斗のペルソナ。

無口で寡黙な忍者。

典型的な忍者の格好に仮面、両手は小太刀という姿、ちなみに髪はボサボサ。

日常的に無言な上に仮面をつけているので、感情が読み取りにくい（本体である幽斗は別、本人曰く『雰囲気で分かる』らしい）。

ベンケイ

属性：混沌・狂

クラス：狂戦士^{バーサーカー}

詳細：由香のペルソナ。

誇り有る武装僧侶。

背中には『七つ道具』と呼ばれる、様々な種類の武器を装備している。

容姿は、伝えられている『武蔵坊弁慶』そのままの姿をしている。

ケンタウルス

属性：混沌・善

クラス：騎兵^{ライダー}

詳細：騎子のペルソナ

いけいけ暴走族気質な姐御。

上半身が人、下半身が馬で、両手には突撃用の槍と、盾を装備している。

口調、行動ともに豪快で、人情に厚い。

クーフリーリン

属性：秩序・中庸

クラス：槍戦士^{ランサー}

詳細：槍馬のペルソナ。

ハイテンションな性格。

容姿は、『fate』のランサーをペルソナっぽくした感じ。

無礼に見えて、礼儀はきっちり心得ている立派な戦士。

イザナミ

属性：混沌・善

クラス：魔術師^{キャスター}

詳細：なのはのペルソナ。

面倒見のいいお姉さん。

全身を覆うローブを纏っており、顔もフードと仮面と覆面で隠している。

なのはを妹のように扱う。

なのはさんのシャドウ

なのはの影

初登場話：第五話

詳細：なのはが押さえ込んでいた一面が暴走した姿。

歪な龍の形を取っている。

本編内では物理攻撃が目立ったが、どちらかと言うと魔法行使が得意。

ネガ・レイジング
歪んだ不屈

初登場話：十六話

詳細：本体であるのはがヴィータ達に追い詰められた際、中途半端に目覚めていたペルソナが怒りに任せて暴走。
主導権を乗っ取ったの暴走のため、身体はなのはそのまま。
レイジングハートでの近接戦闘と魔法を行使する。

リグレット
自己後悔

初登場話：十七話

詳細：歪んだ不屈がさらに暴走した姿。

龍のような身体で、頭に当たる部分にある水晶に本体がある。

ここまでくるとなのはの身体は限界を超えてしまっているため、戦闘中はずっと崩壊が進んでいた。

設定その2（後書き）

ペルソナだけじゃ凄く短くなったので、なのはさんのシャドウの設定も乗っけてみました。
それではお返事をば。

金色の戦姫様

イザナミでしたww

ペルソナ4のものとは全く別物ですが……。

確かに『空xなの』は確定ですが、そう簡単に幸せにしてあげませんぜww()

緑異様

ストリートに行けばよかったですww

この小説に出てくるペルソナは全部オリジナルなので、4以外のもも出てくるっちゃでてきますよ〜。

次回からは新章『Strikers編』に突入でございます。
あの人がむちゃくちゃ性格変わって……？
それでは。

ブログ（前書き）

連続投稿。

ブログなので短め。

プロローグ

雪が、降っている。

雨のように音を立てるわけでもなく、ただただ無音で降り積もる。

この世界に存在するのは無機質のみ、ゆえに雪もすぐに積もっていきが。

とある一角だけは、違った。

鮮やかな赤が飛び散っており、熱を持っているのか、そこに落ちた雪は片っ端から解けていく。

その赤の中心に、白い点があった。

白は、灰色を抱きしめて、声を殺して涙を流している。

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

呪文のように、それを続けていた。

実際、白は己の無力を呪っていた。

どれだけ力を手に入れても、いざと言うときに役立たずな自分が、

この上なく腹立たしかった。

しかしその感情をぶつける術を忘れてしまっているのです、ただ声を殺して、涙するしかできない。

灰色はまだ生きている。

だが、白は離れようとしなかった。

少しでも離れれば、雪のように消えて無くなるような錯覚を覚えて、

怖くて離れられないのだ。

故に、白は灰色にしがみついたままだった。

熱を失った赤の上に、雪が降り積もっていく。

白の肩や灰色の背中にも雪がたまるが、彼女はそれをはらおうともしない。

ただただ、腕に力をこめるだけだった。

全ての者よ聞け

これより、『鍵』を優勝商品としたバトルロワイヤルを開
催する

参加は自由、ただし、一度参加すれば後戻りはできない

願いがああるなら、さあ、立ち上がれ

己の欲望のために武器を取れ

そして存分に

殺しあえ

背後で響いた声を、白は黙って睨みつけ、心に刻み込む。

そして、一つの歪んだ決意を胸に抱きしめ、自身を殺しにかかった。

雪は何事も無く降り注ぎ、積もっていく。

命をも奪うその冷たさは、白の心を徐々に冷やしていった。

新暦0075年3月。

古代遺失物管理部、「機動六課」本部隊社。

「うがぁ　っ！！なしてやあぁあぁあっ！！」

新設された部隊内で、その絶叫は響き渡った。

「ど、どーしたですか！？はやてちゃん！」

部隊長室の中を、絶叫の発信源　機動六課の部隊長である、八神はやてのもとに、見た目10歳ほどの、文字通り『小さな』少女がふよふよと飛んで駆けつける。

はやてはその少女を涙目で見つめながら、頭を抱えつつ、開いていたウィンドウを見せた。

「いきなりー大事やリイン！教導を頼んどった人が、来なくなった
！」

「……………ええっ！？何ですって！？」

リインと呼ばれた少女は、危うく落としかけた書類を持ち直しながら、ウィンドウを覗き込む。

「で、でも！この間ちゃんと来れますよって、OKもらいましたよね！？」

「それが、実は手違いで古い資料を手渡してしもうとっいたらしくて、せやから頼んどった人はすでに退職しとったんよお……………」

そう言って、はやてが情けなく机に突っ伏し、リインがおろおろし

始めたとき。

『 おやおや、もしかしくなくてもお困り? 』

「ふえ? つし、失礼しました!!」

『 つほつほつほ、いいのよ、そんなに硬くならなくても
・それで、何に困っているのかしら? 』

突然通信が開き、ウィンドウに三提督の一人 ミゼット・クロー
ベルの顔が現れる。

はやてはすぐに飛び起きると、背筋を伸ばして敬礼をした。

ミゼットはのほほんとした笑みを崩さないまま、はやてに問いかけ
る。

はやては、始めは渋っていたものの、きちんと今までの経緯を説明
した。

するとミゼットは再び「ほつほつほ」と笑うと、

『 ちょうどよかった、あなたのところを受け入れてほしい教導官が
いて、今あなたに直談判しようとしたところなの 』

「っ本当ですか! ?」

『 ええ、あなたさえよければ、すぐにも異動命令を出すけど . . .
. 』

はやてはここで、思考をささむ。

いくら相手がよしと言っているとはいえ、こつも甘えてしまってい
いのだろうか? と。

だが、教導官がないのは事実、戦力として抱えるメンバーは皆新
人ゆえに、それを育てる人間がいままなのは痛い。

(背に腹は抱えられんね)

うん、と頷いてから、

「それでは、お願いします」

『わかったわ………ちなみにその子、あなたが受け入れる
予定の二人の試験官を担当しているから、その折に紹介するわね』

「はい！ありがとうございます！」

互いに一礼しあってから、はやては通信を切った。

プロローグ（後書き）

中学生編を書き終えてから気付いたのですが……。

『リインフォース？出てなくね？』

ああっ石を投げないで！！

第一話独白と試験（前書き）

というわけで、STS編です。

今回、あの子も若干変わってます。

第一話 独白と試験

変な子。

それがあたしに対する周りの評価だった。

別に、身体にアザがあるってワケでもないし、頭の中がメルヘンちつくなわけでもない。

性格はむしろ明るいほつで、人付き合いもそれなりに出来ると自負している。

じゃあ、どうして変な子かって？

……それは、

あたしには、俗に言う『前世の記憶』があるから。

気付いたのは、『今の家』に来たとき。

ふと、難しい本や文字を読めたときに、気付いたんだ。家族には思い切って相談した。

そのときは当然のように受け入れてくれて、思わず泣いてしまったのを記憶している。

けれど、同時にそれが恐ろしくもなってしまった。

家族は受け入れてくれても、周囲の人間はどう思うか？

個性が大切にされている時代とはいえ、『異端』は徹底的に拒絶されるもの。

話したのは家族だけだけど、それがもし、赤の他人に漏れたら？それが原因で、家族が危険な目にあつたら？

考え出すと止まらなくなつて、頭を抱え込んでしまった。

そしていきついた結論は、『自分だけでも、他人に関わらないようにしよう』って言うもの。

学校では、図書室の奥の方で難しい本を読み漁つて、外にはあまり出ないようにして、話しかけられても、曖昧な返事で流して。

とにかく徹底して、人と関わらないようにしてた。

そりゃ、ちよつとは人恋しい時もあったよ？

でも、受け入れてくれた家族のことを思つたら、耐えられた。

そうやって壁の花を決め込んでいた所為か、周りの人間からの評価は『勉強も運動も出来る子、だけど人と関わりたがらない変な子』っていうものになつてた。

クラスメイトも、必要なとき以外は喋りかけてこなかったし、こちらとしては結果オーライなので、別に何も思わなかった。

あの人に、出会うまでは。

公務員であるお父さんを訪ねて、地方から首都圏に来たときのことだ。

着陸した空港で、姉と逸れてしまい、探し回っていると、大きな爆発音が響いて、人や荷物が吹き飛ばされていた。本当に突然のことで、何が起こったのか分からないうちに、あたしも吹き飛ばされた。

気がついたら、あたりはまさに火の海。

あまりの熱気に、何度も咳き込んだ。

一瞬別の世界に飛ばされたことも考えたけど、見覚えのある柱や窓ガラスを見つけて、自分がまだ空港にいるってことに気付いた。

とにかくここは危険だと思って、とにかく出口を探そうと思って、まだ痛い足を動かしながら歩き出した。

途中、物と一緒に燃えている人間も目撃しちゃって、何度も戻しかけた。

蒸し風呂以上に熱い中、吐き気を抑えながらの前進。

ダウンしないほうがおかしかった。

「・・・・・・・・お父さん・・・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・・・

」

開けた場所で、膝を付いてしまう。

熱気が、どんどん体力を奪っていく。

涙が、ぼろぼろとこぼれてきた。

「痛いよ・・・・・・・・怖いよ・・・・・・・・こんなのだよ・・・・・・・・

」

口から漏れる、数少ないあたしの弱音。
小さい頃から、あたしは弱かった。
痛いとか、怖いとかが嫌で、泣く事しか出来なくて。

「帰りたいよ……!」

女神像の前で手をついて、情けなく泣くしかなかった。

「……誰か……誰か助けて……!」

その時、前の方で、ミシミシと何かが圧迫される音。
ぱつと顔を上げると、女神像が倒れ掛かっていた。

しかも、あたしの方に。

神様は、自分を殺したがっているんだと思った。

前世の記憶を持っているから、いつかお父さんたちに迷惑をかけるから。

そうならないために、あたしを殺そうとしてるんだと、そう思っていた。

『あの人』が現れたのは、そんな時だった。

魔法が発動する瞬間に聞く、済んだ音。

顔を上げると、倒れ掛かっていた女神像が、桜色のリングで固定されている。

その後ろの方にいる、白いバリアジャケットの、『あの人』。

「よかった……間に合った……!」

かなり急いでいたのか、手を前に突き出したまま、肩で息をしていた。

『あの人』は、真剣だけど安心させるような表情であたしを見つめて、

「助けにきたよ……！」

長い亜麻色の髪が翻ったと思うと、『あの人』はあたしの目の前に佇んでいた。

そしてあたしの頭に手を置いて、いつぱいに笑ってから、

「良く頑張ったね、偉いよ……もう大丈夫だからね」

「……あ……っ！」

優しい言葉に、また涙が溢れてくる。

『あの人』はもう一度笑ってから、杖を天上に向けた。

「安全な場所まで、一直線だから！」

その姿は、とてもかっこよくて、今まで臆病だったあたしなんかとは大違いで、

『I confirm upward security(上方の安全を確認)』

相棒らしい杖が声を発すると、『あの人』は魔方陣を展開。

『I remove a fire ring lock(ファイアリングロック、解除します)』

「一撃で地上まで行くよ！」

『all right, A road cart ridge』

集束していく光、『あの人』は杖をしっかりと持ち持って叫ぶ。

「デイバイン……！」

バスターー！！

その後のことは、少し曖昧だ。

ただ、あたしを抱えている『あの人』が、笑いかけてくれたのは、はつきり覚えている。

街の光の所為かも知れない、はたまた目下で起こっている火災の所為かも知れないけど、それでも。

その笑顔がとてもまぶしくて。
だから、

いいなって、この人みたいに、強くて優しい人になれたらな
て。

本当に単純なことだけど、

心から思ったんだ。

新暦0075年4月、ミッドチルダ。

臨海第8空港近隣、廃棄都市街。

その一角に、二人の少女がいた。

一方はボーイッシュな雰囲気少女。

素手での素振りを行っていることから、戦闘スタイルは格闘であると取れる。

もう一方は、橙色の髪を二つに結び上げた少女。

自身の銃に弾を込めながら、不備がないかを見ていた。

と、ここでその少女が、素振りを行っている少女に顔を向けて、

「スバル、あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラー逝っちゃうわよ？」

「うえー……ティア、やなこと言わないでー、ちゃんと油も差してきた！」

ボーイツシユな少女　スバルは素振りを中断させると、不安げな表情で、ツインテールの少女　ティアナに反論した。
ティアナは素つ気無く「そう」と返し、再び作業を再開する。
スバルも、どこか納得いかないような表情で、ストレッチを始めた。あらかた終わったのか、ティアナはウィンドウを開き、時間を確認する。

すると、何かベルのような音が響いて、ティアナの時計とはまた別の、大きなウィンドウが開いた。

二人が反応し目をやると、10歳ほどの幼い女の子が写っている。だが、少女らが普段纏っている服装をしていることから、二人は背筋を伸ばした。

「おはようございます！さて、魔導師試験受験者さん二名、そろつてますか？」

「はい！」

二人が返事をする、モニターの向こうの少女は、書類を手に取り、

「確認しますね、陸士386部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と・・・」

「はい！」

「ティアナ・ランスター二等陸士！」

「はい！」

威勢のよい返事に、少女は笑ってから、

「所有している魔導師ランクは、陸戦Cランク、本日受験するのは、陸戦Bランクへの昇格試験で間違いありませんね？」

「はい！」

「間違いありません」

すると少女は書類をしまい、背筋を伸ばして、

「はい！本日の試験監督を務めますのは、私リインフォース？空曹長です、よろしくですよー！」

「よろしくお願ひします！」

二人は、リインフォース？に敬礼を返した。

一方その頃、試験会场上空。

「お、早速始まつてるな？リインもちゃんと試験官してる」

ヘリコプターから身を乗り出して、三人の様子を見ている女性がいるた。

「はやて、ドア全開だと危ないよ？モニターでも見られるんだから
「はあい」

満足そうに微笑む女性の後ろから、声がかかった。

身を乗り出していた女性　はやては苦笑いしながら、返事をして、
座席についた。

はやてに声をかけた女性　フェイトは、モニターを開き、続けて
資料も開く。

「この二人が、はやてが見つけた子達だね？」

「うん、二人ともなかなか伸び代のある、ええ素体や」

「今日の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「うん、直接の判断は、教導官に任せてるんやけどな」

「そっか……うん？」

そこまで会話して、ふと、フェイトは疑問を浮かべる。

「どうしたん？」

「いや、六課にくる教導官のこと、何も聞いてないなって思って……」

「あ……」

はやては、ばつが悪そうに後頭部をかいてから説明を始めた。

「実は、うちも何も聞いとらんのだよ」

「……え？」

ぼかんとするフェイト。

はやては再びばつが悪そうにしてから、

「書類の手違いで、教導官が来なくなってしまうたって事態は、もう知つとるやろ？」

「うん、でもミゼット提督のお陰で難を逃れたんだよね？」

「せや、けど、その教導官本人の希望で、素性は全く明かされとらんのだよ」

「そつなの！？」

驚きのあまり身を乗り出すフェイト。

はやてはそれを制して、

「今日、ラインと一緒に試験官してるらしいから、多分会えると思
うんやけど……」

と、モニターに目をやった。

同時刻、廃屋の一角。

『There are not a life reaction, the reaction of dangerous materials in a range (範囲内に生命反応、危険物の反応はありません)』

「……………」

『It is the course check end (コースチェック終了です)』

「……………ご苦労」

ウィンドウを操作していた女性は、モニターを開いてコースの情景を映し出す。

「観察用のサーチャーも、攻撃対象のオートスフィアも設置完了」

「じゃあ、わたし達は全体を見てましょ？」

「……………ああ」

「……………撃に気をつけつつ、制限時間内にゴールを目指してくださいです、何か質問は？」

「えっと……………ありません！」

「同じくありません！」

ラインの問いかけに、二人ははつきり返事をする。

「では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう！ですよ！」

ウィンドウが消えると同時に、合図をしめす画面が出現。

二人は、構えた。

「始まったな」

ええ、活きのいい二人よ

モニターを見つめ、意見を言う声が二つ。
だが見える人影は一つだけだ。

「……………」

あら、この子あの時の……………？

黒い制服を纏った女性は、モニターの向こうで開始の合図を待つス

バルを見つめ、目を細めた。

「……………随分見違えたな、スバル」

ぼそっと、呟いた声は、甲高く響いたブザーに消される。

「うりゃ！ていつ！はあっ！」

スバルは建物の中で、ティアナか建物の外から。
効率よくターゲットを破壊していく。
非破壊対象をうまく避けつつ、確実に破壊対象を攻撃。
しばらく爆発音が響いていたが、やがてそれも止み、二人は曲がり
角で合流した。

「いいタイム！」

「当然！」

面白い子達ね

「だが立ち回りに隙が見える、改善すべき点が山積みだな」

だからこそ育てがいがあるんでしょ？

「……………」

女性はだんまりを決め込んだが、もう一つの声はくすくすと笑い。

我は汝、汝は我よ？そのくらいお見通し

「……………そうか」

女性はため息をついて、再びモニターに目をやった。

「だが、難関はまだ続くぞ」

そうねえ……………

女性が手を振ると、もう一つウィンドウが開いた。

「特にこれが出てくると、受験者の半分以上は脱落することになる」

試験の最終関門、大型オートスフィアね

「そつだ、今の二人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい、
中距離自動攻撃型の大型スフィア」

どう切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所よ

廃棄都市を駆ける、スバルとティアナ。

前方には、敵の大群がいる。

だが二人の顔に見えるのは、むしろ余裕で、

「いける？」

「もちろん！」

怯むことなく、挑みかかる。

第一話独白と試験（後書き）

まさかのスバルが転生者。

なので原作より少し大人しめです。

まあ、根っこはほとんど変わってないけどな！！

次回、順調にターゲットをクリアしていく二人の前に、大型スフィアが立ちふさがる！

そして名前が出てきていない、教導官は誰？

さて次回っ！

それでは。

第二話試験2（前書き）

またまた連続投稿。

7/19：タイトルちょびっと加筆。

8/7：誤字修正。

第二話試験2

スフィアから浴びせられる、集中攻撃。

スバル、ティアナの両名は物陰に隠れている。

ティアナはアンカーガンを、スバルは左手に装備していた小型の弓を構えて、確実にスフィアを撃ち落していた。

「ティア、大丈夫？」

「問題ないわ？スバルこそいける？」

「当たり前！」

二人して笑いあつて、同時に撃った。

「よし、全部クリア」

「この後は？」

背中を預けあい、各々のデバイスにカートリッジを込めていく。

「このまま上、上がったら最初に集中砲火が来るわ、オプティック
ハイド使って、クロスシフトで瞬殺！やるわよ？」

「りょーかい！」

両腕にカートリッジを込め終えたスバルは、親指を立てて笑った。

スフィアが漂う上の階。
ズドンつと音を立てて、ティアナのアンカーガンから放たれたワイヤーが天上に突き刺さる。
それに反応したスフィア達は、狙いを定めると同時にチャージを開始。
ワイヤーが巻かれていくと同時に、光の密度が大きくなる。

ガチッ

ワイヤーが巻き取られて、無機質な音が立ったとき、魔力弾が容赦なく浴びせられた。
が、

「あっ……」

攻撃をくらっているのは、ティアナではなく、そのアンカーガン。では二人はどこにと、はやてとフェイトが探している頃、廃屋にいた女性は、今まさに刻まれている軌跡を見ていた。

5

見えない影に、スフィアが次々と破壊される。

4

死角から何かを撃ちこまれて狂ったように動き回り、やがて機能を停止させる。

3

すると景色の一部がぼやけはじめ、人の形を取る。

2

人影　スバルはナツクルにカートリッジを装填し、大きく右手を引いた。

同じくして、彼女を感知したスフィアが攻撃を開始。
スバルはそれらを避けながら、前を見据える。

1

「っふ！」

跳躍。

スバルは宙に飛び上がり、十分にスフィアを『引き付ける』。

「クロスファイヤー！」

「リボルバー！」

姿を現したティアナと、スバル。

シュート！ツ！

二方向から放たれた魔力弾が、ターゲットを一掃した。

「なるほど、これは確かに伸び代がありそうだね」

「やる？」

へりの中、フェイトは感心の表情ではやてに微笑んだ。
はやても微笑み返してから、モニターに目を戻す。

新人にしてはやるじゃない？ますます鍛えるのが楽しみにな
ってきた！

「これで残るは最終関門だな」

廃屋に佇む女性は、目を細めて、モニターを凝視した。

「よっし！さすがだよティア！一発で決まったね！」
「ま、あんだけ時間があればね」

スバルは残ったターゲットを破壊し、ティアナは罠に使ったアンカーガン回収している。

「普段はマルチショットの命中率あんまり高くないのに、やっぱりティアはすごいなあ」

「うっさい、さっさと片付けて、次に………っ!!」

突然ティアナの言葉が中断。

スバルは何があったと思わず身構える。

「スバル、防御!!」

「………っ!!」

ティアナに促され飛び退くと、さきほどまでスバルがいた場所に、黒い焼き跡が刻まれた。

どうやら先ほどの攻撃で、捕らえ損ねたスフィアがあったようである。

ティアナがスフィアを目で追いながら、狙いを定めた瞬間。
足元から、嫌な音がした。

「………っづあ!!」

体制が崩れるものの、何とか立て直して物陰に隠れる。

「ティア！つこの！くらえ！」

スバルが魔力弾を飛ばすのと、ティアナが弾丸を飛ばすのはほぼ同時だった。

一方の魔力弾はスフィアに命中、もう一方は

へりの中。

「なんや？」

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど……？」

廃屋。

「………だめだな」

完全に壊れたわね

「………はあ」

このさいしょーがないわよ、一度様子見に行きましょう？

「ティア！」

「騒がないで！何でもないから………！」

うづくまるティアナに駆け寄るスバル。

若干のうるたえが見えた彼女にティアナが一喝する。

「嘘つけえ！明らかにやばい音が鳴ったよ！？捻挫したでしょ？」

「だから何でもないって……」

スバルの言うとおり、足を痛めたらしい。

立ち上がるうとしたティアナは、すぐにふらつき座り込んでしまった。

「……ごめん、完全に油断してた」

「あたしの不注意よ、あんたに謝られると、かえってむかつくわ」

自分の足をじつと見ていたティアナは、諦めたようにため息をついてから、

「……走るのは無理そうね、一最終関門は抜けられない」

「……ティアナ」

スバルは暗い表情で、ティアナを見つめていた。

「あたしが離れた位置からサポートするわ、そしたら、あんた一人ならゴールできる……」

「ティアナ……!」

「うっさい!」

ティアナが、声を張り上げた。

「次の受験の時は、あたし一人で受けるっつってんのよ!」

「次って……半年後だよ!？」

「迷惑な足手まといがいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよ! わかったらさっさと……」

また立ち上がるうとするティアナ、しかしまだ痛むのか、また座り

込んでしまっ。

スバルは、まだ暗い表情で彼女の背中を見つめていた。

「ほら！速く！」

「……………ティア」

それに気付き、ティアナは振り返ると苛立った声で促すが、スバルは口を開いた。

「あたし、前に言ったよね？弱くて、情けなくて、誰かに助けて貰いつ放しな自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入ったって」
「……………」

何かスバルの意図を掴んだのか、ティアナは黙って聞いている。

「魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事についた」

「知ってるわよ……………聞きたくもないのに、何度も聞かされたんだから」

ティアナは、そう言っている割にはあまり嫌な表情をしていない。

「……………ティアとずっとコンビだったから、ティアの夢とか、魔導師ランクアップとか昇進に、どれだけ一生懸命かも、よく知ってる……………！」

「……………だから、何？」

そう振り返ったティアナから視線を逸らすこと無く、スバルは言葉を紡いだ。

「あたしの目の前で、それを躓かせるのだけは、絶対にいや」
「じゃあどうするのよ!? 走れないバックスを抱えて、残りちよつとの時間で、どうやってゴールすんのよ!?」

するとスバルの口元が、ほんの少しいたずらっぽく上がった。

「……………裏技、反則取られるかもしれないし、出来るかどうかも、曖昧だけど……………うまく行けば、二人でゴールできる」
「！」

「……………本当?」

問いかけるティアナ。

スバルは途端に自信なさ気に明後日の方向を見ながら、

「いや、結構難しいし、ティアにもちよつと無理させるかも知れないけど……………よく考えると、無茶っばいかも……………」
「……………~~~~~」

うじうじと考え事を始めてしまったスバルに、ティアナは堪忍袋の尾が切れた。

「っだーもう! 鬱陶しい! 何でこついつ時にうじうじすんのよ!?!」
「ふにゃっ!?!」

続けてスバルの胸倉を引っつかみ、威圧するように顔をぐいっと近づける。

「はつきりしなさい! やるのか、やらないのか!?!」
「……………」

ばかんとするスバル、だがもう一度いたずらっぽく笑って、

「二人でならやれる、手伝って、ティア

「……残り時間、3:40」

ティアナは胸倉から手を離し、時間を教える。
そしてスバルを見つめた。

「プランは？」

「……うん！」

おおっ、出てきたわよ？

モニターが、道路を走る人影を認識する。

だが女性は人影の数と、周囲の状況を見てから、

「……だが一人だ」

某所。

最終関門である大型スフィアが人影　ティアナを補足し、ロック
オン。

間髪いれずに、攻撃を放った。

魔力弾は真つ直ぐにティアナに向かうが、彼女は反応が遅れる。案の定、攻撃が着弾した。

「ああ！直撃！！」

へりの中、思わず身を乗り出すはやて。

「いや、違う」

しかしフェイトは冷静に、モニターを見つめていた。

画面の向こう、ティアナは以前走っている。

スフィアは次々と攻撃を放つが、ティアナはうまく避けながら進んでいく。

「高速回避？いや、ちやうな……」

「あの子、ティアナは」

思考をめぐらせるはやてに、フェイトは解説をいれた。

困ね

「ああ、そして……」

攻撃が、再びティアナに直撃。

だが次の瞬間、4〜5人ほどのティアナが出現した。

「……………フェイクシルエツト、これ、滅茶苦茶魔力食うのよ？……………あんまり、長く持たないんだから」

物陰、本体のティアナが魔方阵を展開し、集中していた。

「（一撃で決めなさいよ？でないと、二人とも落第なんだから！）」
「・・・・・・・・分かつてる」

ビルの屋上。

ベルカ式の魔方陣を展開し、スバルは目の前を見据えていた。

あたしは、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない、遠くまで届く攻撃ならあるけど、限界はある

出来るのは、

全力で走ることと、クロスレンジでの一発だけ！

「だから！」

魔方陣の光が強くなり、ナツクルのリボルバーの回転も激しくなる。

「・・・・・・・・決めたんだ、『あの人』みたいに、強くなるって」

閉じていた目を開けて、顔を上げて、

「誰かを、助けてあげられるような、強い自分になるんだって！」

拳を振り上げて、地面を殴りつける。

ウィンググロード！

瞬間。

『道』が伸びて、スフィアの背後の壁に突き刺さる。

スフィアが反応して、攻撃準備に入るが、そこにティアナの幻術が

出現。

次々現れるそれに注意が向けられる。
スバルはナツクルのカートリッジをロード。
ローラーにありつたけの魔力を込めて、

突っ走る！！

「うおおおおおおおっ！！」

雄叫びを上げて、壁を破壊。

勢いそのままに、スフィアを殴りつける。

障壁に阻まれるが、さらにカートリッジを消費して火力を倍に。

さすがに耐え切れなかったらしく、障壁は粉々に砕け散った。

一度スフィアに反撃されるものの、スバルはそれを避けきって、再び突っ込む。

「一撃、必倒！！」

魔方陣の上に立ち、さらにリング状の魔方陣を展開して、魔力を集束。

「デイベイン……！！」

大きく振りかぶって、

「バスターツ！！」

容赦無しに、撃ちこむ！！

ゴール地点前。

「お！来たですね！」

ラインが見つめる方向、土煙を上げてこちらにくる人影がある。

「あと何秒!？」

「16秒!まだ間に合う!!」

スバルに答えると同時に、ティアナは残りのターゲットを全て撃つ。

「はい!ターゲット、オールクリアです!」

目の前で最後のターゲットが壊れたのを確認し、ラインはオールクリアを宣言した。

力んでいるのか、急いでいるのか、いささかスピードがあまりすぎるよつな?

「ちょっとスバル！止まる時のこと考えてるでしょうね！？」

「うぐっ……大丈夫だ、問題しかない！」

「何よそれ！？」

不安すぎるスバルの返答に、ティアナは声を荒げた。

「あ、何かちよいやばです」

リンも、苦い表情を浮かべている。

そうこうしている間に、二人はゴールラインを通過。

しかしスピードを殺しきれないらしく、勢いそのままに、壁に激突しかけた。

「……アクティブガードとホルディングネットだな」

そうね

女性が手を上げると、桜色の爆発が発生した。

「ちよお待ちい！あの光！！」

へりの中。

二人を助ける為の魔法を発動しようとしていたはやてが、その光を目の当たりにして、驚愕する。

「……………うえ？」

スバルが目を覚ますと、世界がさかさまになっていた。一瞬混乱したが、直前の記憶を思い出し、飛び起きる。周囲を探すと、サンゴのような柱にうまく引っかかっているティアナを発見した。

「二人とも！危険行為で減点です！！」

ほっとするのも束の間、叱咤の声が上から聞こえてきたが

「頑張るのはいいですが、怪我をしたら元も子もないですよ！？」

呆けてしまった。

あのティアナですら、ぼかんとしている。

「そんなんじゃない、魔導師としてはダメダメです！」
(……………ちっさ)

階級的には上とはいえ、そう思わざるを得なかった。

「……………その辺にしておけ」

凜とした、それでいて何か威圧しているような声。

スバルがそちらに目を向けると、真っ黒なバリアジャケットを纏った女性が、空にいる。

彼女はゆっくりとこちらに向かって降下し、ラインの隣に降り立った。

「最後のは確かに誉められたものではないが、叱咤は後にまわしておけ」

今度は、その場の全員が驚いていた。

ティアナもリインも、へりにいるはやてとフェイトも、そしてスバルも。

「まずはお疲れ様、と言っておく………試験は終了だ」

全員が固まっている中、誰かがぼつりと呟く。

「………なのは、さん？」

第二話試験2（後書き）

さーて、という訳でなのはさんの登場ですた。

誤字脱字、突っ込みがあれば、ご感想へどうぞ W W W W

第三話『機動六課』（前書き）

バリバリ上げるぞっ！

7/21：ちよびつと加筆。

第三話『機動六課』

あたしがあこがれた『あの人』は、すっかり変わっていた。普段はサイドアップで、バリアジャケットの時はツインテールにしているはずの髪は下ろしていて。

バリアジャケットのカラーも、あの時みたいな真っ白じゃなくて、黒。

アンダーはかの有名なシグナム二尉と同じ構造の物に、スパッツと黒いブーツを履いていて、胸のリボンも無くなっていた。

杖の形になっているはずの愛機は、実態の刃が付いた槍になっていたけど、カラーリングは変わっていない。

表情はとても厳しくて、何か威圧しているような、威嚇されているような、そんな雰囲気だった。

「ランスター二士」

「え、あ、はい！」

「負傷していただろう？見せてみる」

「は、はい……」

口調もすっかり変わっている。

……四年の間、『あの人』に　なのはさんに、いったい何があったんだろうか？

「あ、あの……」

「何だ？ナカジマ二士」

射抜くような視線を向けられて、一瞬怯んでしまう。ただ、思い切って、話しかけてみた。

「お、覚えていませんか？四年前、空港で助けて……」
「知らん」

……え？

「人助けなど日常茶飯事でな、一々覚えていられない」

「そ……そう、ですか……」

……覚えていないのなら仕方ないんだけど、でも……。

「これで大丈夫だが、しばらくは安静にしている」

「はい……」

何と言うか、素っ気無さすぎる気が……。

「ランスター、ナカジマ両名は、休憩後、ミーティングルームに集合しろ」

「は、はい！」

「了解、しました……」

なのはさんは小さく頷いてから、踵を返して戻ろうとする。

けど、その先には、あの八神はやて二等陸佐と、フェイト・T・ハラウン執務官がいた。

二人も、かなり驚いている。

どうやらなのはさんの変化は、親友の二人もしらないところで起こつたらしい。

「……話すことは無い、彼女等を引き抜くかは、自分達で判断しろ」

なのはさんはどこか威圧感のある声で二人にそう言うと、その場を去ってしまった。

事情が事情とはいえ、ちょっと素っ気無さ過ぎない？

「……あの子らはまだ若い、巻き込めない」

そうね

『にしても！』と、声がなのはに嬉々とした様子で話しかける。

さっきのバスター見た！？あれ、あの時使った技よね！？

「……そうだな」

嬉しいわぁ、覚えててくれたんだ！もうすっかり見違えちゃ

って！

「……そうだな」

声に対しても素っ気無く返しながら、なのはは机に付くと、試験映像を照らし合わせつつ、採点を始める。

side スバル

「……………あのさ」

あれから。

休憩室で休んでいると、ティアが話しかけてきた。

「なのはさん、どうしたの？あんたから聞いてた性格とまるで逆っぽいんだけど……………」

そう言われて、もう一度さっきのなのはさんを思い浮かべる。

全身真っ黒で、視線もきつくて、誰も近寄らせないような雰囲気なのはさん。

ティアの怪我を見てくれたから、一応優しさはあると思うんだけど……………。

「……………ごめん、分かんない」

「……………そう」

そりゃ四年も経てば、ちょっとくらい性格は変わるかも知れないけど、でも……………。

どう考えても、変わりすぎだと思っ。

一体、何があっただら……………？

「スバル、そろそろ……………」

「ん？」

ティアに促されて時計を見る。

集合までまだ時間はあるけど、ティアはさっきまで怪我してたんだ。

その辺を考えて、早めにミーティングルームに行くことにした。

ティアと二人で、八神二佐とハラオウン執務官から新部隊の誘いを受けていた。

話を聞く限り、ロストロギアの探索と確保が主な任務になるっぽいけど……。

「すまない、取り込み中だったか？」

さつきも聞いた、威圧するような声。

振り向くと、なのはさんが立っている。

「いえ、大丈夫ですよ」

八神二佐がそう返事をする、なのはさんはこちらに歩いてきた。今身に着けている制服は、教導隊のもの、青い部分を黒に変えたものの。

「つていうか、なのはさん教導隊所属じゃなかったの？」

「まずは試験の結果だ、二人とも技術は問題無し、だが危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えているな」

あちゃー・・・・・・・・・・やっぱりまずかったか。

「自分とパートナーの安全や、規則を護れない魔導師が、人を護るなどおこがましい」

・・・・・・・・・・そりゃ、そう、だよなあ。

「残念ながら、二人とも不合格だ」

淡々と告げられた事実には、あたしもティアも、俯くしか出来ない。やっぱり、やめておくべきだったかなあ、あれ・・・・・・・・・・。けど、なのはさんは『しかし・・・・・・・・』と話を続ける。

「二人の能力や技術的に考えると、次までの半年間Cランクのままというのはいささか危険だ・・・・・・・・・・というのが、わたしと試験官の共通見解」

「で、です！」

リン曹長はまだ今のなのはさんに慣れていないみたい。目を向けられて怯んでいたし・・・・・・・・・・。

一方のなのはさんは、あたし達に二つの封筒と一つの紙を渡してくれた。

「特別講習の参加申込と、推薦状だ、これを持って、本局武装隊の三日間の特別講習を受ければ、四日目には再試験をうけられる」

「え、えつと・・・・・・・・・・」

あたしもティアも、ちょっと困惑気味だ。

そんなあたし達を見て、なのはさんは小さく息を吐いてから、

「一度厳しい環境に揉まれて、安全を一から学んで来い、そうすればBランクなど容易い」

「……やっぱり、根っこは変わっていないのかもしれない。目の前のなのはさんは未だに仏頂面だけど、なのはさんなりにあたし達のことを考えてくれているのが、なんとなく分かった。」

「ありがとうございます!!」

ティアと一緒に、頭を下げる。
すると八神二佐が、

「合格までは、試験に集中したいやろ？わたしへの返事は、試験が済んでからつてことにしようか？」

「す、すみません！恐れ入ります!!」

思わず二人で立ち上がって、敬礼した。

閑話休題。

「………でき、新部隊の話、ティアはどうする？」

中庭で一休みしていたあたしは、隣にいたティアにさっきのことを聞いてみる。

違っつてこと」

「・・・・・・・・・・そう」

ふいっと、ティアは顔を逸らしちゃったけど、あたしはまだ続ける。

「フェイト執務官にも、内心ライバル心メラメラでしょ〜？」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたものはないわよ、知ってるでしょ？あたしの夢は執務官だから、勉強できたらいいな〜ってだけ・・・・・・・・・・」

「だったら、やるうよ！あたしはとにかくいろんなことを吸収して、もっともっと強くなりたい！ティアは新しい部隊で、色んな経験つんで、自分の夢を、最短距離で追いかける！」

それに！

「当面はまだまだ二人で一人前扱いなんだからさ！まとめて引き取ってくれるの嬉しいじゃん！」

・・・・・・・・・・あれ？また寒気が。

「そーいうこというなあっ！何が悲しくて、どこにいてもあなたとコンビ扱いなのよ!？」

こゝ、今度はほっぺたと腰い!？」

やめやめやめっ！息苦しいって!!

free side

「なのはちゃん」

なのはが、上からスバルとティアナのやり取りを見ていると、後ろから声がかかる。

振り返ると、真剣な顔のはやてとフェイトがいた。

「なのはちゃん、4年も何やっとったん？何で連絡くれなかったの？」

「……何を聞くかと思えば、そんなことか」

はやてが一步前に出て、質問をぶつける。

が、なのはは詰まらなさそうに踵を返して、切り捨てる。

「っそんなことやあらへん！どれだけ心配しとったと思うて……」

『どつやら全員集まっているようね？』

はやてが叫んだ時、通信が開き、のほほんとした笑顔が写った。

するとなのはは即座に敬礼し、一瞬出遅れたはやて達も敬礼する。

『まずは、試験官お疲れ様、と言っておこうかしら?』
「恐縮です、提督」

のほほんとした笑顔　ミゼットは、なのはに労いの言葉をかける。
それから、はやてを見て、

『……色々聞きたいことはあるでしょうけど、まずは再会
を喜びなさいな』

「は、はい……」

「……提督、ご用件は？まさか労いだけではないでし
ょう」

『ええ、そうよ』

ミゼットは一度ほっほっほっ、と笑ってから、

『高町なのはは一等空尉、あなたには異動してもらっわ、行先は、そ
この八神はやて二等陸佐が指揮する、古代遺物管理部『機動六課』
ですよ』

「……は?」

やっぱり、とはやてはどこか複雑そうな表情をしたが、なのはは一
瞬目を見開く。

「……何も聞いていませんよ?」

『今言っただもの』

それから眉間に手をやった。

ミゼットは、笑いながら続ける。

『それと、これは決定事項、だから拒否できないわよ?』

「……………なにしてんだ、ばあさん」

なのはは頭を抱えてしまった。

『だって、わたしの手元にいる教導官といたら、あなたただかも』

再びほっほっほっ、と笑うミゼット。

なのはは盛大にため息をつき。

「……………関わりたくないって、あれほど言っていただろう……」

『だからこそ、よ』

しばらくにらみ合いを続ける、なのはとミゼット。

だがなのはがもう一度ため息をついたことで、それは打ち切られる。

「……………了解しました、ミゼット提督」

『それでいいのよ』

最後にまたほっほっほっ、と笑って、通信画面が消えた。

その夜、廃棄都市。

「出現の頻度、数、増えてきてんな？」

「うん、それに、動きも段々賢くなってるね」

管理局の制服を纏った男女が三人。

そのどれもが、なのはが纏っていた制服を身に着けている。

「でも、この程度ならまだ俺達でも抑えられるな」

「ああ」

「しょーじき、ド新人に任せるにはめんどい相手だけどなあ……………」

「しょうがないさ、いずれ俺達だけじゃ、手が足らなくなる」

三人そろって、ため息をついた。

すると、男の一人が、そういえば、と切り出す。

「なのは、新設される部隊に配属になったらしいぞ？」

「それって、八神二佐の……………」

「そう、機動六課！」

「……………何も、起こらなければいいんだけど……………」

第三話『機動六課』（後書き）

なのはさん激変な三話でしたWWW
それでは、お返事の部屋。

緑異様

そりゃあもう、180度がらつと変えてみましたWWW
イザナミはみじんも変化なしですよ。
強がっているかどうかは、今後をお楽しみにっ！

金色の戦姫様

別人28号WWW

口調は確かにシグナムさんっぽいですが、バリアジャケットはシユ
テルさんじゃないですよ。
能力関係は、ちょっと変更が……。

次回、集結するエース達、そこにはなのはの姿もあった……。
それでは。

第四話ガジェット（前書き）

キーワードも二つ追加しました。

第四話ガジェット

新暦0075年4月。

遺失物対策本部、機動六課隊舎。

「うふふー、このお部屋もやっと隊長室らしくなりましたねえ」

部隊長室にて、専用の机とイスに座ったリインが、嬉しそうに回転する。

「そやね、リインのデスクも、ちょうどええのが見つかってよかったなあ」

「はい！リインにぴったりサイズですー！」

それにはやては微笑んで返し、リインもますますはしゃいだ。

と、そこへ来客を告げるブザー。

はやてが入ってくるよう返事をする、ガスが抜ける音とともに扉が開き、二人の人物が入ってくる。

「おっ！お着替え終了やな！」

「お二人とも素敵です！」

はやて達の言葉に、ニコニコするフェイトに対し、なのはは仏頂面のまま無反応。

三人は苦笑いをしたが、すぐに表情を引き締めて、

「本日ただいまより、高町なのはは一等空尉」

「フェイト・T・ハラオウン執務官」

「兩名とも、機動六課へ出向となります」

「どうぞ、よろしく願います」

背筋を伸ばし、敬礼をした後、フェイトとはやては笑いあったが。なのはは一礼すると足早にその場を去ってしまった。

その時、ちょうど部隊長室に入ってきた青年とすれ違つが、目もくれずに去っていった。

しかし青年はかなり驚いているようで、思わずなのはを目で追っていた。

それでも挨拶だけはきちんと行つようだ。

「グリフィス・ロウラン准陸尉であります！」

「すごい、グリフィスすごい成長したね、前はこんなに小さかったのに」

「その節は、どうも」

折り目正しく、グリフィスは一礼し、少し表情を曇らせてから、

「あの、先ほど出て行かれた方は……………」

「……………高町なのは一等空尉や」

「やはり……………何と言つか、変わられましたね」

グリフィスの一言に、はやてとフェイトは、何とも言えないような表情で、俯く。

ロービー。

はやてが挨拶しているが、いつくかの視線はなのには向かっていた。

あれ、高町教導官じゃないか

雰囲気も随分変わって……一体何があったんだ？

はやての挨拶を邪魔せず、かつ、ひそひそと言う声が響かないように努力しながら、隊員達は噂し合っている。

そんな隊員たちの様子を、スバルは複雑そうな表情で見つめていた。

「テストロッサ」

はやての挨拶の後。

フェイトと廊下を歩いていた女性 シグナムが立ち止まる。

「何ですか？シグナム？」

「……なのはこのことだが」

そう切り出した彼女の表情はどこか真剣で。
フェイトも思わず身構える。

「あの制服、おそらく『懐刀』のものだ」

「つええ！？」

シグナムの口から出た単語に、フェイトは思わず叫んでしまった。
咄嗟にフェイトの口を塞いだシグナムは、あたりに人がいないことを確認して、ほっとため息をつく。

『懐刀』

近年になって設立された、三提督直属の部隊。

人員はたった八人だが、一人ひとりが強力な力を備えているという。
メンバーが公表されていない上に、人数があまりにも少ないので、
幻のエリートチームと囁かれている。

「二年ほど前、その構成員を見たという人物から話を聞いてな、
なのは制服が情報と一致していた」

「じゃあ、四年も音信不通だったのは……」

「……おそらく、そこで何かあったんだろう」

早速訓練を始めるために、フォアード四人はなのはについていつている。

四人ともなのはの厳しい雰囲気、少し圧倒されているようだ。すると、そのなのは突然こちらを振り向いた。

「確認していなかったが、四人とも自己紹介は？」

「名前と、経験やスキルの確認はしました」

なのはの雰囲気は呑まれ、返事に詰まってしまったスバルをフォアードのようにティアナがそう答える。

「あと、部隊分けと、コールサインもです！」

ティアナに続けるように、赤毛の少年 エリオ・モンディアルが返事をし、隣にいた少女 キャロ・ル・ルシエも頷く。

なのはは小さく、「そうか・・・」と答えると再び移動を開始した。

閑話休題。

訓練施設前。

白地に黒という何ともシンプルな制服を着て、なのはは海を見つめていた。

いいところね、海鳴にも雰囲気が似てるし
「・・・・・・・・ああ」

海を見つめながら、なのはは呟くように返事をする。

「顔見知りもたくさんいるし・・・・・・・・護らないと

「・・・・・・・・当たり前だ・・・・・・・・！」

表情を険しくして、鋭い視線をより鋭くして、虚空を睨みつける。

「なのはさーん！」

そこへ後ろから声がかかった。

振り向くと、スーツケースを持ったメガネの女性が、こちらに駆け寄ってきている。

「・・・・・・・・シャーリー」

「はい！お久しぶりです！」

シャーリーと呼ばれた女性は、ニコニコしながら一礼した。

ふと、なのはが視線を横にずらすと、こちらに向かって走ってくるフォアードが見えた。

なのはは小さく頷いてから、四人を訓練スペースへ案内する。

それから、四人にデバイスを手渡してから、

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入っている、丁寧に扱え」

「それと」と、なのははシャーリーに視線を向けて、

「メカニツクのシャーリーから、一言」

「えー、メカニツクデザイナー兼、機動六課通信主任の、シャリオ・フィニーノー等陸士です、みんなはシャーリーって呼ぶので、そう呼んでね！」

シャーリーは一旦微笑んでから、

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々、訓練を見せてもらったりします、デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね！」

「それでは、早速訓練に入る」

もう一度人懐っこく微笑んで締めたのを確認してから、なのはは彼女にシステムを動かすよう指示。

シャーリーは元気良く返事をする、ウィンドウを開いてパネルを操作する。

「機動六課自慢の訓練スペース！教導隊完全慣習の、陸戦用空間シミュレーター！」

嬉しそうに、ウィンドウのメッセージを押すと、海上に鎮座する何もない鉄の板から、ビルが出現した。

「わあー！」

「すごい……」

何も無いと思っていたところが、都市に変わったのを見て、フォアード達は感嘆の声を漏らす。

「呆けている暇はないぞ、来い」

そんなフォアード達になのはが声を掛け、先行してスペースに入っていく。

それを見て、彼らも慌ててついていった。

「お前は参加しないのか？」

同じ頃。

屋上では、シグナムとヴィータが話をしていた。

シグナムの問いかけに、ヴィータは『否』を答えてから、

「四人ともまだよちよち歩きのひよっ子だ、あたしが教導を手伝うのはもう少し先だな」

「そうか」

「それに、自分の訓練もしたいしさ」

何処か真剣な表情で、ヴィータはこちらに背を向けているなのを見る。

「同じ分隊だからな……あたしは空でなのはを護ってやらなきゃいけないえ」

「頼むぞ……だが、なのはもなのはで、かなり腕を上げたらしい」

「……ああ」

ちょうどフォアード達のアップが終わったようで、なのはに次の指示を仰いでいるのが見える。

「……何があったんだ、なのは」

side スバル

『……よし、全員聞こえるか？』

「はい！」

耳元で、なのはさんの声が聞こえる。

いよいよ訓練本番……頑張らないと！

『じゃあ、早速ターゲットを出していく、まずは八体から』

通信の向こうで、なのはさんとシャリーさんの会話が聞こえた後、カプセルのようなロボットがあわられた。

『わたし達の仕事は、搜索指定ロストロギアの保守・管理、そのために戦うことになる相手だ』

胴体部分の中央にはレンズが付いている。

多分、攻撃方法はレーザー、かな？

『自立行動型の魔導機械、これは近づくと攻撃してくるタイプだ』

ホログラムだって分かっているのに、やっぱり気が引き締まってくる。

『攻撃は結構鋭いぞ………それでは、第一回模擬戦訓練、逃走する目標を破壊、あるいは捕獲、15分でやれ』

「はい！」

『それでは………』と、なのはさんが一旦区切って、

『ミッションスタート!!』

時空管理局本局。

一角の、とあるオフィス。

「レリック？」

「こそ、古代文明の時代、何らかの目的で作られた超高エネルギー結晶体」

「見た目こそただの宝石だけど、暴発したときの破壊力はかなりのものだよ」

数人の男女が、開いているウィンドウを中心に会話している。

「過去に四度発見されて、その内三度は周辺を巻き込む大災害を起こしてる………ってさ」

「んで、その内二件では、製造プラントらしき施設が発見されてる

と……」

「ってことは、主犯は技術者か、それに明るいい人間ってか？」

問いかけられた女性は、コーヒーを一口飲んでから、

「だろうね、しかもそれらは災害が起きた後、まるで痕跡を消すようにして破棄されてるから」

「広域次元犯罪の可能性が高いと……」

「さらに、そのレリックを収集しようと動き回ってるのが」

コーヒーを飲んだ女性とはまた別の女性が、新しいウィンドウを開く。

「ガジェット・ドローンだったか？」

「ん、特定のロストログアの反応を搜索し、それを回収しようとする、自立行動型の自動機械」

「めんどろなのが出てきたなあー」

そこへ、コーヒーを飲んだ女性と瓜二つの男性がせんべいなどのお茶菓子が入ったトレーを持ってくる。

「にしても、なのはちゃんとこのフォアードって、新人ばっかでしょ？大丈夫なの？」

「というか、バックヤード、隊長、副隊長共にS超えてんのに、なんでフォアードだけ新人？」

「だからこそ、フォアードが新人なんだよ、エースぞろいの隊長達に、エリート揃いのバックヤード、そこにやり手のフォアードを入れてしまえば、明らかに過剰戦力だ」

「それに、新人達に関しては教導官資格持ってるのはがいるし、その気になれば短期間で使い物になる、だから大丈夫だろ」

「ふーん……」

女性二人は感心した様子でせんべいをほおばった。

「てか、その資料どこで手に入れたんだ？」

「無限書庫にハッキングして、コピーしてきた」

「え」

「貴重な資料とか収めてるのに、こんなんでいいのかな？」

side スバル

「うおおおおおおっ！！」

手始めに、ターゲットであるロボット　　ガジェットに向けて、ナツクルから衝撃波を撃ってみる。

けどあいつらはそれを易々と避けて、逃走を続行した。
つてか、

「何これ、速っ！」

このスピードだと、今のあたしじゃ矢を当てるのはきついなあ……

と、ガジェットの進行方向に、エリオがいた。

「でりゃああああっ!!」

エリオはレーザーを避けてから飛び上がると、ストラダを振って斬撃を飛ばす。

けど、ガジェットはそれすら避けて、逃げていった。

ふわふわ避けるし、結構厄介な相手だなあ……もう!

「(前衛二人、分散しすぎ!ちょっとは後ろのこと考えて!)」

「(あ、はい!)」

「(ごめん!)」

しまった、攻撃に集中しすぎて、ティア達のが頭になかったよ……。

エリオと一緒に追跡していると、ティアの魔力弾がガジェットに撃たれた。

パツと見た感じ、強化されてるみたいだ。

これならさすがのあいつらも……。

けど魔力弾は、ガジェットに当たる寸前に消える。

………って、ええ!?

「バリア!?!」

「違う、フィールド系!」

魔力が消された!?

『そう、ガジェット・ドローンには少し厄介な性質があつてな、攻撃魔力をかき消す《アンチマジックフィールド》、AMF……』

』

なのはさんが説明を入れてくれるけど、そうしているうちにもガジェットは逃げていく。

っ逃がしてたまるか！

ウイングロードを展開して、追いかける！

「（バカ！危ない！）」

『それに、AMFを全開にされると・・・・・・・・』

進行方向に伸びているウイングロードが、消えていく。

っしまった、ウイングロードが！！

宙に投げ出されてビルに叩きつけられたけど、何とか着地。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる』

あいたあ・・・・・・・・説明最後まで聞くんだった。

『ナカジマ、大丈夫か？』

「はい、なんとか」

『まあ、訓練中では、みんなのデバイスにちよつと工夫をして、擬似的に再現してるだけなんだけどね、でも、現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ』

そうなんだ・・・・・・・・。

『対抗する方法はいくつかある、迅速に考えて、迅速に行動しろ』

対抗する方法・・・・・・・・そう言えば、AMFって発生した効果までは消せないんだっけ？

例えば、天候操作魔法で作り上げた雷とか、魔力で撃ち出した小石とか・・・・・・・・。

だったら………!

「(スバル!いくつか試したい方法があるの)」

「(あたしもある、エリオ!あいつら逃がさないように先行して、足止めできる?)」

「(あ、えつと……)」

「(試したいことがあるの、ティアも何か考えてるから、時間稼ぎ!)」

「(……やってみます!)」

「へえ、みんな良く走りますね」

「………危なっかしくて叶わん」

「あ、はは………」

シャーリーも、未だに今のなのはになれないらしい。
ドスの聞いた呟きに、苦笑いしてしまう。

「………デバイスのデータは?」

「あ、はい!いいのが取れています、四機ともいい子に仕上げますよ」

「そうか」

素っ気無い返事に、シャーリーがまた苦笑いしたとき、通信が入った。
なのはがウィンドウを開くと、シグナムが写っている。

「……烈火の、どうした？」

『折り入って頼みがある』

「……何だ」

『新人達の訓練が終わってからでいい、わたしと模擬戦をしてくれ』

黙ったまま、何故？と聞いてくるのはに、シグナムは、

『4年も音信不通だったんだ、実力がどのくらいか見てみたい』

それと、

『飯にも味方なんだ、手札の一つくらい明かしてくれないと、どう動けばいいのか分からない』

しばらく考え込むのは、やがて小さく頷き、

「……わかった、だがあまり期待はするな」

『ありがとう』

ガジェットを、エリオと一緒に追い詰める。

エリオはストラーダに命じて、カートリッジをロード。頭上で回転させて、その勢いで足場を斬り付ける。破壊されたコンクリートの破片がガジェットに落ちて、土煙が上がった。

そこからガジェットが二体逃げていく。でも、そう簡単に、

「逃がさないよ!!」

まずはカートリッジを消費して、いつも通りガジェットに殴りかかってみる。

案の定、AMFが発動して、威力が出ない。

魔力での強化を良く使うあたしとしちゃ、厄介なことこの上ないけど………。

「ふっ！」

後ろにいたガジェットを足で捕らえて、地面に叩きつける。そしてナツクルを打ち付けて、ギアを回転させる!!

「うりゃあああああっ!!」

いくらガジェットでも、こんな至近距離じゃ、AMFを発動する暇ないよね!

と、別の方向から爆発音。

魔力からして、多分キャロがつれてたフリード……だっけ? それだと思っ。

見てみると、熱の余波でガジェットの動きを止めたみたいだね。

「我が求めるは、戒めるもの、捕らえるもの、言の葉に答えよ、鋼

鉄の縛鎖……！」

キャラの詠唱が聞こえてくる。

これは……何かを呼んでる？

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！」

魔方陣が展開されて、鎖が伸びてきた。

なるほど、無機物操作と組み合わせてる感じ？

ティアと同じく、器用な子だなあ。

「（スバル！上から落とすから、そのまま追ってて！）」
「おう！」

そのティアから指示だね！

さって、いっくよー！！

「魔力弾？AMFがあるの？」

いいえ、通用する手段があるわよ

「……ああ」

『二人』の言葉に、シャーリーは画面を除いて経過を見守る。

『二人』？

「あの、なのはさっ……」

問いかけるシャーリーだが、こちらに背を向けたまま威圧するなのはに気圧され、諦めた。

ティアがいるところを通り過ぎるとき、一瞬魔力を薄い膜でコーティングしているところが見えた。

フィールド防御を突き抜ける、多重弾核射撃だね。さすがティア！AAのスキルを使うなんてさ！！

「ヴァリアブルツシュート！！」

オレンジの弾丸があたしを追い越して、ガジェットを一気に三つも葬った！！

「ティア！ナイス！！」

「（うるさい……このくらい、とーぜんよ……！！）」

通信では相変わらずこっちに檄を飛ばしてくるけど。

多分向こうでは、結構疲れてるんだ。

うっし、残りはあとわずか。

そろそろあたしの試したいことも……

「やりますか！」

弓の方のカートリッジをロード。

A M Fは魔力は消すけど、結局はそれだけ。
発生した効果までは打ち消せない！（例えば、天候操作魔法で生み
出された雷とか、魔力で打ち出された小石とか）
矢を撃たずに、そのまま地面に叩きつける！！

「茂みの、刺っ！！」

地面で発生する爆発。

ガジェットはA M Fで防ぐけど……。

口元が上がるのが、自分でも分かる。

ガジェットに当たったのは、あたしが放った攻撃じゃなくて。

その攻撃で生まれた、コンクリートの破片ッ！！

あれから何とかターゲットをオルクリアして、重い体を引きずりながら集合場所に移動していると、シグナム副隊長とすれ違った。しかもバリアジャケットを着ているので、何事かと思ってしまう。

「あの、シグナム副隊長、どうしてこちらに……?」

エリオが恐る恐る聞いてみる。

するとシグナム副隊長は、どこか嬉しそうに振り返って、

「なのはと模擬戦をすることになった、この四年の間、どれだけ強くなったのか気になってな!」

「は、はあ……」

「……なんだろう、内面ではすごく楽しみにしてるっばい。」

戦闘狂つてみんなこうなのかな?

でも、なのはさんの模擬戦、かあ……ちよつと興味あるかも。

と、そこへシャーリーさんが来て、

「みんな、なのはさんから伝言だよ!」

伝言?なんだろ……。

「『ちよつどいい機会だ、わたしはともかく、シグナム二尉は指折りの実力者、技術をしっかり見学するように』だそうよ」

模擬戦を見学!? やった!

なのはさん、どんな戦い方するんだろっなあ………！

第四話ガジェット（後書き）

というわけで、原作三話でした。
前にも言いましたが、この小説でのスバルは転生者なので、原作より大人しかったり、賢かったりします。

緑異様

長期休暇にも入ったので、バリバリ元気です！！

シグナムとの会話の際には、区別付けられるよう頑張りたいであります、サー！！

金色の戦姫様

根っこはみじんも変わっていませんよww

空也達が局に入ったかどうかは今後に期待ということ。

それと・・・甘い原作なのはさん！ 闇夜のドレスッ！

ふははははっ！この世界においてわたしに不可能なdぐふあっ！

ばっばかな！？魔法も物理も通さぬ壁を貫通しただと！？

おのれ、管理局の白いエースはバケモノか！？

仮面なのは「……………」

って、うちのなのはさん何でここに！？いかん、SLBが！逃げ

仮面なのは「……………」バキィッ！

は、弾き返したあっ！？

仮面なのは「……………」シグナムとわたしが無骨はどうかは、この際おいておこう、それと、確かにSLBは火力も半端ないし、防御も突き抜けるが、それだけだ、力点をうまく利用すれば、この程度、容易い」

……………原作より、こっちの方がまお

幾千の呪言！

アーツ！！

次回は、シグナムVSなのは。
それでは。

第五話模擬戦、VSシゲナム(前書き)

今回ちょっと短いかもです。

8/20:ちよつと修正

第五話 模擬戦、VS シグナム

side キャロ

わたしたちが、ガジェットとの戦闘を終えると、シグナム副隊長が訓練スペースに入ってきました。

何でも、あのなのはさんと模擬戦をするらしいんです。

なのはさんのことはあまりよく分からないんですけど、でも、スバルさんとかが話しているのを聞いていると、すごく強い人って言うのは分かります。

でも、シグナム副隊長もすごく強いらしいので、どっちが勝つのかは分かりません。

邪魔にならないように、訓練スペースの外、シャリーさんの隣に立って見学することになります。

……… いったいどんな試合が繰り広げられるんでしょうか？
ちよつと楽しみです。

side シグナム

「すまない、待たせたな」

新しく森林に設定しなおされた訓練スペースで待っていると、なのはが来た。

真っ黒なバリアジャケットをまとったその姿は、依然と違って気品のある雰囲気纏っている。

レイジングハートも随分変わったな。

杖ではなく槍の形になっており、刃は魔力ではなく、実体で出来ている。

「構わん、始めよう」

互いに構えあつて、開始の合図を待つ。

甲高いブザーの音。

それがなり始めるか、始めないかの内に、わたし達は斬り合っていた。

f r e e s i d e

金属音が不規則に響き、それでいて美しい舞踏が繰り広げられている。

現在、シグナムが攻めてなのはが防いでいる状況。

縦、横、斜め、突き、払い、持てる全ての攻撃手段を持ってして、

シグナムは攻撃を加え続ける。

「やっぱり、接近戦じゃシグナムに分があるみてえだな」

「ヴィ、ヴィータ副隊長!？」

スバルは、突然隣に現れたヴィータに驚き飛び上がる。

ヴィータは少し不機嫌そうな目を向けてから、目の前の試合を見つめた。

確かに、見た限りではシグナムが優勢のように見える。
が、

(なのは……明らかに強くなっている、攻撃が通らない!)
「っはあ!」

鋭い突き、なのはは体を横にそらして避ける。

重い縦一闪、半歩バックステップされることで避けられる。

斜め一闪、レイジングハートを上跳到ね上げることで阻止された。

と、ここでのなのはの胴体がから空気になる。

(しめた!)

と言わんばかりに、シグナムはすばやくレヴァンティンを引くと、再び突きを繰り出す。

が、次の瞬間、なのはは片手をレイジングハートから離すと、拳底でレヴァンティンを打ち落とした。

レヴァンティンの落ちる勢いに引っ張られて、シグナムの体が傾く。なのはの目が、細くなった。

「……………っ!」

流れるような動作でレイジングハートを持ち直したなのは、シグナムよりも、鋭く細やかな突きを繰り返した。

崩れた体制を立て直しつつ、シグナムはそれを必死で回避。

持ち直したレヴァンティンでも防ぐものの、なのはの猛攻はとまらない。

突きのみの単純な攻撃のみ、しかし、その全てが、

(左肩、右肩、両手、鳩尾、胸、太腿、足首……全て負傷すれば厄介な部分ばかりを狙っている！)

「……………っっ！」

ここで、シグナムに傷が付いた。

非殺傷設定のためミミズ腫れになっただけだが、それでも一撃は一撃。

(思考すら、隙になるか……………！)

シグナムは思考を打ち切り、なのはの攻撃をいなすことだけに集中し始めた。

「どーなってんだ、見覚えあると思ったら……………！」

その光景を見ていたヴィータが、ぽつつと呟く。

「なのはの攻撃、殺すことに特化してる動きだ……………！」

一方、試合は空中戦に展開していた。
桜と紫が残像を退いて、宙で何度もぶつかりあう。

「紫電一閃！」

炎を纏った剣が、なのはに振り下ろされるが、

「……………ブフ」

ぼそつと、何かを呟いた瞬間。

派手な水蒸気が上がったと思うと、爆発が起こった。

視界が塞がれるのを防ぐ為、シグナムはそこから離脱。

しかしその先には、突きの姿勢で待ち構えているなのはが……………

「……………ぐうっ!!」

シグナムは何とか弾き飛ばすと、なのはの手からレイジングハート
が落ちてしまう。

素手となってしまったなのはに、シグナムは容赦なく一撃を入れた。
……………はずだった。

「なっ!？」

振り下ろされた剣は、合掌の形で受け止められていた。

所詮、白刃取りと言うやつだ。

一瞬呆けてしまったシグナムに、隙が出来る。

なのははそれを見逃さず、再び拳底を繰り出して、顎に命中させた。
大きく体制を崩した所に、今度は膝蹴りを見舞った。

それでは終わらず、最後に体をひねって、シンプルな蹴りを放つ。

だがそこでシグナムは姿勢を元に戻すと、レヴァンティンを下から上に薙ぐ。

なのはは体を逸らし、顔を跳ね上げてかわすが、髪が数本。はらはらと落ちていった。

再びがら空きになるなのはの胴体。

シグナムは雄叫びを上げながら、容赦ない横一闪を繰り返した。

咄嗟に防御の体制をとるなのはは、腕にそれを受けて、地に落ちる。

s i d e ティアナ

………どうなってんのよ!?

確かスバルから聞いたなのはさんの戦い方って、砲撃中心だったはずよね!?

それが何でシグナム副隊長と互角で、しかも素手でも対抗出来るワケ!?

雰囲気といい、威圧感といい、戦い方の激変といい。

スバルと再会するまでの間、何があったの………!?

f r e e s i d e

地面に被弾したなのはに追い討ちをかけるべく、一気に急降下するシグナム。

大分薄れているものの、未だに土煙が登っている箇所へ急接近する。その時、

「『二人』とも、狙いを外すなよ？」

『All right, my master』

任せて！

煙と枝の間。

レイジングハートを構え、背後に何かの影を従えて、こちらに狙いを定めているのが見えた。

シグナムは咄嗟に急降下を中止、レヴァンティンに命じカートリッジを消費して、連結刃に変形させる。

刃それぞれに炎をともし、上から攻撃した。

一方のなのは慌てる様子を見せず、レイジングハートを構えたまま、

「ドットアビリティ」

フリージングバスター！！

デイベインバスターに氷属性が付与された砲撃が、連結刃を迎え撃つ。

高熱の炎と、凍てつく氷がぶつかり合い。

再び、水蒸爆発が起きた。

シグナムは煙に視界を遮られ、警戒し動こうとしない。

「……………エクセリオン」

レヴァンティンを構えたまま、なのはがいた方向を見つめると、

「ストライクッ!!」

レイジングハートが、投降されてきた。

あまりの速さと鋭さにシグナムはそれを防ぎ損ねて、叩き落とされる。そして地上に落ちると同時に、

「……………っ!」

「……………」

なのはがシグナムに馬乗りして、首にナイフを突きつけていた。

s i d e スバル

夕方。

ロビーで寛ぎながら、昼間の模擬戦を思い出す。

そりゃ、なのはさんとシグナムさんの戦いはすごかった。
……けど、気になったのは、ヴィータ副隊長の、

『殺すことに特化している』

つていう発言。

そういわれてみれば確かに、なのはさんの攻撃は急所を常に狙っていた。

急所とかじゃなくても、肩とか足とか、手首とか、負傷すれば戦いにくくなる場所を重点的にしていた気がする。

そんなところを怪我したら、誰だつて動けなくなる。

動けるかもしれないけど、武器とか、普段の戦い方がやりにくくなるのは確かだ。

……なのはさん、四年の間にどんな経験をしてきたんだろ？

まるで、何かをやるために何かを捨ててきたような……。

新人の子、みんないい手応えねえ

「……………」

なのはの自室。

何かの書類仕事を行っているなのはの隣で、カードから半身を出した少女が、脇においてあった固形の栄養食品を頬張っている。

みんな、立派になるといいんだけどね

「……なるんじゃないくて、するんだ」

ま、それがわたし達の仕事だし？

やがて作業が終わったのか、開いていたウィンドウを操作して嚴重にロックをかけ、閉じた。

小さくため息をついてから、上着をソファにほっぺりだして、ベッドに倒れこむ。

今日はないといいんだけどね、『襲撃』

「……こちらの都合など考えんよ、あいつらは」

それもそうかあ

諦めたようなため息を『二人』してついて、完全に部屋の明かりを消した。

布の中に体を埋めて、目を閉じる。

安らかなそれは、どこかあどけないものを感じさせた。

小さい頃は一人でいる時間が多くて。

寝るときに誰かが側にいるなんてこと、まず有り得なかった。

だから、一人で寝るのは当たり前で。

今でも、それは変わらない。

大丈夫、独りぼっちにはなれている。

これまでも、これからも。

第五話模擬戦、VSシグナム（後書き）

そんなこんなで、VSシグナムでした。
なのはさん四年の間に『色々』あったんで、接近戦もやり手な設定。
さて、それではお返事の部屋。

栖こんぶ様

初めましてw

180度変わったなのはさんの戦い方は、とりあえずこんな感じになりました。

もちろんティアナの失敗やヴィヴィオにはバリバリ関わりますよw
あと、指摘してもらった場所は修正しておきますね、ありがとうございますw
ございました。

金色の戦姫様

はい、P3のニクスアバターから取ってきましたw w

仮面なのは「ちょっと待て、わたしはそんな技習得した覚えは無いぞ？あと、自分を受け入れておらん平行世界のお前が何故ペルソナを使う？」

さて、次回の八つの仮面はあゝ？

スバル、ローラーを壊す。

フォアード、デバイスを手に入れる。

六課、初任務！

次回もお楽しみに、うふふふ。

……某国民アニメ風にやってみたりw w

第六話ファーストアラート(前書き)

書き上げたどおーっ！

第六話ファーストアラート

新暦0075年、5月。

AM5:45。

「んーっ！」

機動六課、隊員寮。

目覚めたスバルは大きく伸びをすると、あくびを一つ。

同時に起きていたらしいティアナとともに、歯磨きをする。

そこへ、

「おはようございます」

「あ、おはよう」

「おはよ」

キヤロが合流し、談笑を交えはじめる。

一方エリオはストレッチを行なっていた。

と、頭上からフリードが降りてきて、一人と一匹が挨拶を交わす。

四人が機動六課に配属されて二週間。

本出勤はまだなく、朝から晩まで訓練付けの毎日である。

閑話休題。

そのころ、訓練スペース。

早くに目が覚めたらしいなのは、パネルを操作してフィールドを作っていた。

決定のパネルに触れ、現れた空間を確認して、小さく頷く。

「おはよー!!」

「おはようございます!!」

スバル、ティアナ、キャロの三人はエリオと合流。
ここでも談笑しながら、訓練スペースを目指す。

「よし、整列!!」

なのはの号令に、四人が集まった。
全員服や顔に砂埃や泥をつけ、肩で息をしている。
なのはは、四人の息が整うまでの少しの間黙り込んでから、

「それでは、本日の早朝訓練のラスト一本、いけるな?」

「はい!!」

少しばかり威勢がなくなっているものの、やる気を十分に感じさせる返事。

なのはは頷いてから、

「では、シュートイベーションを行う」

手にした愛機レイジングハートを構えて、自身の周囲にスフィアを展開した。

「わたしの攻撃を5分間被弾なしで回避しきるか、わたし自身に――撃入れればクリア」

「ちなみに」と、なのはは戦闘体制を取り、

「誰か一人でも被弾すれば最初からやり直した、気合入れろ」

「みんな！このボロボロの状態で、攻撃全部裁ける自身は！？」

魔力弾の嵐を掻い潜りながら、ティアナが声を張り上げる。

「ない！」

「同じく！」

それに、起動力を活かして避けるスバルとエリオが即答した。

「じゃあ、なんとか一発いれよう！」

「はい！」

「全員、撤退回避！」

ティアナが号令を飛ばし、四人とも別方向に散る。

全員がなのはの視界から消え去る。

なのはは慌てる様子を見せず、周囲を警戒。

動きは、すぐにあった。

「うおおおおおっ！」

後ろから猛スピードで迫るスバルを確認。

さらに離れたビルからは、ティアナがこちらに狙いを定めている。

「……………アクセルッ！」

すぐに指を振り近くに待機させていたスフィアを発射。

二つともスバルとティアナを撃ち抜くが、手応えは無い。

「……………ティアナか、見事」

そう呟きながら、振り向きざまにシールドを展開。

本物のスバルの拳を受け止め、さらに先ほど放ったスフィアを再びスバルに撃つ。

スバルは間一髪のところまで気付いて回避。

一度体制を崩すものの、立て直して逃走を始めた。

弓で牽制しつつ、ティアナに念話を飛ばす。

「（ティアナ、援護！）」

「（分かってる！）」

念話を受け取ったティアナはアンカーガンを構え、チャージを始める。

しかし、放つ寸前だったそれは突然掻き消えた。

「ちよっ、こんな時に……………!!！」

苛立たしげにしながらも、空薬莖を捨て、新しいカートリッジを装填。

改めてチャージしなおし、弾丸を二つ、なのはに向かわせた。なのはは追尾性能のあるそれを回避し、スバルを追っていたスフィアの動きが鈍る。

「っそこ！」

スバルは振り向いて、弓から魔力弾を発射。

追って着ていたスフィアを撃ち落した。

ティアナの追尾弾と、フリードの火炎放射を掻い潜るなのはは、こちらに狙いを定めているエリオとキャロを発見。追撃すべく、接近する。

「エリオ、今！」

ティアナの叫び声を合図に、エリオが振りかぶる。

『Speerrangriff』

「でやあああああっ！！！」

ストラーダごと突進してくるエリオ。

それを見たなのはの口元が、少しだけ歪んだ気がした。

瞬間、爆音。

煙の中から離脱したエリオは、ビルに着地する。

「はずした!？」

思わずそう叫んだティアナだったが、

「いや、当たっている」

そう言っつて、なのはは自身の腕を指した。

「確かにバリアと通って、攻撃が当たった」

相変わらずの仏頂面だが、誉めてもらっているのは確かだ。
四人の表情が、明るくなった。

「それでは今朝はここまで、一旦集合しろ」

「はい！」

ジャケットを解除しつつ下りたなのはは、集合した四人に歩み寄りながら、

「大分チーム戦に慣れてきたな」

「ありがとうございます！」

もう一度仏頂面から出た誉め言葉に、四人の表情がまた明るくなる。

「ティアナの指揮も筋が通ってきた、指揮官訓練でも受けてみるか？」

「いや、その、戦闘訓練だけでいっぱいはいっばいです！」

なのはの誘いを、ティアナはやんわりと断った。

と、ここで、キャロの隣にいたフリードが、キョロキョロとあたりを見回し始める。

「何か、焦げ臭いような……?」

エリオの発言で気が付いたティアナが、スバルの足元に目をやり。

「スバル! あんたのローラー!」

「え? ああ!？」

なのはの視線を受けながら、スバルはローラーを外して、抱きかかえた。

「あちゃー、無茶させちゃった……」

「オーバーヒートか? 後でメンテナンスに見せておけ……. ティアナのアンカーガンも厳しいだろう?」

「あ、はい、騙し騙しです」

返事を受けてから、なのはは少し考え込み。

「……. 訓練になれてきたし、いい頃合だろう」

一人呟くと、顔を上げて、

「そろそろ、実戦用の新デバイスに切り替えよう」

「新しいデバイスかぁ……どんなものかな!？」

シャワー室に向かいながら、ティアナに話しかけるスバル。

「それ、何回目?もう少し落ち着きなさいよ」

ティアナはそれを呆れた様子で返しつつ、歩みを進める。

「でも、わたしも楽しみです!」

「でしょー!？」

ニコニコと笑いながら、キャロがスバルに同意。

ティアナは苦笑いしつつも、二人のやり取りを見守っていた。そうしている内に、目的のシャワー室に到着。

中に入るうとしたとき、ふと、話し声が聞こえた。

「……?」

「ティア？」

「どうかしました?」

突然立ち止まったティアナを、不思議そうに見る二人。

ティアナはそれにあえて反応せず、聞こえてくる声に耳を傾ける。

新人達、いい具合に実力上げてきたじゃない!

「……そうだな」

今日デバイス渡すんでしょ?あー、早くあの子らがセットアップした姿が見たい!!

「……………そう急がんでもいいだろう」
（……………なのはさん？）

しかし、もう一方は聞き覚えの無い声だ。

いいじゃない！いつの時代も新しいものってのは、見る瞬間
までワクワクするのが当たり前なの！

「……………そうか」

もう一人入っているのかと、ロッカーを覗き込むが、カギが外れて
いるのは一つだけだ。
頭にはてなを浮かべるティアナ。

（なのはさん、一体誰と……………？）

ティアナが思考を始めた瞬間、

「ティア、先に行くよ？」

「へっ？」

スバル達二人が、もう衣服を脱いでシャワーに向かっているところ
だった。

一瞬呆けるティアナだが、すぐに再起動して、さっさと進んでしま
うスバルを退きとめようと手を伸ばす。

伸ばすの、だが。

「わっ！なのはさん！？」

スバルの驚いた声が聞こえた。

(・・・遅かった)

なんてことを考えつつ、ティアナはスバルの元に駆け寄る。

「すみませんなのはさん！お邪魔しました！」

「・・・いや、いい」

シャワーを止めこちらを振り向いていたのはは、静かにそう答える。

「・・・わたしはもう出る、気にしなくていいから」

そう告げると、側にかけていたタオルで体を隠し、去っていった。

「・・・?」

その時ティアナは、なのはの鎖骨の辺りに白いものを見た。スバル達とシャワーを浴びつつ、そのことについて考えていたが。

(もしかして、古傷・・・?)

結論が出たのは、デバイスルームに移動している時だった。

「……………何やろうな、この預言」
「わたし達も調査しているのだけれど……………まだ解明は出来ていないの」

聖王教会、騎士団騎士『カリム・グラシア』の執務室。

部屋の主であるカリムに呼び出されていたはやては、数枚の紙を見つめて唸っていた。

古代ベルカ語で書かれた文章は、こう綴られている。

世界の鍵をめぐり、転生せし者達は戦う

あるものは欲から、あるものは善から

願望機と称される、鍵をめぐって殺しあう

迎え撃つは鍵自身

善きも悪しきも滅ぼす己を呪い

鍵はただ仮面をかぶり続ける

「最初の三行については、今各地で起こっているらしい『バトルロワイヤル』で間違いなさそうやね」

「ええ……………」

『バトルロワイヤル』。

新暦0072年に突如勃発し、現在も続いている、転生者同士の殺し合い。

始まった当初は、一般人も巻き込んだ激しい戦闘が行われていたが、現在は無人世界にその現場を移している。

どうやら、ルールに変更があったらしい。

何が目的かは不明だが、最近の調査では『鍵』と呼ばれるものをめぐった争いであることが判明している。

「特に、第45管理外世界『レオンハルト』で起こった大戦は、惨いもんやった」

「そうね……地域住民が何人も亡くなった、忌むべき出来事……」

当時の現場と映像を思い出しながら、苦い表情になる二人。
はやては振り払うように頭を振って、

「とにかく、今は目の前の問題をどうにかする！ガジェットの新型も出てきた見たいやし、気合入れんとな！」

「ふふっ、頼もしいわ」

ぐっと拳をにぎったはやてを見て、カリムは微笑を浮かべた。

side スバル

「悪い、待たせたな」

「なのはさん！」

あたし達がデバイスを受け取って、一通りの説明を受けた頃。
なのはさんがデバイスルームに入ってきた。

リン曹長が飛び出して、なのはさんに文字通り飛びつく。

「……うん、さすがに二週間もあれば慣れるもんだね。
あのなのはさんに躊躇無く飛びつくなんて……。」

そのすぐ後に、改めてデバイスについての説明があった。

なんでも、今の段階では、出力リミッターがかかっているらしい。
段々ならしてから、フェイト、なのは両隊長と、シャーリーさん、
リン曹長の判断で、ちよつとずつ解除されるんだって。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にもかかっていますよね
？」

「そうだな、ただ、わたし達の場合、デバイスだけでなく本人も、
だが」

ティアの質問に、なのはさんが丁寧に答えてくれた。

「……っていうか、ええっ!？」

「何を驚く?ここの隊長、副隊長はみんなかかっているぞ」

「部隊ごとに保有できるランクの総計規模が決まっていますからね
え……。」

「一つの部隊でたくさん優秀な魔導師を保有したい場合、そこに
うまく収まるように大きな出力リミッターをかけるですよー」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

へえ……。

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直属の上司の力り

ムさんか、部隊の監査役クロノ提督の許可がないと解除できませんし、許可は滅多なことじゃ出せないそうです」

「……………それって、万が一の時に、咄嗟に本気を出せないってことだよな？」

結構危険な気が……………。

「あ、スバルのリボルバーナックルと弓は、シンクロ機能もうまく設計できてるからね」

「ほんとですか!？」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといた」
「！」

「わあ！ありがとうございます！」

「一々手動で脱着するのは手間がかかったから、その機能は正直助かる!!」

心がわくわくしていた時だった。

甲高い音が響いて、一気に気が引き締まる。

「アラート……………!？」

「一級警戒態勢!!」

「ロングアーチ！」

真剣な表情になったのはさんが叫ぶと通信が開いて、グリフィス准陸尉が出てきた。

「はい！教会本部からの出動要請です!!」

「状況は!？」

『こちらはやて！教会騎士団が追っていた、レリックらしきものが

見つかった！場所はエイリム山岳丘陵地区、対象は、山岳リニアレールで移動中！！」

『移動中って……まさか……！！』

「ガジェットあたりに乗っ取られたな……！！」

現在、ヘリで移動しながら、さつき受け取った情報を整理する。

山岳地帯を移動中のリニアレールは、ガジェットにコントロールを乗っ取られている。

車内にいるガジェットは、最低で30、大型や飛行型の未確認タイプの可能性もあり。

あたし達の任務は、ガジェットを討伐して、レリックを回収すること。

いきなりハードな任務になっちゃったけど……やるしかない！

「よろしく頼むよ……！！」

さつき出会ったばかりの相棒を、握り締めた。

第六話ファーストアラート（後書き）

そんなこんなの原作4話でした。
それではお返事の部屋。

金色の戦姫様

こめかみに銃を突きつけるアレですね。
下手したら自殺行為に見えるんだから注意が必要だと個人的に思います。

あと、合体させたらなにができるかな！？かな！？

栖こんぶ様

殺伐とした現場を潜り抜けてきたんですよ。
根っこは変わっていませんが、このなのはさんは押し込めまくってますから。

フェイトさんとも別部屋ですね。

あと、リミッターについては後日ちゃんと説明しますよ〜w

次回、とにかく暴れます。
それではw

第七話初任務（前書き）

お待たせしました、第七話です。

第七話初任務

竜召喚は、危険な力

人を傷つける、怖い力……！！

へりの中。

緊張した面持ちで、初陣を待つフォアード四人。

なのはも先ほどから何も言わない。

ハッチ内部の手すりを掴んで、ただただ外を睨みつけている。

空気が引き締まり、ピンと張り詰めていた。

と、ここで、けたたましいアラートが再び。

「ロングアーチ！」

『はいー！』

なのはが一声上げると通信が開き、アルトが顔を出した。

『航空型のガジェットが、現地搜索隊を捕捉！そちらに向かっています！』

「うち……仕方ないか……」

小さく舌打ちしたなのはは、操縦室に顔を向け、

「ヴァイス！わたしが出る、フェイト隊長と二人で空を抑える！！」

「うっす！お願いします！」

ヴァイスは親指を立ててにかつと笑い、ハッチを開けた。

風が吹き込み、髪が踊る。

なのはは臆することなく、ハッチに向かう。

「わたしは行くが、心配することはない、ガジェットくらい倒せるだろう、だが気は抜くな」

いつにも増して真剣な表情でそう告げるなのははに、三人が勢い良く返事をした。

キャラはワントンポ遅れて、答える。

何か思うところがあるのだろうか、他のメンバーと比べて、いささか表情が硬い。

それに気がついたのか、なのはは東の間キャラを見てから、歩み寄った。

視線を合わせるためにしゃがみ、じっと見つめる。

「あ、あの……」

「……キャラ」

戸惑うキャラロに対して、

「怖いか？」

そんな質問をぶつけた。

瞬間、キャラロの目が大きく見開かれ、フリードを抱く手に力が籠る。フォアード三人も、かなり驚いていた。

「あの、なのはさん！今はそんなこと言ってる場合じゃ……！！」

「悪いが黙れ、わたしはキャラロと話をしている」

ティアナの反論をバツサリ切り捨て、なのははもう一度、まっすぐキャラロを見つめる。

「もう一度聞く、怖いか？」

「……………あ……………の……………」

口には出さないものの、見るからに震えているキャラロ。

恐怖していることは一目瞭然であるが、なのははキャラロが口を開くまで待っていた。

「……………怖い、です」

やがて、キャラロは咳くようにこぼす。

「どろして？」

「……………わたしは……………まだ……………フリードをうまく制御できないから……………だから……………！！」

震えながら、ぼろぼろと涙をこぼすキャロ。
対するなのはため息を一つつくと、立ち上がって。
キャロの頭を、撫でた。

「それでいい」

「……え？」

その時キャロは、なのはが一瞬だけ穏やかに笑ったのを見て、呆けた。

キャロが知る限り、高町なのはという人物は、仏頂面が基本だったはずである。

当の本人は、言いたいことを言ったからなのか、ハッチに近づいた。バリアジャケットを纏い飛び出そうとして、「そうそう」と、再びこつちを見る。

「わたしも、たまらなく怖いよ」

「……え？」

さらっとそう言い放ち、今度こそ飛び出していった。

『あの』なのはの意外な一言に、一同はしばらく固まっていた。

『同じ空は久しぶりだね、なのは』

『……………フェイト隊長、私語は慎め、任務中だ』

なのはが飛んでいると、フェイトから念話が飛んできた。

その間にガジェットに接触したので、次々破壊しながらそう指摘。

通信の向こうで、フェイトは苦笑いしているようだ。

なのはは慣れた手つきでレイジングハートを回転させ、その勢いで来るガジェット全てを向かえ撃つ。

フェイトも負けじと、カートリッジを消費。

鎌の刃を飛ばして、ガジェットを切り裂く。

「……………あまり時間はかけたくない……………」

ぼそっと、なのはが呟いた瞬間。

フェイトのものではないプラズマが走り、いくつかのガジェット編隊を簡単に破壊した。

「うおおおおおっ！！」

バキンっと。

スバルが殴りつけたガジェットから、まずい音がして。

彼女が離れると同時に爆発する。
壁を走りぬけ、ガジェットに接近。

「リボルバー……！！！」

大きく拳を振りかざして、

「シュート！！！」

叩き込んだ。

が、勢い余って爆風に吞まれ、外に放り出される。

しかし、彼女の新しい相棒　マツハキヤリバーが一瞬煌くと、ウイングロードが展開した。

スバルは何とかそれに乗って、車両に着地する。

それから、感心したようにため息をついて、マツハキヤリバーを見つめた。

「うはぁー……マツハキヤリバー、お前すごいよ！加速とか、グリップコントロールとか、申し分なし！」

『Because I was created to more strongly send you faster（私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから）』

その返答にスバルはふっと微笑んでから、

「お前はAIとはいえ、心があるんでしょう？　だったら言い方を変えよう　お前は、あたしと一緒に走る為に、生まれてきたんだよ」

『I feel it for the same meaning（同じ意味に感じます）』

「もーっ！　違うんだよ、色々と！！！」

スバルは今度は苦笑いしてから、前に進む。

『スターズ1、ライトニング1、制空権獲得!!』

『スターズF、4両目で合流!』

なのはは、ロングアーチの管制を聞き、教え子達がうまく立ち回れていると悟って、ほっとする。

周囲を見渡すと、綺麗な青空が広がっていた。

しばらくじっと見ていたが、やがて顔を背けると、後ろに立っていたフェイトと向き合う。

「……………ねえ、なのは」

どこか疑っているような表情で、フェイトが口を開いた。

「さっきの雷は何？なのは、魔力変換なんて持ってなかったよね？」

「……………」

だんまりを決め込むのは。

フェイトは少し声を大きくする。

「あのペルソナって奴の能力なの？……………どうしてそんな

力使うの？それがなかったら、なのはは……！」
「少し、黙っててくれないか」

遮るように、なのはは言い放った。

鋭い視線は、フェイトを射抜いている。

一瞬怯むフェイト、だが一旦唇を噛み締めてから、

「……………なんで、四年も連絡くれなかったの？」
「……………」

依然、なのははだんまりだった。

「……………なのはが、そんな性格になったことと、関係あるの？この間のシグナムとの模擬戦だって、ナイフとか使ってたし……」
「……………」
「……………強いて言うなら」

瞳を閉じて、なのはが口を開いた時。

『ライトニングF、八両目突入……………っエンカウント！新型です……！』

エリオとキャロの目の前、巨大な球体のガジェットが鎮座していた。コードをくねらせ、ただじっとこちらの様子を窺っている。そして、突然ベルトを伸ばしてきた。

二人はそれを飛んで回避、キャロはすぐに魔方陣を展開する。

「フリード、ブラストフレア！ファイア！」

「キユクーツ！」

迫るベルトに臆せず、キャロはフリードに指示。

フリードは火球を発射したが、ベルトがうねって弾き飛ばされる。

「おおりゃああああああっ！！！」

次にエリオが攻撃。

ストライダーの刃にプラズマを纏わせると、渾身の力でたたきつけたが、

「か、硬っ……！！！」

装甲はかなり頑丈に作られているらしい。

エリオの斬撃をもつともしない。

すると、ガジェットから何らかのオーラが湧き出てきた。

それはかなり広い範囲に広がり、二人が行使する魔法を打ち消す。

「AMF!？」

「こんな遠くまで……！！！」

魔力を消されたとなれば、二人はただの子ども。

エリオはガジェットに押され、苦い表情を見せた。

「あ、あの………!」

「大丈夫、任せて!」

心配そうに、キャラが声をあげる。

エリオは苦し紛れにそう答えるが、どう見ても大丈夫には見えない。その時、ガジェットは彼に狙いを定めていた。

「………つ!」

無機質なレンズが自分を捕らえていることに気付いたエリオは大きく跳躍。

同時に発射されたガジェットのレーザーも、彼を追って天井を焼き切った。

「つぐあ!?!」

着地したところを狙われ、エリオはベルトで叩きつけられる。壁に激突し、走る痛み顔に顔を歪ませた。

「………つ!」

不意に、キャラは過去を思い出す。

君は、どこに行つて、何をしたい?

フェイトに引き取られた日、雪が降る中で、聞かれた言葉。

その質問に戸惑ったのを、良く覚えている。
自分の前にはいつも、自分が行っちゃいけない場所があつて、
自分がしてはいけないことがあるだけだったから。

「うああああっ!」

「.....!?!」

現実に戻る。

エリオがガジェットに捕らわれて、空に放り投げられる。
それを目の当たりにしたキャロは、

「.....っ!」

ただ、飛び出していた。

思い出すのは、六課での日々と、先ほどなのはの言葉。

それでいい

いつも素っ気無くて、ちょっと近寄りがたいけど。

あの一言には、とても、勇気付けられた。

宙で、気絶したままのエリオを抱きしめる。

『ライトニング4、飛び降り!?!』

『あんな状態からのリカバリーって……!!』

通信の向こうで絶句するロングアーチの面々。

かなりの速度で飛ばしてフォアードの元にむかうのはは、呆れたような表情をしている。

それでいいのになー

「……AMFは、発生源から離れるほどその効果も弱くなる」

そぞ、使えるわよお! キャロの、フルパフォーマンスの魔法

!!

護りたい

優しい人を

わたしに笑いかけてくれる人たちを

自分の力で………!

「護りたい!!」

キャロの叫びに反応したのか、はたまた別の要因か。
ケリュケイオンに、桃色のラインが走る。
グローブが光り、発生した光にキャロが包まれる。

「………フリード、今まで不自由な思いさせて、ごめん」

主人の元によってきたフリードに、キャロはそう告げる。

「わたし、ちゃんと制御するから!!いくよ!!」

竜魂召喚!!

「はあっ!だっ!でりゃあ!!」
「バリアブルバレット!シュート!!」

ティアナと合流したスバルは、怒涛の勢いでガジェットを破壊。止め処なく爆音が響く。

「うりいやあああああああー!!」

弓にカートリッジを装填。

左手を大きく振り上げて、壁を殴りつける。

「茂みのっ！刺えっ!!」

爆発。

壁に大きな穴が開き、破片がガジェットを粉砕。

と、その時。

その穴から光が差し込んできた。

桃色のそれに気がつき、二人は思わず外に飛び出す。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ!!」

清められていく空気。

魔方阵はいつそう輝きを増し、そこから一対の翼を出現させる。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚!!」

グオオオオオオツ！！

side スバル

『召喚成功！フリードの意識レベル、ブルー！完全制御状態です！』

うはぁー……………すごい……………。

「あれが、チビ竜の本当の姿」

「かつこいいー……………」

「一時はどうなるかと思ったけど、大丈夫みたいだね。」

「ライトニングの二人は、救援はいらなないみたいですね、さ、レリックを回収するですよー！」

「はいー！」

「フリード、ブラストレイ!!!」

キャラの魔力を吸収し、フリードは火炎放射を放つ。
だがガジェットは障壁でそれを乗り切った。

「やっぱり硬い……」

「あの装甲形状じゃ抜き辛いよ、僕とストラーダがやる!」

不安そうにそう呟くキャラに、エリオは力強く答えた。
エリオはキャラが黙って頷いたのを見てから、構える。

「我が請うは聖銀の剣、若き槍騎士の刃に、祝福の光を! 猛きその
身に、力を与える祈りの光を!」

キャラの両手。

桜色の光りが灯り、輝く。

「っだあああああ!!!」

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク!」

エリオが飛び出して、重力を利用し突っ込んでいく。
そこへキャラが放った光が宿り、力が漲るのを感じた。
危険と判断し、コードとベルトを延ばしてくるガジェット。
エリオは斬撃でそれらを薙ぎ払うと、着地。
カートリッジを消費し、突撃の姿勢を取る。

「一閃必中!!!」

刹那、ガジェットすら反応できない速度で突っ込み、ストラーダを

突き刺した。

キャロの加護を受けた桃色の刃が障壁と装甲を打ち抜き、貫通する。

「でえええりゃあああああああつー!!」

小さな体で、満身の力で、大きく斬り上げた。

背後には、切り裂かれたガジェット。

一瞬の間を置いて、爆散した。

「やったー!!」

その様子を見届けたキャロは一人、うれしそうに笑った。

『車両内、および上空のガジェット、全て反応消滅!』
『スターズF、レリックを無事確保!』
『車両のコントロールも取り戻したですよー!今止めま〜す!』

通信を聞き、なのははため息をつく。

「……………終わったな」

そーね……………思ったより苦戦してなかったみたいだし

「・・・・・・・・あぁ」

一人そう呟いて、後ろにいたライトニングの二人を見る。
エリオもキャラロも、初めての任務成功に、少し無邪気にはしゃいでいた。

「・・・・・・・・」

そんな微笑ましい光景を見たからか。

気が付けばなのはの口角が上がり、穏やかな表情を見せていた。

『刻印ナンバー9、護送体制に入りました』

「ふむ・・・・・・・・」

『追跡ガジェットを送りますか？』

暗闇。

多くのウィンドウを見つめ、一人佇む男。

「やめておこう・・・・・・・・レリックは惜しいが彼女達のデータが
取れただけでも十分さ」

にやにやしながら、ウィンドウを開く。

「それにしても、この案件は実に素晴らしい……私の研究にとって興味深い素材が揃っているし……」

また新たなウィンドウ。

そこにはエリオとフェイトが写っている。

「この子達……生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだからね、それと……」

「もう一つ」と、男はパネルを操作。

もう一つ開かれたウィンドウに、プラズマを駆使してガジェットを潰すのがいた。

「『バトルロワイヤル』の渦中にあるこの人物も、実に興味深い……」

ただただ不気味に、男は嘲笑う。

第七話初任務（後書き）

この話で一番書きたかったのは、キャロとのやり取りだったり・・・。

子どもには意外と優しいうちのなのはさんです。

第八話進展（前書き）

もうお気づきの方もいるとは思いますが、タイトルは原作から取ってきたのがちらほら。

これがぴったりだなんて思ったたり、単純に思いつかなかつたり・・・。

第八話進展

side なのは

訓練スペース。

新人達、こないだの任務がいい発破剤になってるみたいねー
「・・・・・・・・ああ」

訓練にも熱が入って、現在個別スキルの指導を行っている。
スバルは、ヴィータにバリアの扱い方と、前衛の立ち振る舞いを。
エリオとキャラロは、テストロツサ執務官に回避方法を。
そしてティアナは、

「次！」

「はいっ！」

わたしが撃ち出したスフィアを、正確に撃ち抜く。
今は性質ごとに色分けしているが、いずれは色を統一するつもりだ。
ティアナが対処している間に、さらに撃ちだす。
処理しきれなくなったのか、回避行動を取った。
だが・・・・・・・・。

「そう動くと、あとが続かなくなるぞ!!」

ポジション センターガードの行動としては誉められたものではないな。

ティアナはすぐに立ち上がると、クロスミラージュをリロード。
両手で狙いを定め、先ほど回避したスフィアを処理した。

「それでいい、立ち止まって、視界を広く」

「迅速かつ的確に指示を飛ばす!!」

わたしの言葉の続きを、ティアナが口にする。

「……さすが、理解が早いな。」

「そう、それがわたしとお前のポジション、センターガードだ」

本局、とあるオフィス。

「………あ」

「ん？どつたの？」

デスクでデータを閲覧していた少女が声を上げた。

それに気がついたもう一人の少女が、床を蹴ってイスごとその隣に来る。

「いや、今日本局に送られてきたデータを見たんだけど……」

「」

「レリックの？」

「うん」

「そしたら………」と、少女はウィンドウを摘んで、見せる。

「あ、これ知ってる」

「何見てるの？」

「あ、つーちゃん」

二人の後ろから、ウィンドウを覗き込む女性。

イスの背もたれに乗っかっている少女は、画像を指差す。

「ほら、前なのはちゃん達が戦ったって言うガジェットの残骸」

「新型が出たらしいから、それ中心のデータなんだけど」

「ああ、そういえば社員達の間で話題になってたね」

女性はイスを持ってきて座り、一緒に画面を覗き込む。

「んで！添付された画像の………ほら、ここー！」

「これ、内部構造の！」

「見せて………っこれって………！」

目を見開く女性。

手にしている画像には、菱形の青い宝石が埋め込まれている。

「ジュエルシード………！」

「確か、なのはちゃんがちっちゃい頃に集めてたって言う古代遺物ロストロギアだよな？」

「ん、今は保管所で厳重に管理されてるはずだけど………っ

ていつか、なして犯罪者の手に渡ってるのさ!？」

「どうしたセキュリティ!」と突っ込んで、少女はコーヒーを一口。すると女性は何かにつき、画像の一点を凝視する。

「どしたん？」

「……ね、ここ拡大出来ない？」

「そこ?ちよつと待つてて……」

始めからウィンドウを閲覧していた少女がパネルを操作。女性が指差した部分が拡大される。

「……やっぱり、人名が書いてある」

「なんて書いてあるの?……じえ、じえい……?」

「ジェイル・スカリエッティ」

背もたれに乗っかっていた少女が、さらつと綴りを読み上げ。

二人の顔が驚愕に満ちた。

「スカリエッティって……!」

「第一級搜索指定犯罪者……だね」

「その辺の分野の人達にとつちや、結構有名人みたいよ?生物学に長けている天才なんだけど、頭がアレだからさ」

「宝の持ち腐れよね」と、少女は意味無く口を尖らせる。

「けど、何かあからさま過ぎない？」

「その辺分かんないんだよなあ、ジュエルシードはともかく、何で自分の名前を……」

「本人なら挑発、他人なら濡れ衣目的……とか？」

「なににせよ、厄介な相手じゃん」

はぁーっと、三人そろってため息をついた。
ふと、女性は疑問を口にする。

「っていつか、このデータどこから？」

「ハッキング」

「ちよっと……」

「だって暇なんだもん」

「そう言えば……」

昼時。

さっさと昼食を済ませ、移動していたのは、後ろから声をかけられる。

振り返るとスバルがこっちに手を振っていた。

続けてされた手招きを無視しようかとも考えたが、話をするのもいいかと思いとどまる。

「……何だ？」

イスに座り、スバルを見据える。

スバルは少し口ごもってから、

「あの、なのはさんの故郷ってどんなところですか？」

「……第97管理外世界、現地惑星名称『地球』だ」

「いや、そうじゃなくって」

ティアナは苦笑いで突っ込みを入れ、

「雰囲気とか、その辺を聞いてみたいんですよ」

「……その辺は、テストロッサにでも聞けばいいだろう」

素っ気無く返事すると、なのはは立ち上がった。

「あの、どちらに……?」

「自室だ」

オドオドとした様子で問いかけるキャラロに、再び素っ気無く返して、
なのはは去っていった。

「ホテルアグスタ？」

「はい、原作通りなら、そちらに『鍵』一行が来るのは間違いないかと」

「ふうん……………」

報告を受けた男は少し考え込んでから、

「……………腑抜けてもらうのも困るしね、ちょっと緊張を持たせようか」

「それでは……………」

「うん、出るよ」

「承知しました」

男に膝間づいていた少女は、一礼してその場を去った。

一人残された男は、くすつと笑って、

「君は逃げられないよ、高町なのは」

夜。

「よし、全員集合!!」

機動六課、訓練スペース。

なのはが号令をかけ、フォアード四人が集まる。

「これにて夜間訓練は終了だ、各自十分に休息を取るように」

「はい！」

「ありがとうございました！」

びしつと一礼して、四人は寮に引き返していった。

なのははそれを見送って、訓練スペースの後片付けを始める。

「おい」

再び背後から、声。

振り返ると、ヴィータが睨みつけていた。

「……………お前もちったあ休めよ、こっちが冷や冷やする」

「……………善慮する」

素っ気無く返事して、中断していた作業を再開。

二人の間に、沈黙が降りる。

「……………なのは」

「……………何だ？」

それを破ったのは、ヴィータだった。

「あんまり、無茶やるなよ?……………あの時見たいなのは、
めんだ」

なのは振り返りもしなかったが、ただ小さく頷いたのは見えた。
現在のなのは未知過ぎるゆえ不安もあるが、ヴィータの口元には
自然と笑みが浮かんでいる。

「……………先に帰っている、わたしのはすぐにでも終わる」

「じゃあ一緒に戻ろう」

「……………好きにしる」

相変わらずの素っ気無い返事。

それでも、ヴィータの口元から笑みは消えなかった。

「……………ん？」

男の端末に、着信。

画面を開いて内容を確認する。

「いかなされましたか？」

そこへ少女がやってきて、男に問いかけた。

「……………いや、ちょっと面白い奴から頼まれごとでね、ち
ょうど僕らと同じ考えだったみたいだ」

「それでは……………」

「ああ」

男はパネルを操作して、返事を出す。

「まったく、『鍵』が腑抜けてないことを祈るよ」

第八話進展（後書き）

タイトルが『進展』なのに、特に何も進展してないっつうー。
とりあえずフラグは立てておきました。

それではお返事の部屋ああああ

高天原 A 様

初めまして〜wご感想ありがとうございます。

この小説では、リリカルなのははともかく、ペルソナは原作知識無しでも楽しめるようにしてあるのでww

とりあえずなのはさんに何があったのかは後々のお楽しみになりますww

それと、誤字指摘ありがとうございます！
きっちり修正させていただきますね！

次回、警護任務を受けた機動六課は、ホテル・アグスタへと向かう。
そこでののははとある人物と再会し……？
それでは！

第九話アグスタ・前編（前書き）

お待たせしました、九話です。

長くなりそうだったので、前編後編に別けました。

第九話 アグスタ・前編

「……………何だ、これは」

某曰。

なのはの機嫌は、少々悪かった。

唐突に部隊長室に呼び出されたと思えば、何かにやついた顔で出迎えられる。

手渡された袋を開けてみれば、明らかに余所行き用のドレスが入っている。

ぶっちゃけ、何がどうなってこのドレスを手渡すこととなったのか、わけがわからない。

眉間のしわをさらに深くして、無言で目の前の部隊長に問いかけてみた。

「お仕事着や！」

「わたしが馬鹿だった」

即答で自信満々に帰ってきた返事に、即答で呆れの言葉を叩き付けた。

それから数日後。

ヴァイスが操縦するヘリの中で、決まった方針と、任務の説明が行われている。

「で！今日これから向かう先はここ！ホテル・アグスタ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・骨董品オークションの会場警備と人員警護、それが今日の仕事だ」

リインの言葉に、そう続けるなのは。

心なしか、ただでさえバリエーションの少ない表情が、さらに鉄仮面と化している。

「取引許可の出ているロストログアが多数出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てくる可能性が高い、このことで、わたし達が警備に呼ばれたです！」

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々油断は禁物だよ」

真剣なフェイトの言葉に、フォード陣はよりいっそう気を引き締めた。

ふと、キャロの視線が、シャマルの足元にあるスーツケースに向けられる。

「現場には昨夜から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長他、数名が

警護に当たってくれてる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・隊長陣は内部の警備に当たるので、前線は副隊長達の指示に従うように」

「はい！」

「あの、シャマル先生・・・・・・・・」

ここで、キャロが軽く手を上げてシャマルに問いかける。

「さつきから気になってたんですけど、その箱って・・・・・・・・」

「ああ、これ？」

途端にシャマルの表情が明るくなり、それとほぼ同時になのはは顔を外へ向けた。

本人としては今の顔を見られたくないのだろうが、雰囲気ではバレバレである。

「隊長達の、お仕事着！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

瞬間。

なのはの気配が、明らかに不機嫌のそれへと変化した。

ホテル・アグスタ。

「いらっしやいませ、ようこそ」

受付の男性が、にこやかな笑顔で来客者を迎える。と、カウンターに管理局員の証明書が差し出され、思わず顔を上げる。

「こんにちは、機動六課です」

そこには、煌びやかなドレスに身を包んだ、三人の美女だった。

閑話休題。

「ほら、なのはちゃん！たまにはその仏頂面やめたらどうや？」

「そうだよ、せっかく綺麗なのに……」

会場の警備状態を確認しながら、なのは、フェイト、はやての三人はホテル内を歩き回る。

とは言え、一般的な非常事態に対応できることは確認したので、不審な人間や物が無いかの見回りなのだ。

そんな中で、はやてとフェイトの二人は、未だ不機嫌なのはを宥めていた。対するなのはは仏頂面こそ解かないものの、二人の話は聞いている様である。ところで、先にも記述したが、今日は骨董品のオークションが行われる。

数多くの要人や骨董マニアが集まり、開始時間までの談笑を楽しんでいた。

なのは達三人も、見回っている間に数多くの集団を見かけている。それぞれ見覚えの有る顔だったり、見知らぬ顔だったり、様々な人間がいた。

そんな中、ふとなのはがとある一団に視線をずらすと、

「ッ！！？」

様々な感情が、体中を駆け巡った。

「・・・・・・・・・・？」

「なのはちゃん？」

突然立ち止まったなのはに、どこか心配そうな表情を向ける。

なのははそれに気付かず、食い入るように、集団の中心を見ていた。そこにいたのは、銀色の長い髪の毛の、どちらかといえば細身の体格の青年。

彼は柔らかい微笑を浮かべて、紳士淑女と会話している。

と、その血のような、宝石のような、真っ赤な目が、なのはを捕らえた。

途端に、なのはの体が、心が、戦慄する。

記憶が蘇り、怒りや悔しさと言った感情が、奥歯を噛み締める。

対する青年はこちらを凝視しているようでいて、しかし周囲との会

話は成り立っているようであり、余裕綽々だ。その口元が、怪しい笑みに彩られて、動いた。

話なら後にしようよ

お友達が心配してるよ？

せつかく綺麗になってるのに、台無しだ

くすくすと小馬鹿にしたような笑い声が、聞こえた気がした。なのはは必死になって無理矢理感情を押しさえ込むと、踵を返して再び歩き出した。

「なのはちゃん……！！」

「大丈夫？ 顔色、酷いよ？」

顔を覗き込み、心配そうに顔を曇らせる二人。

なのはは少しの間、俯いて黙った後、突然顔を上げて、

「……大丈夫だ、すまない」

満面の笑みを見せた。

「……っ！？」

「……っ」

なのはが初めて見せた笑顔に、今度ははやたとフェイトが戦慄した。何か、言いようのない威圧感を、強制的に読み取らされたような感覚を感じて、顔を強張らせる。

「・・・・・・・・裏手を見てくる」

瞬きの間に表情を戻し、なのはは小走りでその場を去っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

建物の影。

顔を真っ青にしたなのはが蹲っている。

あいつ、何でここに!?

「・・・・・・・・・・・・・・・・分らない」

先ほどから心臓が暴れており、呼吸も若干苦しい。

重く重く息を吐き出しながら、無理矢理それらを落ち着かせて、立ち上がる。

この場にいるのが独りだけだからなのか、脈打つ音と、呼吸音がやけに大きく聞こえた。

「……………オークション開始まで、あとどれくらいだ？」
3時間27分、でしょ？

『yes』

大きく息を吐き終えて、確認を取り、室内に戻ろうとした時だった。

「こちらにいらっしやいましたか」

「……………っ」

振り返った先、先ほどの男と同じ銀髪を揺らした少女が佇んでいた。エリオやキャロとあまり変わらなさそうな外見だが、きつちり着こなしたスーツと光の無い瞳が、雰囲気をも大人っぽく見せている。

「……………ツクヨミ」

「はい、お久しぶりです、イザナミ」

「……………なのはだ」

ツクヨミと呼ばれた少女は一礼すると、なのはを真っ直ぐに見つめて、

「主より言伝です、『話は後で、今は任務に集中しなよ』だそうです」

「そんなこといちいち言わなくていい!!」

苛立たしげに怒鳴りつけられても、平然とした態度を崩さないツクヨミ。

なのはは束の間睨みつけたが、もう一度大きく息を吐いて、

「……すまない」

「いいえ、身体、健康、ともに問題はありませんから」

「……そうか」

「はい」

一旦、ツクヨミは言葉を切ってから、

「我々はあなたの任務の邪魔はいたしません……が、主の案により、あなたが腑抜けているようであれば、即刻制裁を与えるように言われております」

「……腑抜けてはいない、心配無用だと伝える」

「あなたがそう言うのであれば……しかし、最終的な判断を下すのは主ですので、そのときはどうかご容赦を」

「……好きにしろ」

『この場にいたくない』と言わんばかりに吐き捨てて、なのははホテルの中へと戻っていく。

ツクヨミは後ろから、変わらない虚ろな目で見送った。

side スバル

オークション開始まで3時間半。

あたし達フォードは、外の警備をやってる。

今のところ、不審な人や物は無し、異常も見られない。

けど、油断は出来ないよね、ガジェットがこないとも限らないんだし………。

………あー、『原作』見とくんだったなあ。

そしたら、ティアとか、なのはさんのこととか、もうちょっと助けられるのに。

それに、ガジェットが来るって分かっていたら、対処法とか考えられるもんね。

「（でも、今日は八神部隊長の守護騎士団も、全員集合かあ）」

「（そうねえ………あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか、副隊長達のこと）」

んー、そりゃあ、

「（父さんとかギン姉あたりから聞いたくらいだけど、八神部隊長が使っているデバイスが魔導書型で、名前は夜天の書っていうこと）」

それと、

「（副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だっことで、それにリイン曹長を含めた五人そろえば、無敵の戦力ってこと）」

ま、八神部隊長達の出自とかは特秘事項だから、あたしも詳しくは知らないんだけど。

「（レアスキル持ちの人達はみんなそうよね……なのはずんだって、魔力変換無いのに、風とか氷使っし……）」

「（ティア、何か気になるの?）」

「（別に……）」

「（そっか、じゃあまた後でね）」

今のところ異常は無いんだけど、任務に支障がでるのもアレなので、キリのいいところで念話を切り上げて、集中することにした。

side ティアナ

………スバルとの話を終えて考えてみる。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク。

まだ10歳になったばかりなのに、Bランクを持っているエリオと、レアな竜を召喚できるキャラ。

他の隊員達だって、前線から管制まで、未来のエリート達ばかり……。

相棒のスバルは、危なっかしいところもあるけど、潜在能力と、優しい家族のバックアップ、そしてレアな魔力変換『毒』を保有している。

自分の凡人っぷりを、これでもかといくらいに、思い知らされた。

けど、

そんなの関係ない……兄さんの為にも立ち止まらない。

某所。

鬱蒼と生い茂る木々の間、二つの人影が見える。
体格のいい男性と、小柄な少女の二人だ。

「ここに、お前の探し物があるのか？」

「……………」

問いかける男性に、少女は無言で答える。

「……………何か、気になるものでもあるのか？」

「……………」

また無言、しかし今度はこっくり頷いた。

と、そこに、小さな、画鋏を思わせる虫が飛んできて、少女が差し出した指先に止まる。

虫は何かを伝えるように、羽を羽ばたかせていた。

「……………何か、あったのか？」

再び問いをぶつける男性に、少女は口を開いて、

「ドクターのおもちやが、近づいて来てるって」

「……………つ！！」

一人屋上でサーチャーを巡らせていたシャマルは、反応した。

何者か　　九分九厘ガジェットだろう　　の正体を探るべく、
シャマルはオペレーターに通信をつなぐ。

『はい！来ました、ガジェットドローン陸戦？型！機影三十、三十
二！』

『陸戦？型、2、3、4！』

前線メンバーに緊張が走り、全員の目つきが変わった。

『前線各員、状況は広域防衛戦です、ロングアーチ1の総合管制に

あわせて、わたし、シャマルが現場指揮を行います！
「スターズ3、了解！」

この時、廊下を疾走し外へ向かうスバルは、言いようのない胸騒ぎを覚えていた。

「（やっぱり来たね、スカリエッティのおもちや）」

「（？型が三十以上と、？型が3〜4機ほどです、如何なさいますか？）」

「（放っておきなよ、前線張ってる餓鬼共に任せておけばいいだろう）」

「（はっ）」

ツクヨミとの念話を終えた青年は、視線をずらす。

その先にいたなのは、ガジェットが来たことを知ったのか、表情がより険しいものになっていた。

が、それが分かりにくくなっているのは、さすがと言うべきか。青年は思わず鼻で笑い、前を見る。

ちょうど、無限書庫の司書長にして、考古学者であるという、自分と同じ年くらいの青年が紹介されているところだった。

君がどう変わろうと、もう逃げられない………生まれ

た瞬間から死ぬ瞬間まで、『鍵』からは逃げられないよ

うっすらと優しく微笑むその裏で、青年は嘲笑を蓄えていた。

第九話 アグスタ・前編（後書き）

今回なのはと接触した少女、意外とキーパーソンだったり、そうでもなかつたり……。

誤字脱字あらば、感想へどうぞ。

それではお返事の部屋っ！

白眉様

ぶつちやけ、自分で読み返すと、結構なのはさんをいじめる感があつたので、少々不安でしたが、そう言って頂けるととても励みになります！

とりあえず、ペルソナの口上を実際に小説で使っていていいですか？

……いや、かつこよかったので……（苦笑

???

「けれど、もう遅いんだよ

始まった時からずっと、強制的に終わらせ続けて

後戻り出来ない所まで来ちゃったから

この手はすでに汚れている、みんなと触れ合えば、それだけで迷惑になる

だから、もう後戻りはやらないの

……忠告ありがとう、『わたし』

だけど、ごめんね

「本当にもう、手遅れなんだ」

さーで、次回は戦闘パート。

ガジェットを撃退すべく、ティアナ達が奔走する。

そして………！

それではこの辺で。

第十話 アグスタ・後編（前書き）

大変長らくお待たせしました、十話です。

第十話 アグスタ・後編

大降りのアッパー、はっけい、タツクル、左右のストレート、ハイキック。

まだ成長途中でありながらも、十分に鍛えられた体から怒涛の連撃が繰り出され、ガジェットを葬る。

弓での攻撃も加わっているそれは、まさに向かうところ敵なしといった状態だ。

そんなスバルの背中を見つめながら、ティアナは複雑な表情を見せていた。

スバルの立ち回りは、六課に来る前と比べて格段によくなっているように感じた。

なのはなどのベテランから見ればまだまだ穴だらけだろうが、少なくとも、ティアナ自身は今のスバルの実力を高く評価していた。

素直に、相棒として自慢したいくらいのものなのだが、反面、同じくらいに微妙な気持ちだった。

(やっぱり、スバルはすごい)

その背中を見つめるティアナは、援護を行いつつ、すっきりしない思いを抱く。

side なのは

(ガジェットか)

ねー

会場警備をしつつ、ロングアーチから定期的に入ってくる状況を整
理、確認する。

今のところ、フォード達はうまく立ち回れているようだが……
……。

なーんか嫌な予感すんのよねー

(………そうだな)

………杞憂に、終わるといいのだが。

「はああっ!」

大きく豪快に、レヴァンティンを振る。

灼熱の斬撃が辺りを嘗め回し、ガジェットを殲滅する。

さらに歩法を駆使して接近、陸戦?型の巨大な胴体を両断した。

「ておあああ

っ!」

一方のザフィーラは、雄叫びとともに魔法陣を展開。

楔を思わせる青白い魔力が、ガジェットを貫いた。

シグナムはレヴァンティンを鞘に収めて、周囲を警戒しつつ見渡す。
隣に降り立ったザフィーラも同様に、辺りを見渡した。

「粗方片付けたか?」

「そのはずだが……っ!」

「……っ」

二人同時に、振り返って、思いつきり舌打ち。

「新手か!」

「しかも、ホテル付近に出現だと!」

「我は請う、小さきもの、羽ばたくもの……」

某所。

同行者である男性に、コートを預けて、少女が詠唱している。
足元に展開された陣の四方から、両生類の卵を思わせる触手が伸び
て、のた打ち回っている。

「言の葉に応え、我が命を果たせ……」

一瞬、煌き。

「……召喚」

バチュン、と触手が弾けて。

小さな虫の群れが姿を現した。

内の一匹が少女の指にとまり、彼女はそれに作戦を伝える。

『了解』と言いたげに、羽を動かしてから、虫たちはいっせいに飛
び立っていった。

「・・・・・・・・！！？」

一方、ホテルアグスタ。

キヤロは何か反応して振り返り、感覚を研ぎ澄まして探る。

そしてそれが何なのかを理解してから、すぐさまティアナ達に通信をつなげた。

「（みなさん気をつけてください、増援、来ます！！）」

手短にそう伝えた瞬間。

魔法陣が展開し、そこから見慣れたカプセル型のボディ　ガジェ
ットが来た。

560

「スバル！」

「分かってる！！！」

レーザーを避け、木々を足場にし、スバルは飛び上がる。

カートリッジロード。

体をひねり、その勢いで右腕を前に突き出して、

「リボルバーシュート！！！」

衝撃波を撃った。

放たれたそれは周囲の木をなぎ倒すものの、AMFに打ち消された

り、避けられたりして、ガジェットには通用していない。
スバルは苦い顔をして、一旦下がった。

「衝撃じゃだめかあ」

「魔力混じってんだから、当たり前でしょ!!」

苦笑した彼女に、ティアナが一喝。

スバルはもう一度苦笑いをして、再び飛び出す。

と、すぐ横をオレンジ色の魔力弾が横切っていた。

説明されなくても分かる、ティアナが撃つたものだ。

対AMF用に魔力をコーティングされたそれを見て、ふとスバルは
妙案を思いつく。

(といつても、単純なことなんだけどねえ)

口角を少し吊り上げて、ガジェットの障壁を引っぺがし、一蹴。

勢いで隣にいた個体も蹴り飛ばそうとしたが、ひよい、とまた避け
られた。

ここで、スバルはふと疑問を抱く。

「(ティア、気づいてる?)」

「(ええ、動きがよくなってる……!!)」

「(遠隔操作か、何かだろうね……つと!!)」

アクロバティックな動きで攻撃を避け、ウィングロードを発動し、
宙を駆けながら、ガジェットの様子を観察。

ティアナの弾丸を、安々とかわしているのが見えた。

実は、召喚されてきたガジェットには先ほど少女が召喚した虫が取
り付いているのだが。

小さい上に動き回っているゆえ、二人は気がついていなかった。

「(『毒』、使う?)」

「(名案だけど、AMFに消されるのがオチよ?)」

「(それなんだけど、ちょっと考えがある)」

首をかしげるティアナに、スバルは笑って見せた。

「っおおおおおおおおおおお!!!!」

レーザーを弾き返し、雄叫びを上げながら、スバルは弓のカートリッジをロード。

右手を添えて、照準を合わせる。

装てんされた魔力の矢に、もう一層魔力がコーティングされていく。

「(ティアみたいに、全部を覆うことは出来ないけど………!!!!)」

矢の形も変わる。

先端が極端なまでにとがっている。

「(貫通力プラス、全部じゃないけど、魔力のコーティング………これなら!)っいつけえ!!!!」

ガジェットに突っ込んでいき、カメラアイを狙って、

「矢尻のっ………毒うっ!!!!」

撃った。

矢はまっすぐ飛んで、障壁、続けてAMFに接触。

激しい火花をちらして、競り合いを始める。

A M Fが若干勝っているように見える、が、

「うおおおおおおおっ!!！」

そこに、スバルが突進してきた。

強化魔法で威力が底上げされた拳が、杭を打ちつけるように矢を殴る。

派手な音を立てて、矢が貫通した。

一拍置いて、突然ガジェットが狂ったように動き回り、見境無くレーザーを撃ちだす。

スバルはそれを必死に避けていたが、成果は上々だった。

流れ弾が他のガジェットに命中し、破壊。

矢を撃ち込まれたガジェットは暴れるだけ暴れて、やがて静かに事切れた。

「(……………スバル、やっぱりすごい……………けど)

」

レーザーを撃ち帰り、弾丸を撃ち続けるティアナは、表情を引き締める。

「わたしだって……………!!！」

奥歯をかみ締めて、自身に一喝。

顔を上げて、スバルに伝える。

「スバル！クロスシフト、行くわよ!!！」

「おうっ!!！」

スバルはすぐさま応えて、再びウィングロードを生成した。

派手な動きでガジェットを引き付け、出来る限り破壊していく。
その隙にティアナは魔法陣を展開。
クロスミラージュを構え、チャージを始める。

(証明、するんだ……………)

脳裏をよぎるのは、今は亡き兄の顔。

そして、その死を貶した、管理局の上官達。

(特別な才能や、凄い能力が無くたって……………)

自分が受け継いだ、兄の技術。

(一流の隊長達のいる部隊でだって、どんな危険な戦いでだって……………!!)

無能ではないことを、思い知らせてやるために。

ランスターの弾丸は、全てを撃ち抜くんだって!!!

「クロスファイア……………!!」

照準、魔力のチャージ、ともに完璧。
後は、

「シュート!!!」

撃つのみ!!

生成された三つの弾丸が突進し、ガジェットを次々と粉碎していく。だが、それを制御しているティアナは、少し辛そうだ。だからだろうか？

うちの一発が、スバルに向かっていていることに、気づくのが遅かった。スバルも反応したようだが、回避も防御も間に合わない。最悪の展開を浮かべて、頭の中が真っ白になった瞬間だ。弾丸とスバルの間に、赤い影が割り込んで打ち落とす。そいつはティアナをにらみつけると、怒鳴った。

「何やってんだ馬鹿!! 無茶やった上に味方撃つてどーすんだ!!」

「?」
「ヴィ、ヴィータ副隊長!」

赤い影　ヴィータは、かなり立腹している様子だ。

「その、これもコンビネーションの一つで……!」
「嘘つけ! 明らかに直撃コースだったろ!」

スバルの必死のフォーローを斬り捨てて、ヴィータは一言言葉を切る。そして息を吸い込んで、

「もういい!! お前ら、すっこんでろ!!」

「ガジェットは全機撃破か」

まあ、『無事』が見つからないのが、ちょっと残念だけど

時は進んで、ホテル・アグスタ内。

オークションも無事に終了し、制服に着替えなおしたなのは壁にもたれかかって、先の戦闘の報告を閲覧していた。

ティアナがミスショットか……………大丈夫かしら、あの子
「……………分かん」

そう、ため息をこぼした。

それから、壁から離れて、現場に向かおうとした時。

「なのは」

不意に、後ろから声をかけられた。
振り返って見ると、見覚えの有る金髪がそこにいる。

「……………ユーノ」

「うん、半年ぶりだね」

ユーノはそう苦笑いして、なのはに歩み寄る。

「君がまだ無事なところを見る限り、まだ『負けて』はいないみたいだね」

「……………おかげさまでな」

「どういたしまして」

相変わらずの素っ気無い態度に、再び苦笑いしてから、ユーノは懐から端末を取り出した。

「はい……………また関係ありそうな資料を見つけた、参考にはならないと思うけど、とりあえず目は通しておいて」

「……………すまない、助かる」

少しだけ、目を細めて。

なのははそれを受け取った。

「それではわたしはここで……………後始末をしなければいけないのでね」

「分かった、それじゃ……………また何か分かったら、連絡するよ」

「……………いつも悪いな、頼んだ」

小さく手を振って、二人は別れた。

現場の調査と後始末が終了し、なのははティアナを探して回る。

ちよつとした指導と、彼女なりの励ましを伝えるためだ。

・・・彼女自身、柄にもないと思っではいるが、仮にも自分はティアナの上司。

それくらいはやらないといけない気がした。

森にはいないことを確認してから、ホテルの裏手に行こうとした。そのときだった。

「や、ごきげんよう?」

体が、硬直する。

続けて熱いものがこみ上げて来て、気がつくと、胸元に下げていたレイジングハートを武器のみ展開していた。

刃を、背後のそれに、振り向きざまに突きつけようとするが、

「どうかお鎮まりを、イザナミ」

それよりも早く、ツクヨミが二振りの剣を交差して、首に突きつけていた。

「あなたのその行動は想定内ですが、『優勝者』が出る前に、『優勝商品』を破壊するのは避けたい事態です」

「……………」

舌打ちし、ただ悔しそうになのははツクヨミが守っている人物を睨む。

人物はははつと気の抜けた笑顔を見せて、

「物騒だなあもう、もう少し抑えられないのかい？」

くすくすと笑うその声が、なのはのまともな思考回路を次々停止させていく。

今はツクヨミの剣があるとはいえ、少しでも油断すれば飛び掛っていきそうな勢いだ。

「はははっ！まあ、元気そうでよかったよ」

再び気の抜けた笑顔。

そこから、瞬きのうちに視線を鋭くさせ、なのはを射抜く。

「ボクが君の前に来たのはただ一つ、忠告さ」

「……………」

とりあえず黙り込み、耳を傾けるなのは、人物はくすくす笑って、続けた、

「……原作が起こっている間、バトルロワイヤルは一旦休止にする、この騒動が終わるまで、自分を鍛えるなり何なりすればいい」

ただし、

「再開したとき、少しでも腑抜けていたら、お仕置きだよ？お友だちを守りたいなら、誰にも心を許しちゃいけない、それが『兄さん』であつてもだ、でない」と、

君が大切にしているもの、『また』壊しちゃうよ？
「……っ！！！」

なのはの脳裏に過ぎる、白と紅。
それらを思い出すだけで、背筋が凍りつく。
人物はツクヨミを下がらせると、にっこり笑って、

「まあ、君なら大丈夫さ、いつもどおり『いい子』にすれば、何も起こらないんだから」

今度は無邪気に笑いながら、ツクヨミを伴って去っていく。

一人残されたなのは、俯いたまま呆然としていたが、やがて思考が再起動し、思い出す。

「・・・・・・・・ティアナ、探さない」と

その足取りは、少しふらついていた。

第十話 アグスタ・後編（後書き）

という十話でした。

誤字脱字、突っ込みがあれば、感想へどうぞ。

それではお返事の部屋！返信お待たせしてすみませんでした。

白眉様

つまりなのはさんはみんなに愛されてるってことですね、わかります（ ）

ペルソナの口上の件、ありがとうございます！大事に使わせていただきますね！

あと、借りたお金はきちんと返しましょう？部隊長www

惑星直列・・・冗談抜きで起こせそうだから、怖いwww

???

「よかった、そっちはそれだけ心配してくれる人がいるんだね

・・・ちよつと、羨ましいかも

でもこっちの今は、わたしが選んだ現状だから、我慢しなきゃ、ね

・・・言いたいことは、なるべく言ったほうがいいと思うよ

でないと・・・」

さて、次回はついに・・・。

それではww

第十一話それぞれの・・・(前書き)

登校前にUP。

アニメ本編を見返さずに書いたので、ところどころおかしいかもです・・・。

第十一話それぞれの・・・

side ックヨミ

「ックヨミ」

「」

主より呼び出し、要件が告げられるまで待機。

「今『あいつ』から連絡があつてね ちよつと、困っている

みたいなんだ」

「？、理解しかねます、それとわたしとどういった関係が？」

「襲撃したい時期があるんだけど、どうも詳しい日時が分からないらしくてね、探ってもらいたいんだってさ」

把握、つまり今度の任務は監視。

「そういうこと、ほんとうは僕がいくつもりだったけど・・・ほら、『ご老人方』がうるさいからね」

主、笑う。

今の微笑みは自嘲のものと確定。

「とうわけだから、頼んでいいかい？」

「御意、もとよりこの身はあなたの駒、忠実な配下にござります」「ふふっ、ありがとう」

主、再び笑う。

今度は喜びからきたものと確定。

「それでは、行ってまいります」

「うん、体には気をつけて」

「命令とあらば」

準備、および移動を開始する。

目標は

s i d e スバル

「んあ？」

気の抜けた声が出てきた。

ぼやけた頭を叩いたり振ったりして、無理やり起こす。いつもなら少し早く起きてるティアが、『はやく歯磨くぞー!』っていうんだけど……。

「……よい、しょっと」

ベッドから降りて、辺りを見渡して見る。

予想通り、ティアナはまたいない。

ベッドを除いて見たけど、もぬけの殻だし、やっぱり先に行っちゃったみたいだ。

……最近、正確にはホテル・アグスタの一件以来。

ティアはやけに早く起きて、自主練をやっているらしい。

よっぽど、悔しかったんだろうな。

ティア、よく自分のことを凡人だと言ってたし……あたしが思ってる以上に深く根付いていたのかも……。……着替えないと。

朝練遅れるなんて洒落にならないって!!

時間も迫ってるし、もう行かないと。

洗面用具を持って、洗面所に向かう。

side なのは？

……だいじょーぶ？

「……………とりあえず」

自室。

ベッドの上で体育座りをしたまま動かないのはに、声をかける。なのは顔をうずめたまま、生返事を返した。

そのまましばらくじっとしていたけど、しばらくしてから顔を上げて、動き出す。

……………あれ以来、なのは精神的なコンディションはガタ落ちで……………。

正直、いつ倒れるか心配で心配で……………。

「訓練、行かないと」

……………今からでも、十分間に合うわね、でも、ちや

ちやっと準備しちやいなさい

「……………ん」

ゆっくりベッドから降りて、パジャマを脱いだ。

髪をとき、歯を磨いて、着慣れた『懐刀』の制服に腕を通す。

それから最低限の化粧を施せば、機動六課付きの教導官に早変わり。

長い髪の毛は結んでもよかったんだけど、いつも下ろしてるわよね。

前は結んでいたけど、今は絶対に関い上げようとしなない……………。

あの子なりの、意地があるんでしょう。

「……………いじり」

ええ

部屋の鍵を閉めて、訓練場へ向かう。

47、48、49、50、51・・・

光るターゲットに、銃口を向けて引き金を引く。

反応が出たら、また次のターゲットに銃口を向ける。

以降、ひたすらこれの繰り返し。

そうしながら思い出すのは、ホテル・アグスタでの一部始終。

あの時のあたしは感情に任せて、らしくないミスを犯してしまった。

下手をすれば、スバルを墮していたかもしれない・・・そう思うと、自分の凡人っぷりが呪わしい。

もっと、正確に、もっと、するどく・・・！

・・・そういえば、ここまでやるのもう一つ理由があったりする。

それは、その後におきた事だ。

裏の警護と称して、スバルを追っ払ったあと、森を彷徨っていたら、なのはさんに出会って。

なのはさんはどうやら、あたしの一件を聞いて、軽い指導をしに来たらしい。

といっても、その辺を探せばあるような文句を並べた後、あたしの反省を確認して、去っていった。

・・・たったそれだけのことだったのに、何でか無性に腹が立ってきて。

自分でもよく分かってないけど、どうやらあたしはあの人を見返し

たいらしい。
まあどつちにせよ……凡人は死ぬ気で頑張らないと。
少しでも気を抜けば、またあの時みたいに、だから

side ヴイータ

「お、なのは！」

訓練場に向かってると、ひたすらパネルを操作してるなのは見つけた。

声をかけるけど、なのははこっちに気づいていないらしくて、こっちを見ない。

……いや、意図的かもしれないなあ。

証拠に、ほら、

「おい、おはよ」

「………ヴィータ副隊長か」

六課に来たばっかのころの、近づくもん全部拒絶する目をしてやる。

………分かりにくいかもしれないけど、六課に来てからのなのは、少しずつ変わっていったんだ。

さすがに口調とかは戻ってないけど、でも、設立当時に比べて、雰囲気は幾分か柔らかくなってたのは確かだ。

けど、こないだの ホテル・アグスタの任務後から、またあの
ピリピリした威嚇の雰囲気に戻りしていた。

「……音信不通だった四年間について、なのは何も語らな
い。」

言いたくないならそれでいいんだけど、ここまで拒絶されると、む
しろ話してくれなきゃ、どうしてやればいいのか、分からなくなる
……。何にも分からないけど、確実になにかあったのは間違
いないだろう。

でなきゃ、明るくて、正義感が強くて、優しかったあいつが、こん
な現実主義みたいなお堅い感じになるのはありえない。

辛いなら、辛いでいいんだ。

言いたくないなら、あたしすらも詮索しない。

「でも」

ちよっとくらい、甘えてくれたっていいだろ？

そりゃ、一度は裏切ったから、信用されてないのかも知れないけど
さ。

それでも

「おはよーございまーす!!」

「……おっ、来たな！新人ども!!」

背負った荷物くらい、持ってやれるから、な。

side なのは

「おはようございます！なのはさん！！」

「……………ああ」

……………やめて。

「あの、おはようございます……………」

「おはようございます…！」

……………やめて。

「……………おはようございます、なのはさん」

……………声をかけないで。

「全員、そろつたな……………それでは、早朝訓練を開始する
はいっ…！」

……………そんな無垢な表情で、こつちを見ないで。

「それでは、キャラはわたしと……………」

「はい！よろしくお願ひします…！」

……………純粋な目を、向けないで

人殺しだよ？近づけば必ず厄介ごとを持つてくる疫病神だよ？

わたしに近づけば、死んじやうよ？

大切なものが、なくなっちゃうよ？

「それでは射撃訓練を行う、フリードに頼らず、シューターだけで
弾幕を凌げるだけ凌いでみせる」

「はいっ…！」

・・・お願い、お願い、お願い・・・！！
これ以上わたしを、腑抜けさせないで・・・！！

side はやて

「・・・・・・・・ふうむ」

グリフィスの報告を聞き終えて、ため息。

機動六課が始まってから、なのはちゃんと再会してから。
音信不通やった間なのはちゃんの動向を、それなりに探って見て
はいるんやけど・・・・・・・・。

「新暦0072年からの足取りが掴めへんかぁ・・・・・・・・」
「申し訳ありません、こちらでも尽力してはいるのですが・・・」
「・・・・・・・・いんや、ええよ」

中学を卒業した後、管理局に戻ってきたのは確実や。

けど、それ以降の記録が閲覧出来ひん状態になつとる。
・・・・トップシークレットちゆうことやるうけど、それでも、
うちは知りたい。

六課にきてからのなのはちゃんは、最初の頃に比べると、柔らかくなつとる。

でも、ホテル・アグスタでの一件から、再会するまでの態度に戻ってしもうとるようぢや。

原因ゆうたら・・・あの時、なのはちゃんが見とった一団やろかね。

あの中の誰かが、なのはちゃんが変わってしまう切欠やったんやろうけど・・・。

今となつては、よう分からん。

・・・・・・それでもな、

「あ、いかにいかに・・・ありがとうグリフィス、下がってええよ」

えよ」

「はい」

それでも、友だちやったから。

つつかえ棒くらいには、なつてやりたいんよ。

side ティアナ

「ティーアッ!」

「わっ!」

早朝訓練を終えて着替えに向かっていると、後ろからスバルが飛びついてきた。

衝撃で前のめりに倒れるけど、なんとか踏ん張って持ちこたえる。

「………つたく、元気があるにもほどがあるっての。あんなにしごかれて、まだ動けるの？」

あたしはもうほぼ限界なんだけど………。

「つと、ごめん、大丈夫？」

「………別に」

あたしの疲労を察してくれたのか、スバルはすぐに離れてくれた。無意識にスバルの方を見て、ふと、左手に目が行く。

スバルは、転生者だ。

だから、『毒』なんていうレアな魔力変換を持っている。

今は無いけど、左手に装備された弓は、いまだき珍しい木製。

何でもイチイと呼ばれる木を使うことで、威力が上がる能力らしい。………他の転生者に比べたら、随分地味なんだろう。

けど、それを補うように武術を習得していて、弓との連携もばっちりだ。

凡人のあたしからしたら、十分すごい。

「………だから、そんな相棒が、時折………」

「ね、ティア！」

「………何？」

「………あたし、最低だな。

一番の親友に、何抱いてた？」

ああ、もう、ほんつとにいやだ。

「………だから、かもしれない。」

「自主トレ！あたしも付き合っていていい？」

「……はあ？」

相棒の口からでた提案に、怪訝な顔で返してしまった。

「……何だよ」

何とか顔を平坦に戻しながら、スバルがしゃべり出すのを待つ。

「……やっぱり、さっきの返事がだめだったみたいね。」

少し、顔が曇ってた。

でもそれも束の間、すぐにぱっと明るくして、

「ティアナばかり自主トレするのは、ずるいもん！それにほら、Bランク試験のとき言ったでしょ？」あたしの目の前でティアアの夢を躓かせるのはいやだ』って」

百面相して必死に訴えてくるスバル。

「……よーするに、」

「危ない橋は一緒に渡ってくれるってこと？」

「そゆこと！っていうか、危ないかどうかは渡りきってからじゃないと分からないじゃん！」

そう言って、からからと笑ってくれた。

「……目の前にいるのは、つい最近自分を落しかけた人だっ
ていうのに、この子はもう……」。

それでもまあ、少なからず、こいつが一緒に居て安心出来るのは確かよね。

「……アホかと思えば、たまにかっこいいことをさら
っというもんね。」

「……わーっ たわよ」

「わはーっ！ やたー！」

承諾すると、スバルは手放して喜んでた。

……一人でうだうだ悩んでたのが嘘みたい。

ちよつとくらいなら、人を頼ってもいいのかもね。

side なのは？

これは……

最近ティアナが、単独での過酷な訓練をやってるってのを知って。動機とか、あたしなりに調査してたんだけど……。

あたしらとそっくりじゃん

「……何が？」

あら、いたの？

気がつくと、寝込んでると思ってたのはがすぐ後ろにいた。別に隠す理由もないので、調べたデータをなのはに渡す。案の定、なのはは顔をしかめていた。

「……………兄のため、か」

犯人取り逃がして亡くなったらしくてね、葬列で思いっきり罵られたらしいわよ？

「……………」

……………よっぽど、悔しかったんでしょうね。

将来の志望も、兄の夢だった執務官らしいし……………。

それだけ自慢のお兄ちゃんだった……………ってところかしら。

「……………なにせよ、どうにかしないと」

ええ、このままじゃ危険ね

ティアナとの自主トレを始めて数日。
今日の訓練は模擬戦で、今までの成果を試すにはうってつけの日。
相手はもちろんなのはさんだ。
「……………こういうの、相手にとって不足なしって言うんだろ
うね。」

勝てないまでも、せめて一撃は入れないと……………!!

「それでは、始めにスターズから……………準備はいいな？」

「はいっ!!」

よーっし!!やるぞー!!

f r e e s i d e

スバルがウィングロードを展開したことにより、試合は開始する。
動き出そうとするなのはに、ティアナがさかさず魔力弾を撃ち込ん
で視界を奪い、姿を隠し、そこからさらに魔力弾の嵐を放った。

一方のなのはは手馴れた様子でレイジングハートを振るうと、魔力
弾を弾き返し、撃ち落とし、斬り捌く。

そうしているところへ、スバルが雄叫びを上げて突っ込んできた。
それを体をひねって避けたなのは。

一閃をスバルに浴びせるが、手ごたえは感じられず。
スバル『だったもの』は衝撃で掻き消えていった。

(幻術……………ティアナか)

幻影に挟み撃ちにされては、流石のなのはもたまったものではないので、一旦空へ上がった。ある程度上がったところで、ウィングロードを走るスバルを見つめる。

レイジングハートに探らせ、実態であることを確認してから接近、斬りかかる。

スバルはナツクルで受け止めると、開いた左手でストレートを打ち出した。

なのははそれをスバルごと弾き飛ばすことで回避。

バックステップで距離を取り、ティアナを探しだす。

すると再びスバルが突撃。

ナツクルとレイジングハートがぶつかり、火花が散った。

「・・・・・・・・スバル」

と、ここで、なのはが口を開く。

「積極的なのは構わんが、突撃しすぎると怪我するぞ」

「すみませんなのはさん！でも、ちゃんと避けますから！！」

互いに弾いて鏝迫り合いを切り上げ、ここでなのはが突然あさっての方向に構える。

カートリッジを幾分か消費し、ビルの一角に砲撃を撃ち込んだ。爆発し、もうもうと煙を上げる廃ビル。

するとその中から、埃まみれになったティアナが飛び出してきた。

ティアナは着地すると、なのはめがけて2〜3発撃ちだす。

なのはは飛行魔法と歩法を駆使して素早くティアナに近づくと、斬りつけた。

ティアナは咄嗟にクロスミラージュの銃口にダガーを生成。

交差させてレイジングハートを受け止める。

ギリギリと再び鏢迫り合いが始まったが、それも束の間。
なのはの背後からスバルが飛び掛ってきたことにより、すぐに切り上げられた。

ティアナは素早く散開の合図を送り、二人は別々の方向に走り出す。宙に静止し、構えていたなのは。

と、背後から迫ってきた魔力弾に反応し、防御。

再びティアナと対峙し、互いに睨み合った。

「……………あ」

そんな中で、ティアナはふと、何かに気がつく。

相手を真正面に見据える位置ゆえか、なのはの顔がよく見える。

その目を見て、

（ …… そっか ）

銃口を向けたまま、少し、納得したような表情を浮かべた。

（ アグスタの時からずっと気に食わなかったのは……………その目なんだ ）

なのはの、無感情であろうとしながら、無感情になれない目を見返して、ティアナは細く息を吐き出す。

（ あたしと同じ、無力を知ってる目……………なんだ、腹が立ったのって、ただの同属嫌悪だったワケ？ ）

ふっと、自嘲の笑みの浮かべてから、徐に発砲。

続けざまに閃光弾を撃ち込んで、なのはの頭上を取る。

流石のなのはも、少しくらい目を眩ましただろう。

前方からは、手筈どおりにスバルが突進していた。

(自主トレの中で編み出したクロスプレー……いける!!)

「っおおおおおおおおお!!!!」

「だあああああああっ!!!!」

二人同時に飛び出して、

二人同時に、素手で武器を受け止められた。

「……………妙だな、訓練ではこういった戦術は教えていないはずだが?」

聞こえてきたのは、今まで以上に低く、重たい声。

それがなのはものであるということを理解するのに、数瞬の間を必要とした。

スバルのナツクルは突き出した左手で受け止められ、ティアナのダガーは右手で掴んでいる。

特に右手は刃で切れたのか、血が流れ出していた。

「別に自分なりの戦術を編み出すのは構わない、だが……………訓練中だけ言うことを聞いて、本番はそれを思いつきり無視するとは……………肝が座っているな」

射抜くような眼差しが、二人を貫いた。

二人が怯んだ瞬間拘束魔法が展開し、逃げ遅れたスバルは両手を封

じられる。

なんとか逃げ出したティアナは、なのはの向かいのウィングロードに着地すると、クロスミラーージュを向けて、再び対峙した。

「……………それがどうしたっていうんですか？」

ありつたけの感情を込めて、ティアナはなのはを睨み付ける。そうしつつ魔法陣を展開し、砲撃のチャージを始める。

「……………あなたと違って、あたしは凡人なんですよ……………死ぬ気でやらなきゃ、上手くいかない人種なんですよ……………」

一方のなのはは、ティアナをじっと見つめるだけだった。

一応防御魔法の準備は出来ているものの、

(……………わたしの力不足か、ティアナは間違いなく暴走している)

後悔しつつ、彼女が取った選択は、構えをいくらか解くことだった。そうすることで、なのはなりにティアナのことを理解しようとしてみたのだ。

(……………正直、言葉にしたほうが伝わりやすいんだが……………この場合は致し方ないか)

あの子の攻撃、受ける？

(ああ、レイジングハートも……………防御は最小限で頼む)

『All right』

一旦俯いてから、もう一度ティアナを見据える。

「だから……もう誰も、傷つけないから、亡くしたくないから……強く、なりたいです!!!」

ティアナは今にも泣き出しそうな顔で、ありったけの声で喚いて、照準のなのはの眉間に定めた。

「フロントム……!!!」

(……すまない、ティアナ)

「あの、なのはさん？」

なのはが何をしようとしているのか。

それを少しでも理解したスバルは、否定を求めて声をかける。

だがなのはは何も答えず、ただじっとティアナを見つめるだけだ。

「ブレイザアアアアッ!!!」

そうこうしているうちに、攻撃が放たれた。

見た目から判断して、砲撃に分類されるらしいそれを見つめたあと、なのはは目を閉じる。

(……後でゆっくり、話を聞いてやるから)

覚悟を決めて、顎を引いた瞬間。

「(主の忠告を忘れましたか？イザナミ……腑抜けているようにあれば、また傷つける、と)」

「ッ！」

ドオンっと、空気が揺れた。

煙が立ち上り、なのはの姿が見えなくなる。

スバルも、砲撃を撃ったティアナも、呆然としていた。

「……………なのは、さん？」

恐る恐る声をかけたスバルに、答えるものはいない。

束の間硬直したあと、事態を最悪の方向に理解したスバルは、煙の中に駆け寄ろうとして、

「っつわ!？」

吹き飛ばされたスバルが見たのは、桜色に輝く魔法陣。

なのははその中心で腕を上げていて、その指先をティアナに向けている。

出来事の意味が遅れているスバルを他所に、重たい口を開いた。

「……………ティアナ」

先ほど、攻撃を受け止められた以上に、畏怖の気配がこもった音。リング状の魔法陣がなのはの腕を固定し、指先に魔力をチャージしている。

一方のティアナは呆然としたまま、防御も回避も行おうとしない。それでも構わず、なのははチャージを続けて、

「少し・・・頭を冷やせ」

桜色の閃光が、ティアナを飲み込んだ。

side スバル

何もかもが急すぎて、どういつわけだか理解が追いつかなかった。けど、足場から落ちていくティアアを見て、すぐに再起動する。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・つ！！！！！！！！」

ティアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！

自分でもびっくりするくらいの大声を上げて、地面にまっさかさまに落ちるティアアに駆けつける。

なんとか直下に潜り込んで、ティアアを受け止めた。

腹で受け止めたから痛かったけど、そんなこと言ってられない。

「ティアア！？ティアア！！おきてよ！！ティアアッ！！」

ぐったりしたまま、動かないティアアナ。

どうしよう、どうしようどうしよう！？ティアアが・・・・・・・・ティアアが・・・・・・・・！！！！！！！！！！

「・・・・・・・・・・模擬戦は、二人とも撃墜して終了だ」

後ろから、そんな声が聞こえて、首をひねる。

振り返ると、なのはさんがそこに突っ立ってて、模擬戦の終了を告げたいだった。

少しだけこっちを見つめた後、何事も無かったように去っていった。

「……………っ！！」

思わず、怒りに任せてその背中をにらんだ。

今思えば、そのときのあたしが冷静だったら、気づいていたんだろうな。

なのはさんの目が今まで以上に虚ろで、目に見えて分かるくらいにすっごい動揺してたこと。

第十一話それぞれの・・・（後書き）

誤字脱字あらばご報告お願いします。

そういうわけで、別名『魔王降臨回』でした。

このなのはさんは、とりあえずなんとか穏便にすませたかったんだけど、邪魔が入っちゃった的な展開にwwww

それではお返事の部屋へ

緑異様

お返事送れてすみません；

あの回更新しましたよww

上でも言いましたが、このなのはさんは自分なりに穏便に済ませたかったです。

好き好んで魔王になろうとは欠片もおもってなかったんですよ。

あと、受験生だろうとなんだろうと、昔のわたしはアニメ三昧してましたww

だから大丈夫だと思います（キリッ

さて、次回の『八つの仮面』はあゝ？

とりあえず、ガジェットが来ました。

それではwwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8310q/>

八つの仮面

2011年10月21日09時08分発行